

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第146集

長根Ⅰ遺跡発掘調査報告書

宅地造成工事関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

長根 I 遺跡発掘調査報告書正誤表

ページ	行	誤	正
1		<u>小</u> 槌川	大槌川
36	4	<u>狐</u> の大きさ	<u>狐</u> の大きさ
45	1	<u>体積</u> する。	<u>堆積</u> する。
54	21	<u>大</u> 刀	<u>太</u> 刀
78	16	<u>いづれ</u> も	<u>いづれ</u> も
89	26	<u>厳</u> しい	<u>著</u> しい
102	11	18 <u>期</u>	18 <u>基</u>
106	31	11 <u>期</u>	11 <u>基</u>
109	21	8世紀である。 ^{注6)}	8世紀である ^{注6)} 。
110	2	注2) <u>註</u> 1に同じ	注2) <u>注</u> 1に同じ
126		↓は <u>耐</u> 料採取位置	↓は <u>試</u> 料採取位置
137	4	800年以前	<u>西</u> 暦800年以前
	6	800年以前	<u>西</u> 暦800年以前

長根Ⅰ遺跡発掘調査報告書

宅地造成工事関連遺跡発掘調査

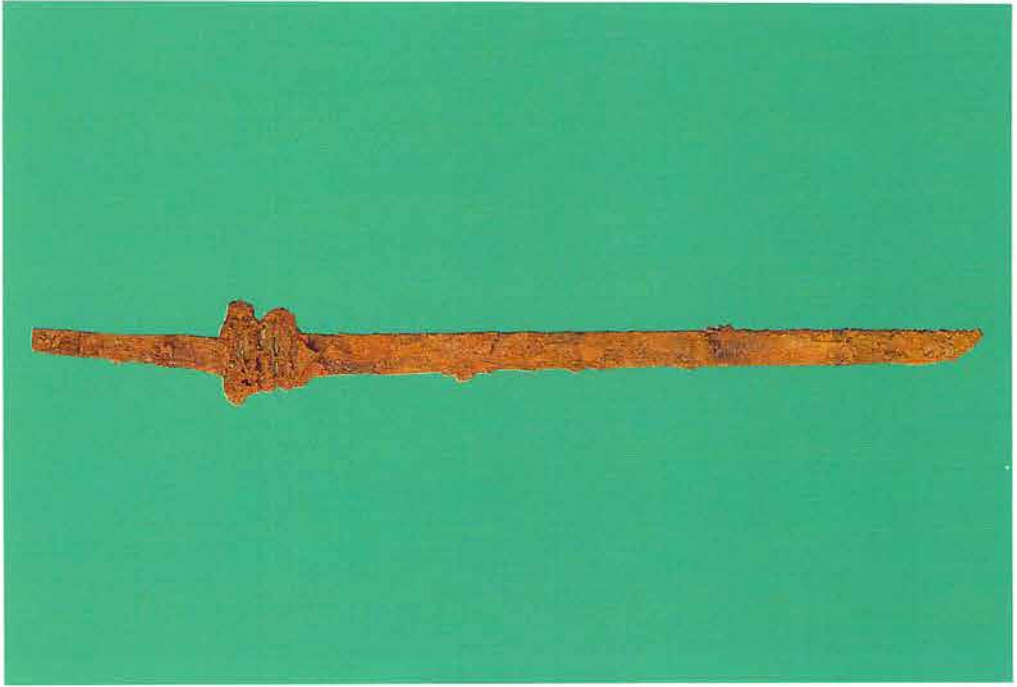


藏手刀（6号古墳出土）



直刀（9号古墳出土）

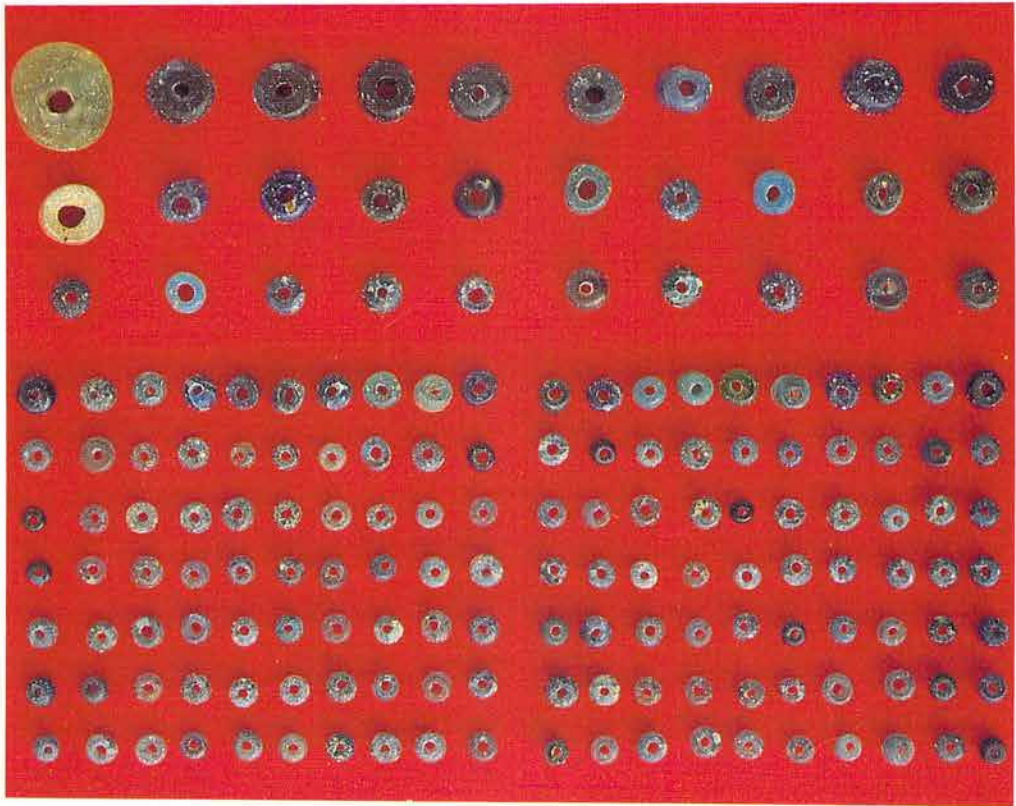
卷頭写真1



太刀 (27号古墳出土)



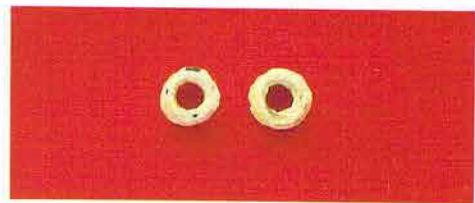
立鼓刀 (28号古墳出土)



ガラス玉類 (16号古墳出土)



錫製釧 (9号古墳出土)



鉛ガラス質の小玉 (16号古墳出土)



和同開珎 (22号古墳出土)



遺跡全景（空中写真 南西から）



2号古墳

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,300箇所に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域の発展に欠かすことのできない社会資本の充実も重要な施策であります。

このような埋蔵文化財の保護と開発との調和ある施策も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団では埋蔵文化財センターの創設以来岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

宮古市千徳の宅地造成事業に関連する長根Ⅰ遺跡は、宮古市街地西方の閑伊川左岸に位置し、昭和63年の発掘調査によって縄文時代から中世までの遺物と遺構が発見され、特に奈良時代の古墳は沿岸部における貴重な資料を提供することができました。

本報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御協力、御援助を賜りました、宮古市教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より謝意を表します。

平成2年1月

財団法人岩手県文化振興事業団
理事長 中 村 直

例 言

1. 本報告書は、岩手県宮古市千徳第2地割字長根61-2ほかに所在する長根I遺跡の調査結果を収録したものである。本遺跡の岩手県遺跡台帳番号はLG33-0253である。
2. 本遺跡の調査は宅地造成工事に伴う緊急発掘調査であり、宮古市と岩手県教育委員会文化課との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は昭和63年4月8日～6月30日に実施した。室内整理は昭和63年11月1日～平成元年3月31日に行った。
4. 発掘調査及び報告書の作成は光井文行・玉川英喜が担当した。
5. 本報告書の執筆はI. 調査に至る経過を昆野靖が、IV章～VI章の土師器・須恵器に関する部分を光井文行が、それ以外を玉川英喜が行った。
6. 検出された遺構の種類と数は以下のとおりである。

古墳	28	方形周溝	2	住居状竪穴遺構	1	溝跡	4	集石遺構	1
墓墳	1	ピット	11	陥し穴	5				
7. 分析や鑑定は次の方々に依頼した。(敬称略)

須恵器・土師器の胎土分析	三辻利一(奈良教育大学)
鉄製品・鉄滓・ガラス小玉・和同開珎	赤沼英男 木村克則(岩手県立博物館)
石質鑑定	佐藤二郎(佐藤地質工学研究所)
炭化樹種の同定	早坂松二郎(財団法人岩手県木炭協会)
8. 発掘調査及び室内整理では次の機関や方々の御協力、御教示を賜った。(敬称略)

宮古市教育委員会	草間俊一(盛岡短期大学)	桜井清彦(早稲田大学)				
瀬川司男(花巻市西南中学校)	高橋信雄	佐々木勝(岩手県教育委員会文化課)				
中嶋隆	武田将男	高橋憲太郎	鎌田祐二	盛合義信(宮古市)	高橋正勝	直井孝一
園部真幸(江別市教育委員会)	坂川 進(八戸市教育委員会)	大野 享(八戸市博物館)	熊谷常正	佐々木清文	佐藤嘉広(岩手県立博物館)	
9. 野外調査の作業には北村昭一氏をはじめ地元宮古市の方々から御協力をいただいた。
10. 調査成果は現地説明会資料や調査略報ほかに中間報告として発表してきたが、本書の内容が優先するものである。
11. 発掘調査の諸記録と遺物は、遺跡調査略号NNI-88を付して、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

目 次

序
例言

〈本文目次〉

I 調査に至る経過	3	3 金属器類・その他	94
II 立地と環境	3	a 刀子	94
1 位置と地形	3	b キセル	94
2 遺跡付近の地形	4	c 鍍状鉄製品	94
3 基本層序	7	d 釘状鉄製品	94
4 周辺の遺跡	8	e その他の金属器類	96
III 調査の方法	11	f 切子玉	96
1 野外調査	11	g 古銭	96
2 室内整理と報告書の作成	14	VI まとめと考察	100
IV 検出された遺構と遺構内出土遺物	19	1 遺構のまとめ	100
1 古墳	19	2 遺物のまとめ	107
2 方形周溝	60	3 考察	120
3 住居状竪穴遺構	65	VII 分析・鑑定結果	123
4 溝跡	65	1 長根 I 遺跡出土土器の蛍光 X 線分	
5 集石遺構	70	析	123
6 墓壙	75	2 長根 I 遺跡出土鉄器・鉄滓の金属	
7 ピット	76	学的解析	126
8 陥し穴	78	3 長根 I 遺跡出土ガラス・古銭・釧	
V 遺構外の出土遺物	83	の分析	134
1 土器			
a 縄文時代の土器	83		
b 弥生時代の土器	83		
c 古代の土器	88		
2 石器	94		

<図 版 目 次>

第1図	岩手県全図	1	第29図	25号古墳（遺構・遺物）	53
第2図	遺跡位置図	2	第30図	26号古墳（遺構・遺物）	55
第3図	地形分類図	5	第31図	27号・28号古墳（遺構）	57
第4図	調査区周辺の地形図 ・グリッド配置図	6	第32図	27号・28号古墳（遺物）	58
第5図	土層柱状図	7	第33図	29号・30号古墳（遺構）	59
第6図	周辺の遺跡位置図	9	第34図	31号方形周溝（遺構・遺物1）	61
第7図	遺構配置図	17	第35図	31号方形周溝（遺物2）	62
第8図	1号古墳（遺構）	19	第36図	32号方形周溝（遺構）	64
第9図	2号古墳（遺構・遺物）	21	第37図	住居状堅穴遺構（遺構・遺物）	66
第10図	3号古墳（遺構・遺物）	23	第38図	101号溝跡（遺構）	67
第11図	4号・5号古墳（遺構）	25	第39図	101号溝跡（遺物）	68
第12図	6号古墳（遺構）	26	第40図	102号溝跡（遺構）	69
第13図	6号古墳（遺物）	27	第41図	集石遺構（遺構）	71
第14図	8号古墳（遺構）	29	第42図	集石遺構（遺物1）	72
第15図	9号古墳（遺構）	31	第43図	集石遺構（遺物2）	73
第16図	9号古墳（遺物）	32	第44図	集石遺構（遺物3）	74
第17図	10号・11号古墳（遺構）	33	第45図	墓壇（遺構・遺物）	75
第18図	12号古墳（遺構・遺物）	35	第46図	ピット1	77
第19図	13号・15号古墳（遺構・遺物）	37	第47図	ピット2	79
第20図	16号古墳（遺構・遺物1）	39	第48図	陥し穴1	81
第21図	16号古墳（遺物2）	40	第49図	陥し穴2	82
第22図	16号古墳（遺物3）	41	第50図	遺構外出土遺物 土器1	84
第23図	17号古墳（遺構・遺物）	42	第51図	遺構外出土遺物 土器2	85
第24図	18号古墳（遺構・遺物）	44	第52図	遺構外出土遺物 土器3	86
第25図	19号・20号古墳（遺構・遺物）	46	第53図	遺構外出土遺物 土器4	87
第26図	21号古墳（遺構）	47	第54図	遺構外出土遺物 土器5	90
第27図	22号古墳（遺構・遺物）	49	第55図	遺構外出土遺物 土器6	91
第28図	23号・24号古墳（遺構）	50	第56図	遺構外出土遺物 土器7	92
			第57図	遺構外出土遺物 土器8	93

第58図	遺構外出土遺物	石器	95
第59図	遺構外出土遺物	金属器類 1	97
第60図	遺構外出土遺物	金属器類 2	98
第61図	遺構外出土遺物	金属器類 3	
		その他	99

第62図	岩手県内の末期古墳の主な遺跡	100
第63図	古墳配置図	101
第64図	土師器・須恵器分類図	112
第65図	須恵器分類図	113

〈写真図版目次〉

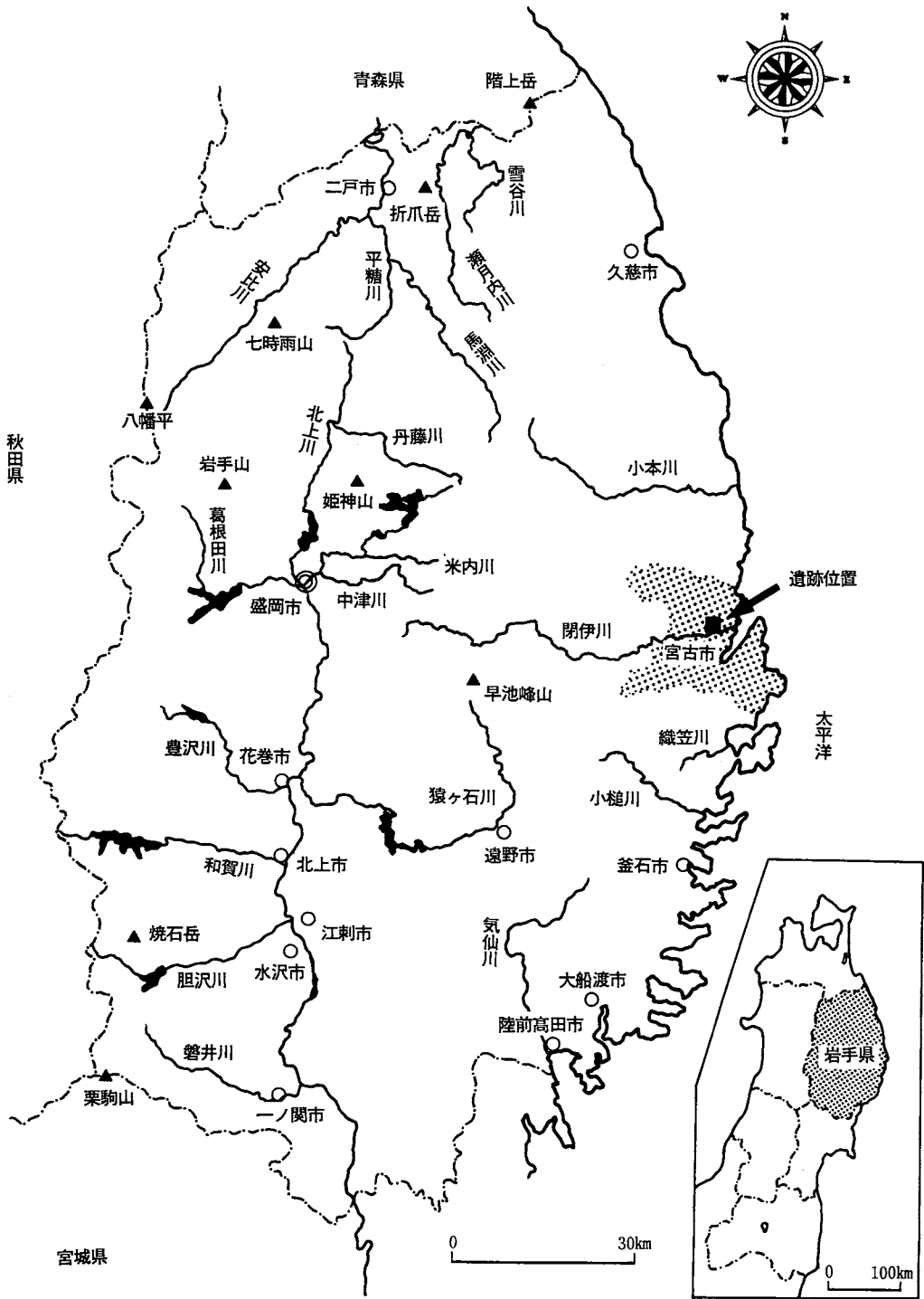
写真図版 1	遺跡全景（空中写真）	141
写真図版 2	遺跡遠景	142
写真図版 3	遺跡近景	143
写真図版 4	1号古墳	144
写真図版 5	2号古墳	145
写真図版 6	3号古墳	146
写真図版 7	4号・5号古墳	147
写真図版 8	6号古墳	148
写真図版 9	6号・8号古墳	149
写真図版10	9号古墳	150
写真図版11	10号古墳	151
写真図版12	11号古墳	152
写真図版13	12号古墳	153
写真図版14	13号古墳	154
写真図版14	15号古墳	155
写真図版16	16号古墳	156
写真図版17	17号古墳	157
写真図版18	18号古墳	158
写真図版19	19号古墳	159
写真図版20	20号古墳	160
写真図版21	21号古墳	161
写真図版22	22号古墳	162
写真図版23	23号古墳	163
写真図版24	24号古墳	164

写真図版25	25号古墳	165
写真図版26	26号古墳	166
写真図版27	27号古墳	167
写真図版28	28号古墳	168
写真図版29	29号古墳	169
写真図版30	30号古墳	170
写真図版31	31号方形周溝	171
写真図版32	32号方形周溝	172
写真図版33	住居状竪穴遺構	173
写真図版34	101号溝跡	174
写真図版35	102号溝跡	175
写真図版36	集石遺構	176
写真図版37	墓壇・ピット 1	177
写真図版38	ピット 2	178
写真図版39	陥し穴 1	179
写真図版40	陥し穴 2・基本層序	180
写真図版41	遺跡近景・作業風景	181
写真図版42	現地説明会	182
写真図版43	2号・3号・6号古墳 出土遺物	183
写真図版44	9号・12号・13号古墳 出土遺物	184
写真図版45	16号・17号古墳出土遺物	185
写真図版46	18号・20号・22号古墳 出土遺物	186

写真図版47	25号・26号・27号・28号古墳 出土遺物……………	187	写真図版54	遺構外出土遺物 土器 4 ……	194
写真図版48	31号方形周溝出土遺物……………	188	写真図版55	遺構外出土遺物 土器 5 ……	195
写真図版49	31号方形周溝・住居状竪穴 遺構101号溝跡出土遺物 ……	189	写真図版56	遺構外出土遺物 土器 6 ……	196
写真図版50	集石遺構・墓壙出土遺物…	190	写真図版57	遺構外出土遺物 土器 7 ……	197
写真図版51	遺構外出土遺物 土器 1 ……	191	写真図版58	遺構外出土遺物 石器・ 金属器類 1 ………………	198
写真図版52	遺構外出土遺物 土器 2 ……	192	写真図版59	遺構外出土遺物 金属器類・ その他……………	199
写真図版53	遺構外出土遺物 土器 3 ……	193	写真図版60	刀類付着布拡大写真……………	200

〈表 目 次〉

表 1	周辺の遺跡一覧表……………	10
表 2	遺構名対照表……………	12
表 3	集石遺構礫計測表……………	70
表 4	石器計測一覧表……………	95
表 5	遺構外出土釘状鉄製品計測表……………	96
表 6	その他の金属器類一覧表……………	96
表 7	古墳一覧表……………	105
表 8	墓壙・ピット・陥し穴一覧表……………	107
表 9	刀類計測値一覧表……………	115
表10	2号古墳出土ガラス小玉一覧表……………	115
表11	16号古墳出土ガラス玉類一覧表……………	115
表12	遺構内出土須恵器・土師器観察表……………	118
表13	遺構外出土須恵器・土師器観察表……………	118



第1図 岩手県全図



第2図 遺跡位置図

I 調査に至る経過

宮古市大字千徳第2地割字長根61の4、同第3地割字青猿106の3のほか10筆の24,618㎡を対象とする宅地造成工事にかかわる埋蔵文化財の取扱いについては、星山建設代表者星山定夫の申請にもとづいて宮古市教育委員会と岩手県教育委員会との間で現地確認を含めて協議された。経過の概要は、以下のとおりである。

- 昭和62年6月11日 県教育委員会文化課による現地確認
- 昭和62年6月26日付け 教第462号 宮古市教育委員長から岩手県教育長あて
埋蔵文化財包蔵地における発掘調査経費の積算について依頼
- 昭和62年8月3日付け 教文第279号 岩手県教育長から宮古市教育長あて
埋蔵文化財包蔵地における発掘調査経費の積算について回答
- 昭和62年12月16日付け 教第1,156号 宮古市教育長から岩手県教育長あて
宅地造成工事に伴う長根I遺跡の発掘調査について依頼

この後さらに両者間で協議が行われ、県教育委員会文化課は「埋蔵文化財の発掘調査に関する実施基準要領」により、調査対象区域を6,200㎡とした長根I遺跡の発掘調査を昭和63年度に岩手県文化振興事業団に受託させることとした。

これにより当埋蔵文化財センターは宮古市の委託をうけて、昭和63年4月1日付け契約により、調査に着手することとなった。

II 立地と環境

1. 位置と地形

長根I遺跡は岩手県宮古市千徳第2地割字長根61-2ほかに所在し、東日本旅客鉄道山田線宮古駅の西約1.5kmの国道106号に沿った北側の丘陵に立地する。

宮古市は岩手県沿岸部のほぼ中央に位置し、北側に田老町・岩泉町、西側に新里村、南側に山田町が隣接する。東側は太平洋を望み、西側には早池峰山(1,914m)を最高峰とする北上山地の山々が連なる。宮古市の海岸は景勝地として名高い三陸海岸の一部である。三陸海岸は宮古市付近を境に、その南部と北部とでは様相を異にする。南部は湾と岬が入り組んだ屈曲の多いリアス式海岸である。それに対し、北部は出入りの少ない比較的滑らかな海岸線である。所々に、海食によってできた高さ100mを越す海食崖のつづく豪壮な海岸が見られる。北部と南部の

この地形差の要因としては、「もともとの地形の違い、岩質の差、隆起速度の違い」（1985年貝塚他）等が考えられている。三陸海岸は山地が海岸まで迫る地形のため、低地は河川の流域の狭い範囲に限られる。

宮古市での主要な河川は市の中心街の載る沖積平野を形成する閉伊川と、宮古湾の湾奥に注ぎ込む津軽石川である。他に磯鶏海岸に注ぎ込む八木沢川、閉伊川の支流の長沢川・近内川・山口川等がある。閉伊川は盛岡市と川井村の境界にあたる区界畔付近に源を発し、蛇行しながら東流を続ける。途中川井村川井付近で小国川と、新里村茂市付近で刈屋川と合流し、宮古市街地から宮古湾に注ぐ。太平洋に注ぐ川としては県内最長であり、総延長は75.7kmである。

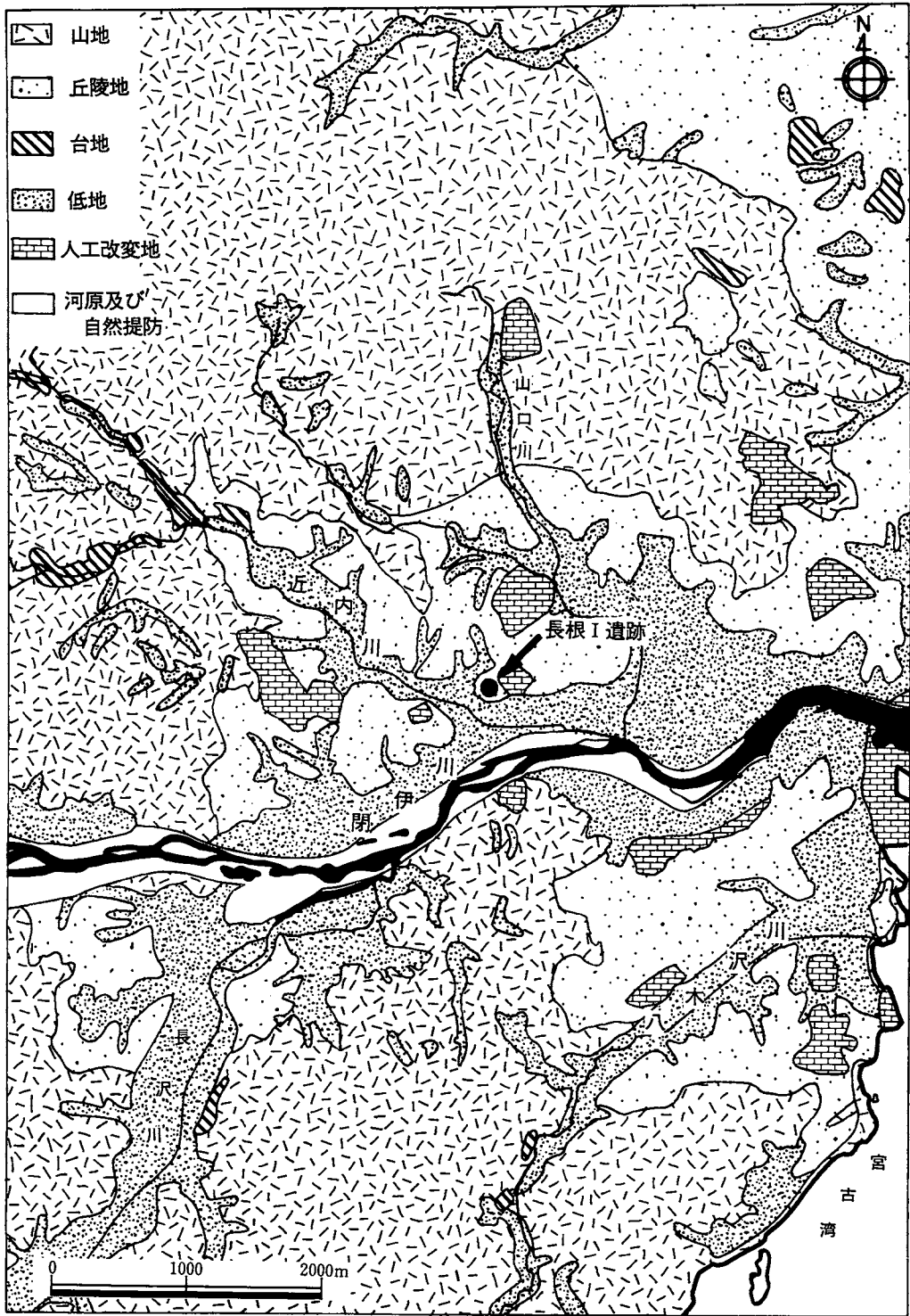
低地はこれら河川の流域に沿って狭く帯状に広がる。閉伊川河口近くの山口川との合流付近は宮古市内においては比較的広い氾濫平野が形成されている。

丘陵地は低地の周辺や海岸に沿って見られる。閉伊川の北側では板屋付近から東に山地と低地に挟まれるように帯状に延び、南側では長沢川との合流付近や磯鶏の西側の低地と山地の間に分布する。海岸沿いでは山地に挟まれて南北に帯状に延びる。

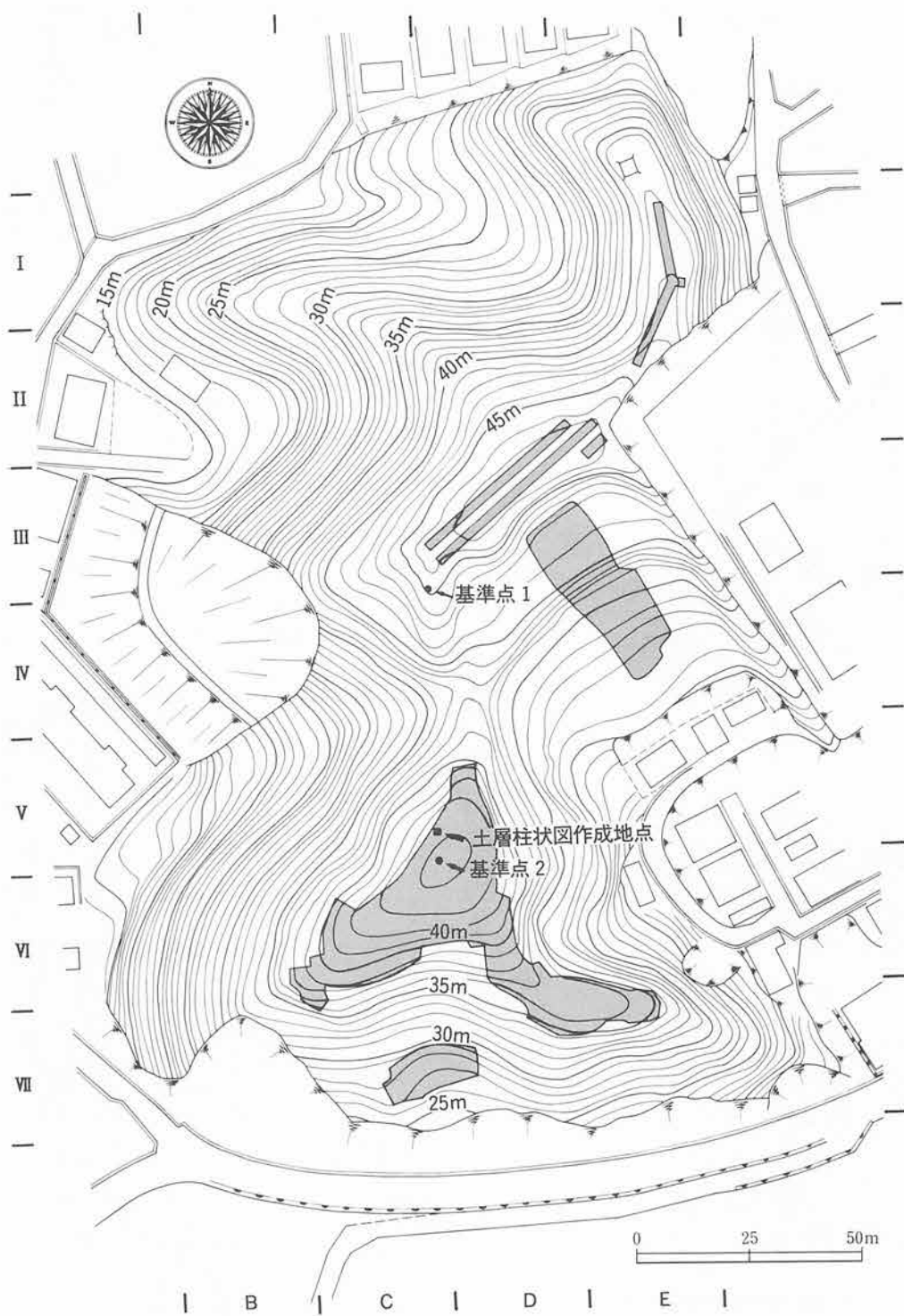
山地は丘陵地の背後に広がる。図幅内（第3図）の山地は起伏量の比較的少ない小起伏ないし中起伏山地である。閉伊川の北側で、宮古市街地の北東側の山地は、宮古市北西端に位置する峠ノ神山（1,230m）、亀ヶ森（1,112m）から南東に延びる山麓地の縁辺である。標高は300m位までの低い山地が多い。一方、市街地の南西側の山地は、大笹山（612m）から北東に延びる山麓地の縁辺である。標高は100～200m位で、定高性が極めて良い。市街地は周辺の丘陵地や山地に延びる傾向を見せており、それらの丘陵地・山地にはニュータウンとして造成された人工改変地が目につく。

2. 遺跡及びその周辺の地形

遺跡は閉伊川の河口から約3km上流の左岸丘陵地に立地する。遺跡の南側約500m付近を閉伊川が東流し、西側には遺跡付近で閉伊川に合流する近内川が北西から南東方向に走行している。北側は宅地化の進行が著しい小沢沿いの低地を挟んで丘陵地が連なり、さらにその背後は峠ノ神山から南東方向に延びる山麓地縁辺の小起伏山地が続き、東側には宮古湾を望むことができる。遺跡の東側は小規模な宅地造成が行なわれた人工改変地である。遺跡の載る丘陵は、閉伊川・山口川・近内川の流域沿いに広がる低地に取り囲まれるようにして南東方向に張り出し、遺跡は近内川寄りの突端部に位置している。遺跡の載る丘陵は閉伊川流域の北側に帯状に広がる丘陵の一角にあたるが、小沢によって周囲の丘陵から若干隔てられ、孤立残丘的な様相を呈している。このため、遺跡からは南側の眼下に閉伊川を、北側には狭小な低地と半円状に広がる丘陵地を望むことができる。



第3図 地形分類図



第4図 調査区周辺の地形図・グリッド配置図

調査区内の地形は北尾根と南尾根に大別される。北尾根は北東－南西方向に延び、頂部付近は小規模な平坦地である。頂部の北西端からは急斜面が続き、さらに馬の背状の尾根が40m程北側に続いている。北尾根の南東側は段差のある緩斜面である。段差は盛土によって2段に形成されているが、旧地表面は連続する緩斜面である。

南尾根の尾根筋は北・南東・南西の3方向に延びる。頂部付近は数mから20数mの範囲で緩斜面となっているが、それを過ぎると傾斜角20度を越す急斜面となる。南東に延びる尾根筋は頂部から標高を7m程下げた後、馬の背状に約30m続いている。南尾根の南端には頂部からの急斜面を下った後、傾斜角10度前後の緩斜面がある。

調査区内の現況は北尾根の南東斜面が畑地で、他は山林である。南尾根の南端緩斜面は一時期畑地として使われている。調査区内の標高は最低部で約26m、北尾根頂部で約47m、南尾根頂部は約44mである。南尾根頂部と閉伊川との比高は40m弱である。

3. 基本層序

第5図の土層柱状図は南尾根頂部付近のグリッドVD8a付近で作成した模式図である。基本土層は場所によって異なる。

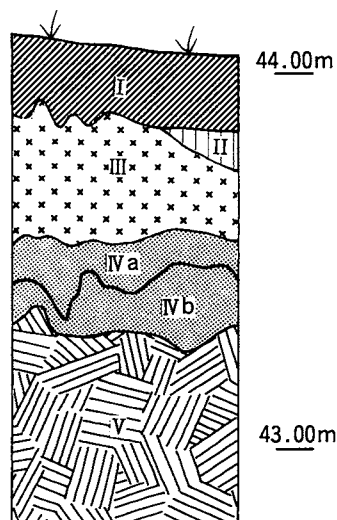
I層 黒褐色～暗褐色土 (10YR $\frac{3}{2}$ ～ $\frac{3}{3}$) シルト質土で遺跡全面を覆う。草木根が非常に多い。層厚は20～40cmで、尾根頂部は薄い。南尾根では土器片等の遺物を含む。

II層 黒色～黒褐色土 (10YR $\frac{2}{1}$ ～ $\frac{2}{3}$) シルト質土。北尾根の南東側斜面と南尾根の南端緩斜面に比較的厚い堆積が認められる、尾根頂部ではこの層を欠く所が多いが、遺構内や凹地などの一部に堆積する。最大層厚は約50cmで、遺物を含む。

III層 黄褐色～明褐色土 (10YR $\frac{5}{6}$ ～7.5YR $\frac{5}{6}$) 粘性のあるシルト質土。尾根頂部に堆積し、斜面下方部ではこの層を欠く所が多い。南尾根の南端斜面では汚れたIII層土の再堆積と思われる層が見られる。多くの遺構はIV層ないしV層まで掘り込まれており、III層土が遺構の埋土となる場合も多い。

IV層 明褐色～浅黄色土 (2.5Y $\frac{7}{4}$ ～ $\frac{7}{6}$) 細砂層。上層にはIII層土が斑点状に混じり、下層にはV層と同質の土が斑点状に混じる。無遺物層である。

V層 淡黄色土 (2.5Y $\frac{8}{3}$ ～ $\frac{8}{4}$) 砂層。乾燥状態での色調は灰白色状を呈する。褐灰色の粒子などがゴマ粒



第5図 土層柱状図

状に含まれ、花崗岩の風化層と思われる。比較的よく締まっている。IV層土とV層土を明瞭に識別できない地点も多い。

4. 周辺の遺跡

宮古市では400カ所を越す遺跡が確認されており、その概要は宮古市教育委員会の調査による遺跡分布調査報告書1～4に収録されている。また、昭和60年度版宮古市遺跡分布図にそれぞれに確認された遺跡が一覧表とともに図示されている。

本遺跡では古代の古墳群と比較的まとまった弥生式土器が出土しているの、ここではそれと同時代の遺跡について若干述べることにする。

第6図の周辺の遺跡位置図には「宮古市遺跡分布図」昭和60年度版（1986年、宮古市教委）に掲載されている遺跡の中から該期のものを抽出した。弥生時代の遺跡は単独のものではなく、すべて縄文時代や古代との複合遺跡である。古代の遺跡も約3分の2は縄文時代との複合遺跡である。

弥生時代の遺物が発見されている遺跡はセネガ沢II・柵館III・青猿II・小山根・早坂・上村貝塚・荷竹米山I・小堀内Iの各遺跡である。該期の遺跡数が少なく、立地上の共通性等は見出せない。このうち上村貝塚は昭和62年に当埋文センターによって調査が行われ、弥生時代初頭に属する竪穴住居跡が5棟検出されている。初頭の住居跡の検出は沿岸地域では初例である。遺物では谷起島式と呼ばれる一群あるいはそれよりやや古い時期に属する土器や県内では同時代のものとしては初例となる石製紡錘車が出土している。

古代の遺跡は90遺跡余りを掲載している。閉伊川とその支流及び津軽石川沿いの背後の丘陵地上に立地する遺跡が大半である。縄文時代のみ遺跡が山地や海岸沿いの崎山地区・重茂地区の丘陵地に多いのに比べ明らかなテリトリーの違いを見せている。違いの要因を指摘する資料はないが、生業の違いや交通路等の要因が上げられるかもしれない。

当地の奈良・平安時代の遺跡で発掘調査が行われているのは10数遺跡に上る。主なものをいくつか上げると、奈良時代の竪穴住居跡が検出されている例としては泉町狐崎II遺跡（1棟）、上村貝塚（2棟）がある。両遺跡とも河川背後の丘陵上に立地し、泉町狐崎II遺跡の場合は丘陵の狭い尾根筋上で住居跡が検出されている。平安時代の集落が検出された遺跡としては、島田III・IV遺跡（8棟）赤前遺跡群（5棟）、青猿I遺跡（5棟）、磯鷄館山遺跡（14棟）、上村貝塚（15棟）等があげられる。遺跡の立地を見ると、赤前遺跡群が山麓地緩斜面ないし扇状地形であるほかはいずれも丘陵地である。島田III・IV、青猿I、磯鷄館山の各遺跡では奈良時代の泉町狐崎II遺跡同様、丘陵の狭い尾根筋上に集落が営まれている。他に青猿I遺跡では鉄関連遺構が検出されており、当地の製鉄史を探る上で注目される。

奈良時代の住居跡の検出数は少ないが、分布調査等において奈良時代の土師器が発見されている遺跡が多いことから相当数の集落が河川流域に営まれていたことが推定される。同時存在かどうかは不明であるが、平安時代の遺跡では1遺跡当りの検出住居数は増加の傾向が見られる。

その他、鉄滓やファイゴの羽口が見つかった遺跡が図中に掲げた中にも24遺跡を数え、製鉄に関係するものと思われる遺跡が多い。これらの中には、青猿Ⅰ遺跡の調査例にも見られたように平安時代に逆上る遺跡の含まれている可能性もあげられる。



第6図 周辺の遺跡位置図

表1 周辺の遺跡一覧表

遺跡名称	遺物・遺構	所在地	遺跡名称	遺物・遺構	所在地
1 黒石沢	縄文時代前・中・後期土器、須恵器	近内第5地割崎ヶ沢	51 鴨崎I	土師器	鴨崎町
2 大又沢II	縄文時代土器、土師器	千徳第27地割大又	52 鴨崎II	土師器・須恵器	〃
3 牛伏	土師器	老木第35地割茂屋沢	53 横山	土師器・須恵器・鉄滓	宮町二丁目
4 セネカ沢II	縄文時代中期土器、弥生時代土器	近内第8地割桐館	54 小山田I	土師器・鉄滓	小山田第5地割和山、大畑
5 桐館III	縄文前・中期、弥生、土師、須恵器	〃	55 小山田II	土師器	小山田第6地割牛ヶ森
6 大又沢I	縄文時代中期土器、土師器	千徳第27地割大又	56 磯鷲竹洞II	縄文時代土器、土師器	磯鷲第6地割竹洞
7 岩船	縄文時代前期・中期、鉄滓・羽口	千徳第24地割岩船	57 猿楽峠	土師器	八木沢第1地割太田前
8 桜木	縄文時代中期・後期土器、土師器	千徳第21地割桜木	58 八木沢守ノ越III	縄文時代土器、土師器	八木沢第2地割守ノ越
9 アサナイ沢	縄文時代前・中期、土師・須恵・羽口	近内第7地割菅ノ沢	59 八木沢守ノ越IV	縄文時代土器、土師器	〃
10 菅ノ沢	縄文時代早・中期、土師・鉄滓	〃	60 藤原上町I	縄文時代前期土器、須恵器	藤原上町
11 横川	縄文時代中期土器、土師器	近内第9地割横川	61 藤原上町II	奈良時代末～平安初頭壑穴住居跡	〃
12 近内中村	縄文時代前～晚期、土師・須恵器	近内第6地割中村	62 磯鷲石崎	縄文時代土器、土師器	磯鷲第1地割石崎
13 近内白石I	鉄滓・フイ羽口	近内第3地割白石	63 藤原上町III	縄文時代土器、土師器	藤原上町
14 近内白石II	縄文時代後期土器、土師器・須恵器	〃	64 早坂	縄文時代早期、弥生、土師・須恵器	磯鷲第3地割上村
15 崎ヶ沢I	縄文時代前期・後期、鉄滓・土師器	近内第5地割崎ヶ沢	65 小沢田	縄文時代中期、土師器・須恵器	〃
16 赤畑	縄文時代中期土器	山口第11地割赤畑	66 上村貝塚	縄文時代中期・住居跡・貝塚、弥生、奈良、平安	〃
17 山口駒込I	縄文時代早期～後期、土師器・須恵器	山口第9地割駒込	67 上村II	縄文時代中期土器、土師器	〃
18 天神山	縄文時代土器、土師器・須恵器	山口第7地割神田	68 磯鷲畑森貝塚	縄文時代中期、土師器・須恵器	磯鷲第3地割上村、第6地割竹洞
19 田鎖	縄文時代中・後期土器、土師器	田鎖第2地割斉藤師	69 上村III	縄文時代中期土器、土師器	磯鷲第3地割上村
20 室井沢I	縄文時代中期・後期土器、土師器	千徳第20地割室井沢	70 上村IV	縄文時代中期土器、土師器	〃
21 神田沢	縄文時代中期土器、土師器	千徳第18地割神田沢	71 磯鷲竹洞I	縄文時代中期土器、土師器	磯鷲第6地割竹洞、第3地割
22 千徳城遺跡群	城館遺跡(千徳城・堀合館)・土師器	千徳5、8、16、18地割、近内第11地割	72 磯鷲館山	城館遺跡、平安集落	磯鷲第11地割岸ノ前
23 近内寺本	縄文時代中期土器、土師器・須恵器	近内第2地割寺本	73 仏沢I	土師器	磯鷲第12地割仏沢
24 近内寺本	土師器	近内第2地割寺本	74 島田	平安時代集落	磯鷲第4地割島田
25 青猿II	土師器、弥生式土器・壑穴	千徳第3地割青猿	75 仏沢II	縄文時代土器、土師器	磯鷲第12地割仏沢
26 青猿III	縄文時代中期土器、土師器	〃	76 磯鷲中谷地	土師器・須恵器	磯鷲第8地割中谷地
27 長根III	土師器	千徳第2地割長根	77 長沢向	平安時代壑穴住居跡・鉄滓・羽口	長沢第12地割向
28 長根I	城館遺跡	千徳第2地割長根、第3地割青猿	78 根井沢穴田I	縄文時代中期、土師器	津軽石第19地割穴田
29 長根II	土師器	千徳第2地割長根	79 沼里	縄文時代後期土器、奈良時代住居跡	津軽石第4地割大森、第6地割沼里
30 長根寺II	縄文土器、土師器	〃	80 馬越I	縄文時代後期土器・土師器・鉄滓	津軽石第3地割馬越
31 泉町狐崎II	奈良・平安時代土器・鉄器	山口第6地割狐崎、泉町	81 馬越II	土師器・鉄滓	〃
32 松山館	城館遺跡、須恵器・兼手刀	田鎖5地割藤内、松山13地割大久保沢	82 弘川I	縄文時代前期・中期・晚期、土師器	津軽石第14地割弘川
33 松山下谷地	縄文時代土器、須恵器・鉄滓・土師器	松山第8地割下谷地	83 弘川II	縄文時代土器、土師器	〃
34 松山大地田沢	土師器・壑穴住居跡	松山第7地割大地田沢	84 荷竹米山I	縄文時代中・後期、弥生、土師・須恵器	津軽石第16地割荷竹日向、米山
35 隠里I	縄文時代中期土器、須恵器・鉄滓	八木沢第2地割中村	85 荷竹日向II	縄文時代中期土器、土師器・須恵器	津軽石第16地割荷竹日向
36 隠里II	縄文時代中・後期土器、土師器・鉄滓	〃	86 荷竹日向III	縄文時代土器、土師器・鉄滓	〃
37 隠里III	縄文時代中・後期、土師器・須恵器	〃	87 荷竹日向I	縄文前・中・晚期、土師・須恵器	〃
38 岩ヶ沢	縄文時代前期土器、土師器・須恵器	小山田第2地割岩ヶ沢	88 荷竹日影III	土師器	津軽石第15地割荷竹日影
39 七所沢I	土師器	松山第10地割七所沢	89 荷竹日影V	土師器・鉄滓	〃
40 隠里IV	縄文時代中・後期、土師・須恵器・鉄滓・羽口	八木沢第3地割中村	90 弘川III	縄文時代前・中・後期、土師器・須恵器	津軽石第14地割弘川
41 隠里V	土師器・鉄滓	〃	91 金浜II	土師器	金浜第2地割吉蔵、第3地割藪の上
42 隠里VI	土師器・鉄滓・羽口	〃	92 金浜III	縄文時代土器、土師器	金浜第4地割鋤ヶ崎
43 八木沢駒込I	縄文時代後期土器、土師器・鉄滓	八木沢第8地割駒込	93 藤畑	縄文時代土器、土師器・須恵器	津軽石第12地割藤畑
44 小沢V神龍石	縄文時代晚期土器・土師器	小沢二丁目	94 久保田	縄文時代土器、土師器	赤前第2地割久保田
45 小沢IV人形鼻	縄文時代後期土器、土師器・須恵器	〃	95 小畑内I	縄文前～晚期、奈良時代土師器、弥生	赤前第14地割小畑内
46 拝殿ヶ沢	縄文時代土器、鉄滓・土師器・須恵器	西町四丁目	96 赤前IV柳沢	縄文時代土器、土師器	赤前第12地割柳沢
47 日の出町II	縄文時代中期土器、フイ羽口	日の出町	97 赤前IV八枚田	縄文前～晚期、平安時代壑穴・羽口	赤前第11地割八枚田
48 沢田I	土師器	沢田	98 赤前III	縄文早・中期、平安時代壑穴・鉄滓	赤前第7地割柳蔵、10山崎、11八枚田
49 小山根	縄文時代土器、弥生時代土器、土師器	中里団地、愛宕一丁目	99 発生野VI	縄文時代後期土器、土師器	音部第7地割坂ノ上
50 泉町狐崎I	土師器	山口第6地割狐崎、泉町			

III 調査の方法

1. 野外調査

(1) 調査区の設定

調査範囲は丘陵地上の尾根筋頂部付近の平坦面や斜面上、それに北尾根の南東側緩斜面や南尾根の南端緩斜面と不連続・不整形に広がる。調査区割はそれらの範囲をカバーできるように次のように行った。

北尾根と南尾根を互いに見通せる地点にそれぞれ基準点1・2をとり、その2点を結ぶ直線を軸線とした。軸線は磁北に対して3度13分東偏し、真北に対しては4度27分西偏する。南尾根にある基準点2を座標の基点とし、基点から調査範囲をカバーする30mメッシュの大区画を設定した。大区画をさらに100分割して、3mメッシュの小区画を設定した。小区画は遺物取り上げの際などに最小単位として使用した。

区画名は大区画が北から南へⅠ～Ⅶ、西から東へB～Eを与え、その組み合わせでⅢE区・ⅥD区などと呼称した。また、小区画名は北から南へ0～9、西から東へa～jを与え、大区画名と組み合わせでⅢE0a・ⅥD9jなどのように呼称している。

基準点1・2の平面直角座標第X系による成果値、および杭高(L)は以下のとおりである。

基準点1 X = -39,536.265 m Y = 94,484.001 m L = 47.030 m

基準点2 X = -39,475.455 m Y = 94,488.893 m L = 44.648 m

(2) 粗掘り・遺構検出

当初、2m幅のトレンチを地形に応じて入れ、遺跡全体の状況把握につとめた。

北尾根頂部及びその北西端から北へ延びる尾根筋では尾根に沿ってトレンチを入れ、遺構・遺物とも皆無であったことから、トレンチ掘りのみで調査を終了させた。

北尾根の南東側斜面では、地表面観察で暗褐色土が中央からやや東寄りに幅10mの規模で斜面に沿って堆積しており、その両側には明褐色から浅黄色土が認められた。暗褐色土の分布は小規模な埋積谷の様相を呈しており、途中に4～5mの段差を持っていたことから、暗褐色土を横断する方向と段差部分に直交する方向にトレンチを設定した。その結果、段差は畑地造成に伴う盛土で形成されたことが確認され、遺物包含層のⅡ層は連続する傾斜をなしている。これにより表土及び盛土は重機を用いて除去した。また、Ⅱ層の遺物包含層は人力によって掘り下げたが、遺構は検出されなかった。

南尾根では頂部の緩斜面と尾根筋に沿ってトレンチを入れ、表土層から須恵器・土師器の破

片が比較的多く出土し、他に弥生式の土器片などが出土した。また、遺構の存在も予想されたので、南尾根は全面を人力によって粗掘りし、遺構検出を行った。

南尾根の南端緩斜面には斜面に平行するトレンチと直交するトレンチを設定した。表土下位の黒色土層からは遺物が出土し、遺構の存在も予想された。廃土場所を斜面上方に確保する必要があり、この部分での粗掘りは重機と人力とを併用した。

(3) 遺構の名称

遺構検出の結果、南尾根とその南端緩斜面で遺構が確認された。検出された遺構は古墳・方形周溝・住居状堅穴遺構・溝跡・集石遺構・墓壇・ピット・陥し穴である。表土除去後の遺構検出時には古墳の存在が予想できず、その段階では遺構の命名を次のように予定していた。住居址及び住居状遺構を1号～、ピット類を51号～、溝跡を101号～とし、概ね検出順に番号を与えた。結果的に古墳となるその周溝は、当初、黒色～黒褐色土が半円状の広がりを見せていたため、斜面上に構築され、斜面下方部が削剝された住居址と考えられた。しかし、精査の途中でそれらが溝状遺構の様相を呈してきたので、遺構名を101号～に変更し、精査を続行した。結果的に古墳であることが確認されたが、野外調査時中は混乱を避けるため、古墳は101号～の番号を使用し、溝跡はすでに精査を開始していた101号溝跡を除き、151号～の番号を用いた。室内整理の段階において、遺構の種類と数が確定したので、遺構の名称を次のように整理した。古墳及び方形周溝を1号～、ピットを51号～、陥し穴を71号～、溝跡を101号～とし、住居状堅穴遺構・集石遺構・墓壇はそれぞれ単独遺構であることから番号は与えていない。従って、現地説明会資料や調査略報ほかに中間報告として発表してきた遺構名(旧遺構名)と本報告における遺構名(新遺構名)は異なるので、その対照表を以下に掲げる。

表2 遺構名対照表

新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名
1号古墳	101号古墳	17号古墳	117号古墳	51号ピット	51号ピット
2号古墳	102号古墳	18号古墳	118号古墳	52号ピット	56号ピット
3号古墳	103号古墳	19号古墳	119号古墳	53号ピット	57号ピット
4号古墳	104号古墳	20号古墳	120号古墳	54号ピット	58号ピット
5号古墳	105号古墳	21号古墳	121号古墳	55号ピット	62号ピット
6号古墳	106号古墳	22号古墳	122号古墳	56号ピット群	54号ピット群
7号古墳	(欠番)	23号古墳	123号古墳	71号陥し穴	53号陥し穴
8号古墳	108号古墳	24号古墳	124号古墳	72号陥し穴	55号陥し穴
9号古墳	109号古墳	25号古墳	125号古墳	73号陥し穴	59号陥し穴
10号古墳	110号古墳	26号古墳	126号古墳	74号陥し穴	60号陥し穴
11号古墳	111号古墳	27号古墳	127号古墳	75号陥し穴	61号陥し穴
12号古墳	112号古墳	28号古墳	128号古墳	101号溝跡	101号溝跡
13号古墳	113号古墳	29号古墳	129号古墳	102号溝跡	151号溝跡
14号古墳	(欠番)	30号古墳	130号古墳	103号溝跡	152号溝跡
15号古墳	115号古墳	31号方形周溝	107号方形周溝	104号溝跡	153号溝跡
16号古墳	116号古墳	32号方形周溝	114号方形周溝		

(4) 精査・出土遺物の取り上げ

古墳の周隴は斜面に直交する方向に土層観察用のベルトを残して掘り進めた。主体部の精査は長軸と短軸にベルトを残す4分法を原則とした。主体部と周隴を同時に検出できた場合には主体部の短軸と周隴の埋土断面が同一直線上になるように設定した。主体部の埋土は2mmメッシュのふるいにかかけ、極少遺物の発見につとめた。ガラス小玉の多くはその際に発見された。墓壙・ピットは2分法を原則とし、陥し穴は長軸中央に、方形周溝・溝跡は適宜ベルトを残して掘り進めた。住居状堅穴遺構は4分法を原則としたが、埋土断面図の記録は斜面に直交するベルトのみにとどめた。

遺構内出土の遺物は出土地点を確認し、必要に応じて記録し、取り上げた。また、遺構外出土の遺物は層位を確認し、原則として小区画単位で取り上げた。

(5) 実測と写真

平面実測はグリッド軸に合わせた1mメッシュを基本とする簡易遣り方測量法で行った。ライン名は基準点2(グリッドVI D0aの北西端にあたる)を座標原点とし、北方向をN1…、南をS1…、東をE1…、西をW1…とした。断面図は任意の高さに水平水糸を張り、作成した。縮尺率は20分の1を基本とし、必要に応じて10分の1も併用した。

写真撮影には6×7cm版モノクロ1台、35mm版モノクロとカラースライド各1台を使用した。また、野外調査がほぼ終了する段階で、セスナ機による遺跡の空中写真を撮影した。

(6) 広報活動

調査が進展し、遺跡の概要が判明した時点で、調査の成果を広く公開するとともに、埋蔵文化財に対する啓蒙活動の一環として現地説明会を6月10日に開催した。また、地元住民、学校、個人、各種団体から遺跡見学の要請があり、適宜調査員が対応した。報道機関からの取材にも可能な限り対応し、広報活動の一部とした。

2. 室内整理と報告書の作成

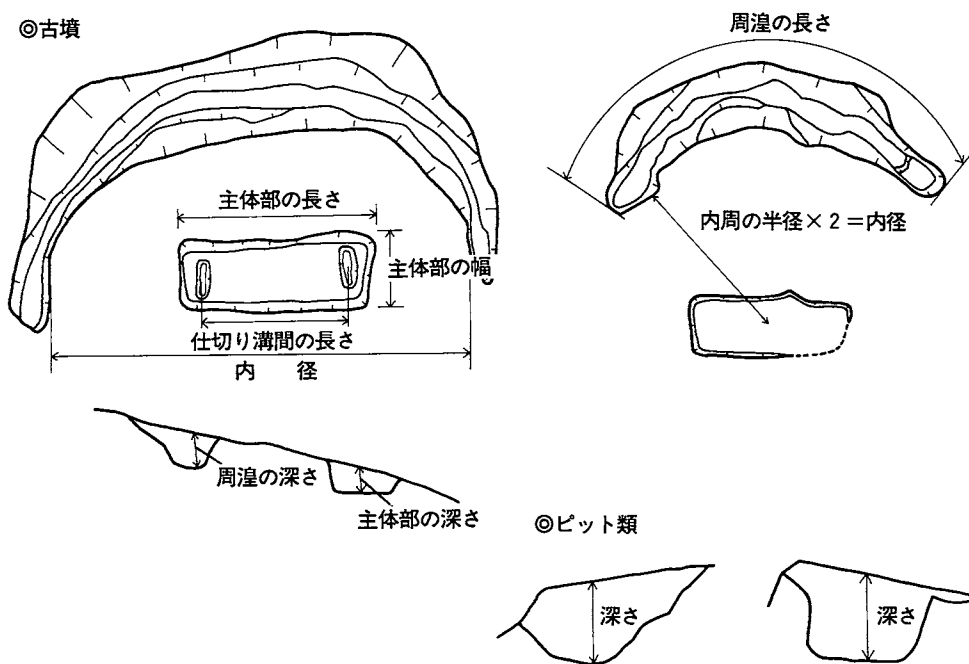
整理作業は遺構関係、遺物関係とに分け、概ね以下に述べる手順で進めた。報告書の凡例は以下のとおりである。

(1) 遺構関係

個々の遺構図版は現地で作成した実測図を点検・補正して第2原図を作り、それをトレースして作成した。

掲載図版の縮尺は40分の1または60分の1であるが、遺構配置図は400分の1、101号溝跡は100分の1である。写真図版の縮尺は不定である。

遺構の計測値はおおよそ以下の図に示す位置で測定したものである。



挿図1 古墳・ピット類の計測位置

基本層序の層位はローマ数字、遺構埋土の土層名はアラビア数字で表わし、細分される場合にはアルファベットの小文字を用いている。

遺構配置図および個々の遺構図版の方位は磁北で示している。

(2) 遺物関係

遺物の整理は野外調査時に水洗と注記の大部分を行い、その残りは室内整理の最初の段階で行った。その後、接合・復元・仕分け・登録の順に進めた。さらに、報告書掲載遺物の実測や拓本、写真撮影、計測、トレース、図版作成を行った。これらの作業の一部は併行または前後して行った。

◎図版の縮尺

土器——1 / 3 礫・鉄器・金属製品——1 / 2 剝片石器——2 / 3
ガラス小玉・古銭・切子玉——原寸 刀類——不定

◎写真図版の縮尺

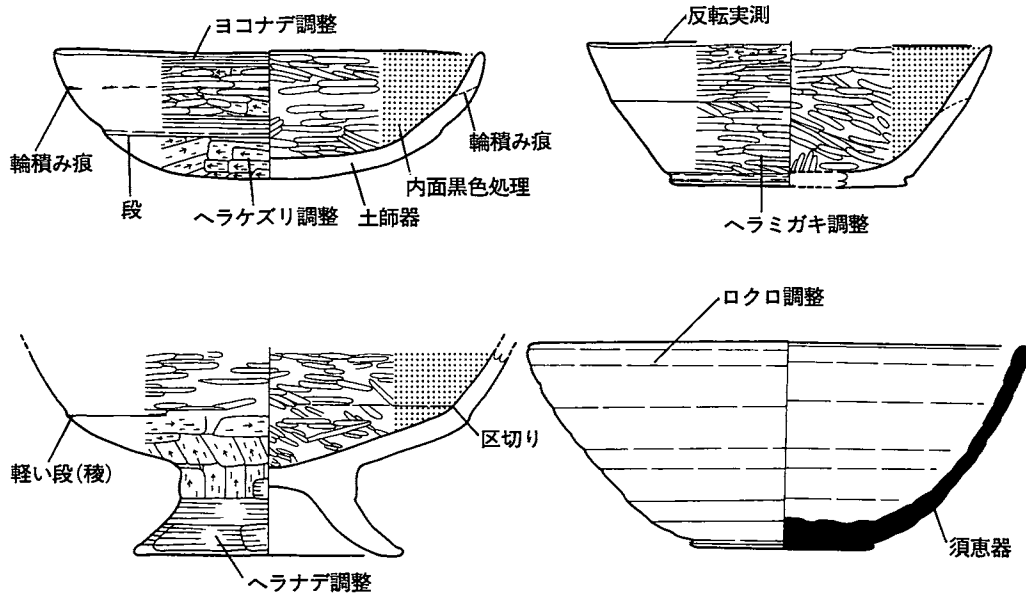
土器——1 / 2 ないし 1 / 3 礫——1 / 3 剝片石器——2 / 3 鉄器・金属製品——1 / 2
古銭・切子玉——原寸 ガラス小玉・刀類——不定

◎土師器・須恵器の整理報告

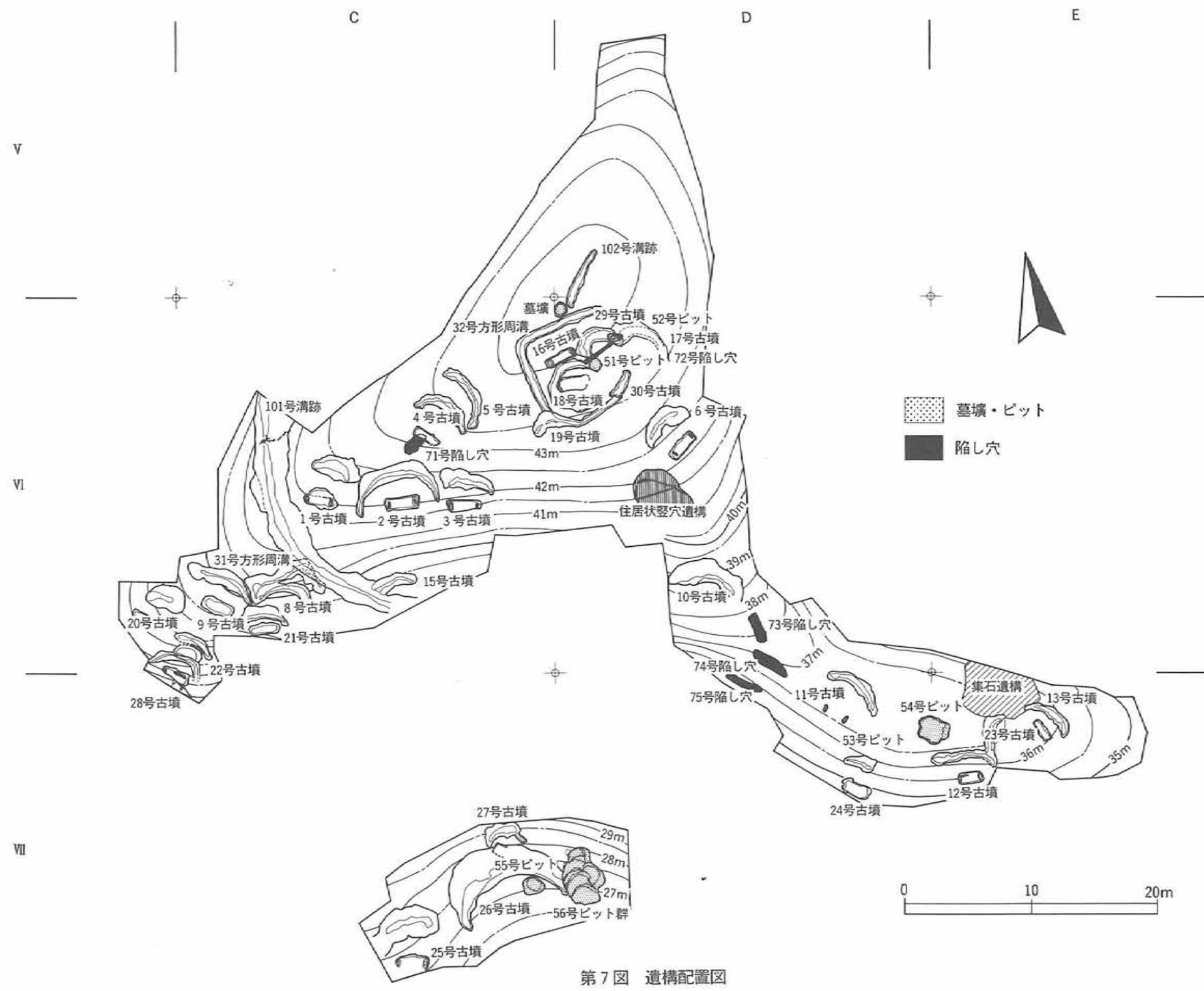
- ・実測した土器は、接合復元できたもののほかに、4分の1以上残存し反転実測できるもの、4分の1未満であるが遺構とのかかわりで取り上げなければならないもの（平面実測）などである。
- ・登録した土器は、土器全体の調整を表している部分を選んで、チョーク、鉛筆で調整痕をしるし、原寸で実測した。調整痕の実測範囲は内外面共4分の1を目安とした。
- ・調整にはヘラナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ調整などがある。
- ・輪積み痕は明瞭にみえる部分のみ実測した。
- ・拓本は底部の木葉痕、回転糸切り痕、須恵器体部のタタキ目痕、当て具痕のみ行った。
- ・4分の1以上2分の1未満で反転実測した土器は口縁部の線を半分まで引き、2分の1以上あるのは全部引いて表している。
- ・ロクロ使用の土器は口縁部、ロクロ痕などを直線で表し、ロクロ未使用の土器はフリー・ハンドで表現した。
- ・須恵器は断面を黒く塗りつぶして表した。
- ・器面に黒色処理が施されているものは、スクリーン・トーンを2分の1貼って表現した。

◎遺物番号

図版掲載の遺物番号はガラス小玉類を除いて種類に関係なく、3号古墳出土土師器坏の1番から遺構外出土寛永通宝の281番まで、掲載順に通し番号を付している。この番号は写真図版の番号とも共通である。ガラス小玉類は出土した古墳毎に通し番号に関係なく、2号古墳出土のものは1～28番まで、16号古墳出土のものは1～183番までの番号を付している。



押図2 実測土器の表現



第7図 遺構配置図

IV 検出された遺構と遺構内出土遺物

1. 古墳

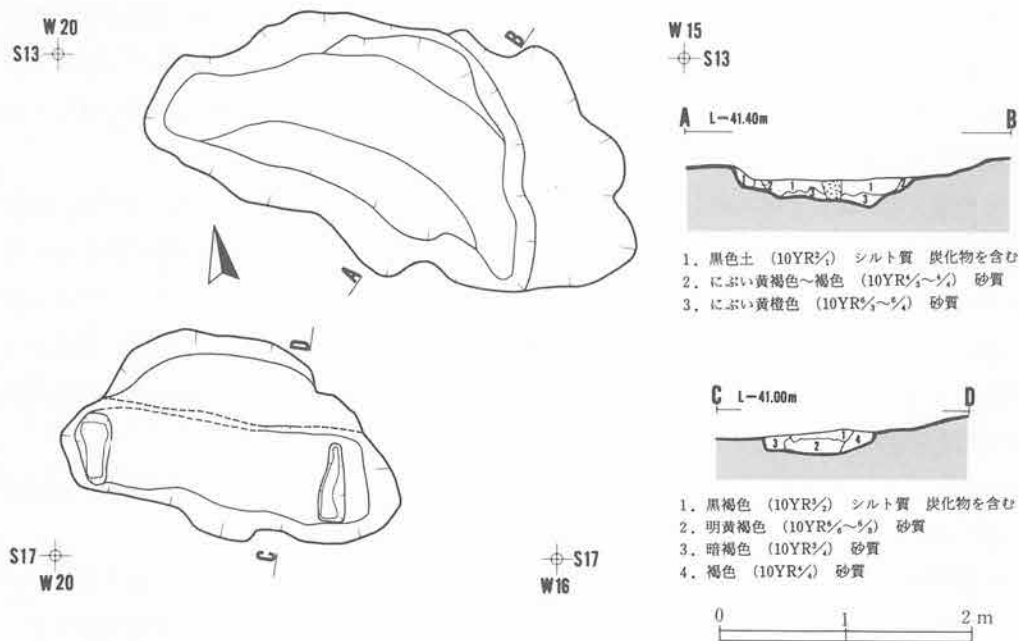
1号古墳

遺構 (第8図、写真図版4)

南尾根の南西に延びる尾根筋状の緩斜面上にあり、VIC区に位置する。検出面はIII層上面で、この付近はII層を欠き、III層の層厚も極めて薄い。

<主体部>土壇形で、平面形は長形状を呈し、長軸の両端の底面には長軸に直交して細長い溝状の掘り込み(以下、同様の掘り込みを仕切り溝と仮称する)を持つ。主軸の方向は等高線に平行し、ほぼ東西を示す。主体部の規模は長さ275cm、幅85cm、深さは17cm前後である。仕切り溝の規模は東側が62×19cm・深さ約15cm、西側が58×28cm・深さ約20cmである。仕切り溝間の長さは約190cmである。残存する壁はほぼ直立し、底面は若干の凹凸が見られる。

埋土は4層に分かれ、1層は炭化物を比較的多く含む黒褐色シルト質土、2~4層は暗褐色等の汚れた砂質土である。1層土は、検出面では不整な半円状に広がっており、主体部の北側が不整形なプランを示している部分には1層土の堆積が見られた。



第8図 1号古墳 (遺構)

<周湟>主体部の北東側に位置する円弧状の周湟である。弧の大きさは円周の4分の1から5分の1程度であり、最大幅は約160 cm、最大深20 cmである。底面は波打つような凹凸があり、断面形はやや上幅が広く、浅皿状を呈する。

埋土は上部が炭化物を多く含む黒色のシルト質土で、主体部の1層と同質である。下部はにぶい黄褐色等の汚れた砂質土である。黒色のシルト質土は、検出面では主体部の1層土と同様不整な半円状の広がりを示していた。

遺物

出土していない。

2号古墳

遺構 (第9図、写真図版5)

1号古墳の東側に位置し、VIC区の南向き斜面のIII層上面で検出されている。1号古墳の周湟と近接しているが、重複はしていない。

<主体部>1号古墳と同様に土壙形で、IV層を掘り込んで構築されている。平面形は長方形を呈し、長軸の方向は等高線に平行し、ほぼ東西を示す、規模は長さ265 cm、幅95 cm、深さは斜面上方側の北側の壁で42 cm、下方側の壁で16 cmである。北側の壁はほぼ直立し、南側ではやや外傾する。底面は平坦で、長軸方向の両端にはほぼ垂直に掘り込まれた仕切り溝を持つ。仕切り溝の規模は、東側が55×24 cm・深さ約20 cm、西側が52×18 cm・深さ22 cm、その間の長さは190 cmである。

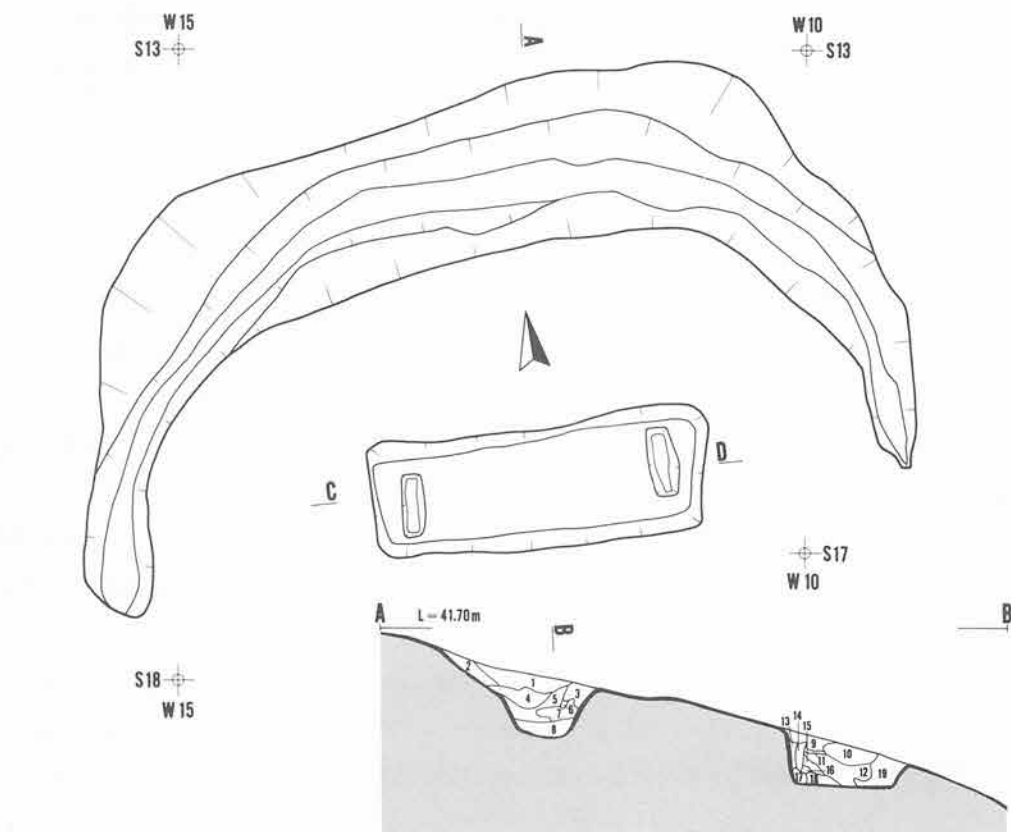
埋土は炭化物を含む暗褐色ないし褐色のシルト質土が主体で、南側の壁際には汚れた黄褐色の砂質土が堆積する。また、北側の壁際には、固く締まって粘性のある黄褐色シルト質土が壁に沿って堆積しており、その状況は人為的な堆積の様相を示す。仕切り溝の埋土は砂混じりの暗褐色ないし黒褐色シルト質土である。

<周湟>主体部の北側に検出された円弧状の周湟であり、内径は推定約5.8 mである。斜面上方に約2分の1周し、斜面の下方には検出されていない。最大幅は130 cm、最大深52 cmである。底部の平面形は比較的整った円弧を呈するが、開口部は北東と北西側にやや方形に張り出している。内径側の壁は急角度で外傾するが、外径側の壁はゆるやかに外傾し、断面形は不整なU字形状を呈する。開口部での斜面上方と下方の高低差は最大で約100 cmであるが、底面での高低差は20 cm程である。

埋土は、上部が黒褐色のシルト質土、中・下部はにぶい黄褐色や黄色の汚れた砂質土である。

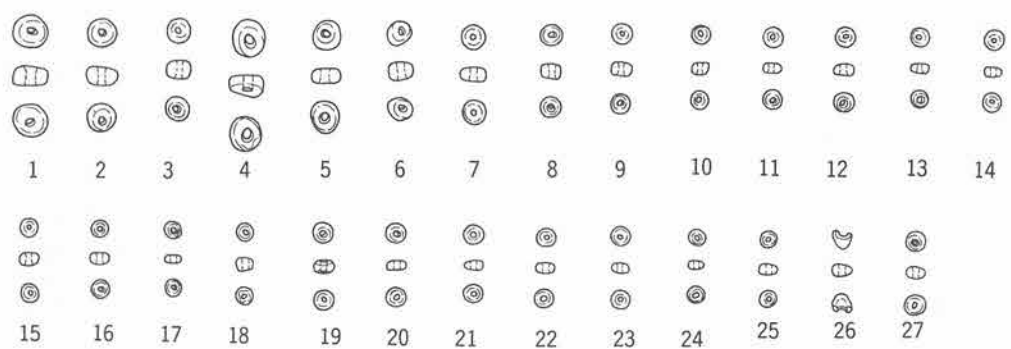
遺物 (第9図、写真図版43)

<ガラス小玉>主体部からガラス小玉28個が出土している。発掘調査時に検出したのは1点で、主体部の中央からやや東に寄った南壁際底面直上からの出土である。他の27点は埋土を洗



1. 黒褐色 (10YR $\frac{2.5}{4}$) シルト質 炭化物を含む
2. におい黄褐色 (10YR $\frac{2.5}{4}$) 砂質 炭化物を含む
3. におい黄色 (2.5YR $\frac{2.5}{4}$) 砂質
4. におい黄褐色 (10YR $\frac{2.5}{4}$) シルト質
5. におい黄褐色 (10YR $\frac{2.5}{4}$) 砂質
6. におい黄色 (2.5YR $\frac{2.5}{4}$) 砂質
7. におい黄色 (2.5YR $\frac{2.5}{4}$) 砂質
8. 明黄褐色 (2.5YR $\frac{2.5}{4}$) 砂質
9. 暗褐色 (10YR $\frac{2.5}{4}$) シルト質 炭化物を含む
10. 暗褐色 (10YR $\frac{2.5}{4}$) シルト質 炭化物を含む
11. 褐色 (10YR $\frac{2.5}{4}$) シルト質
12. 暗褐色 (10YR $\frac{2.5}{4}$) シルト質 炭化物を含む
13. 褐色 (10YR $\frac{2.5}{4}$) シルト質
14. 黄褐色 (10YR $\frac{2.5}{4}$) シルト質 粘性あり。黒褐色土が斑状に混じる
15. 褐色 (10YR $\frac{2.5}{4}$) シルト質
16. 暗褐色 (10YR $\frac{2.5}{4}$) シルト質
17. におい黄褐色 (10YR $\frac{2.5}{4}$) シルト質
18. 暗褐色 (10YR $\frac{2.5}{4}$) シルト質
19. 黄褐色 (10YR $\frac{2.5}{4}$) 砂質

遺構実測図



出土遺物

第9図 2号古墳 (遺構・遺物)



浄して篩いにかけての時点での検出である。いずれも東側の埋土中から出土し、西側の埋土からは出土していない。ガラス小玉は最大のもので直径 7.4 mm、最小のものが直径 3.5 mm である。大部分は径 3.5 mm から 4.4 mm の範囲のものである。色調は薄紺色を呈するものが多く、他に紺色、濃紺色のものが数点見られる。中央部に径 1.3 mm 前後の穿孔があり、孔の両端部はやや平滑に成形されているものが多い。

3号古墳

遺構 (第10図、写真図版6)

2号古墳の東側に位置し、2号古墳と同様VIC区南向き斜面のIII層上面で検出されている。2基の周濠は隣接するが、重複はしていない。

<主体部>土壇形で、IV層を掘り込んで構築されている。平面形は長方形で、長軸は等高線に平行し、その方向はほぼ東西を示す。規模は長さ 260 cm、幅は残存部の最大が 83 cm、深さは斜面上方の北側で 26 cm、下方の南側には壁が残存しない。残存する壁はほぼ直立する。底面はほぼ平坦で、長軸方向の両端に仕切り溝を持つ。その規模は東側が 48×25 cm・深さ 8 cm、西側が 65×18 cm・深さ 5 cm、その間の長さは約 200 cm である。

埋土は炭化物を含む黒褐色ないし暗褐色のシルト質土が主体を占め、最下部には明黄褐色の汚れた砂質土が堆積する。仕切り溝の埋土は砂混じりの暗褐色から黒褐色のシルト質土である。

<周濠>主体部の斜面上方側である北側に、推定による内径が約 4.4 m の円弧状の周濠を検出している。最大幅は 125 cm、最大深 40 cm で、弧の大きさは円周の約 3分の1 である。平面形は不整で、2号古墳の周濠に比べてやや直線的で、周濠の両端部分で若干湾曲する程度である。開口部北西側の不整な広がりには崩落によるものと思われる。底面は波打つような凹凸があり、深さは一様ではない。内径側の壁は外径側の壁より急角度で外傾する。断面形は不整な U 字形状を呈する。

埋土は上・中部が炭化物を含む黒褐色ないし暗褐色のシルト質土、下部がにぶい黄褐色や明黄褐色の汚れた砂質土である。

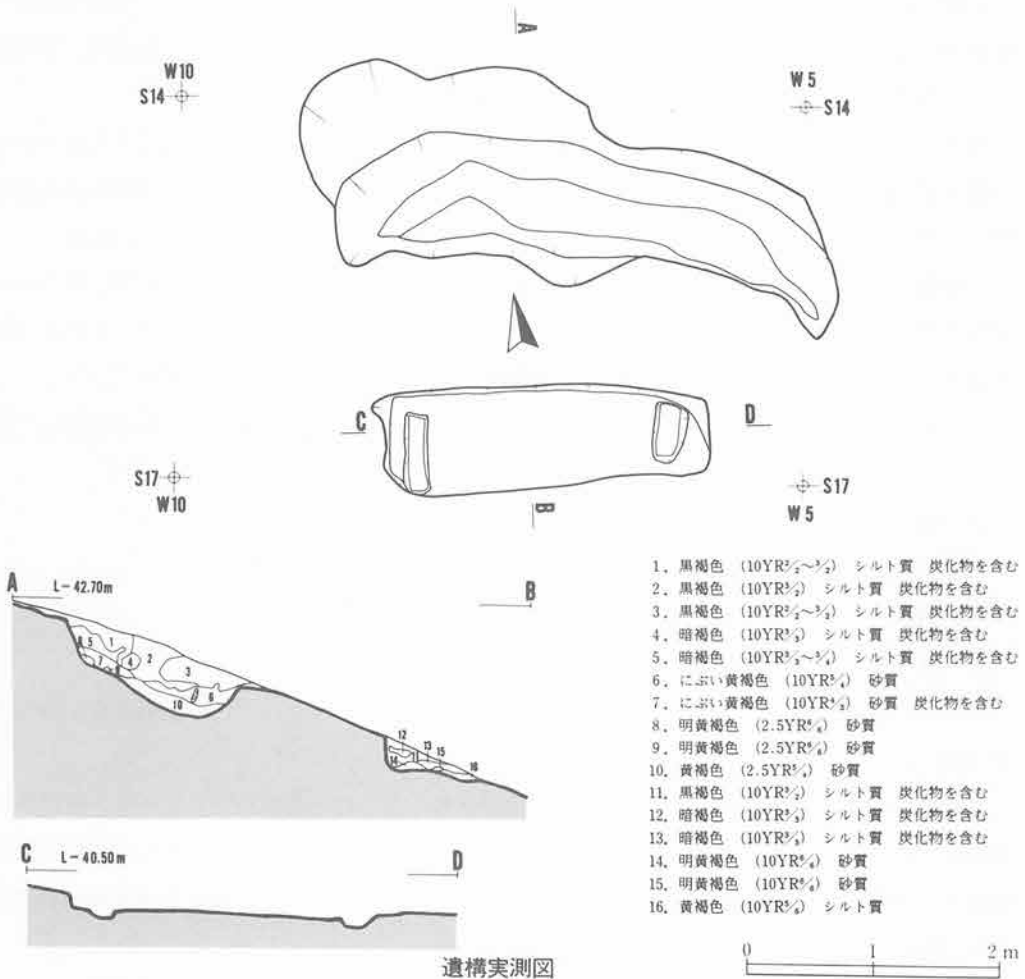
遺物 (第10図、写真図版43)

<土器>ロクロ未使用の土師器坏形土器が2点(1、2)出土している。2点とも丸底で内面をヘラミガキ後、黒色処理が施されている。

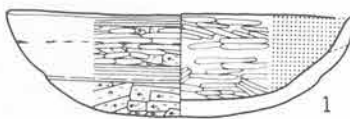
1は体部外面下位に段をもち、体部が丸底の底部から内彎気味に立ち上がるものである。外面は段上半がヘラケズリ後、ヨコナデが施され、更にヘラミガキ調整されている。段下半はヘラケズリで調整されている。輪積み痕が外面の体部上半に3本、下半に1本みられる。内面に一部不明瞭ながら軽い区切りをもつ。1は周濠の埋土最上部から出土しているが、一片だけ西側の2号古墳周濠の埋土中位から出土した口縁部片と接合している。口径は 13.9 cm、器高は 4.1

cm である。

2は体部外面の中位に段をもち、内面に明瞭な区切りをもつものである。体部は丸底の底部から内彎しながら立ち上がる。体部外面の調整は段上半がヨコナデ後、一部ヘラミガキ、段下半がヘラケズリ後、一部ヘラミガキである。周湮南西壁側の緩く平坦状になる壁直上から出土している。口径は15.4 cm、器高は4.5 cm である。



1. 黒褐色 (10YR^{2/6}~^{3/6}) シルト質 炭化物を含む
2. 黒褐色 (10YR^{2/6}) シルト質 炭化物を含む
3. 黒褐色 (10YR^{2/6}~^{3/6}) シルト質 炭化物を含む
4. 暗褐色 (10YR^{3/6}) シルト質 炭化物を含む
5. 暗褐色 (10YR^{3/6}~^{4/6}) シルト質 炭化物を含む
6. 濃い黄褐色 (10YR^{5/6}) 砂質
7. 濃い黄褐色 (10YR^{5/6}) 砂質 炭化物を含む
8. 明黄褐色 (2.5YR^{5/6}) 砂質
9. 明黄褐色 (2.5YR^{5/6}) 砂質
10. 黄褐色 (2.5YR^{6/6}) 砂質
11. 黒褐色 (10YR^{2/6}) シルト質 炭化物を含む
12. 暗褐色 (10YR^{3/6}) シルト質 炭化物を含む
13. 暗褐色 (10YR^{3/6}) シルト質 炭化物を含む
14. 明黄褐色 (10YR^{5/6}) 砂質
15. 明黄褐色 (10YR^{5/6}) 砂質
16. 黄褐色 (10YR^{6/6}) シルト質



出土遺物



第10図 3号古墳 (遺構・遺物)

4号古墳

遺 構 (第11図、写真図版7)

南尾根の南西に延びる尾根筋状の非常にゆるやかな斜面上で検出されている。3号古墳の北側に位置している。検出面はⅢ層上面である。この付近のⅢ層は層厚が薄く、周滄の掘り込みはⅣ層に至る。

<主体部>掘り込みが浅く、残存状態は極めて悪い。検出面では北西側が黒褐色土の広がりを長方形に確認できたが、南東側は大きな木根の攪乱を受け、また、黒褐色土の堆積がほとんど見られず明瞭に識別できなかった。土壇形で、平面形は長方形と思われる。規模は推定で長さ220cm前後、幅約82cm、深さは数cm程度である。長軸の方向は北西—南東で、等高線に対しほぼ平行する。

埋土は、北西側上部には黒褐色シルト質土、下部にはⅢ層起源と思われる褐色の汚れたシルト質土が堆積する。黒褐色シルト質土は北西端に10cm程の堆積が見られ、その部分是不整形に窪んでいる。この窪みは2号古墳等に見られる仕切り溝であった可能性も考えられる。

<周滄>主体部の北東側に円弧状の周滄が検出されている。内径は推定で約4.5m、弧の大きさは円周の約3分の1、最大幅88cm、最大深は30cmである。埋土断面図を作成した付近が最も深く、両端に近づく程浅い。平面形は比較的整った円弧で、断面形はU字状を呈する。

埋土は上・中部が暗褐色ないし褐色のシルト質土で、下部はにぶい黄色の汚れた砂質土である。

遺 物

主体部、周滄ともに出土していない。

5号古墳

遺 構 (第11図、写真図版7)

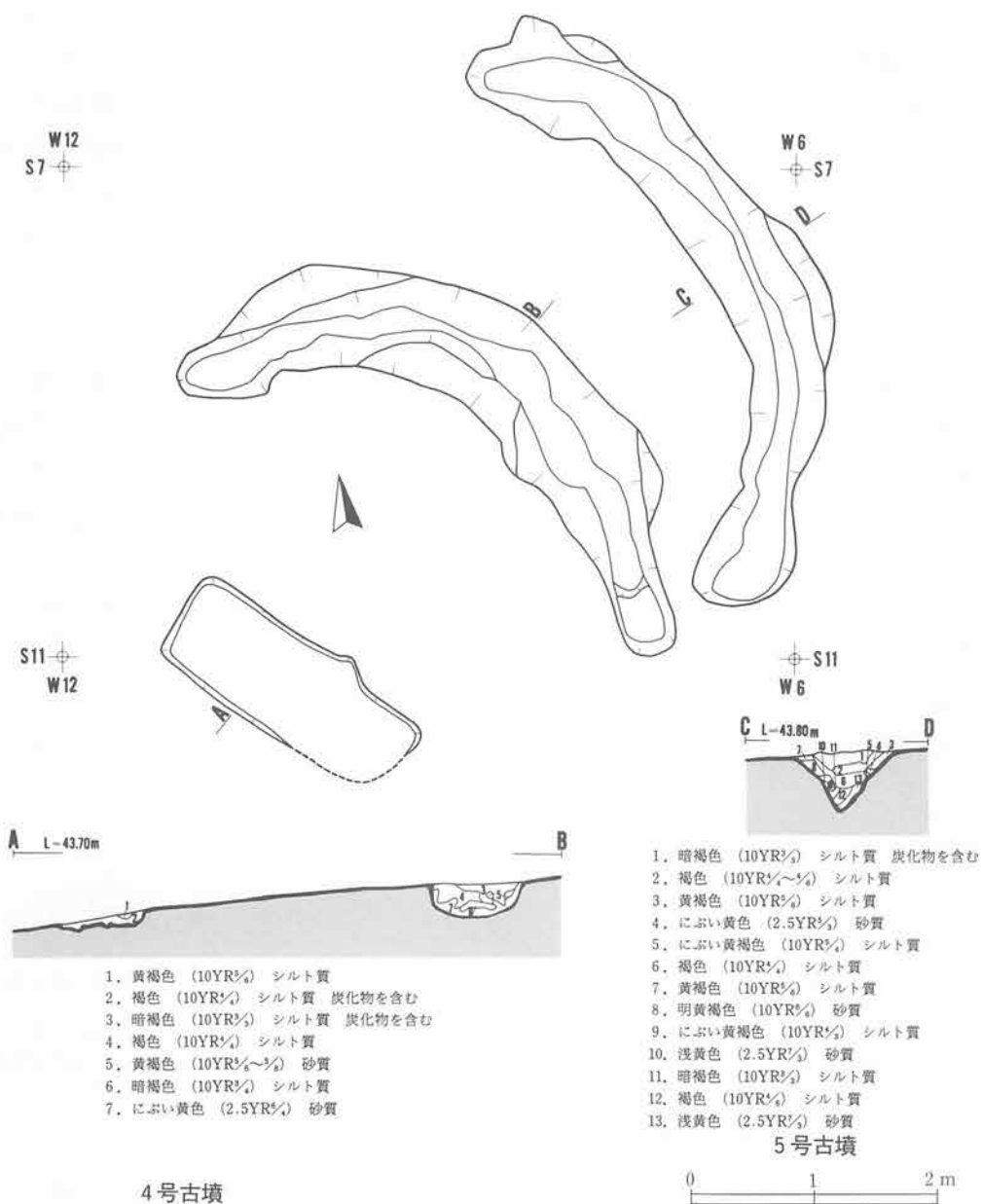
4号古墳周滄の東側に周滄のみを検出している。検出面、掘り込まれている土層とも4号古墳と同様である。

<周滄>平面形が、円周の約3分の1周程度の比較的整った円弧状を呈している。推定される内径は約5.0m、最大幅82cm、最大深は50cmである。4号古墳と同様、弧の中央付近が最も深く、両端に行く程浅くなる。底部の幅は狭く、壁は内径側が外径側より若干急角度で外傾する。断面形はV字状に近い。

埋土も4号古墳に類似し、上・中部は暗褐色から褐色のシルト質土で、下部や壁際はにぶい黄色や浅黄色などの汚れた砂質土である。

遺 物

出土していない。



遺構実測図

第11図 4号・5号古墳 (遺構)

6号古墳

遺構 (第12図、写真図版8・9)

南尾根の南東方向に延びる尾根筋の頂部からやや下方の傾斜変換点付近のVI D区斜面上で

検出されている。検出面はⅢ層上面である。

<主体部>土壇形で、Ⅲ・Ⅳ層を掘り込んで構築されている。平面形は長方形を呈し、長軸は等高線に対して平行の北東—南西方向を示す。規模は長さ 254 cm、幅 92 cm、深さは斜面上方側の壁で約 20 cm、下方側の壁で約 7 cm である。壁はほぼ直立する。底面は平坦で、黒褐色から暗褐色のシルト質土が長形状に約 208×62 cm の範囲で貼られている。長軸方向の底面両端には仕切り溝を持つ。その規模は東寄りの溝が 46×15 cm・深さ 12 cm、西寄りが 54×14 cm・深さ 10 cm である。仕切り溝間の長さは約 195 cm である。

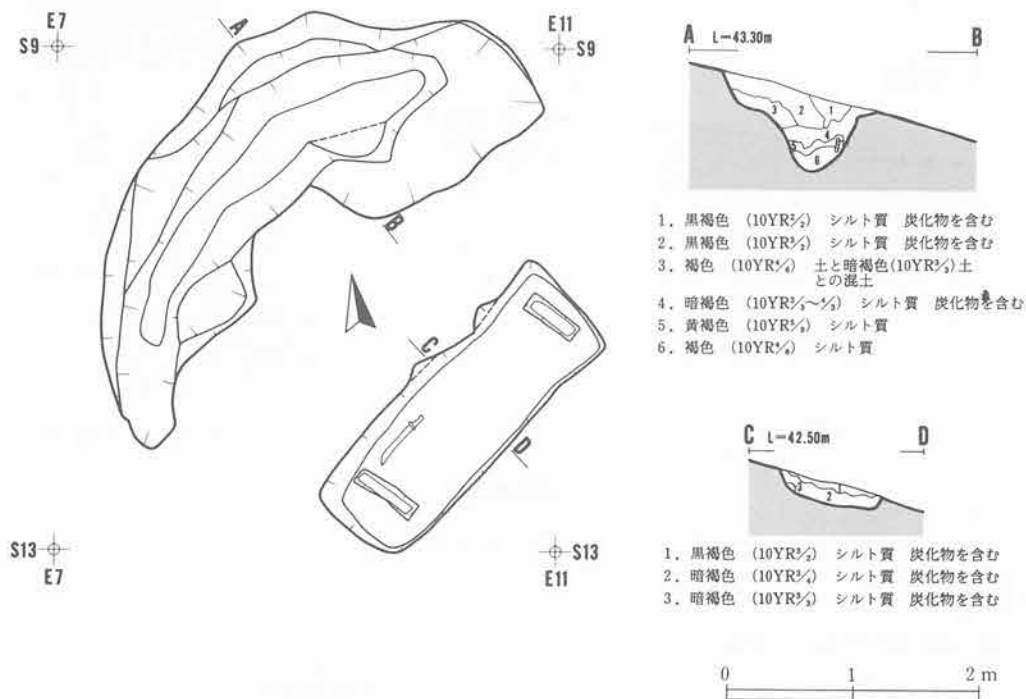
埋土は炭化物を含む黒褐色や暗褐色のシルト質土が主体である。

<周濠>主体部の斜面上方にあたる北西側に円弧状の周濠を検出している。内径は推定で約 4.0 m、弧の大きさは円周の約 3分の1で、最大幅 110 cm、最大深が 60 cm である。内径側の壁は比較的急角度で外傾し、外径側の壁は開口部付近がゆるやかで、底部付近はそれよりはやや急な角度で外傾する。周濠の両端は、南西側がゆるやかに浅くなるのに対し、北東側は比較的急な角度で立ち上がる。

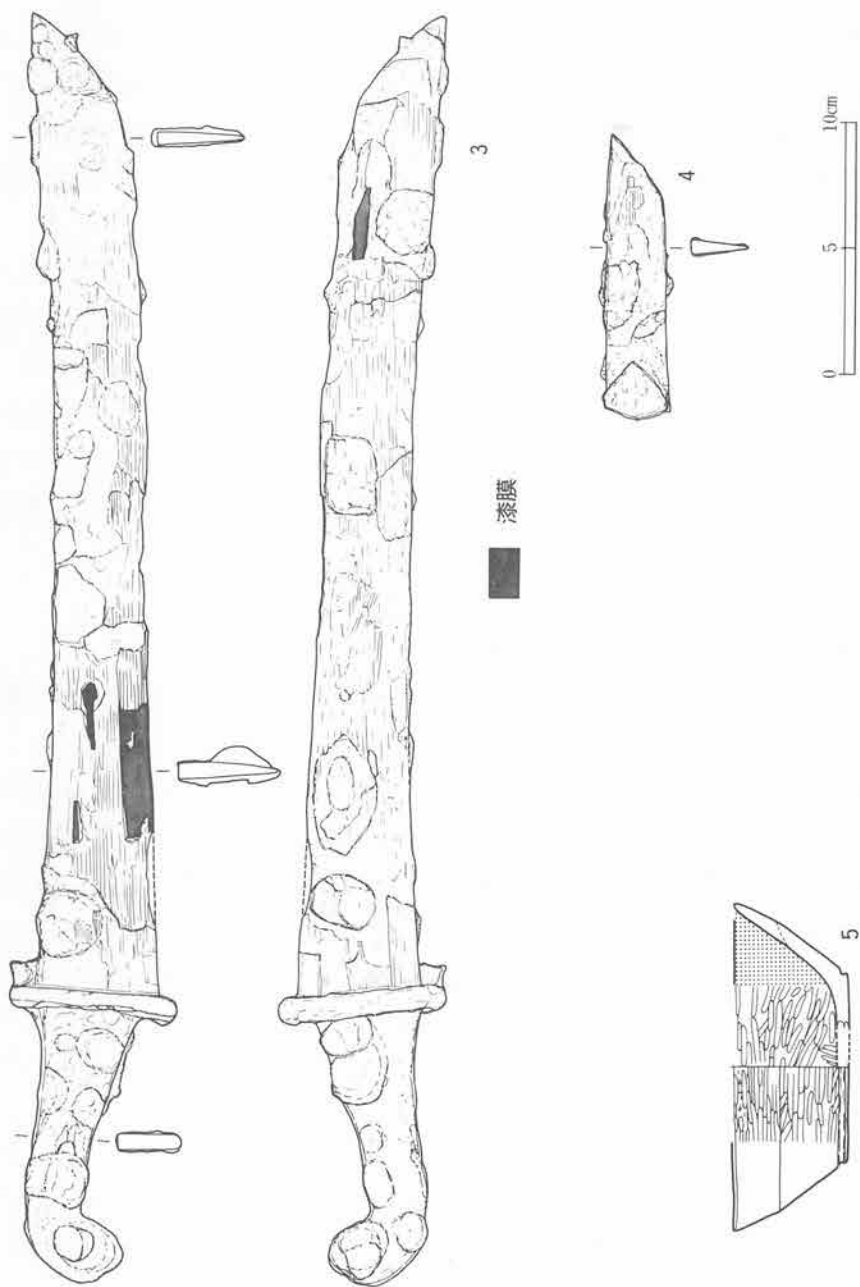
埋土は上部が炭化物を含む黒褐色シルト質土、中・下部が暗褐色や褐色等のシルト質土である。

遺物 (第 13 図、写真図版 43)

<刀類>主体部の底面直上から蕨手刀 1 振と埋土上部から直刀と思われる刃先が 1 点出土し



第12図 6号古墳(遺構)



第13图 6号古墳(遺物)

ている。

蕨手刀は全長 50.6 cm、刃長 38.8 cm、元幅 4.7 cm である。刀身の反りは僅かで、柄反りは 6 mm 程である。柄の絞りは強い。鞘の木質部や漆膜も一部残存する。本体部分の残りもよく、重量感がある。主体部北西側の長軸の壁際から壁に平行し、棟を内側、柄を北東向きにした状態で出土している。

直刀と思われる刃先は残存部の長さが 11.5 cm、幅 2.4 cm である。刃先の形はかます切先である。主体部北東部の検出面からやや掘り下げた埋土上部からの出土である。

<土器> ロクロ未使用の土師器坏形土器が周埴埋土最上部から 1 点 (5) 出土している。5 は平底で、体部外面中位に稜をもち、下端に沈線を 1 本巡らせている。体部は底部から外傾し、稜線からやや内彎している。外部・底部外面の一部が剥れて調整の不明な部分があるが、外面は主にヨコ方向のヘラミガキで調整されている。上半の 1 ケ所にヘラケズリ痕がみられる。内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。内外面に部分的に輪積み痕が 1~2 本みられる。土器は遺構外出土のものと接合している。口径は推定 13 cm、底径は推定 7.6 cm、器高は 4.7 cm である。

8 号古墳

遺 構 (第 14 図、写真図版 9)

南尾根の南西に延びる尾根筋の南向き斜面上で周埴のみ検出されている。31 号方形周溝と重複し、切り合い関係から本遺構の方が古い。

<周埴> 内径の推定規模が約 4.0 m の円弧状の周埴である。西端は 31 号方形周溝に切られ、東端は斜面下方に向かって消滅している。本遺構が構築されている斜面は比較的傾斜があり、東端は流失していると思われる。検出できた部分での弧の大きさは円周の約 4 分の 1 程度で、最大幅は 75 cm、最大深が 24 cm である。掘り込みが浅く、遺構の残存状態もよくない。底面にはゆるやかな凹凸が見られる。壁は内径側、外径側ともゆるやかな角度で外傾する。断面形は碗形を呈する。

埋土は黒褐色から暗褐色の砂質土が主体である。

遺 物

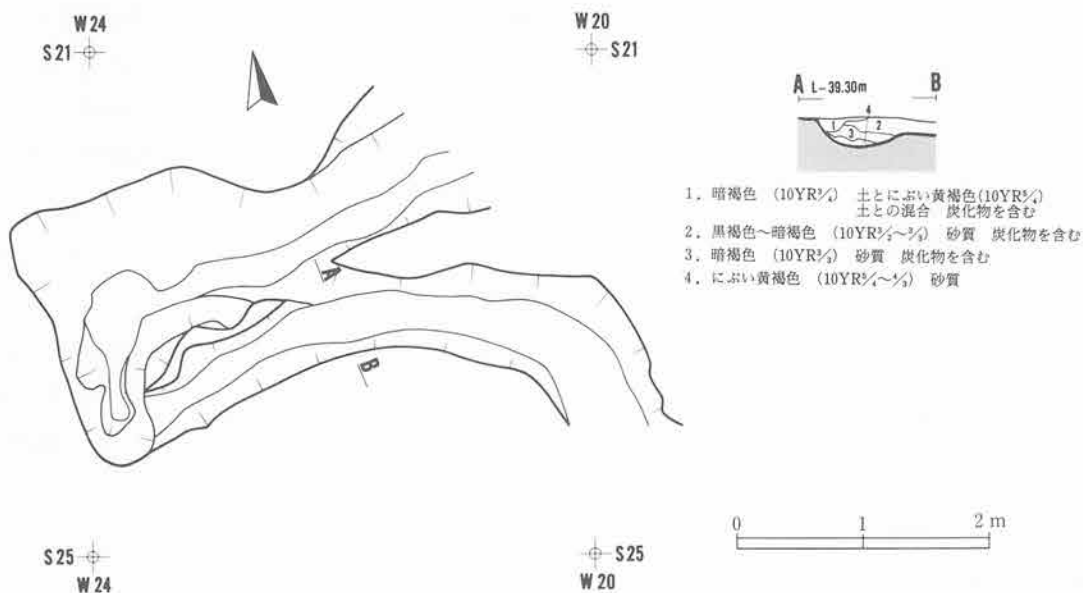
出土していない。

9 号古墳

遺 構 (第 15 図、写真図版 10)

8 号古墳の西側、南西に延びる尾根筋の VIC 区南南西向き斜面上で検出されている。検出面は IV 層上面で、この付近は III 層を欠く。

<主体部> 平面形が長方形を呈する土壇形の主体部である。長軸の方向は北西-南東で、等



第14図 8号古墳(遺構)

高線に平行する。規模は長さ 262 cm、幅 118 cm で、深さは斜面上方側の壁で 50 cm、下方の壁で 24 cm である。底面は概ね平坦で、西側の短辺の壁際が溝状に若干窪む。壁はやや外傾するが直立に近い。

埋土上部の 14 層は暗褐色砂質土で、東寄りに堆積する 15 層には炭化物が多い。下部の 16 層は土にふい黄色の汚れた砂質土である。16 層上面は概ね平坦で、副葬品は 16 層上面の直上から出土していることから、16 層上面が棺の底面であった可能性がある。

<周湮>主体部の斜面上方にあたる北東側に円弧状の周湮が検出されている。平面形は、2・4 号古墳などの周湮に比べ湾曲の度合いが小さく、西側部分は直線的である。推定される規模は内径 5.5 m 前後で、弧の大きさは円周の約 3 分の 1 である。最大幅は 120 cm、最大深が 70 cm である。

埋土は上部が黒褐色や暗褐色のシルト質土、下部は褐色や浅黄色などの汚れた砂質土である。

遺物(第 16 図、写真図版 44)

<刀類>主体部から直刀が出土している。全長 70.0 cm、刃長 53.5 cm、元幅 4.0 cm で、刃先の先端から 4.9 cm の所で折損している。留金具と双脚の足金具が付き、二ノ足部分には 1.5×1.0 cm の範囲に布片が残存する。鞘の漆膜や木質部も一部残存する。主体部南側の長軸の壁際中央から壁に平行し棟を内側、柄は南東向きの状態で出土している。

＜釧＞主体部埋土の15層中からその大部分が出土し、若干の破片を南東側の埋土を洗浄して篩にかけて検出している。脆弱でいくつかの破片に分かれて出土している。破片の状況から推定して、およそ1個体分と思われる。推定される大きさは径約8cmで、若干歪んだ楕円形を呈する。断面は腐食のため不整であるが、本来は径1cm前後の円形であったと思われる。材質は錫製である。

＜鉄製品＞器種不明で、径1.5cm前後の球形状をなし、重さは7.8gである。主体部の中央東寄りの埋土から出土している。

＜土器＞ロクロ未使用の土師器坏形土器の体部上半片が周湟埋土から1点(7)出土している。7は体部外面に軽い段をもち、残存する体部上半は内彎している。外面はヘラケズリ後、ヨコ方向のヘラミガキ調整が行われている。内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。体部下半が欠損しているため、底部の形態は不明である。口径は推定13.6cm、残存高4.2cmである。

10号古墳

遺構(第17図、写真図版11)

南尾根から南東に延びる尾根のVI D区南向き斜面上で検出されている。検出面はIII層上面である。周湟のみで主体部は検出されていない。本遺構は比較的急な斜面上にあり、付近には土砂崩壊の痕跡があることから、主体部のあった部分は崩落したと思われる。

＜周湟＞内径による推定で4m前後の円弧状の周湟を検出している。弧の大きさは円周の約3分の1で、最大幅は175cm、最大深が62cmである。壁は外径側がゆるやかな角度で、内径側が比較的急な角度で外傾する。掘り込みはV層に達しており、周湟の西側部分の地山は風化しきらない花崗岩で、底面には凹凸が見られる。

埋土は炭化物を含む褐色や暗褐色のシルト質土が主体である。東寄り部分の埋土下部は粘性のある褐色のシルト質土や暗褐色土と黄褐色土の混土等が堆積し、人為的に埋め戻した様相が見られた。

遺物

出土していない。

11号古墳

遺構(第17図、写真図版12)

10号古墳の南東約13mに位置する。南尾根の南東に延びる馬背状の尾根筋の比較的平坦に近いVII D区南向き緩斜面上で検出されている。検出面はIII層上面であるが、この付近のIII層土の層厚は薄く、斜面下方ではすぐにIV層土が露出する。

＜主体部＞仕切り溝のみが検出されており、主体部の平面形は不明である。仕切り溝の規模は東側が72×28cm・深さ約18cm、西側が60×20cm・深さ約13cmで、その間の長さは約175

cmである。仕切り溝の位置から長軸の方向は北西-南東と推定され、等高線に平行する。

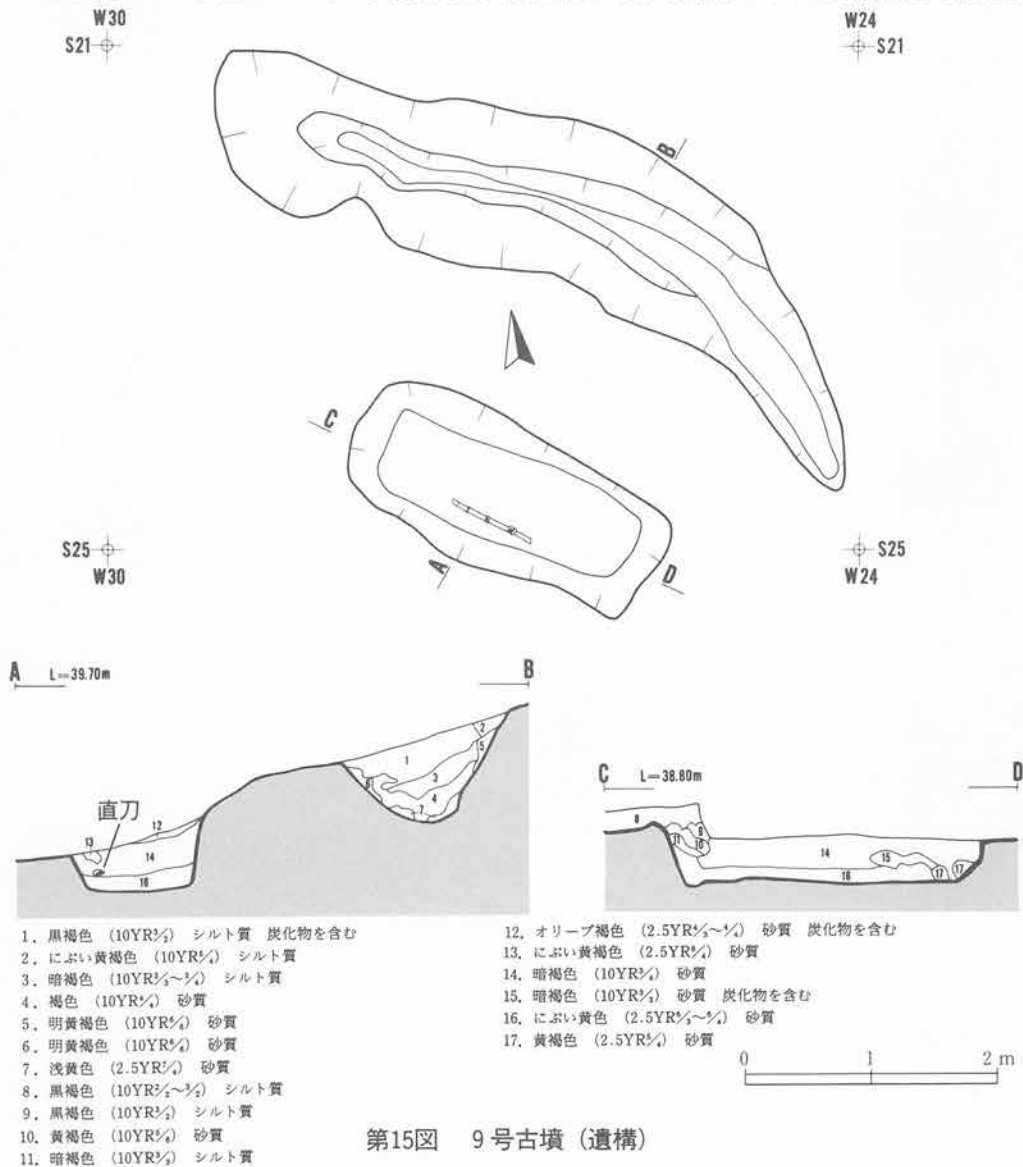
埋土は暗褐色ないしにぶい黄褐色の汚れた砂質土である。

<周漕>主体部の北東側に、推定で内径約4.8mの円弧状の周漕を検出している。平面形は比較的整った円弧で、弧の大きさは円周の約3分の1、最大幅105cm、最大深が約52cmである。壁は内径側・外径側ともほぼ同様の角度で外傾し、断面形はU字状を呈する。最大深は中央部付近にあり、両端に近づく程浅くなる。

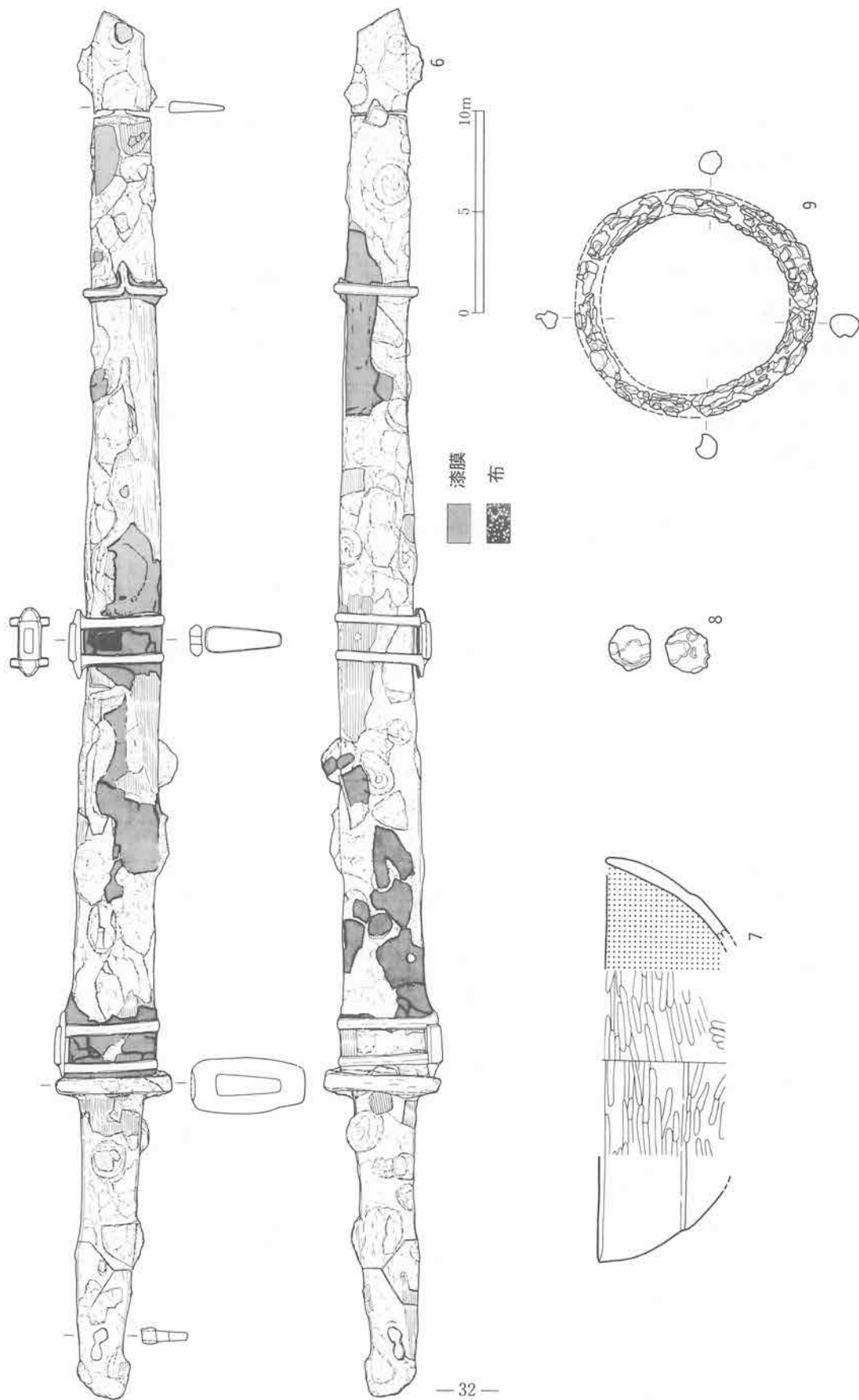
埋土は上部が黒褐色等のシルト質土、下部はにぶい黄色の汚れた砂質土である。

遺物

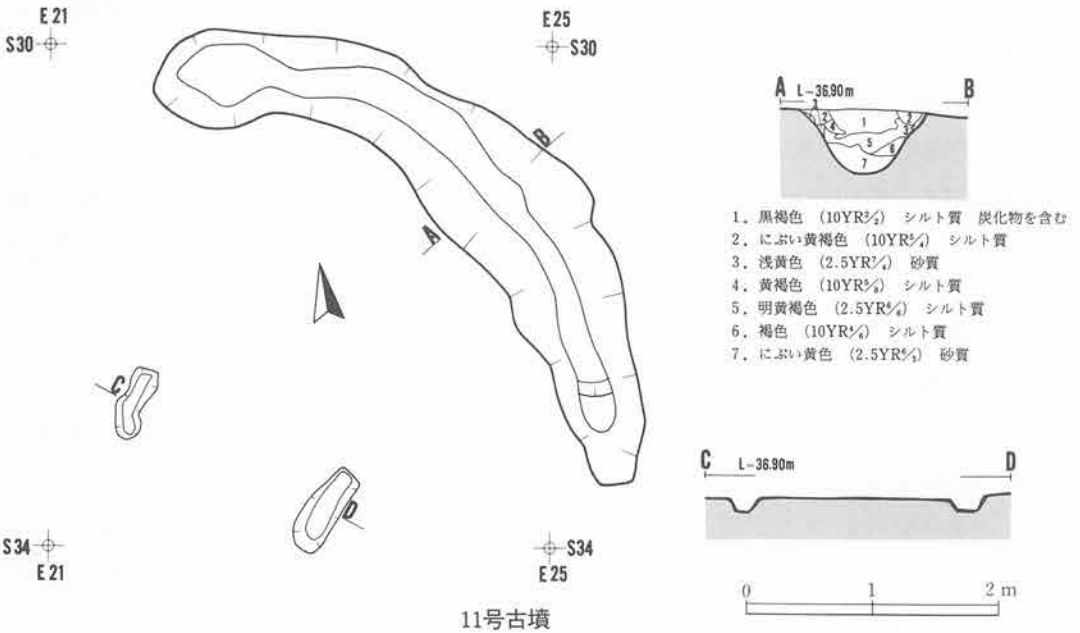
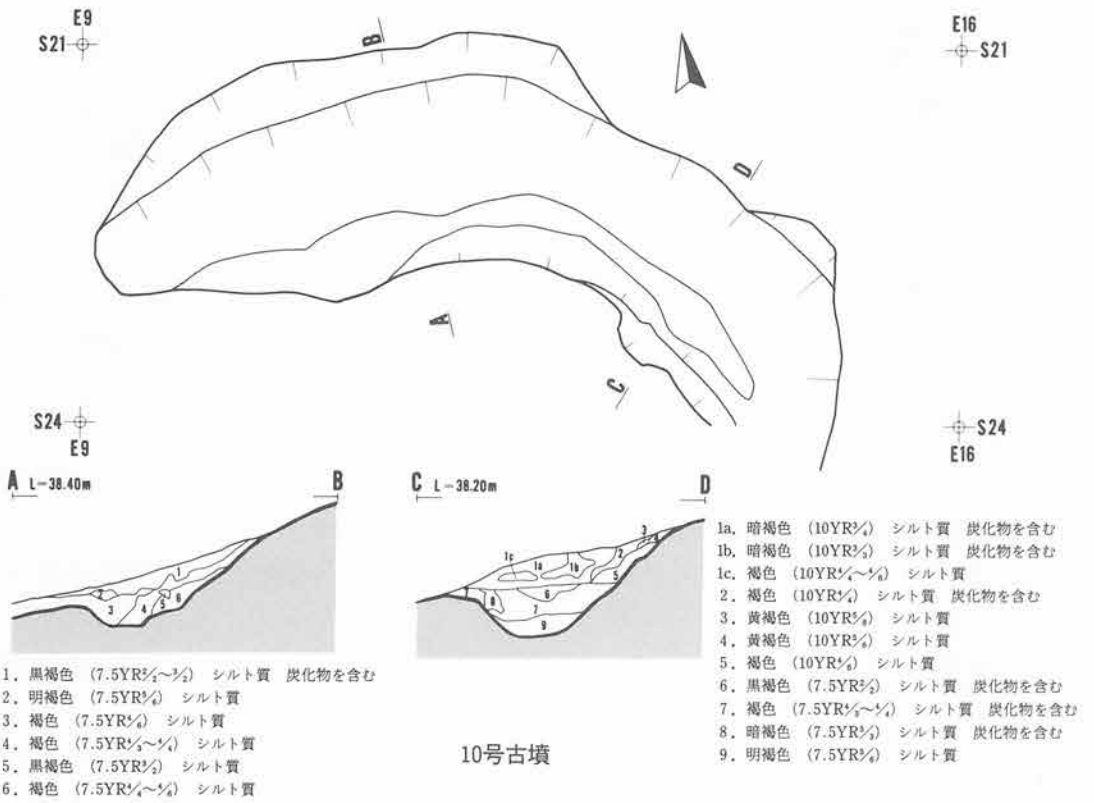
本遺構内からは出土していない。遺構部分の表土層からは自然釉のかかった須恵器の破片等



第15図 9号古墳(遺構)



第16图 9号古墳(遺物)



第17図 10・11号古墳 (遺構)

が出土している。

12号古墳

遺構 (第18図、写真図版13)

11号古墳の南東約10mにあり、馬背状尾根の南向き斜面上で検出されている。検出面はⅢ層上面で、斜面下方の主体部付近ではⅢ層の層厚は極めて薄い。本遺構の周滄は東端部分で23号古墳の周滄と重複し、切り合い関係から本遺構の方が新しい。

<主体部>土壇形で、平面形は長方形を呈しているが、崩落や木根等の攪乱のため、形状は歪んでいる。規模は長さ約193cm、幅約83cmで、深さは中央部付近で15cm前後である。底面には若干凹凸があり、主軸方向の両端には不整な長方形の仕切り溝を持つ。仕切り溝の規模は55×24cmと56×18cmで、深さはともに10cm前後である。また、長軸方向と平行して底面の北壁際の一部には溝が巡り、南壁際にも図示できる程明瞭なものではないが、溝状の窪みが見られることから、底面に周溝を持っていた可能性がある。

埋土は砂が混じる褐色のシルト質土が主体をなし、底面直上や壁際にはにぶい黄褐色等の汚れた砂質土が堆積する。

<周滄>主体部の斜面上方にあたる北側に、円弧状の周滄を検出している。平面形は湾曲の度合いが小さく、やや直線的である。東端部で斜面下方に向かって湾曲する程度である。弧の大きさは円周の約3分の1で、最大幅は60cm、最大深が28cmである。底面には波打つような凹凸があり、壁は内径側、外径側ともゆるく外傾する。断面形はU字状を呈する。

埋土は上部が暗褐色のシルト質土、中・下部はⅢ層起源と思われるにぶい黄褐色等のシルト質土である。

遺物 (第18図、写真図版44)

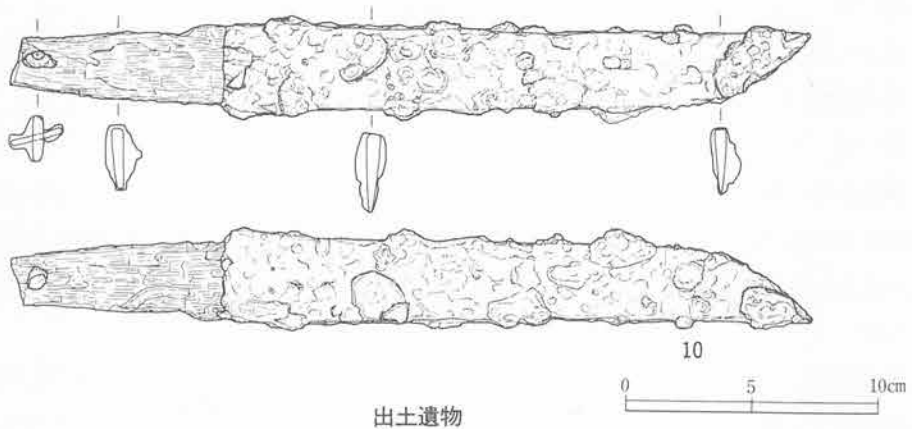
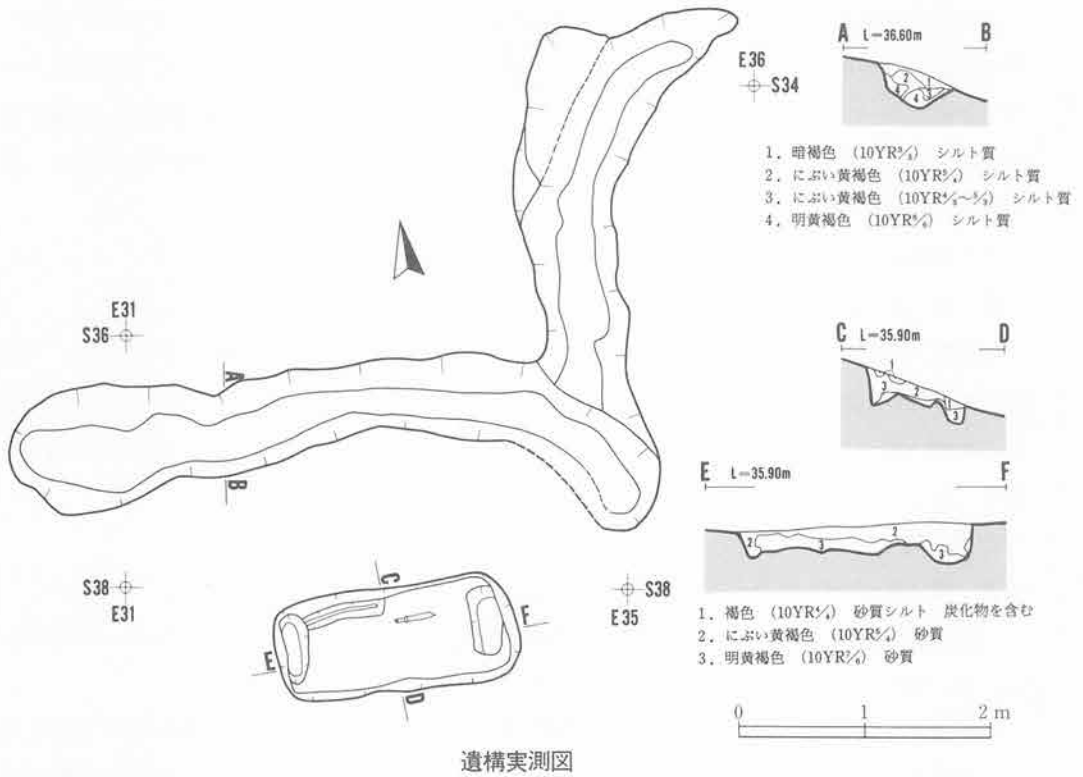
<刀類>主体部から全長31.8cm、幅3.4cm、刃長23.3cmの小刀が出土している。柄の部分には木質部が残存する。反りはほとんどなく、刃先はかます切先である。表面の錆化は進んでいるが、本体の残りは比較的良好である。主体部の中央からやや東寄りの北壁際底面直上に、壁にほぼ平行し、棟を内側、柄は西向きの状態で出土している。

13号古墳

遺構 (第19図、写真図版14)

南尾根から南東に延びる馬背状の尾根筋東端部のⅦE区に位置し、東向きの非常にゆるやかな斜面上で検出している。検出面はⅢ層上面である。

<主体部>遺存状態が悪く、平面形は不整な長方形を呈する土壇形の主体部である。規模は長さ約180cm、幅約60cm、深さ約15cmである。長軸の方向は北北西-南南東で、等高線に対して斜交する。



第18図 12号古墳 (遺構・遺物)

埋土は黄褐色砂質シルトや明黄褐色粘土質シルト等である。

<周湮>主体部の斜面下方にあたる北東側に円弧状の周湮を検出している。主体部の斜面下方に周湮を持つ例は本遺跡で主体部を検出した中ではこの13号古墳のみである。推定規模は内径3.6m前後、弧の大きさは円周の約3分の1、最大幅85cm、最大深42cmである。底面には凹凸があり、壁は外傾するが、その角度は一樣ではない。弧の南東端は急に立ち上がるが、北西端は浅い部分が80cm程続いて途切れる。

埋土は黒褐色シルト質土が主体で、下部に浅黄色等の汚れた砂質土が堆積する。

遺物 (第19図、写真図版15)

<土器>須恵器坏形土器の体部片が1点(11)、周湮埋土から出土している。11は上端、下端が欠損しているため、全体の形態は不明である。外面のロクロ痕は顕著である。外面にヘラで切った短い長さ0.9cmの刻線が1本みられる。残存する土器の体部最大径は推定14.2cmである。胎土は良い。色調は灰白色である。

15号古墳

遺構 (第19図、写真図版15)

2号古墳の南約6mに位置し、VIC区南向き急斜面のIV層上面で検出されている。周湮のみであり、101号溝跡と重複し、切り合い関係から本遺構の方が古い。

<周湮>円弧状の周湮で、西端が101号溝跡に切られており、残存部分の弧の大きさは円周の4分の1程である。最大幅は115cm、最大深が40cmである。壁は外傾し、内径側の壁の方が外径側よりも傾斜がゆるやかである。開口部での斜面上方と下方の高低差は最大90cmであるが、底面での高低差は中央部と端部で10cm程である。

埋土は炭化物を含む黒褐色から暗褐色のシルト質土が主体で、最下部にはにぶい黄褐色の汚れた砂質土が堆積する。

遺物

出土していない。

16号古墳

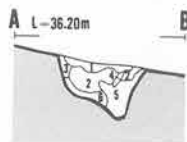
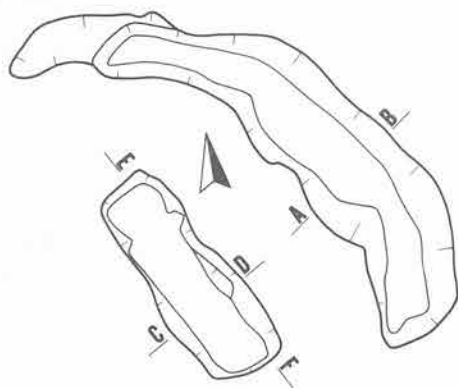
遺構 (第20図、写真図版16)

南尾根最頂部から若干南に寄ったVIC区からVID区にかけての比較的平坦な面のIII層上面で検出されている。南側には18号古墳が、東側には29号古墳があり、それぞれの周湮がほとんど接するように位置するが、重複はしない。本遺構は主体部のみの検出である。本遺構を囲む位置に32号方形周溝が検出されているが、別個の遺構と思われる。

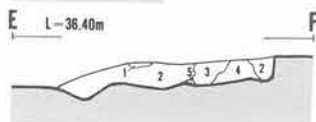
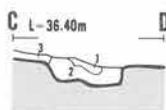
<主体部>土壙形で、平面形は長方形を呈し、長軸の方向は等高線にほぼ平行な東北東-南南西を示す。規模は長さ242cm、幅70cm、深さ約25cmである。壁はほぼ直立する。底面は

E37
S32

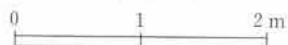
E41
S32



1. 黒褐色 (10YR $\frac{2}{2}$) シルト質 炭化物を含む
2. 黒褐色 (10YR $\frac{2}{2}$) シルト質
3. 黒褐色 (10YR $\frac{2}{2}$) シルト質
4. 明黄褐色 (10YR $\frac{2}{4}$) 砂質
5. 黄褐色 (10YR $\frac{2}{4}$ ~ $\frac{3}{4}$) 砂質
6. 浅黄色 (2.5YR $\frac{2}{4}$) 砂質

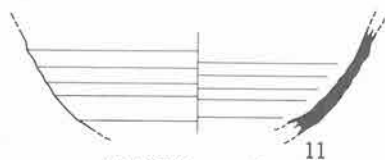


1. 褐色 (10YR $\frac{2}{4}$) 砂質シルト
2. 黄褐色 (10YR $\frac{2}{4}$) 砂質シルト
3. 明黄褐色 (10YR $\frac{2}{4}$) 粘土質シルト
4. におい黄褐色 (10YR $\frac{2}{4}$) 粘土質シルト
5. 黄褐色 (10YR $\frac{2}{4}$) 粘土質シルト



S36
E37

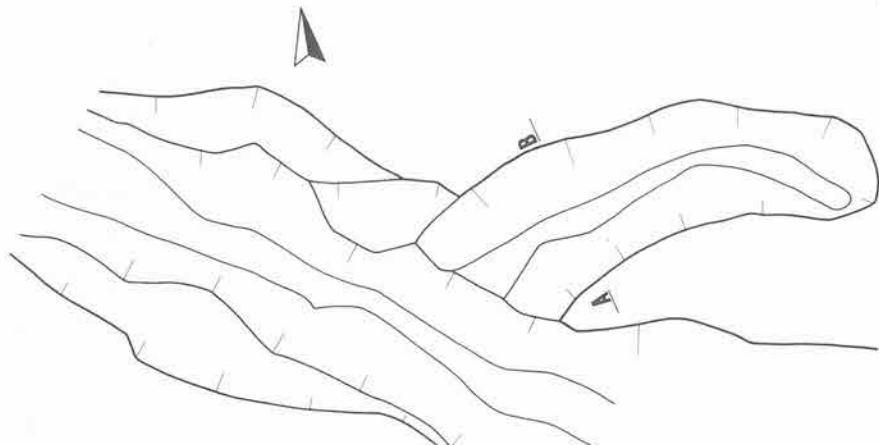
S36
E41



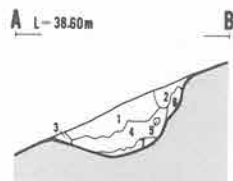
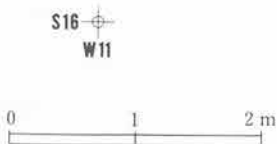
出土遺物 S=1/3 11 13号古墳

W11
S12

W5
S12



1. 黒褐色 (10YR $\frac{2}{2}$) シルト質 炭化物を含む
2. 暗褐色~褐色 (10YR $\frac{2}{2}$ ~ $\frac{3}{2}$) シルト質
3. 黒褐色 (10YR $\frac{2}{2}$) シルト質
4. 暗褐色 (10YR $\frac{2}{2}$ ~ $\frac{3}{2}$) シルト質 炭化物を含む
5. におい黄褐色 (10YR $\frac{2}{4}$) 砂質
6. におい黄褐色 (10YR $\frac{2}{4}$) 砂質
7. におい黄褐色 (10YR $\frac{2}{4}$) 砂質



15号古墳

第19図 13号・15号古墳 (遺構・遺物)

平坦で、長軸方向の両端には仕切り溝を持つ。規模は、東側が60×30 cm・深さ約23 cmで、西側が65×32 cm・深さ約23 cm、その間の長さは約180 cmである。

埋土は炭化物を含む暗褐色シルト質土が主体で、仕切り溝には褐色ないし暗褐色のシルト質土が多い。

遺物 (第20～22図、写真図版45)

<刀類>主体部から全長27.1 cm、幅約2 cm、刃長約19 cmの小刀が出土している。柄と鞘の木質部が一部残存する。反りがなく、刃先はかます切先である。主体部の中央からやや東寄りの北壁に沿った底面直上に、長軸方向に平行し、棟を内側、柄は西向きの状態で出土している。

<ガラス玉類>主体部からガラス玉191個と石製の玉2個が出土している。ガラス玉で細かく破損した10点については図版及び表への掲載を割愛した。

ガラス玉は最大径3 mm台68個、4 mm台71個、5 mm台18個、6 mm以上が23個で、最大のものは径13.9 mmである。孔径は1～2 mm台のものが大半である。孔の両端部は研磨され、平らまたは若干丸味を帯びるものが多く、臼状のものもいくつか見られる。また、側面形が管状を呈するものが6個ある。色調は薄紺色・紺色・濃紺色のものが大半を占め、他に緑色・青色・白色等のものが散見される。白色のガラス玉は155～157の3個出土しており、他のガラス玉がアルカリ石灰ガラスに対して鉛ガラスに分類されるという鑑定結果を得ている。不透明で、形状も他のガラス玉と異なり、孔径が4 mm台と大きい。一部に緑色のガラスの付着が認められる。

石製の玉は158と174である。どちらも最大径が8 mm以上で、孔径も3 mm台と大きい。孔の両端部はどちらも臼形を呈する。

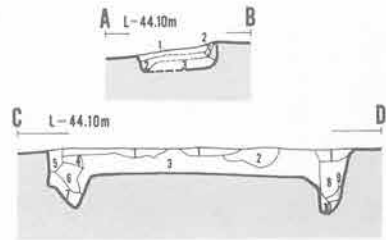
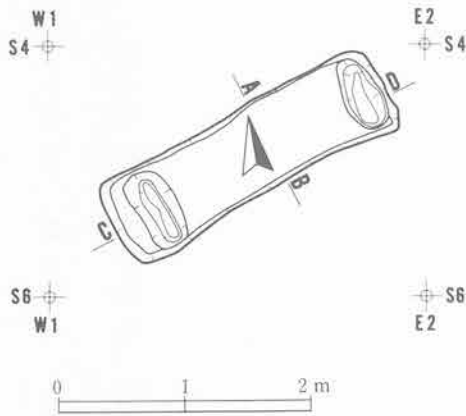
17号古墳

遺構 (第23図、写真図版17)

南尾根頂部付近の比較的平坦な面のIII層上面で検出されている。16号古墳から5 m程東に位置する。検出時には外径・内径の一部が円弧状に確認できたが、底面を掘り過ぎたこと、再堆積層等との区別が明確に捉えられなかったこと等のため、遺構の形態を的確に把握できなかった。周湮の弧の中心付近は黒褐色土と黄褐色土の混土で人為的な堆積層が見られたが、主体部と認められる遺構は検出されなかった。

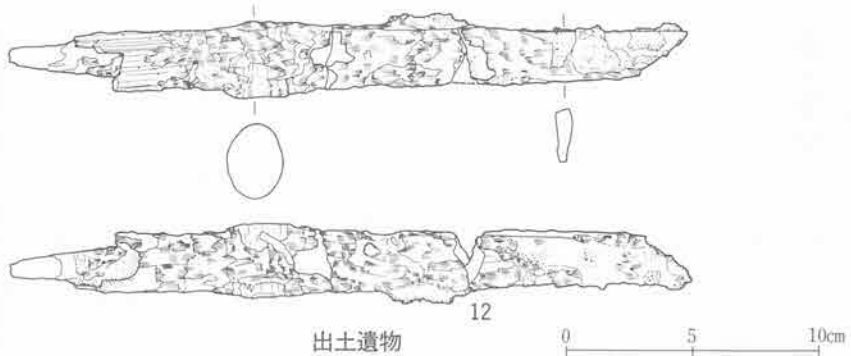
<周湮>円弧状の周湮と思われる。西端は29号古墳と重複するのかわ不明である。また、東端も埋土の類似層が不整に南側に広がり、把握できなかった。推定される弧の大きさは円周の約3分の1、最大幅約90 cm、深さ約25 cmである。

埋土は、最上部に暗褐色シルト質土、中・下部には暗褐色シルト質土を間層にして、褐色ないし黄褐色の粘性のあるシルト質土が堆積する。



1. 褐色～黄褐色 (10YR $\frac{7}{4}$ ～10YR $\frac{3}{4}$) シルト質
2. 褐色～黄褐色 (10YR $\frac{7}{4}$ ～10YR $\frac{3}{4}$) シルト質
炭化物を含む
3. 暗褐色 (10YR $\frac{3}{4}$) シルト質 黄褐色土塊を含む
炭化物を含む
4. 褐色 (10YR $\frac{7}{4}$) シルト質 炭化物を含む
5. 黄褐色 (10YR $\frac{7}{4}$) シルト質 炭化物を含む
6. 明黄褐色 (10YR $\frac{7}{4}$) シルト質 炭化物を含む
7. 褐色 (10YR $\frac{7}{4}$) シルト質
8. 暗褐色 (10YR $\frac{3}{4}$) シルト質
9. 暗褐色 (10YR $\frac{3}{4}$) シルト質
10. 褐色 (10YR $\frac{7}{4}$) シルト質

遺構実測図



第20図 16号古墳 (遺構・遺物1)

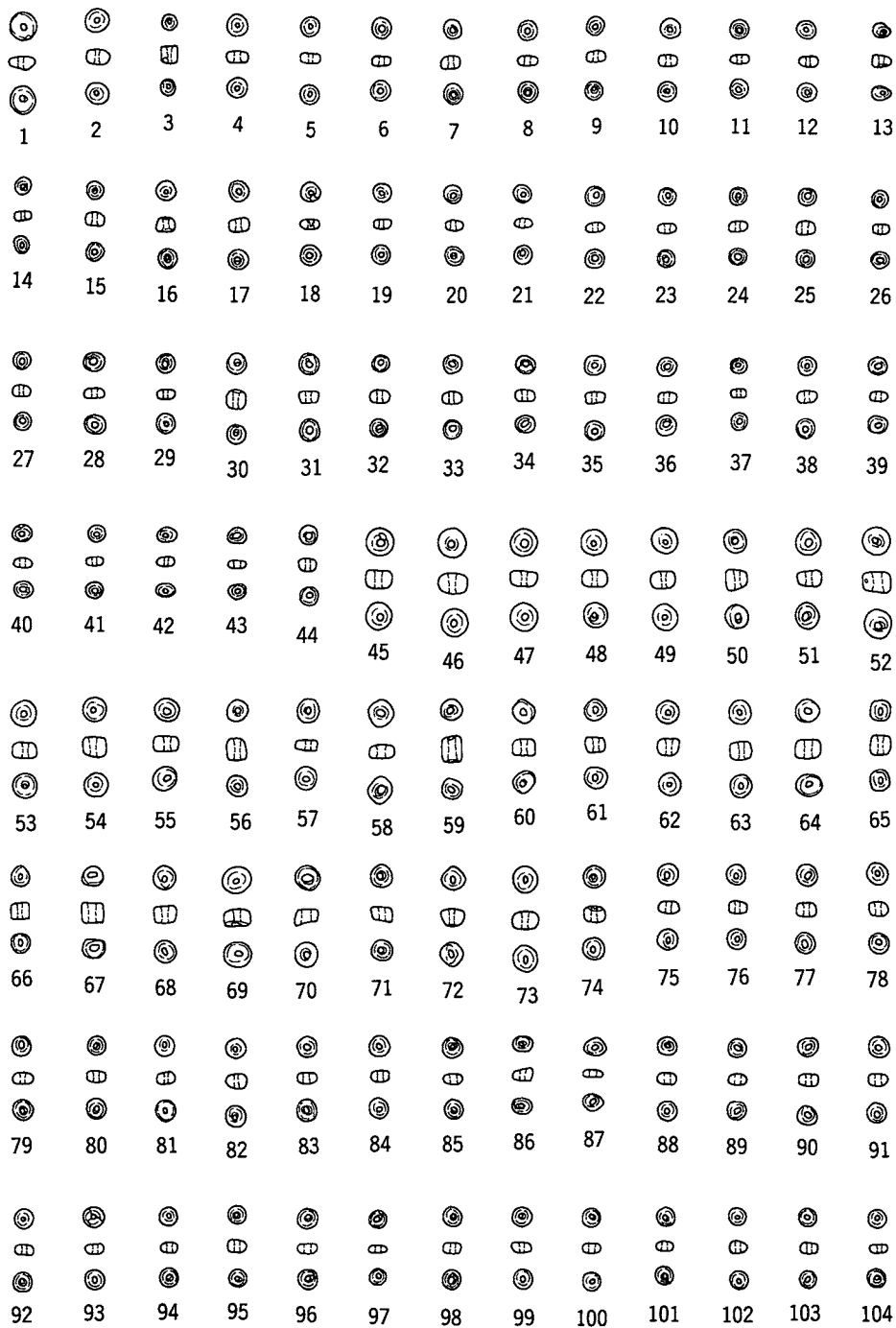
遺物 (第23図、写真図版45)

<土器> ロクロ使用の土師器坏形土器の底部片1点(13)、弥生式土器の体部片2点(14・15)が周濠埋土から出土している。

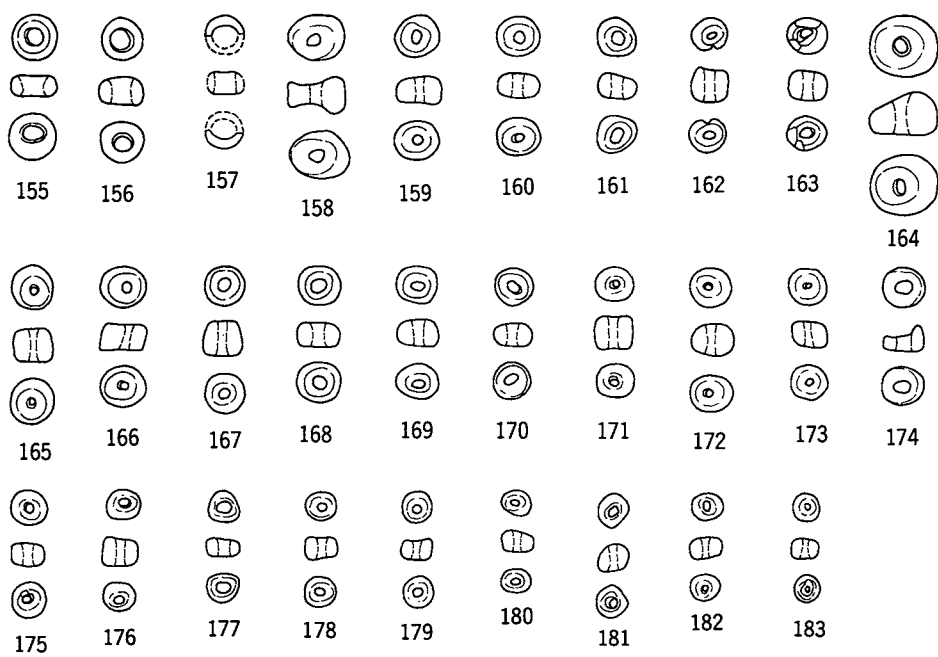
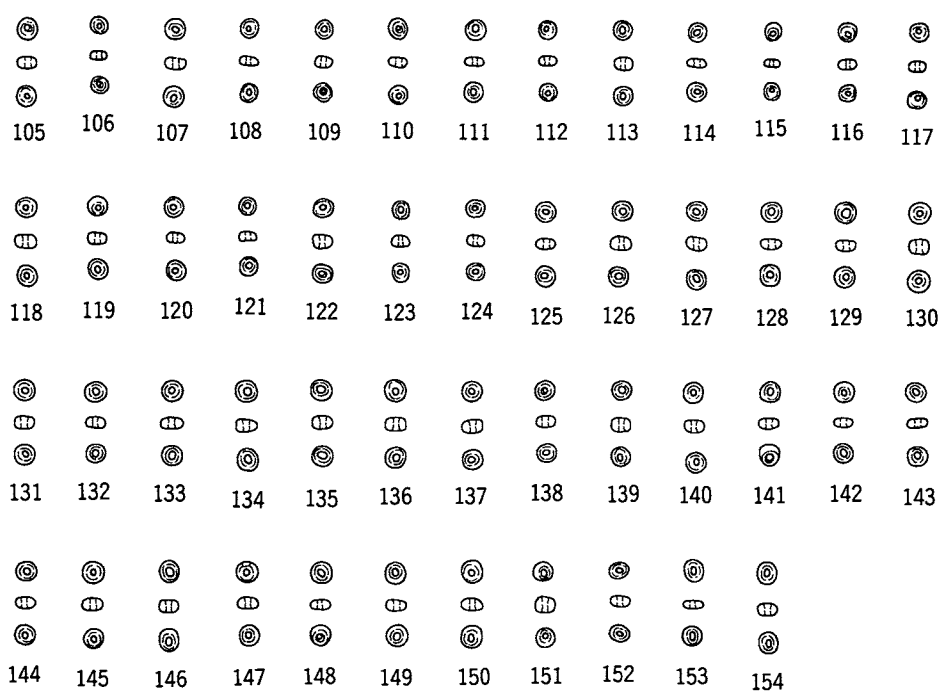
13は体部の大半が欠損している。ロクロからの切り離しは回転糸切りである。再調整はみられない。底部内面はヘラナデが放射状に、体部内面はヘラミガキ調整が施されている。内面は調整後、黒色処理が施されている。底径は推定7.6cm、残存高は1.4cmである。

14・15は周濠埋土から出土した弥生式土器の体部破片である。撚糸文による施文がなされている。流れ込みによるものかと思われる。

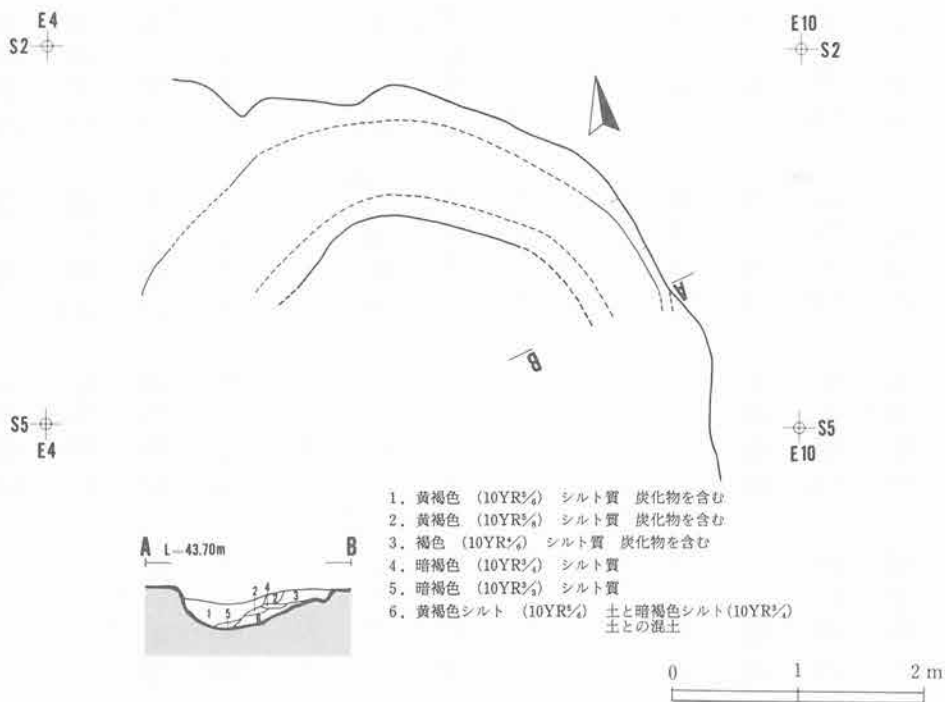
<鉄器> 刀の一部と思われる細片が4点出土している。いずれも片面が剥落しており、17・18の表面には木質部が若干付着している。出土地点は主体部が想定される弧の中心付近の黒褐色と黄褐色土との混土中からである。人為的な堆積層からの出土で、古墳出土の可能性を捨てきれず、ここに掲げた。



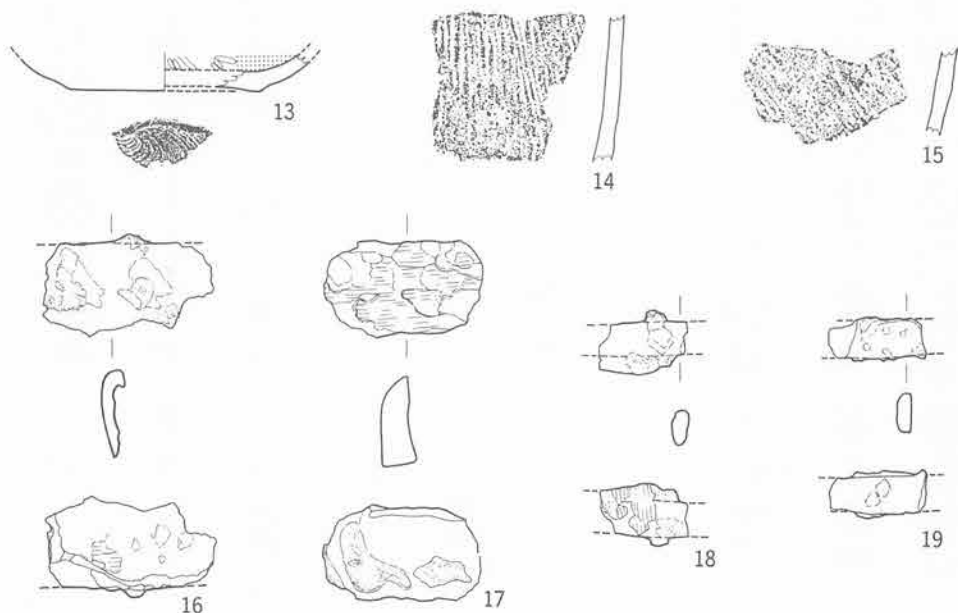
第21图 16号古墳（遺物2）



第22图 16号古墳 (遺物3)



遺構実測図



出土遺物

第23図 17号古墳 (遺構・遺物)

18号古墳

遺構（第24図、写真図版18）

16号古墳の南隣りに位置し、南尾根頂部付近の比較的平坦な面のⅢ層上面から検出されている。周湮が51号ピットと重複し、本遺構はそれより古い。

〈主体部〉周湮の検出面から10cm程掘り下げた時点で、周湮内部に僅かに暗褐色シルト質土の薄層が長方形に認められ、その部分を主体部と推定した。長軸の方向は、ほぼ東西である。平面形は不整な長方形を呈する。長軸に平行する北壁の西寄り部分では壁高が数cm認められるが、他は土層変化部分からの推定である。底面は、若干のゆるやかな凹凸が見られる程度である。規模はおおよそ長さ230cm、幅105cmである。西端は周湮と極めて近接する。

〈周湮〉本遺跡の中では唯一半円を越す円弧状の周湮である。弧の大きさは周湮の約4分の3で、最大幅は120cm、最大深が22cmである。内径は2.8m、外径は4.3mである。平面形は主体部長軸方向の東側の部分が約2.2m開口する馬蹄形状を呈している。

埋土は炭化物を含む褐色のシルト質土が主体で、最下部には汚れたⅢ層土が堆積する。

遺物（第24図、写真図版46）

〈刀類〉周湮埋土から刀の刃先2点が出土している。ともに鞘の木質部が付着している。23は残存部の長さ4.5cm、刃の幅は約2.5cmである。24は残存部の長さ6.1cm、刃の幅約3.2cmである。

〈鉄片〉器種不明の鉄片1点（25）が周湮埋土から出土している。大きさは3.2×1.8cmで、片面が剝落している。木質部が付着していることから刀の残片の可能性がある。

〈土器〉弥生式土器の体部破片3点（20～22）が周湮の埋土から出土している。捺糸文による施文が縦位になされている。遺構に伴うものではなく、流れ込みによるものと思われる。

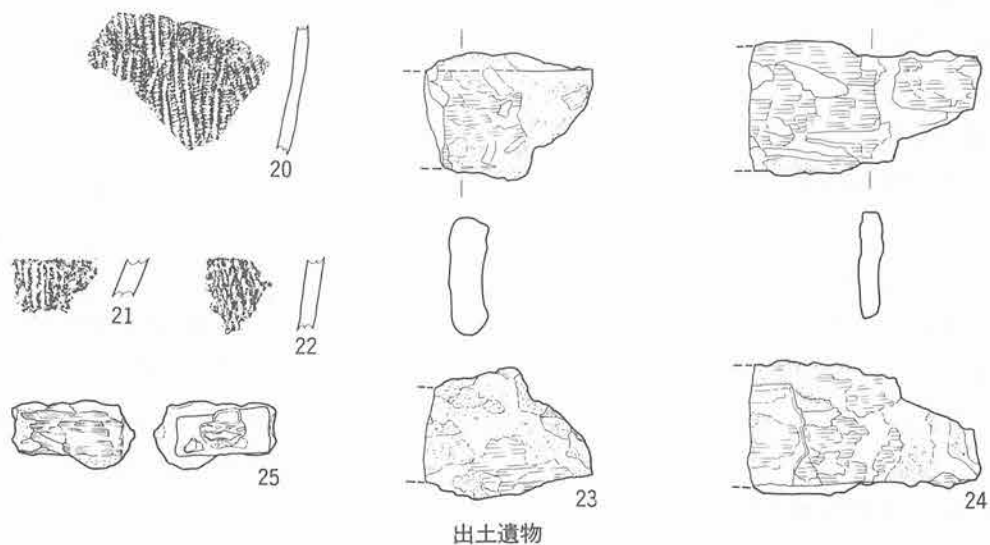
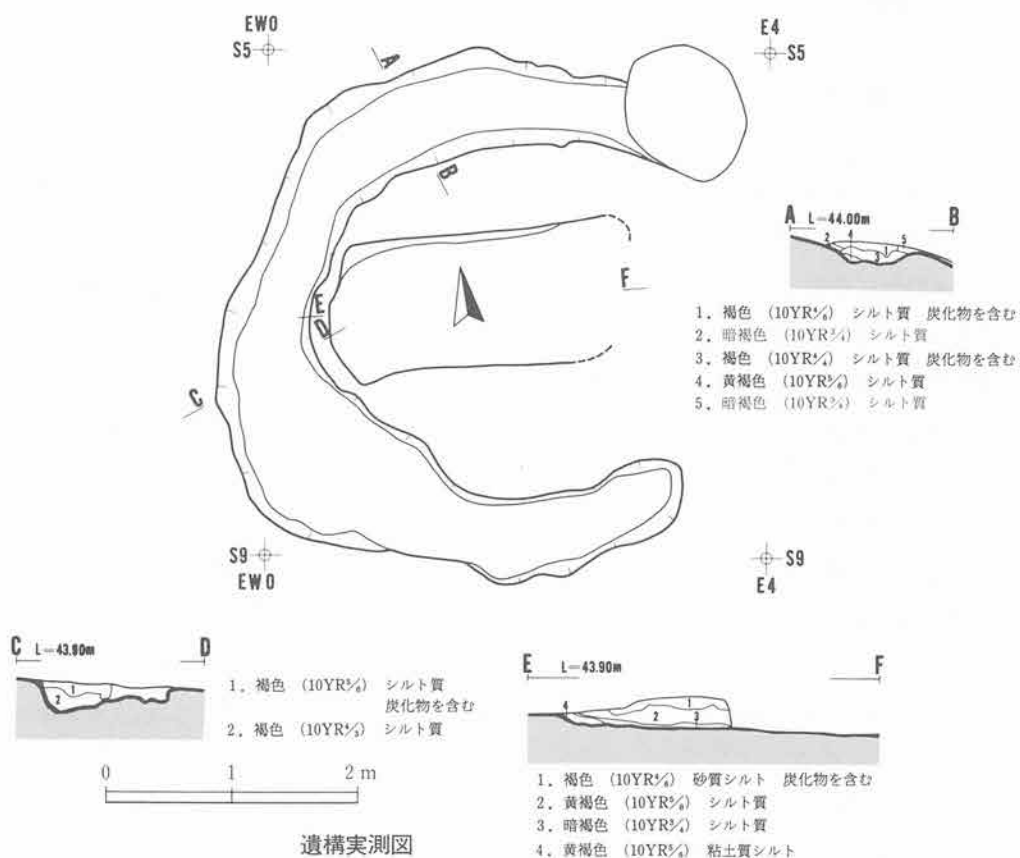
19号古墳

遺構（第25図、写真図版19）

18号古墳の南西側に位置し、南向き緩斜面のⅢ層上面で検出されている。32号方形周溝と重複するが、切り合いによる新旧関係は埋土が類似して識別できなかったため、不明である。周湮のみで、主体部は検出されていない。

〈周湮〉平面形が、円周の約3分の1程の不整な円弧状を呈している。弧の中央部の上端が外側にふくらんでいる。推定される内径は約2.5m、最大幅は126cm、最大深37mである。中央部付近が最も深く、両端が浅くはなるが、西端部の壁は立ち上がりが比較的急である。東端部は方形周溝と重複し確認できなかった。底面は凹凸が見られ、狭い幅で湾曲している。壁は内径側が比較的急角度で、外径側がゆるやかな角度で外傾する。

埋土は上部が炭化物を含む暗褐色シルト質土で、中・下部に褐色や黄褐色の砂混じりのシル



第24図 18号古墳 (遺構・遺物)

ト質土等が体積する。

20号古墳

遺構（第25図、写真図版20）

南尾根の南西に延びる尾根筋の南西向き斜面上で検出されている。検出面はIV層上面である。

〈主体部〉土壙形で、IV層を掘り込んで構築されている。平面形は長方形で、長軸の方向は等高線にほぼ平行し、北西-南東を示す。開口部の平面形は短辺が若干丸味を帯びているが、底部では南東側が角張り、北西側が丸味を帯びる。規模は長さ238cm、幅90cm、深さは斜面上方の壁で43cm、下方の壁で26cmである。壁はほぼ直立し、底面は概ね平坦で、長軸に平行する壁際に若干溝状に窪む。仕切り溝は検出されていない。

埋土は上・中部の1・3層が褐色ないし暗褐色の砂混じりのシルト質土、最下部及び斜面上方側の壁際にはにぶい黄褐色等の砂質土が堆積する。1・3・5層はほぼ水平な堆積状況を示し、4層は壁際に貼り付くような状況である。1・3層部分は棺の痕跡を示す可能性がある。

〈周湟〉主体部の斜面上方である北東側に不整な円弧状の周湟を検出している。最大幅は200m、最大深54cmで、弧の大きさは円周の約4分の1である。開口部の平面形は半円形状を呈し、底部が幅30~60cmの湟状を呈する。開口部の形状は崩落によるものと思われる。西端部分の湟は斜面に沿って消滅している。

埋土は上部が炭化物を含む黒褐色から暗褐色のシルト質土、下部がにぶい黄色の汚れた砂質土である。

遺物（第25図、写真図版46）

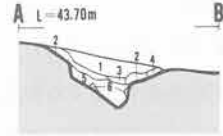
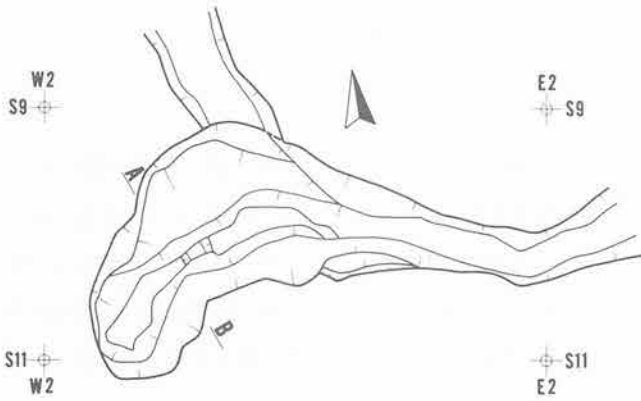
〈土器〉周湟埋土からロクロ未使用の土師器坏形土器の口縁部片1点(26)、須恵器甕形土器の口縁部片1点(27)が出土している。26は外面がヘラケズリ調整、内面がヘラミガキ後、黒色処理されている。27はロクロ調整されているもので、内面にヘラナデ痕がみられる。

21号古墳

遺構（第26図、写真図版21）

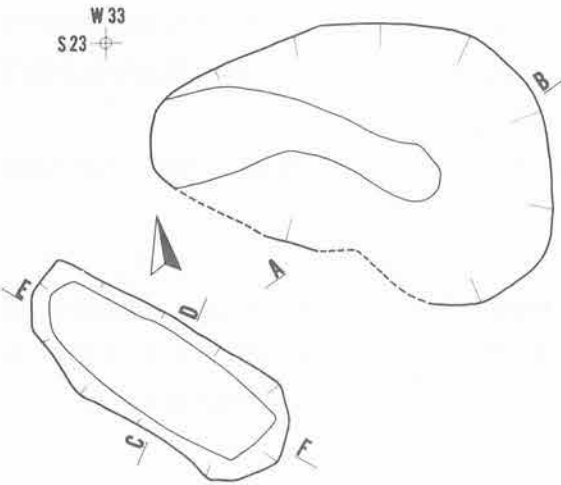
9号古墳の南東側に位置し、南尾根の南西に延びる尾根筋の南向き急斜面上のIV層上面で検出されている。斜面の傾斜は20度以上である。9号古墳と互いの周湟が近接する位置にあるが、重複はしない。

〈主体部〉土壙形で、平面形は長方形を呈する。主軸の方向は等高線に平行し、ほぼ東西を示す。開口部の平面形は20号古墳と同様、短辺部分が若干丸味を帯びる。規模は長さ約240cm、幅75cm、深さは斜面上方の壁で74cm、下方の壁で38cmである。長軸の壁はほぼ直立し、短軸の壁は若干外傾する。底面は概ね平坦で、長軸の壁際は若干溝状に窪む。仕切り溝は検出されていない。

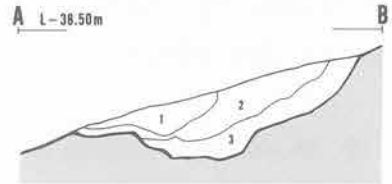


1. 暗褐色 (10YR3/4) シルト質 炭化物を含む
2. 褐色 (10YR1/4) 砂質シルト
3. 褐色 (10YR2/4) 砂質シルト
4. 黄褐色 (10YR3/4) シルト質
5. 黄褐色 (10YR5/4) シルト質
6. にぶい黄褐色 (10YR7/4) 砂質シルト

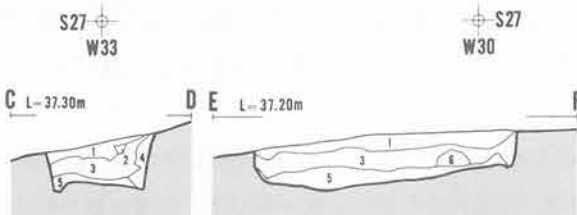
19号古墳



W29
S23



1. 黒褐色 (10YR2/4) シルト質 炭化物を含む
2. 黒褐色～暗褐色 (10YR2/4～3/4) シルト質 炭化物を含む
3. にぶい黄色 (2.5YR7/4) 砂質 粗砂含む



1. 褐色 (10YR2/4) 砂質シルト
2. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質シルト
3. 暗褐色 (10YR2/4) 砂質シルト 炭化物を含む
4. にぶい黄褐色 (10YR3/4) 砂質シルト
5. にぶい黄褐色 (10YR7/4) 砂質シルト

遺構実測図

20号古墳



出土遺物

第25図 19号・20号古墳 (遺構・遺物)

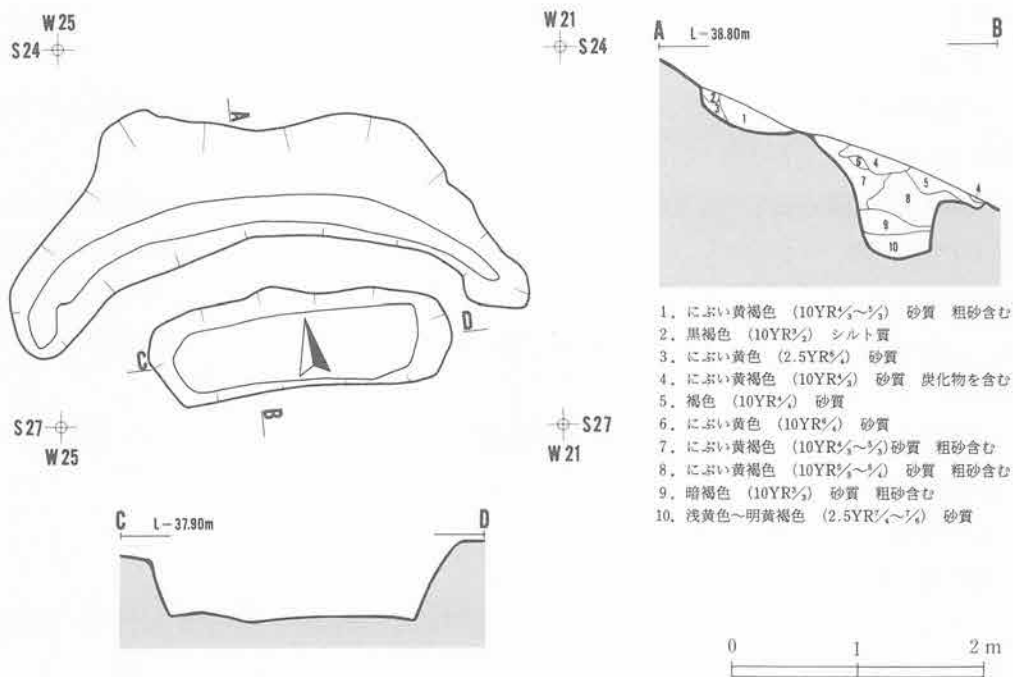
埋土はにぶい黄褐色や褐色の砂質土が主体で、最下部に浅黄色から明黄褐色の汚れた砂質土が堆積する。最下部 10 層は水平に堆積しており、上面は棺の底面の痕跡を示す可能性を持つ。

〈周湮〉主体部の斜面上方側である北側に円弧状の周湮を検出している。推定される内径は約 3.5 m、弧の大きさは円周の約 2 分の 1 である。最大幅は約 90 cm、最大深が約 20 cm である。開口部の平面形は、北西側と北東側にやや角張って張り出し、底部は比較的整った円弧を呈する。開口部の形状は崩落によるものと思われる。掘り込みは浅く、斜面下方の壁はほとんど残らない。

埋土はにぶい黄褐色の汚れた砂質土が主体である。

遺物

出土していない。



第26図 21号古墳 (遺構)

22号古墳

遺構 (第27図、写真図版22)

南尾根の南西に延びる尾根筋の端部に位置し、南向きの 20 度を越す急斜面上の IV 層上面で検出されている。本遺構の主体部と 28 号古墳周湮とが重複し、切り合い関係から本遺構の方が古い。

〈主体部〉土壇形で、平面形は不整な長方形を呈する。IV 層土に掘り込まれ、しかも急斜

面上にあるため、崩壊が著しく、当初の形状は不明な点が多い。長軸の方向は等高線に平行し、西北西―東南東を示す。規模は長さ約 224 cm、幅が残存部分で約 100 cm、深さは斜面上方の壁で約 65 cm、下方の壁は大部分が 28 号古墳周湟に切られているが、両端に数 cm の壁が一部残存する。長軸の斜面上方の壁はほぼ直立するが、短軸の壁はゆるやかに傾斜し、明確な立ち上がりを把握することができなかった。底面はゆるやかな凹凸があり、傾斜上方の壁際には溝状の窪みが見られる。

埋土はオリブ褐色系の砂質土が主体で、最下部にはにぶい黄色の汚れた砂質土が堆積する。

〈周湟〉主体部の斜面上方である北東側に不整な円弧状の周湟を検出している。推定による内径約 3.3 cm、弧の大きさは円周の約 3 分の 1、最大幅約 80 cm、最大深約 20 cm である。掘り込みが浅く、底部が若干窪む程度で、斜面下方には明瞭な壁はない。

埋土はオリブ褐色や浅黄色の汚れた砂質土である。

遺物 (第 27 図、写真図版 46)

〈和同開珎〉主体部の中央部付近の底面直上から 1 枚出土している。字体から判断して新和同と思われる。大きさは径 25 mm、厚さ 1.4 mm である。

〈鉄製品〉用途不明の鉄製品が 1 点、主体部の埋土最上部から出土している。全長 19.7 cm、幅 1.8~1.0 cm、厚さ 0.3~0.4 cm の細長い板状の鉄製品である。上端の両側は径 2 cm 前後の輪状をなしている。幅は下方にいくほど狭くなる。他に長さ 4 cm 余り、径約 1.5 cm の筒状のもの (28 b・28c) が 2 個同一の場所から出土している。1 個は 28 a 上端の右側に接して、他は左側数 cm の所からの出土である。

〈土器〉周湟埋土から、ロクロ未使用の土師器坏形土器の口縁部片が 1 点 (30) 出土している。内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。

23 号古墳

遺構 (第 28 図、写真図版 23)

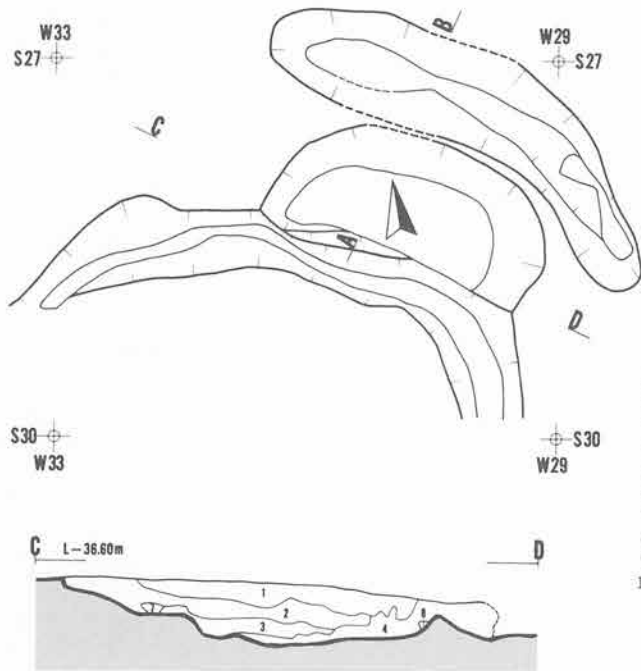
南尾根の南東に延びる馬背状の尾根筋上、VIII 区の東向き緩斜面上で検出されている。検出面は III 層上面である。周湟のみの検出で、12 号古墳周湟と重複し、本遺構の方が古い。

〈周湟〉内径での推定規模が 4.0 m 程度の弧状の周湟である。南端部は 12 号古墳周湟に切られている。弧の大きさは円周の約 3 分の 1 で、最大幅約 70 cm、最大深約 40 cm である。底面には凹凸があり深さは一様ではない。内径側の壁は立ち上がりが強く、外径側の壁はゆるやかに外傾する。湟の北西部分は攪乱を受けている。

埋土は上部が黒褐色等のシルト質土、下部は黄褐色シルト質土で、汚れた III 層土と思われる。

遺物

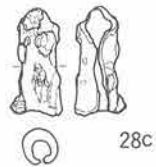
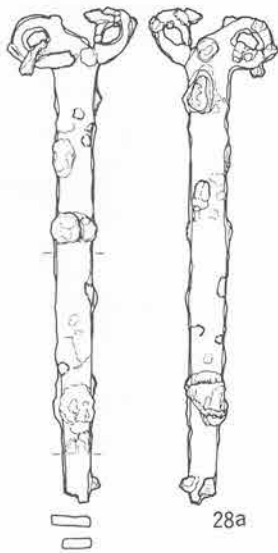
出土していない。



1. 暗オリーブ褐色 (2.5YR5/1) 砂質 小礫を含む
2. 黄褐色 (2.5YR5/2) 砂質 小礫を含む
3. オリーブ褐色～黄褐色 (2.5YR5/1～2) 砂質 小礫を含む
4. におい黄色 (2.5YR7/1～2) 砂質 小礫を含む
5. におい黄色 (2.5YR7/2) 砂質
6. 黄褐色 (2.5YR5/2) 砂質
7. におい黄色 (2.5YR7/2) 砂質
8. 浅黄色 (2.5YR8/1) 砂質
9. オリーブ褐色 (2.5YR5/1) 砂質 小礫を含む
10. 浅黄色 (2.5YR8/1～2) 砂質 小礫を含む

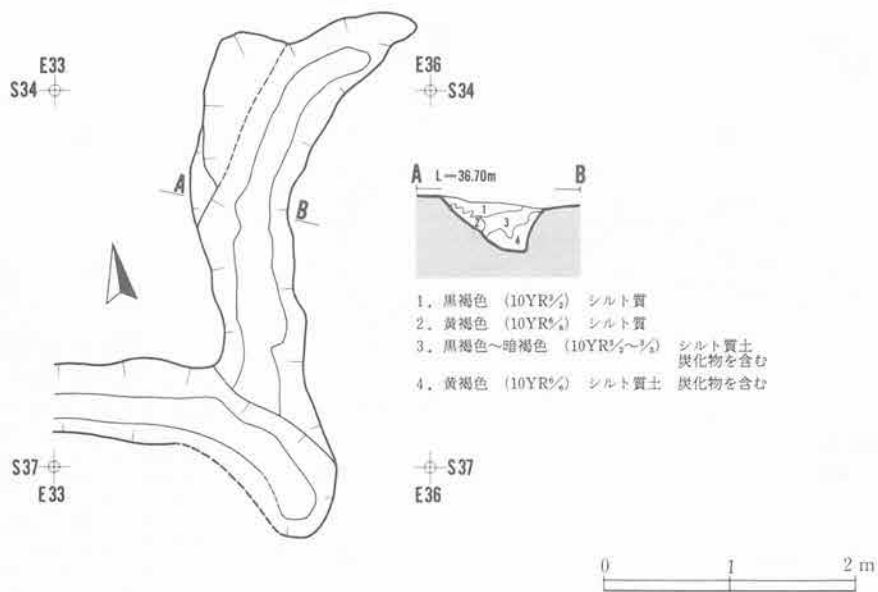


遺構実測図

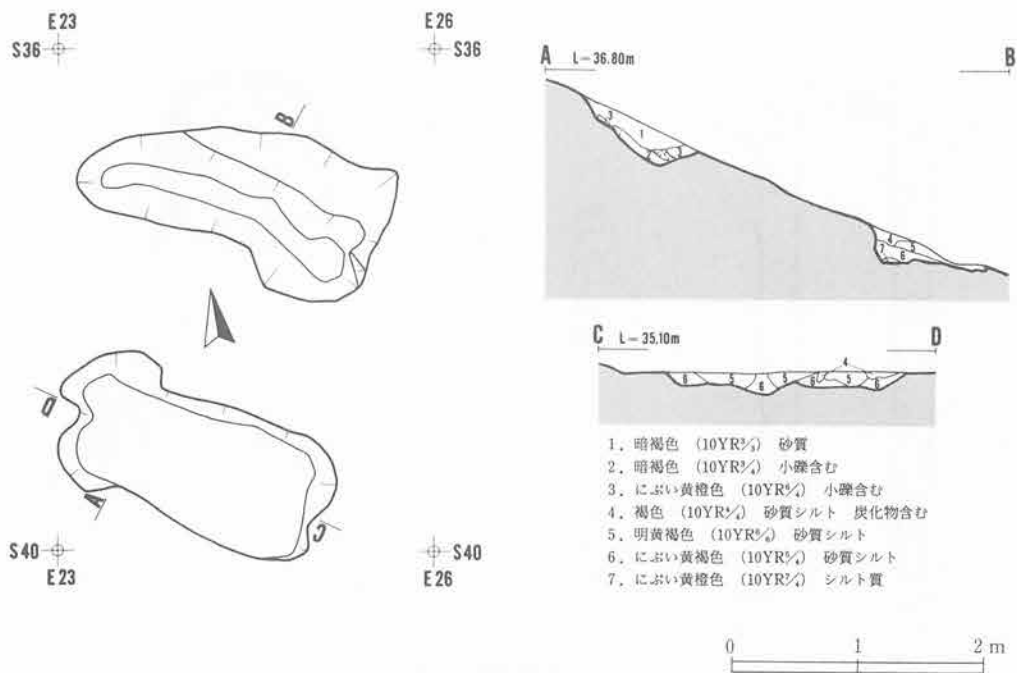


出土遺物

第27図 22号古墳 (遺構・遺物)



23号古墳



24号古墳

第28図 23号・24号古墳 (遺構)

24号古墳

遺構（第28図、写真図版24）

11号古墳の南約6mに位置し、南尾根の南東に延びる尾根筋の南向き急斜面で検出されている。斜面の傾斜は20度以上である。検出面はIV層上面で、本遺構付近はIII層を欠く。急斜面上の砂質土に掘り込まれているため、遺構の残存状況はよくない。

〈主体部〉土壙形で、平面形は崩落等のため不整であるが長方形を呈する。西側部分の形状は特に不整である。長軸の方向は等高線に平行し、北西-南東を示す。規模は長さが約210cm、幅は残存部で100cm、深さは斜面上方の壁で約30cm、下方の壁はほとんど残存しない。底面には若干凹凸が見られる。長軸の壁はほぼ直立するが、短軸の壁は立ち上がり方が緩やかである。底面に仕切り溝等は検出されていない。

埋土は褐色やにぶい黄褐色の汚れた砂混じりのシルト質土が主体である。

〈周塹〉主体部の斜面上方にあたる北側に円弧状の周塹を検出している。弧の中心は主体部の中央より西に寄っている。弧の大きさは円周の5分の1程度で、推定による内径は約3.5m、最大幅約90cm、最大深約26cmである。弧が小さく、主体部を囲むような塹ではない。平面形が不整で、北東側の開口部は角張った広がりを見せている。崩落によるものと思われる。底部はやや直線的で湾曲の度合いが小さい。底面には凹凸が見られ、壁はゆるやかに外傾する。

埋土は暗褐色の汚れた砂質土が主体である。

遺物

主体部・周塹ともに出土していない。

25号古墳

遺構（第29図、写真図版25）

南尾根の南向き斜面は頂部付近はゆるやかで、その下方は傾斜角20度を越す斜面となり、さらにその下方は傾斜角10度前後の比較的ゆるやかな斜面となる。本遺構はその傾斜角10度前後の斜面上で検出されている。大区画ではVIIC区にあたる。検出面はIII層上面である。

〈主体部〉土壙形で、斜面下方は残存しないが、平面形は長方形を呈する。長軸の方向は等高線に対し約30度の角度を持ち、ほぼ東西を示す。規模は長さ約260cm、残存部分の幅約115cm、深さが斜面上方の壁で24cm、下方の壁は残存しない。残存する壁はほぼ直立する。底面は若干波打つような凹凸があり、西側は若干掘り過ぎもあるが東側よりやや低い。長軸方向の底面両端には仕切り溝を持つ。その規模は東側が72×30cm・深さ約23cm、西側が60×28cm・深さ約7cmで、その間の長さは約210cmである。

埋土は上部が黒褐色シルト質土、下部が黄褐色の汚れた砂質土である。仕切り溝の埋土は東側が黒褐色シルト質土、西側は褐色の汚れた砂質土である。

〈周湟〉主体部の斜面上方にあたる北側に円弧状の周湟を検出している。推定による内径は約 5.0 m、弧の大きさは円周の約 3 分の 1、最大幅 260 cm、最大深 66 cm である。平面形は不整で、湟というより、土取り穴のような観を呈している。湟の西端部から先は崖になっている。底部の形状も不整で、凹凸が見られる。壁はやはり凹凸が見られ、内径側・外径側ともにゆるやかに外傾する。東端部は比較的急に立ち上がるが、西側は徐々に浅くなる。

埋土は黒色ないし黒褐色の砂混じりのシルト質土が主体である。埋土には炭化物が比較的多く含まれている。最下部の 7 層は暗褐色シルト質土に黄褐色土や褐色土がブロックで、黒色土や黒褐色土が斑状に混じり、埋め戻した様相を呈している。7 層の上面は比較的凹凸が少なく、所謂、掘り方部分の埋土の可能性が考えられる。

遺物 (第 29 図、写真図版 47)

〈土器〉周湟埋土最下部から高坏形土器 1 点 (31) とその同一個体と思われる坏身の体部片 1 点 (32)、周湟埋土上部から須恵器坏形土器の底部片 1 点 (33)、須恵器甕土器の体部片 1 点 (34) が出土している。

31 はロクロ未使用で、坏部の上端が欠損している。坏部は体部外面に稜をもち、内面に区切りをもつものである。外面は稜上半がヨコナデ後ヘラミガキ、下半がヨコ方向とタテ方向のヘラケズリで調整されている。内面はヘラミガキ後、黒色処理されている。脚部は上部が柱状、下部が円錐台状に大きく開くもので、その境に軽い段をもつ。内外面調整は上部がヘラケズリ、下部がヨコナデ後、一部ヘラミガキである。坏部の残存する最大口径は 15.4 cm である。脚部は上部の径が 5.7 cm、先端での径が 8.6 cm である。残存高は 6.5 cm で、脚部の高さは 2.9 cm である。

33 はロクロからの底部切り離しが回転糸切りであると思われるものである。小破片のために再調整の有無はわからない。色調は褐灰色である。34 は外面に平行叩目文をもつ小破片である。

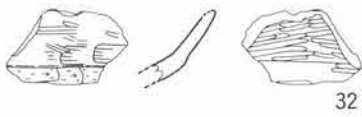
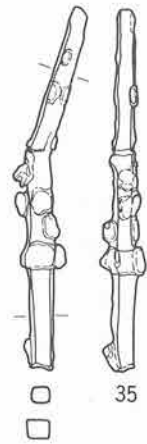
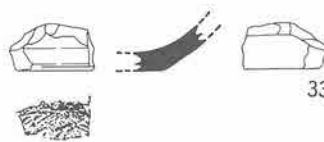
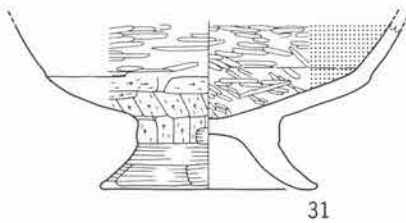
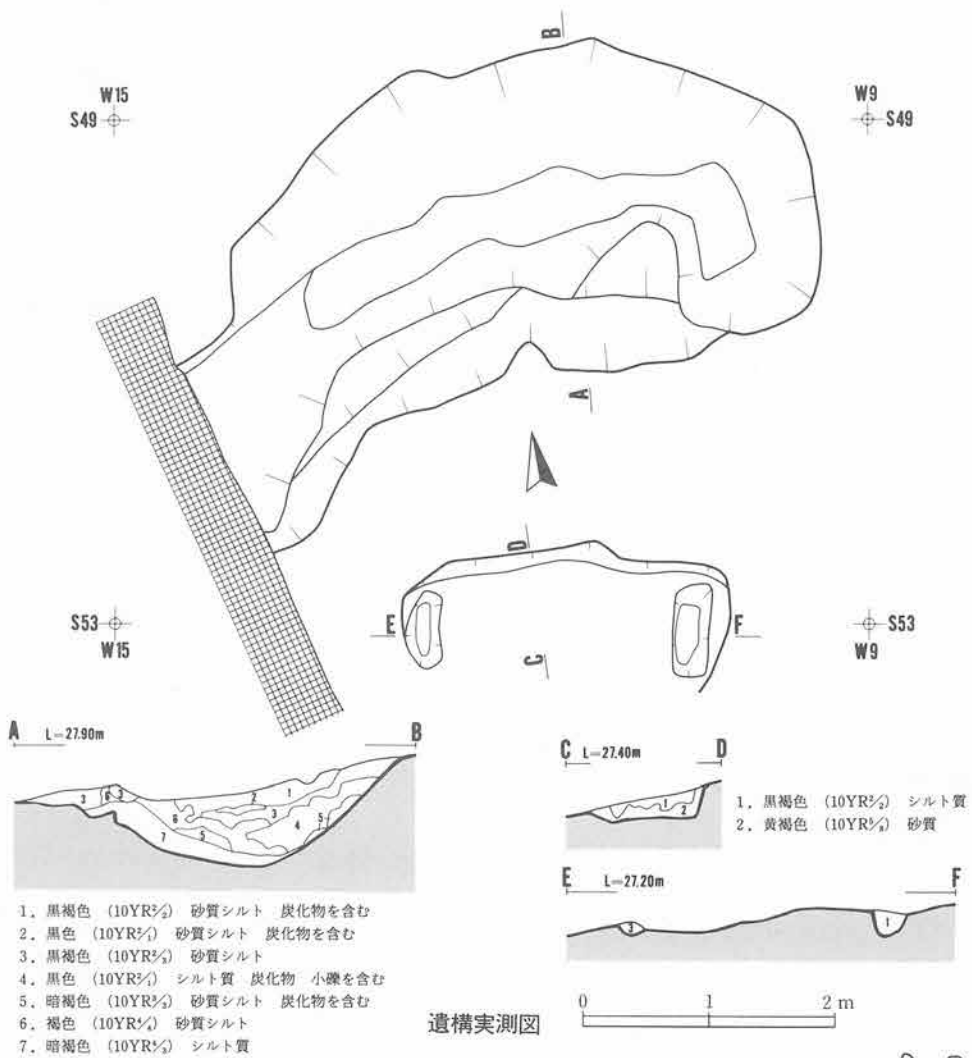
〈鉄製品〉周湟の埋土下部から 1 点 (35) 出土している。器種は鉄鏃と思われる。身の中程で折れ曲がっており、先端部は欠損している。茎の長さ 3.3 cm、身は長さ 6.6 cm、最大幅約 7 mm、最大厚約 6 mm である。

26 号古墳

遺構 (第 30 図、写真図版 26)

25 号古墳の東側に位置し、検出面はⅢ層上面である。主体部は検出されておらず、周湟のみの検出である。

〈周湟〉推定規模が内径約 8.0 m の円弧状の周湟で、本遺跡では最大規模である。弧の大きさは円周の約 5 分の 2、最大幅が 330 cm、最大深が約 75 cm である。底面は若干凹凸はあるが、他の周湟に比べ湾曲の度合も小さく、割合平坦である。底部の幅はおおよそ 40~100 cm である。



出土遺物



第29図 25号古墳 (遺構・遺物)

壁は内径側が比較的急角度で、外径側がゆるやかな角度で外傾する。

埋土は上部では炭化物を含む黒褐色シルト質土が主体をなし、下部には褐色や暗褐色シルト質土が堆積する。最下部は 25 号古墳周湟と同様黄褐色土や黒褐色土がブロックや斑点に混じる暗褐色のシルト質土で、埋め戻した様相を呈しており、所謂掘り方部分の埋土の可能性が考えられる。

遺物 (第 30 図、写真図版 47)

〈土器〉周湟の埋土から須恵器坏形土器 1 点(36)、酸化焰焼成の須恵器坏形土器の底部が 1 点(37)出土している。2 点ともロクロからの切り離しは回転糸切りである。

36 は体部が底部から内彎気味に立ち上がるものである。底部は薄い台がつく形をなしている。ロクロから切り離し後の再調整はみられない。体部下端の外面や底部の内面にロクロ痕の凹凸が顕著に残っている。体部に径 5 mm の孔が 1 個ある。胎土中の小石がとれてできたものと思われる。口径 16.1 cm、底径 5.9 cm、器高 6.7 cm である。

37 は底部外面の中央が上がるもので、ロクロ調整後、体部下端にヘラナデが行われている。ロクロから切り離し後、底部外面の再調整はみられない。底径は 6.2 cm、残存高は、1.0 cm である。

27 号古墳

遺構 (第 31 図、写真図版 27)

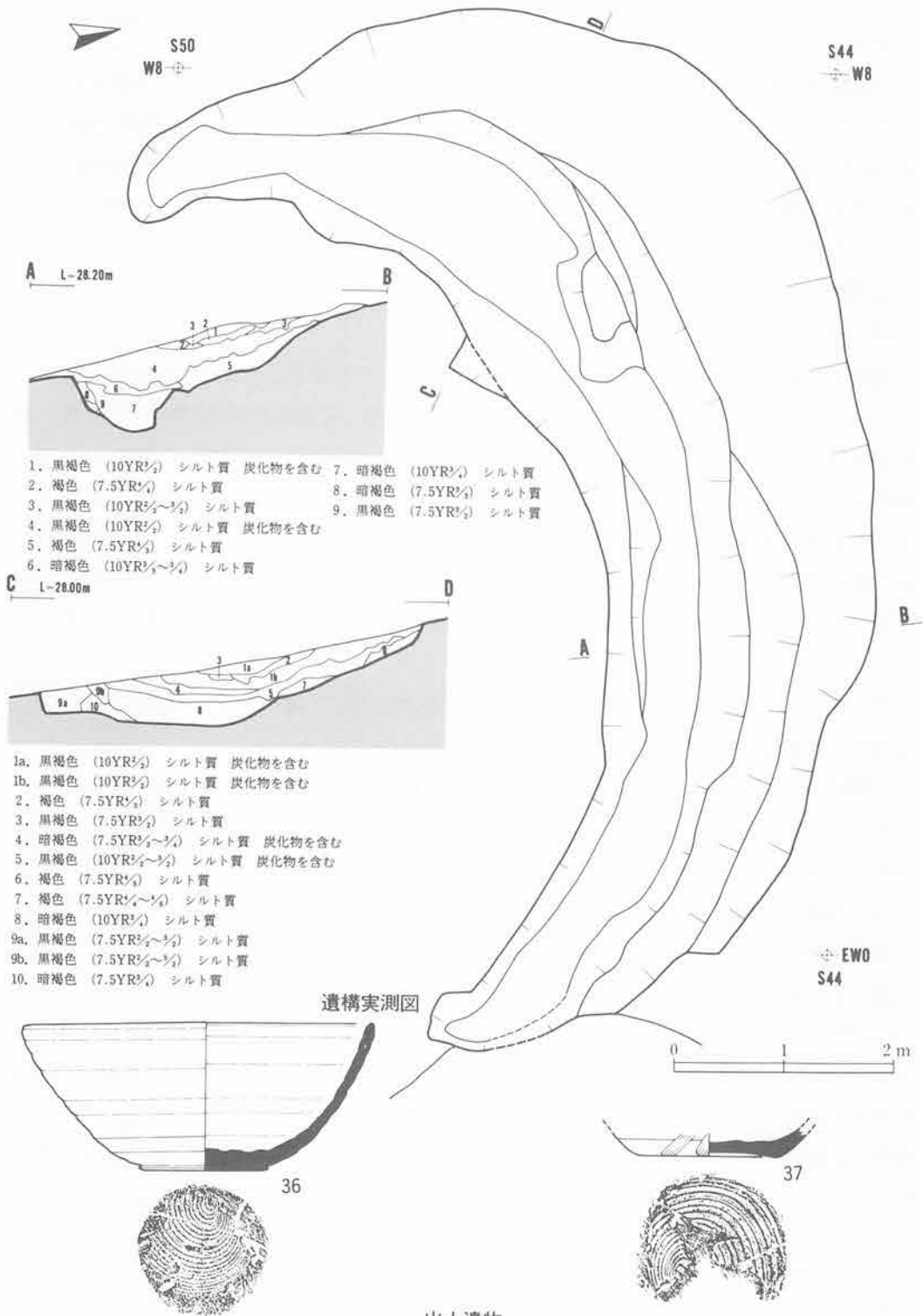
26 号古墳の北側に位置し、本遺構の主体部が 26 号古墳と重複する。新旧関係は本遺構の方が新しい。検出面はⅢ層上面である。

〈主体部〉26 号古墳の周湟が埋没した後、その上位に構築され、主体部の最下部のみが残存する。また、黒褐色土中に残存していたため、不明瞭で、副葬品の大刀の出土位置と西側斜面上方に残る壁の一部によって確認できたものである。形状は平面形が長方形の土壇形で、残存部の規模は長さが 140 cm、幅 85 cm、深さ数 cm である。長軸の方向は等高線に対し約 30 度の角度で斜交し、北西—南東を示す。底面は平坦で、斜面に沿って若干傾斜する。

埋土は C—D 断面図の 1 層がそれにあたり、暗褐色シルト質土で、若干粘性あり、比較的締まっている。黄褐色土が若干小ブロックで混じる。

〈周湟〉主体部の斜面上方にあたる北側に円弧状の周湟を検出している。掘り過ぎのため、形状や規模は正確に把握できなかった。推定規模は内径約 3.0 m、弧の大きさは円周の約 3 分の 1、最大幅約 100 cm、最大深約 35 cm である。外径側の壁はゆるやかに、内径側の壁はそれよりやや急な角度で外傾し、断面形は碗状を呈する。

埋土は上部が炭化物を含む黒褐色シルト質土で、下部は褐色土がブロックで混じる暗褐色シルト質土である。



1. 黒褐色 (10YR $\frac{3}{6}$) シルト質 炭化物を含む
2. 褐色 (7.5YR $\frac{3}{6}$) シルト質
3. 黒褐色 (10YR $\frac{3}{6}$ ~ $\frac{2}{6}$) シルト質
4. 黒褐色 (10YR $\frac{3}{6}$) シルト質 炭化物を含む
5. 褐色 (7.5YR $\frac{3}{6}$) シルト質
6. 暗褐色 (10YR $\frac{3}{6}$ ~ $\frac{2}{6}$) シルト質
7. 暗褐色 (10YR $\frac{3}{6}$) シルト質
8. 暗褐色 (7.5YR $\frac{3}{6}$) シルト質
9. 黒褐色 (7.5YR $\frac{3}{6}$) シルト質

- 1a. 黒褐色 (10YR $\frac{3}{6}$) シルト質 炭化物を含む
- 1b. 黒褐色 (10YR $\frac{3}{6}$) シルト質 炭化物を含む
2. 褐色 (7.5YR $\frac{3}{6}$) シルト質
3. 黒褐色 (7.5YR $\frac{3}{6}$) シルト質
4. 暗褐色 (7.5YR $\frac{3}{6}$ ~ $\frac{2}{6}$) シルト質 炭化物を含む
5. 黒褐色 (10YR $\frac{3}{6}$ ~ $\frac{2}{6}$) シルト質 炭化物を含む
6. 褐色 (7.5YR $\frac{3}{6}$) シルト質
7. 褐色 (7.5YR $\frac{3}{6}$ ~ $\frac{2}{6}$) シルト質
8. 暗褐色 (10YR $\frac{3}{6}$) シルト質
- 9a. 黒褐色 (7.5YR $\frac{3}{6}$ ~ $\frac{2}{6}$) シルト質
- 9b. 黒褐色 (7.5YR $\frac{3}{6}$ ~ $\frac{2}{6}$) シルト質
10. 暗褐色 (7.5YR $\frac{3}{6}$) シルト質

遺構実測図

出土遺物

第30図 26号古墳 (遺構・遺物)

遺物 (第 32 図、写真図版 47)

〈刀類〉主体部から太刀一振が出土している。全長 66.7 cm、刃長 51.5 cm、元幅 3.0 cm である。刀身に反りはないが、柄は刀身に対して 8 mm 程反っている。鐺口近くに鉄製で双脚の足金具が付く。足金物の下に青銅製の金具があり、鐺口付近には長さ・幅が 0.5～1 cm 程の布が数片残る。鞘の木質部や漆膜の一部も残存する。出土状態は、長軸方向に平行で、棟を外側にし、柄は南東向きである。

28 号古墳

遺構 (第 31 図、写真図版 28)

南尾根の南西に延びる尾根筋西端の約 35 度の急斜面上に位置し、検出面は IV 層上面である。

〈主体部〉土壙形で、平面形は長方形状を呈する。長軸の方向は等高線に平行し、北西—南東を示す。主体部の南西側は崩落して小規模な崖状を呈し、崩落は主体部の一部に及んでいる。規模は長さ 224 cm、幅 93 cm で、深さが斜面上方の壁で 66 cm、下方の壁は大部分が崩落し、残存する壁は数 cm である。底面は概ね平坦で、長軸の北側の壁際に長さ約 1 m、幅 15～20 cm、深さ数 cm の溝状の窪みが見られる。また、短軸の西側の壁際に 32×20 cm・深さ約 10 cm の窪みがある。仕切り溝に類似するが、反対側の東側壁際には検出されていない。壁はほぼ直立する。

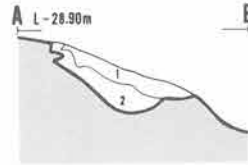
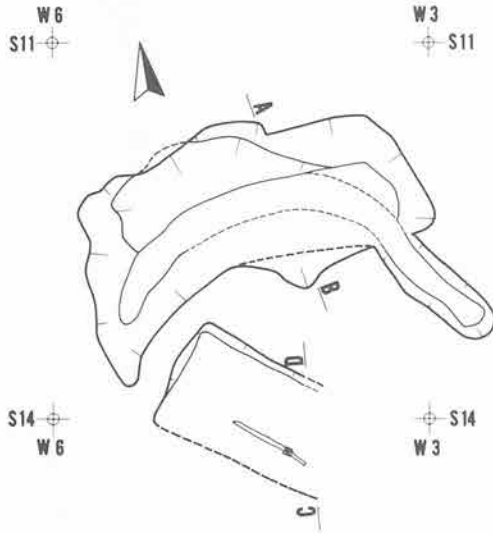
埋土はにぶい黄褐色の汚れた砂質土が主体である。断面図の 7 層は浅黄色の汚れた砂質土で、ほぼ水平に堆積しており、この層の上面は棺の底面の可能性が考えられる。

〈周濠〉主体部の斜面上方にあたる北東側に円弧状の周濠を検出している。急斜面上にあるためその両端は崩落または斜面に沿って消滅している。内径での推定規模約 3.5 m、弧の大きさは円周の約 5 分の 2、最大幅約 50 cm、最大深約 15 cm である。掘り込みが浅く、21 号・22 号古墳と同様、斜面下方の壁は壁が立つというより斜面を切土した状態で、ほとんど水平に近い。

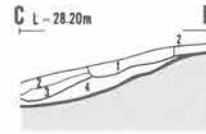
埋土は暗褐色シルト質土ないしはにぶい黄褐色の汚れた砂質土である。

遺物 (第 32 図、写真図版 47)

〈刀類〉主体部から立鼓柄刀一振が出土している。全長 62.1 cm、刃長 46.7 cm、元幅 4.0 cm、全反り 1.3 cm である。刀身の反りは小さく、柄反りが大きい。双脚の足金具が付き、鞘の木質部や漆膜の一部が残存する。柄の握りの部分には布片が付着している。主体部の中央から東寄りの南側壁際で、主軸方向に平行し、棟を内側にし、柄は南東向きの状態で副葬されていた。

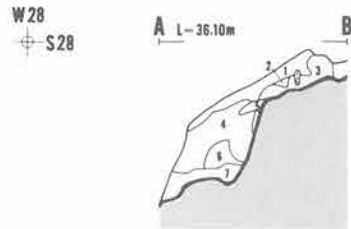
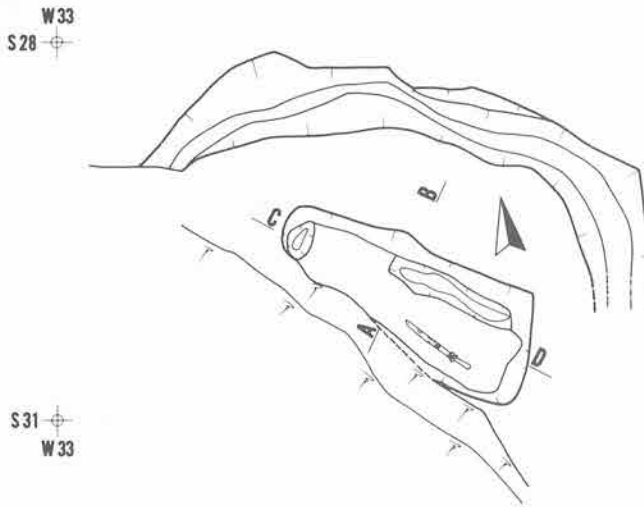


1. 黒褐色 (10YR $\frac{2}{5}$) シルト質 炭化物を含む
2. 暗褐色 (10YR $\frac{3}{5}$) シルト質 褐色砂質シルト (10YR $\frac{7}{5}$) 土塊を含む
3. 暗褐色シルト (10YR $\frac{3}{5}$) 土と褐色砂質シルト (10YR $\frac{7}{5}$) 土との混土



1. 暗褐色 (10YR $\frac{3}{5}$) シルト質
2. 黒褐色 (10YR $\frac{2}{5}$) シルト質
3. 褐色シルト (10YR $\frac{7}{5}$) 土と暗褐色シルト (10YR $\frac{3}{5}$) 土との混土
4. 黒褐色 (10YR $\frac{2}{5}$) シルト質

27号古墳



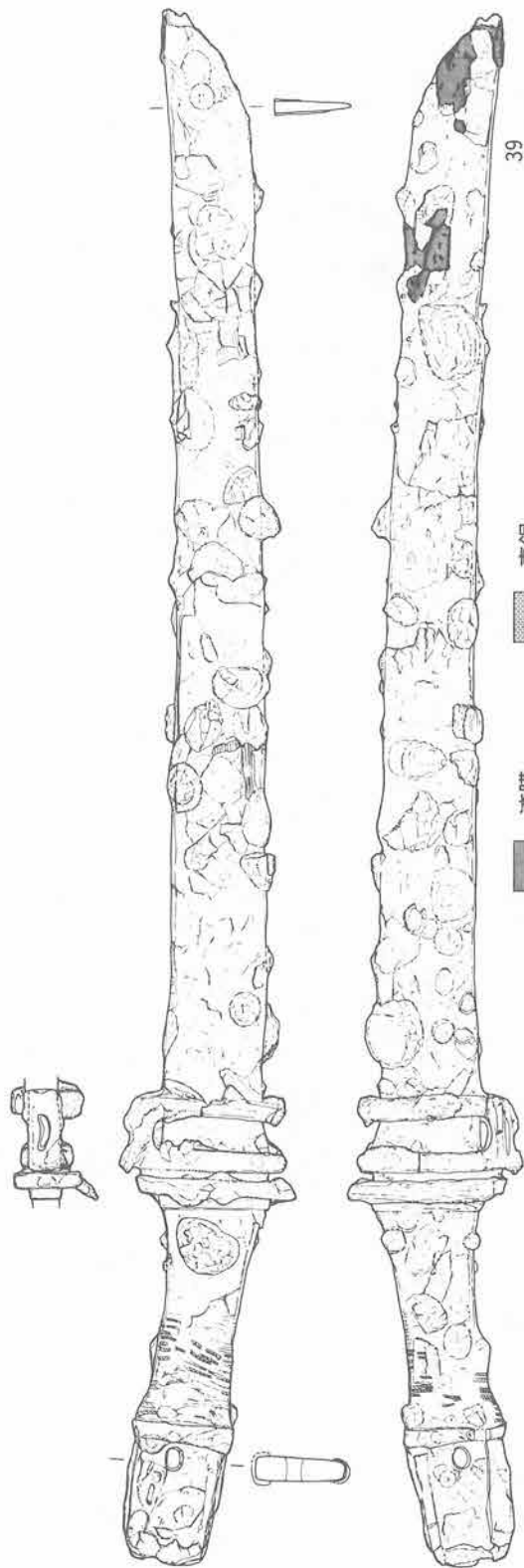
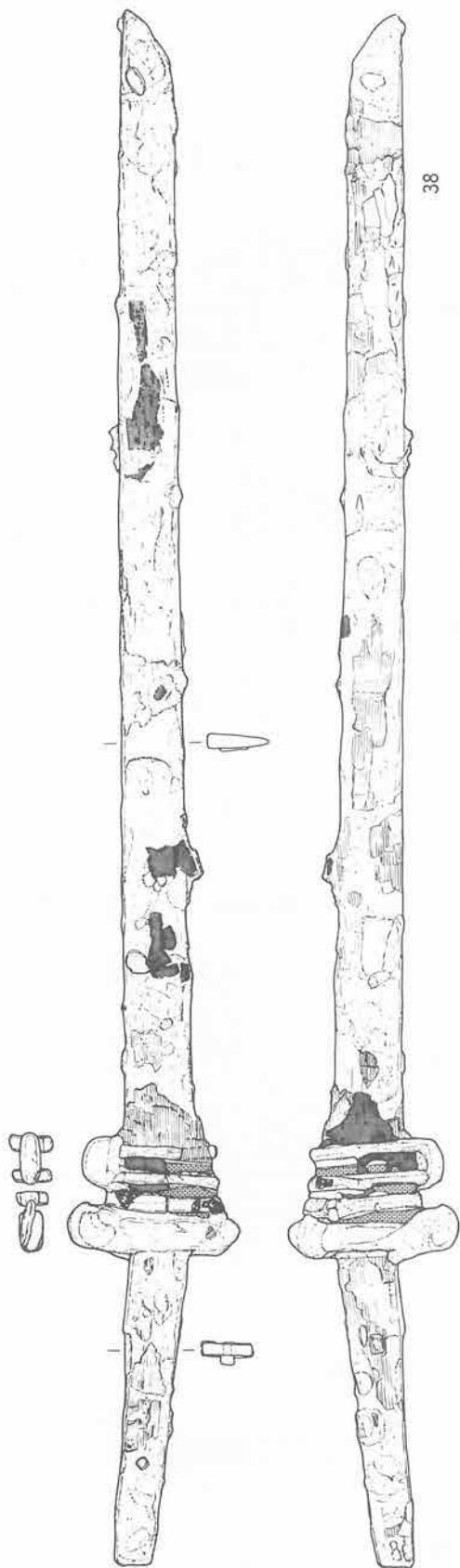
1. 暗褐色 (10YR $\frac{3}{5}$) シルト質
2. にぶい黄褐色 (10YR $\frac{6}{5}$) 砂質
3. にぶい黄色 (2.5YR $\frac{7}{5}$) 砂質
4. にぶい黄褐色 (10YR $\frac{6}{5}$) 砂質 粗砂、小礫含む
5. 浅黄色 (2.5YR $\frac{7}{5}$) 砂質
6. にぶい黄褐色 (10YR $\frac{6}{5}$) 砂質 小礫含む
7. 浅黄色 (2.5YR $\frac{7}{5}$) 砂質

S31
W28



28号古墳

第31図 27号・28号古墳 (遺構)



漆膜
布
青銅

第32图 27号·28号古墳(遺物)

29号古墳

遺構 (第33図、写真図版29)

南尾根頂部付近の比較的平坦な面のⅢ層上面で検出されている。16号・18号古墳の東側に位置する。51号ピットと重複し、本遺構の方が古い。また、本遺構の下位からは52号ピットと72号陥し穴が検出されている。周湮のみで主体部は検出されていない。

<周湮>内径での推定規模が2m程の半円状の周湮である。最大幅は約100cm、最大深約30cmである。外径側の北西部はやや角張っており、内径側も中央部付近で屈曲する、底面は若干凹凸が見られ、底部幅は60cm前後である。壁はやや急な角度で外傾する。

埋土は上部がにぶい黄褐色の汚れたⅢ層土、下部は暗褐色や黒褐色などのシルト質土である。断面図の1～4層が本遺構の埋土と考えられる。

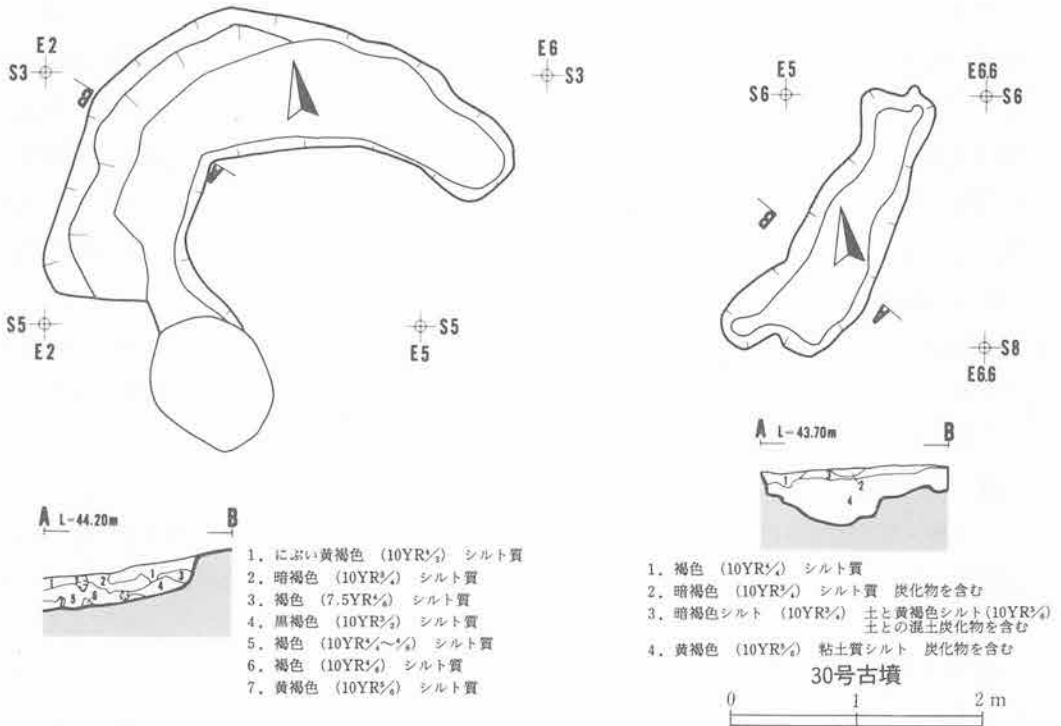
遺物

出土していない。

30号古墳

遺構 (第33図、写真図版30)

29号古墳の南東約4mに位置し、検出面も同様である。32号方形周湮と重複しているが、埋土が類似しているため明確な新旧関係は把握できなかった。周湮のみで主体部は検出されてい



29号古墳

第33図 29号・30号古墳 (遺構)

ない。

〈周隄〉平面形が不整な円弧状の周隄である。検出面では外径側がいく分湾曲しており、内径側は土質の違いがよく識別できなかった。やや直線的な隄で、両端が若干湾曲する。内径での推定規模は約 2.5 m、弧の大きさは円周の約 4 分の 1、最大幅 70 cm、最大深 36 cm である。弧の中心は他の古墳と異なり、斜面上方側にある。底面は湾曲して波打つような凹凸があり、壁は内径側・外径側ともほぼ同様の角度で外傾する。

埋土は黄褐色の粘性のあるシルト質土が主体である。炭化物粒が少量混じる。

遺物

出土していない。

2. 方形周溝

31 号方形周溝

遺構 (第 34 図、写真図版 31)

南尾根の南西に延びる尾根筋の南向き斜面上のⅢ層上面で検出されている。8 号古墳及び 101 号溝跡と重複し、新旧関係は古い方から順に 8 号古墳・本遺構・101 号溝跡である。

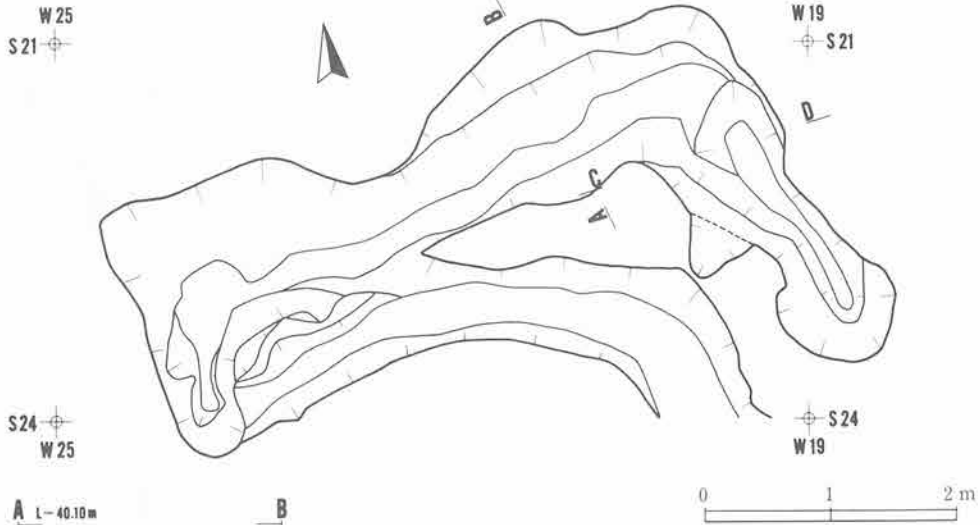
南辺を除く 3 辺が残存する。規模は、北辺の長さ 5.3 m、東辺の長さ 3.2 m、西辺の長さ 2.1 m で、幅は上幅が 60~140 cm、下幅が 10~30 cm、最大深は約 70 cm である。底面には凹凸があり、深さは一様ではない。壁は内側、外側とも 30~40 度程の角度で外傾する。東辺・西辺の溝は斜面下方に向かって浅くなる。斜面下方に周溝が当初から存在しなかったのか、削剝されて残存しないのかは不明であるが、東辺・西辺の斜面下方の両端は立ち上がる。底面での高低差は約 30 cm で、上端部での高低差約 90 cm に比べ小さい。東辺の上部の一部が 101 号溝跡に切られているが、底部は残存する。

埋土は上部が黒褐色から暗褐色のシルト質土主体で、下部は褐色や黄褐色等の汚れた砂質土である。C-D 断面のⅠ層は表土であり、1a~4 層は 101 号溝跡の埋土で、本遺構の埋土は 5~7 層である。

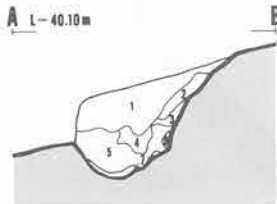
遺物 (第 35 図、写真図版 48・49)

〈土器〉北辺東寄りの周溝埋土下部から、須恵器長頸壺形土器 1 点 (42)、須恵器甕形土器の口縁部片 1 点 (43)、体部片 5 点 (44~48) が出土している。また、北辺の周溝埋土上部から土師器坏形土器が 2 点 (49、50) 出土している。

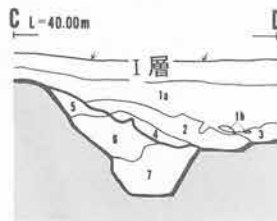
42 はロクロ使用のもので長頸部が欠損している。体部は球形をなし、最大径が中央部よりやや上位にある。体部はロクロ調整後、下半をヘラケズリにより更に調整されている。内面に長



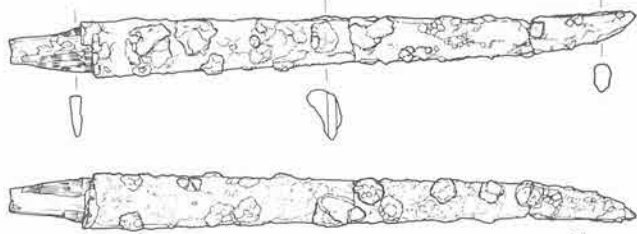
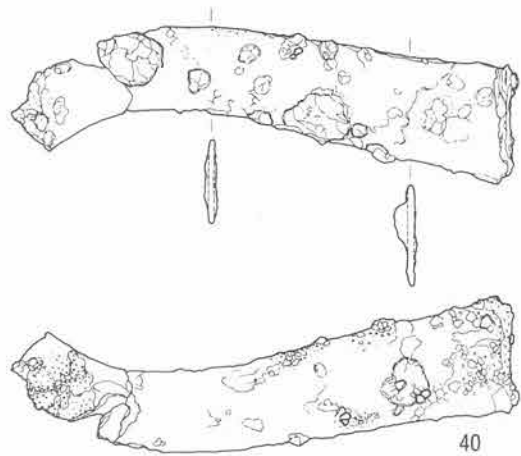
遺構実測図



1. 黒褐色～暗褐色 (10YR $\frac{5}{1}$ ～ $\frac{2}{1}$) シルト質炭化物を含む
2. 褐色 (10YR $\frac{3}{1}$) シルト質
3. 褐色 (10YR $\frac{3}{1}$) シルト質と砂質の混土
4. 暗褐色 (10YR $\frac{2}{1}$) シルト質 炭化物を含む
5. 褐色 (10YR $\frac{3}{1}$ ～ $\frac{2}{1}$) 砂質 炭化物を含む
6. 褐色 (10YR $\frac{3}{1}$) シルト質と砂質の混土
7. にぶい黄褐色 (10YR $\frac{7}{1}$) 砂質



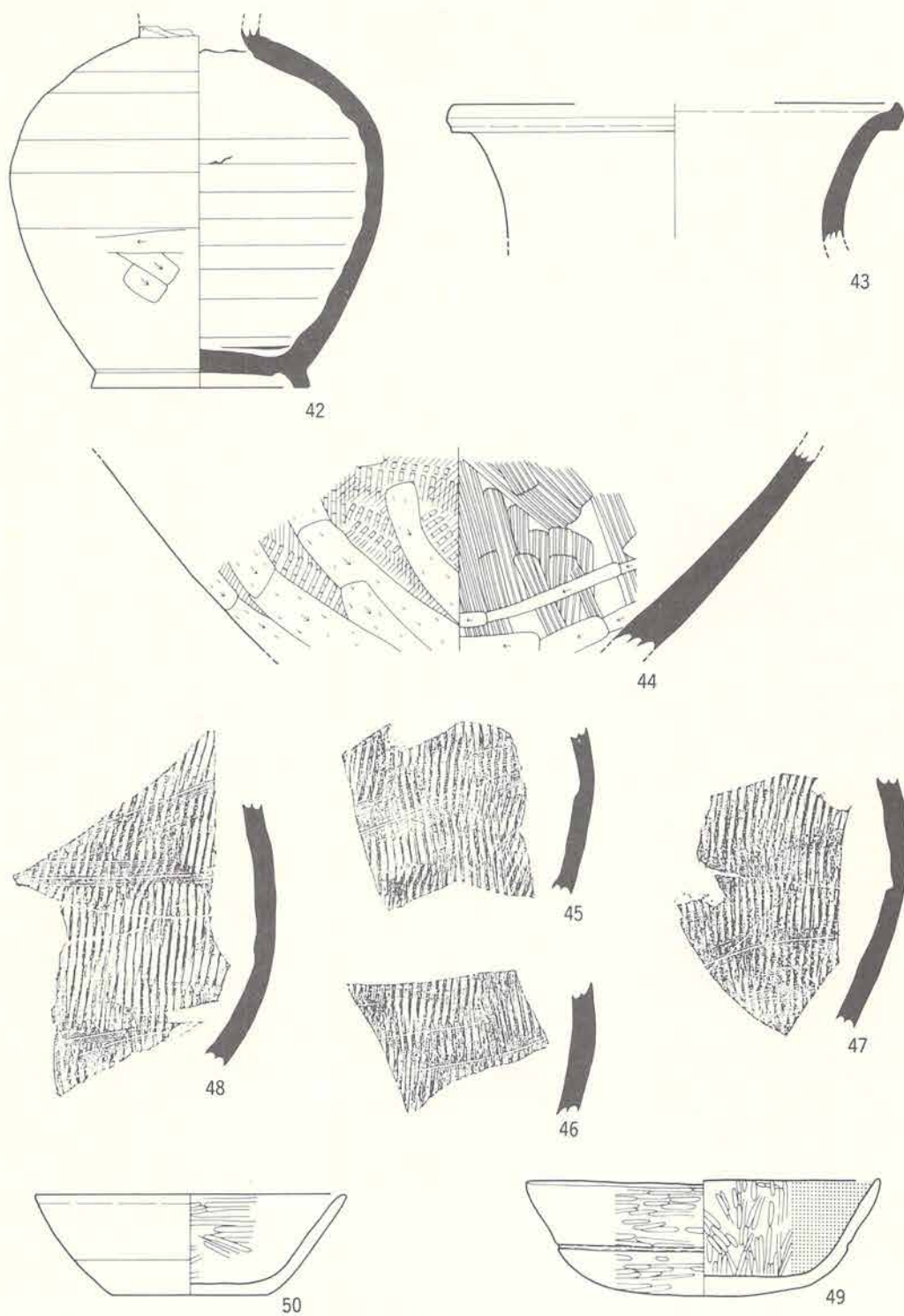
- 1a. 黒褐色 (10YR $\frac{2}{1}$) シルト質
- 1b. 黒褐色 (10YR $\frac{5}{1}$ ～ $\frac{2}{1}$) シルト質
2. 暗褐色～褐色 (10YR $\frac{2}{1}$ ～ $\frac{3}{1}$) 砂質
3. にぶい黄褐色 (10YR $\frac{7}{1}$) 砂質
4. 灰黄褐色 (10YR $\frac{8}{1}$) 砂質
5. 暗褐色 (10YR $\frac{2}{1}$) シルト質 褐色土塊を含む
6. 暗褐色 (10YR $\frac{2}{1}$) シルト質
7. 黄褐色 (10YR $\frac{5}{1}$ ～ $\frac{2}{1}$) 砂質



出土遺物



第34図 31号方形周溝 (遺構・遺物1)



第35图 31号方形周溝 (遺物2)

頸部と体部とを接合した部分が1ヶ所みられる。高台は粘土紐をつけロクロで調整して付けられたと思われる。また体部内面に紐積み上げ痕が2ヶ所みられる。高台径 9.9 cm、残存高 16.2 cm、体部最大径 16.9 cm、頸部下端径 5.5 cmである。

44 は体部下端の破片である。外面には平行叩目文をもつ。叩いた後、幅広いヘラケズリで一部調整されている。内面はカキメ調整を施した後、一部ヘラケズリで更に調整している。

45～48 は外面に平行叩目文をもつ体部片である。内面に当て具圧痕である半円状の凹凸がみられる。当て具そのものには同心円などの溝は刻まれていなかったと思われる。46 の内面には粘土紐積み上げ痕が2ヶ所みられる。

49 はロクロ未使用の丸底風平底のもので、体部外面中位に沈線を1本巡らせている。体部は外傾している。外面はナデ後、主にヨコ方向のヘラミガキで調整されている。内面はタテ方向のヘラミガキ後、黒色処理されている。底部中央が肥厚している。口径 15.4 cm、器高 4.5 cmである。

50 はロクロ使用のもので、底部に回転糸切り痕をもつ。底部外面などに再調整はみられない。内面はヘラミガキで調整されている。内面はかつて黒色処理が施され内黒であったものが、二次的の火熱を受けて消失したと思われる。口径 14.1 cm、底径 7.0 cm、器高 4.6 cmである。

<鉄器>東辺の埋土上部から鎌1点(40)、同じく下部から小刀1点(41)が出土している。鎌は先端部が欠損し、残存部先端から4 cm程の所で折損している。右手用で、刃は柄に対して115度位の角度で付く。先端は湾曲している。残存部の長さ20.0 cm、最大刃幅4.7 cm、最大厚3 mmである。小刀は先端から4.3 cmと10.5 cmの所で折損している。全長25.0 cm、幅2.1 cm、刃長21.5 cmである。先端が僅かに反り、刀身は徐々に細くなる。柄には木質部が残存する。

32号方形周溝

遺構(第36図、写真図版32)

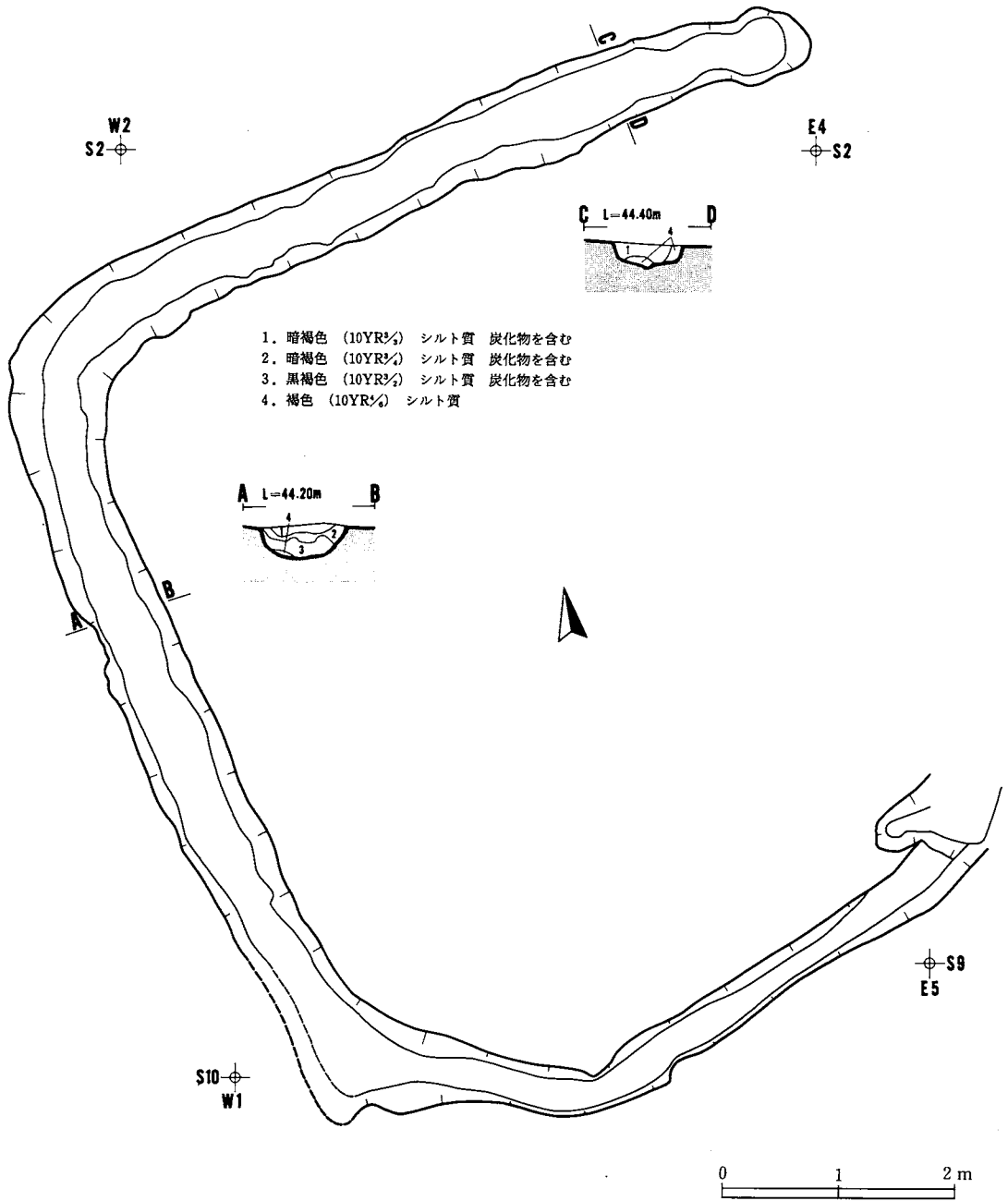
南尾根頂部から若干南に寄った非常にゆるやかな斜面上のⅢ層上面で検出されている。19号・30号古墳と重複し、16号・18号・29号古墳は本遺構の周溝に囲まれた内部に位置する。

北辺・西辺・南辺が検出され、東辺は検出されていない。規模は北辺・西辺・南辺の長さがそれぞれ7.5 m・7.5 m・5.4 m、上幅が35～75 cm、下幅が20～50 cm、最大深は約30 cmである。底面は比較的凹凸が少なく、若干湾曲する。壁は若干外傾し、断面形はU字状を呈する。南西隅で19号古墳と、また南辺の東端で30号古墳と重複するが、埋土が同質なため明確な新旧関係は確認できなかった。

埋土は炭化物を若干含む暗褐色シルト質土が主体で、下部には黄褐色土等をブロック状に含むやや粘性のある褐色シルト質土等が堆積する。

遺物

撚糸文による施文がなされた弥生式土器の細片が埋土中から数点出土しているが、図版掲載は割愛した。



第36図 32号方形周溝 (遺構)

3. 住居状竪穴遺構

遺 構 (第 37 図、写真図版 33)

1 棟のみの検出である。南尾根から南東に延びる尾根筋の南向き斜面上のⅢ層上面で検出されている。6 号古墳の南隣りに位置する。

斜面下方部が流失しているが、平面形は上端部では半円状、下端部では隅丸方形状である。床面は概ね平坦で、暗褐色シルト質土が貼られている。壁はゆるやかに外傾しており、本来の壁は崩落したと考えられる。残存部での規模は上端部で東西約 3.8 m、南北約 2.8 m、下端部で東西約 3.3 m、南北約 1.7 m で、壁高は最大約 65 m である。

埋土は炭化物が比較的多く含まれる黒褐色シルト質土と砂混じりの暗褐色シルト質土が主体である。

カマドの痕跡を示すものや柱穴等は検出されていない。機能や性格は不明であるが、床面のような平坦面が見られることから住居状竪穴遺構とした。

遺 物 (第 37 図、写真図版 49)

<土器>埋土からロクロ使用土師器坏形土器が 1 個体(51)、底部片 1 点(52)、口縁部片 3 点(53~55) が出土している。

51 はロクロからの切り離しが回転糸切りである。底部外周や体部下端を手持ちのヘラケズリで再調整されている。体部は内彎しながら立ち上がる。内面はヘラミガキ後、黒色処理されている。口径 12.4 cm、器高 5.0 cm、底径 5.8 cm である。

52 は内外面をヘラミガキ後、黒色処理されている。底部外面はロクロから切り離した後、手持ちヘラケズリで再調整されている。底径は推定 5.2 cm、残存高は 1.1 cm である。

53~55 は内面をヘラミガキ後、黒色処理されている口縁部片である。53 は体部外面の上端にも一部ヘラミガキ調整されている。体部は内彎している。55 は口唇部近くで幾分外反している。また、体部外面のロクロ痕の凹凸がやや顕著である。

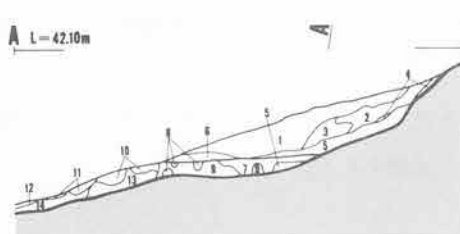
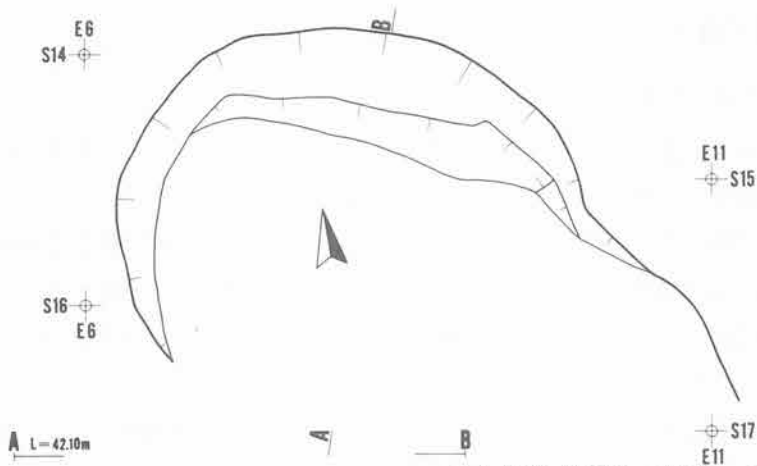
4. 溝 跡

4 条検出している。103 号・104 号溝跡の 2 条は南尾根頂部付近の南向き緩斜面上に位置し、重複等が著しく、その痕跡を認めただけで規模や形状等の詳細は不明であり、図版等は割愛した。

101 号溝跡

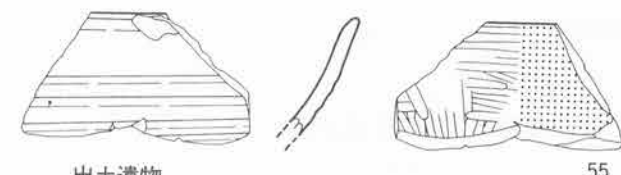
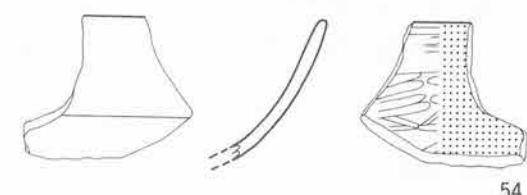
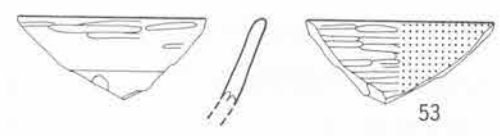
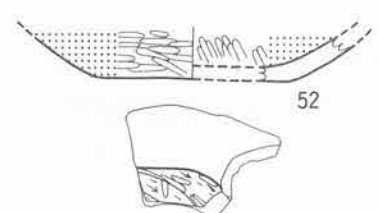
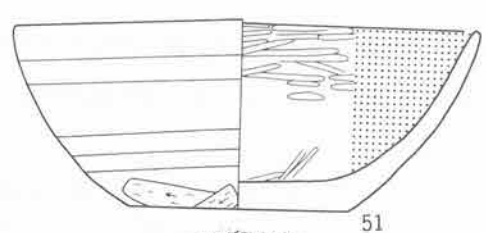
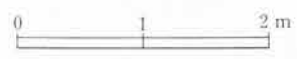
遺 構 (第 38 図、写真図版 34)

南尾根の南西に延びる尾根を区切るように、頂部から約 28 m 南西のⅢ層上面で検出されて



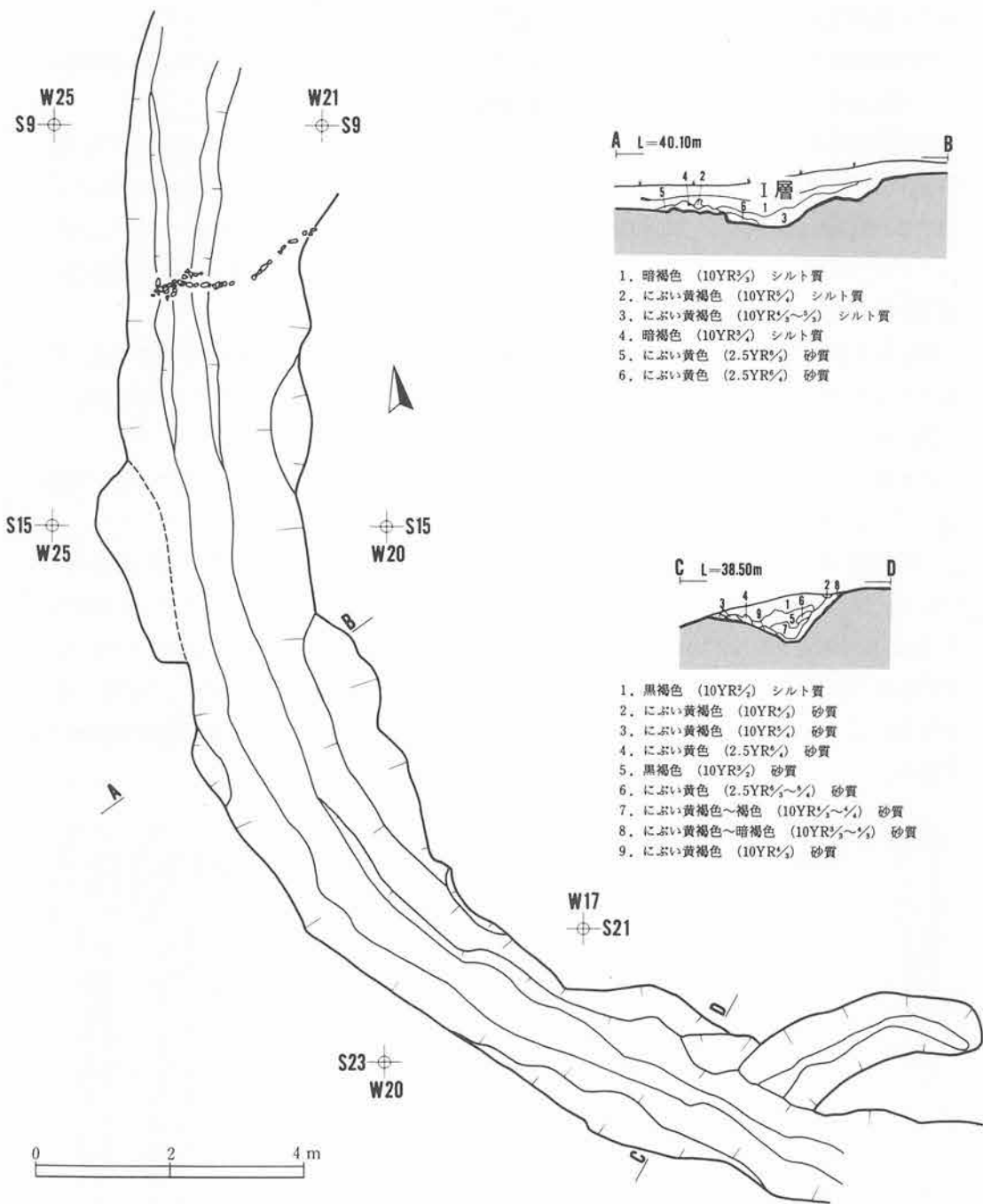
- | | |
|---|---------------------------------|
| 1. 黒褐色 (10YR2/3) シルト質炭化物を含む | 11. 暗褐色 (10YR2/4) シルト質 |
| 2. 暗褐色 (10YR2/4) シルト質 | 12. 暗褐色 (10YR2/4) シルト質 |
| 3. 暗褐色 (10YR2/4) シルト質 | 13. におい黄色 (2.5YR7/4~8/4) 砂質 |
| 4. 黄褐色 (10YR3/4) 砂質 | 14. 黄褐色~明黄褐色 (10YR3/4~5/4) シルト質 |
| 5. 暗褐色 (10YR2/4~3/4) シルト質 | |
| 6. 暗褐色 (10YR2/4) シルト質 | |
| 7. 暗褐色 (10YR2/4) シルト質とにおい黄褐色 (10YR7/4~8/4) 砂質土の混土 | |
| 8. 暗褐色 (10YR2/4) シルト質 | |
| 9. におい黄褐色~明黄褐色 (10YR7/4~8/4) 砂質 | |
| 10. 暗褐色 (10YR2/4) シルト質土とにおい黄褐色 (10YR7/4~8/4) 砂質土の混土 | |

遺構実測図



出土遺物

第37図 住居状竖穴遺構 (遺構・遺物)



第38図 101号溝跡 (遺構)

いる。15号古墳、31号方形周溝と重複し、ともに本遺構に切られている。

溝は等高線が湾曲する方向と同じ方向に弧状に湾曲し、概ね南北方向に延びる。その両端はそれぞれ北西向き及び南向き急斜面上の調査区域外に続いている。

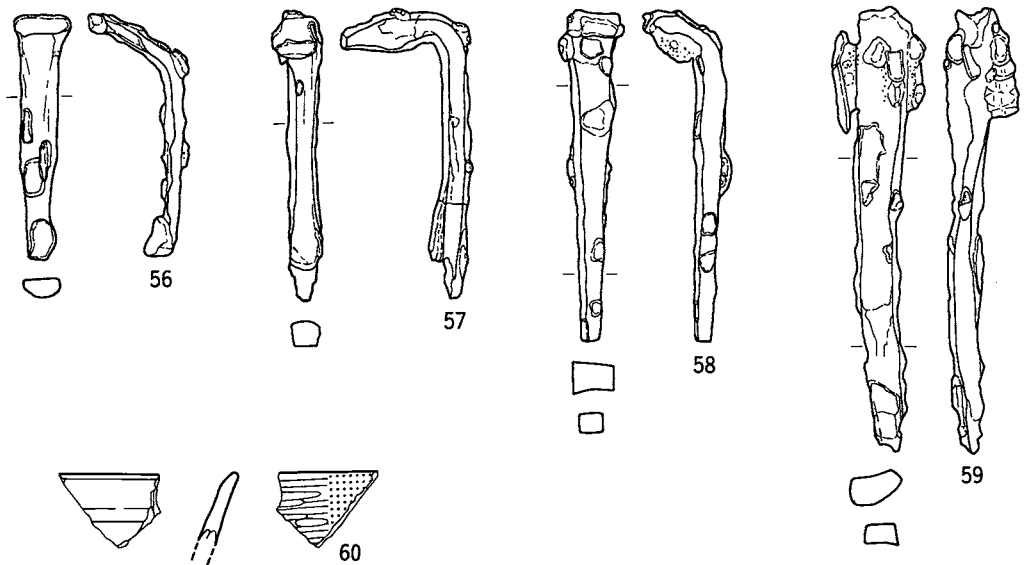
検出された長さは約19m、上幅が1.6~2.8m、下幅は尾根筋付近が0.5~0.8mで、南向き斜面下方部では0.2~0.3m、深さ0.6m前後である。底面は凹凸が少なく、壁はゆるやかに外傾する。断面形は椀状ないしは上端の開きが大きいV字形状を呈する。尾根筋からやや北に寄ったグリッドVI C3c付近に溝を横断する石組みが検出されている。東側の壁にはほぼ1列に、底面には1列に並ぶ他にその両側に石が埋め込まれている。

埋土は上部が黒褐色ないし暗褐色のシルト質土、下部はにぶい黄褐色等の砂質土である。南向き斜面下方部のグリッドVI C7e付近では埋土の締まりがよく、また粗砂が多く見られた。

遺物 (第39図、写真図版49)

<土器>埋土からロクロ使用の土師器坏形土器の口縁部片が1点(60)出土している。内面はヘラミガキ後、黒色処理されている。

<鉄製品>埋土から手斧と考えられる鉄器1点(56)と釘状鉄製品3点(57~59)が出土している。56は全長6.5cm、刃部幅1.3cm、基部幅0.6cm、厚さ0.5cm前後である。基部から5cm程の所で125度位の角度で湾曲する。刃部は錆等で、丸味を帯びて盛り上がっている。57・58は上端部が曲がり、先端部を欠損する。59も先端を欠損する。長さが伸ばした状態で57から順に10.3cm・9.1cm・11.7cm、幅及び厚さは中央部分で0.7~1.2cmの角釘状の鉄製品である。



第39図 101号溝跡 (出土遺物)

102号溝跡

遺 構 (第40図、写真図版35)

南尾根頂部のグリッドVI DOa～VD9a 付近のIII層上面で検出されている。32号方形周溝北辺の北側に端を発し、北西方向に延びる。

検出された長さは約5m、上幅が40～70cm、下幅が20～45cm、深さ15cm前後である。底面には若干凹凸があり、壁は比較的急角度で立ち上がる。断面形は浅皿状を呈する。

埋土は炭化物を含む黒褐色から暗褐色のシルト質土が主体で、下部にはIII層起源の汚れた黄褐色シルト質土が堆積する。

遺 物

出土していない。

103号・104号溝跡

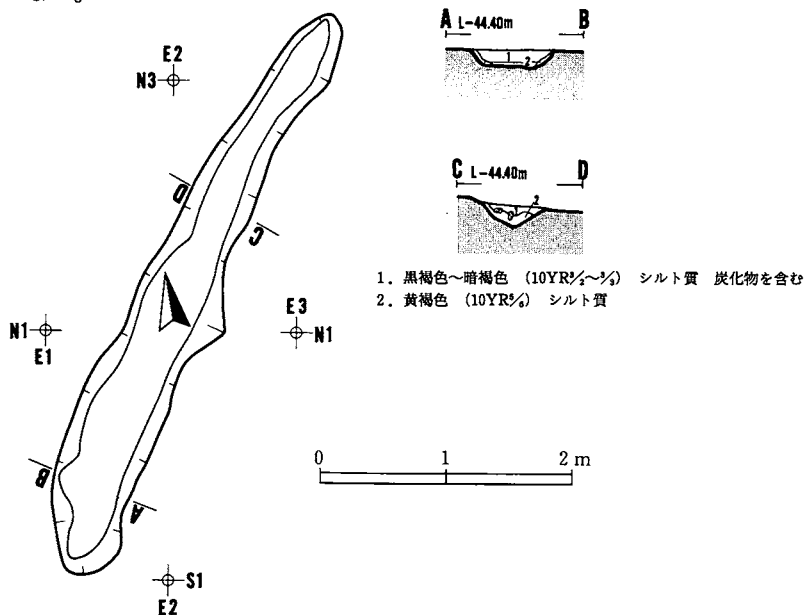
遺 構

32号方形周溝の南辺の東側に、東に向かって並行して延びる2条の溝状遺構を検出している。2条の溝跡は重複し、北側の103号溝跡の方が新しい。いずれも攪乱等で全体を明確に把握できなかったが、斜面の傾斜が強くなる部分で消滅する。長さはともに8m前後で、幅は103号溝跡が上幅40cm前後、他方が上幅60cm前後である。

埋土はともに褐色または暗褐色のシルト質土が主体である。

遺 物

ともに出土していない。



第40図 102号溝跡 (遺溝)

5. 集石遺構

遺 構 (第 41 図、写真図版 36)

南尾根の南東に馬背状に延びる尾根のVII E 区北向き斜面上で、尾根筋を境とした北側の表土直下からIII層上面の間で検出されている。本遺構の東側には13号古墳が、南側には23号古墳が位置する。

集石は南北約4m、東西約6mの範囲に350個程の石が敷かれたような状態で検出されている。掘り込み等は見られず、本遺構の下位にも遺構は検出されていない。意図的な配置がなされたものかどうかは不明であるが、石質はアルコース砂岩で、遺跡地内にこの石の露頭はなく、持ち込まれたものと推測される。宮古市では浄土ヶ浜等に同質の石が見られる。

遺 物 (第 42~45 図、写真図版 50)

<土器>表土直下からIII層上面までの間から須恵器壺形土器の底部片1点(61)、須恵器長頸壺形土器の破片2点(62・63)が出土している。

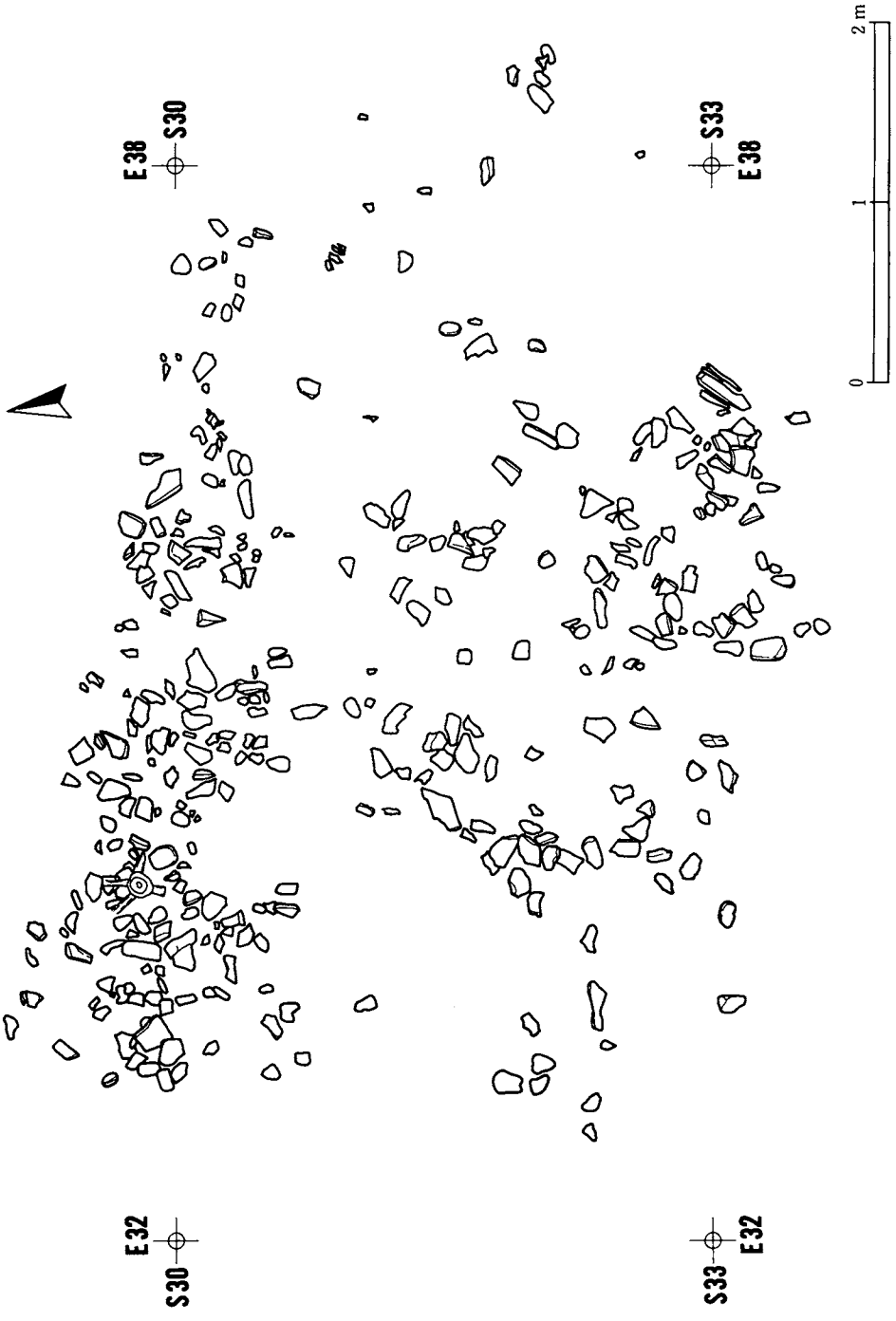
61はロクロ調整された高台付の底部片である。底部外面はヘラケズリで調整され、外周には高台を付けた時のロクロ調整が見られる。高台外径は推定14.4cm、残存高5.7cmである。

62はロクロ調整された頸片部である。頸部は上方にやや開く器形をなす。現存する部分での推定口径は7~8.1cmである。63は肩部片である。頸部と肩部とが接合する頸部最下端に1~2mmの細い隆帯がみられる。内外面をロクロ調整しているため、頸部と肩部の接合痕跡はみられない。

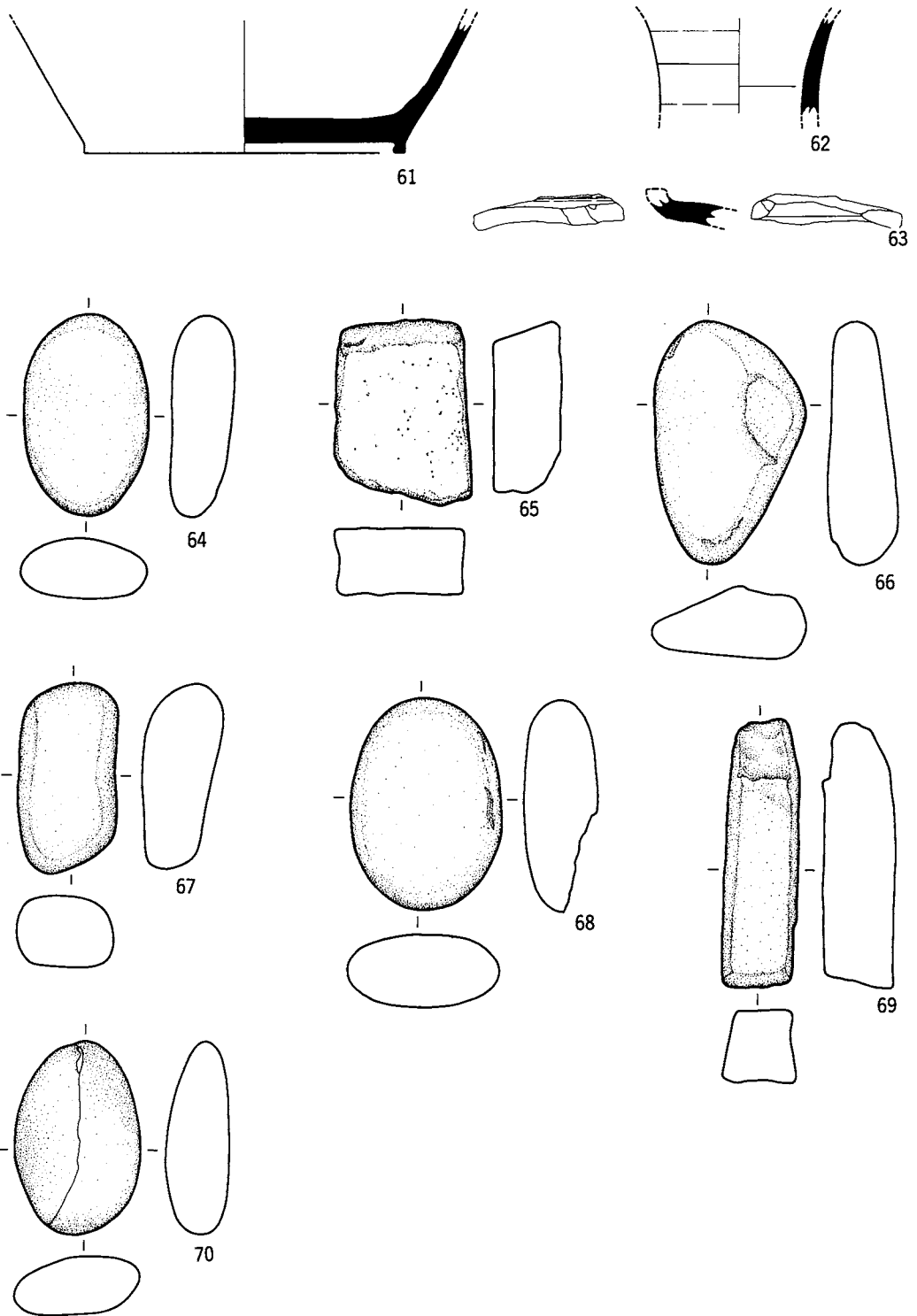
<礫>集石の中に人工的に手が加えられていると思われるものが25点あり、それらを図版に掲載した。円礫・亜円礫と亜角礫があり、前者は磨石のように表面が滑らかである。後者は面取りしたような扁平な面を持つ。最大径が11cm台から15cm台のものが多く、石器と言えるかどうか分からないが、利器とすれば磨石的機能が考えられる。

表3 集石遺構礫計測表

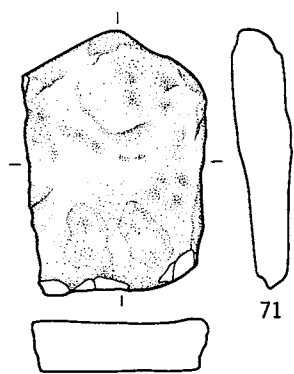
図版 番号	法 量				図版 番号	法 量			
	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重 さ(g)		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重 さ(g)
第42図-64	12.0	7.5	3.6	438	第43図-77	13.0	7.9	3.2	602
〃 -65	11.1	8.3	3.9	630	〃 -78	9.8	7.8	3.7	295
〃 -66	14.5	9.1	4.2	680	〃 -79	12.7	8.8	3.2	782
〃 -67	11.5	6.0	4.5	455	第44図-80	13.7	9.6	2.9	478
〃 -68	12.7	9.1	4.4	626	〃 -81	13.7	7.9	5.0	550
〃 -69	16.1	4.5	4.2	506	〃 -82	13.7	6.2	4.0	690
〃 -70	11.6	7.5	3.7	410	〃 -83	15.7	8.4	4.1	702
第43図-71	14.9	11.0	2.3	563	〃 -84	14.5	10.9	2.8	936
〃 -72	11.3	8.2	4.5	645	〃 -85	16.3	8.0	3.9	549
〃 -73	15.6	6.4	4.5	480	〃 -86	13.9	7.0	4.3	598
〃 -74	15.7	7.7	4.1	720	〃 -87	15.1	6.3	2.0	375
〃 -75	15.6	9.2	5.5	567	〃 -88	18.9	9.5	4.6	475
〃 -76	10.3	10.7	3.8	571					



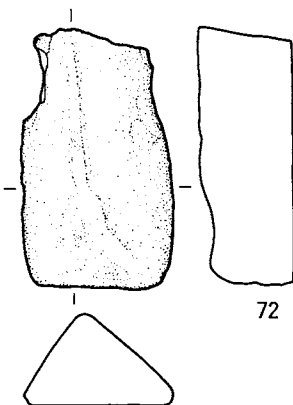
第41図 集石遺構 (遺構)



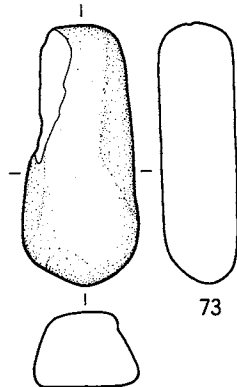
第42図 集石遺構（遺物1）



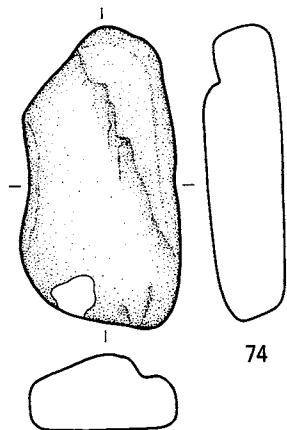
71



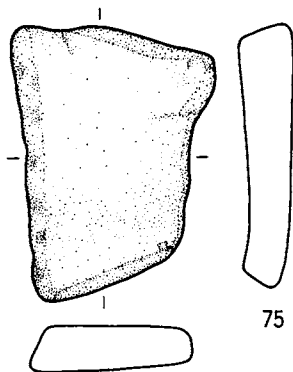
72



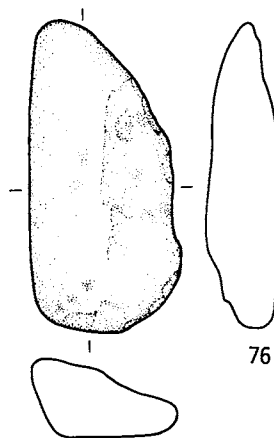
73



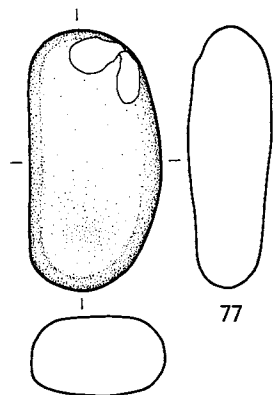
74



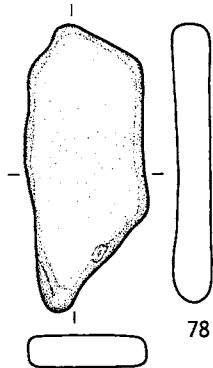
75



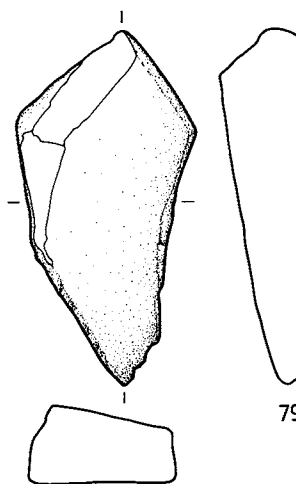
76



77

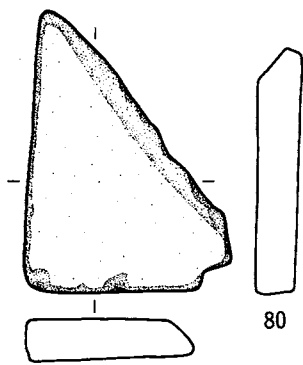


78

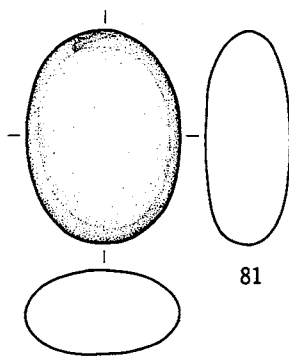


79

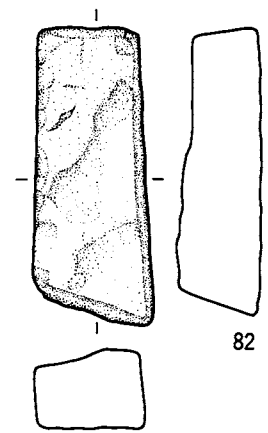
第43図 集石遺構 (遺物2)



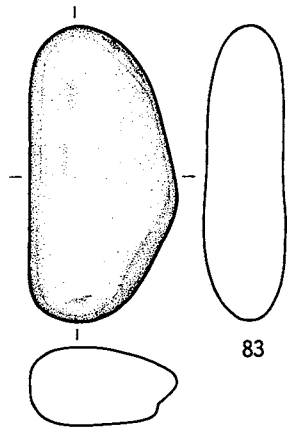
80



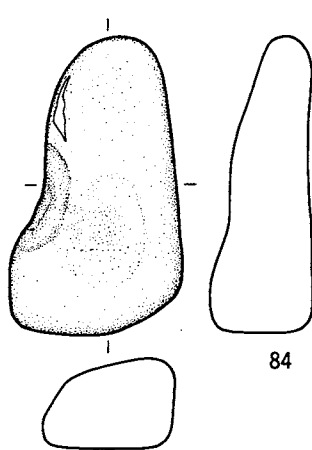
81



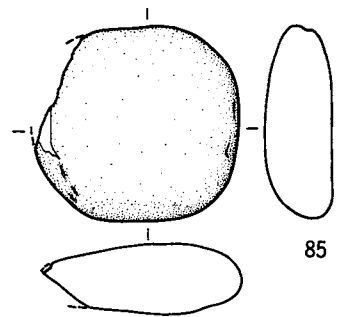
82



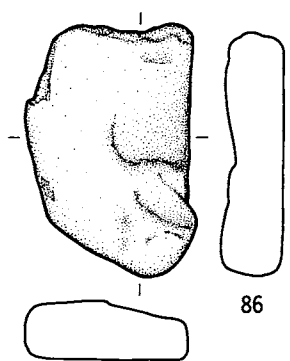
83



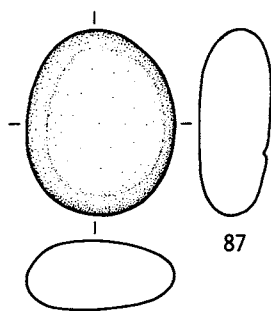
84



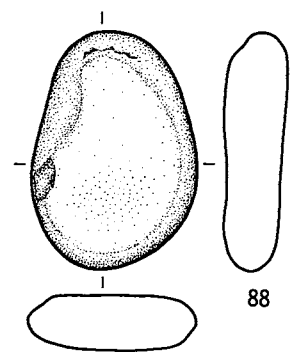
85



86



87



88

第44図 集石遺構 (遺物3)

6. 墓 墳

遺 構 (第 45 図、写真図版 37)

南尾根頂部のVI D 区北西端のIII層上面で検出されている。この付近は表土が薄く、またII層土を欠く。

平面形は若干歪んだ楕円形で、規模は開口部 120×103 cm、底部 86×81 cm、深さ 53 cm である。底面は平坦で、壁はほぼ直立する。埋土は4層に分かれ、上部に暗褐色、下部に褐色のシルト質土が堆積する。

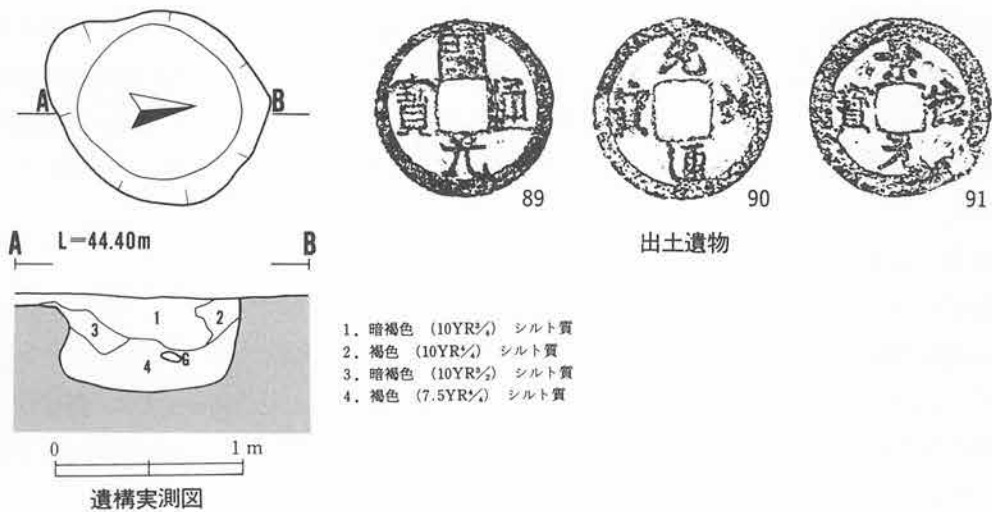
底部直上の北壁際には人骨の一部が残存していた。骨片の部位は眉間にあたる頭骨の一部と、指骨、歯3点であり、成人女性のもので、眉間から鼻骨にかけての形状は中世人骨の典型的な特徴を有する、との鑑定結果を得ている。

遺 物 (第 45 図、写真図版 50)

銅銭3枚が出土している。開元通宝(初鑄造年 621 年)、景德元宝(同 1004 年)、元祐通宝(同 1086 年)である。

遺構の時期

人骨の鑑定及び出土した銅銭から中世の墓墳と考えられる。



第45図 墓墳 (遺構・遺物)

7. ピット

11基のピットを検出している。53・54号が重複し、56号ピット群の6基が重複し合っている。遺物はいずれのピットからも出土していない。

51号ピット（第46図、写真図版37）

南尾根頂部で墓墳の南東約4.5mに位置する。29号古墳周湟の南西端で重複し、本遺構が周湟を切っている。

平面形は楕円形で、規模は開口部110×92cm、底部100×72cm、深さ20～27cmである。底面は緩やかな凹凸が若干あるが、ほぼ平坦で、壁は直立する。埋土は締まりの弱い黒褐色シルト質土が主体である。埋土中には径10～20cmほどの礫が数個含まれる。

52号ピット（第46図、写真図版37）

51号ピットの東北東約2mに位置する。17号・29号古墳周湟の下位から検出されている。遺構の上部は、大部分がそれらの古墳によって切られており、西側の一部が残存する。

平面形は楕円形で、底面は湾曲し、壁はゆるやかに外傾する。断面形は摺鉢状を呈する。規模は、開口部が残存部で145×120cm、推定値で約190×140cmである。底部は約80×20cm、深さ約75cmである。埋土は上部が炭化物を含む黄褐色の粘性のあるシルト質土と明黄褐色の砂質シルトで、下部が炭化物を含む黄褐色粘土質シルトである。

53号ピット（第46図、写真図版38）

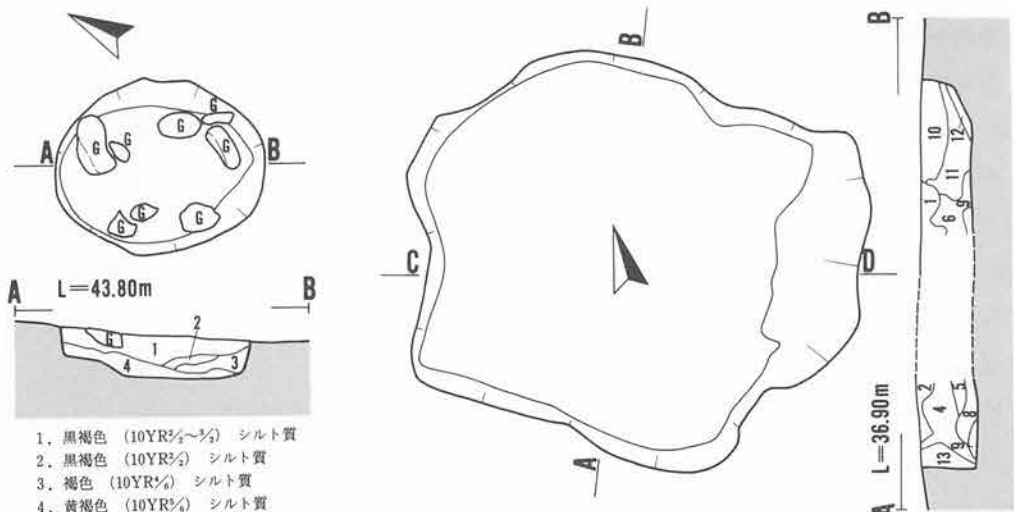
南尾根から南東に延びる馬背状の尾根筋上の平坦に近い南向き緩斜面上で検出されている。検出面はⅢ層上面である。南側には12号古墳、東側約2.5mには23号古墳が位置する。54号ピットと重複するが、埋土がほとんど同質で、新旧関係は不明である。

平面形は長方形を呈すると思われるが、北東側の壁は残存しない。底面は平坦で、締まりもよい。壁は湾曲して立ち上がり、ほぼ垂直である。規模は、開口部の長さが180cm、幅は推定で約70cm、底部の長さが165cm、幅が推定で55cm前後、深さは約30cmである。埋土は炭化物を含む暗褐色シルト質土ないし黒褐色砂質シルトが主体で、壁際や最下部には暗褐色土と黄褐色土の混土や汚れた黄褐色砂質シルト等が堆積する。

54号ピット（第46図、写真図版38）

53号ピットの北側に重複して検出されている。

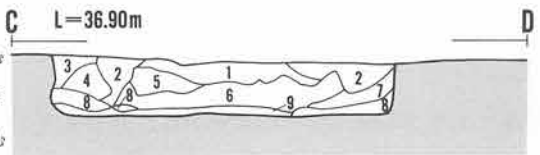
平面形は楕円形状を呈すると思われるが、南側の壁は残存しない。北東から東側にかけては不整である。底面は53ピット同様平坦で締まりがよく、深さもほとんど同じである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。規模は開口部で約200×160cm、底部で約190×150cm、深さ約30cmである。埋土は53号ピットと同様である。



1. 黒褐色 (10YR $\frac{2.5}{1}$) シルト質
2. 黒褐色 (10YR $\frac{2.5}{1}$) シルト質
3. 褐色 (10YR $\frac{2.5}{1}$) シルト質
4. 黄褐色 (10YR $\frac{2.5}{1}$) シルト質

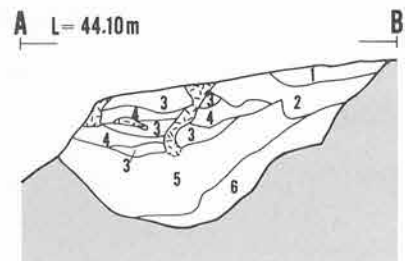
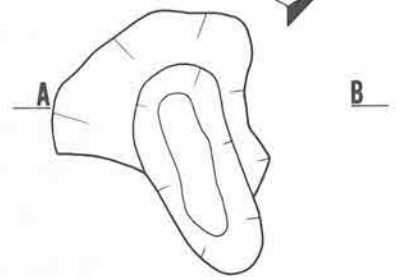
51号ピット

1. 暗褐色 (10YR $\frac{2.5}{1}$) シルト質 炭化物少量含む
2. 黄褐色シルト (10YR $\frac{2.5}{1}$) 土と暗褐色シルト (10YR $\frac{2.5}{1}$)土の混合
3. におい黄褐色 (10YR $\frac{2.5}{1}$) 砂質シルト
4. 明黄褐色 (10YR $\frac{2.5}{1}$) 砂質シルト 炭化物含む
5. 黄褐色 (10YR $\frac{2.5}{1}$) 砂質シルト
6. 黒褐色 (10YR $\frac{2.5}{1}$) 砂質シルト 炭化物含む
7. 暗褐色 (10YR $\frac{2.5}{1}$) 砂質シルト
8. 黄褐色 (10YR $\frac{2.5}{1}$) 砂質シルト
9. 黄褐色 (10YR $\frac{2.5}{1}$) 砂質シルト



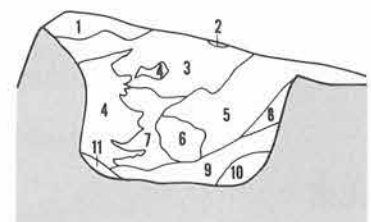
10. 明黄褐色 (10YR $\frac{2.5}{1}$)
11. 褐色 (10YR $\frac{2.5}{1}$) シルト質 炭化物少量含む
12. 黄褐色 (10YR $\frac{2.5}{1}$) シルト質
13. 明黄褐色 (10YR $\frac{2.5}{1}$) 砂質シルト

53号・54号ピット



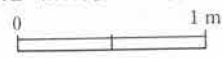
1. 黄褐色 (10YR $\frac{2.5}{1}$) シルト質 炭化物少量含む
2. 黄褐色 (10YR $\frac{2.5}{1}$) 粘土質シルト
3. 明黄褐色 (10YR $\frac{2.5}{1}$) 砂質シルト
4. 明黄褐色 (10YR $\frac{2.5}{1}$) 砂質シルト
5. 黄褐色 (10YR $\frac{2.5}{1}$) 粘土質シルト 炭化物少量含む
6. 黄褐色 (10YR $\frac{2.5}{1}$) 粘土質シルト 炭化物少量含む

52号ピット



1. 暗褐色 (10YR $\frac{2.5}{1}$) シルト質
2. 褐色 (7.5YR $\frac{2.5}{1}$) シルト質
3. 黒褐色 (10YR $\frac{2.5}{1}$) シルト質
4. 褐色 (10YR $\frac{2.5}{1}$) シルト質
5. 暗褐色 (10YR $\frac{2.5}{1}$) シルト質
6. 褐色 (7.5YR $\frac{2.5}{1}$) シルト質
7. 黒褐色 (10YR $\frac{2.5}{1}$) シルト質
8. 褐色 (10YR $\frac{2.5}{1}$) シルト質
9. 暗褐色 (10YR $\frac{2.5}{1}$) シルト質
10. 暗褐色 (10YR $\frac{2.5}{1}$) シルト質
11. 褐色 (10YR $\frac{2.5}{1}$) シルト質

55号ピット



第46図 ピット1 (遺構)

55号ピット（第46図、写真図版38）

南尾根の南向きの10度前後の斜面上で検出されている。26号古墳周濠の内径側の壁に接する位置にある。

平面形は楕円形を呈する。底面はほぼ平坦で、壁は湾曲して立ち上がり、ほぼ垂直かまたは若干外傾する程度である。断面形は円筒形状である。規模は開口部170×135cm、底部128×100cm、深さ60×80cmである。埋土は黒褐色ないし暗褐色のシルト質土が主体で、壁際等に褐色のシルト質土が堆積する。

56号ピット群（第47図、写真図版38）

55号ピットの東約2mに位置する。断面形がフラスコ形状または円筒形状を呈するピットが南北に5基連なり、その東側に1基の計6基が重複し合って検出されている。明確な新旧関係は不明であるが、埋土の状況から底面のレベルの上位のピットの方が下位のピットより新しい可能性が考えられる。ただし、個々のピットに明確な土層の違いはなく、大きな時期差はないと思われる。

平面形は各ピットとも概ね楕円形状を呈し、底面は若干凹凸が見られるものもあるが、ほぼ平坦である。壁は湾曲して立ち上がり、若干外傾するものと、垂直またはオーバーハングするものがある。規模は底部の長径でいずれも2m前後、深さは1.3～1.6m位である。

56号eピットの南側は完掘していないが、これ以上精査を続けて掘り進むと崖崩れの危険があるため、途中で調査を断念した。埋土の状況からは56号eピットの南側にさらに16・18・19・23・26・27層を埋土とするもう1基のピットが存在する可能性がある。

埋土は1～8層が56号aピット、2・3層の一部と9～15層が56号bピット、20～22・24層が56号cピット、25・31層が56号dピット、28～30層が56号eピットのものと推測される。

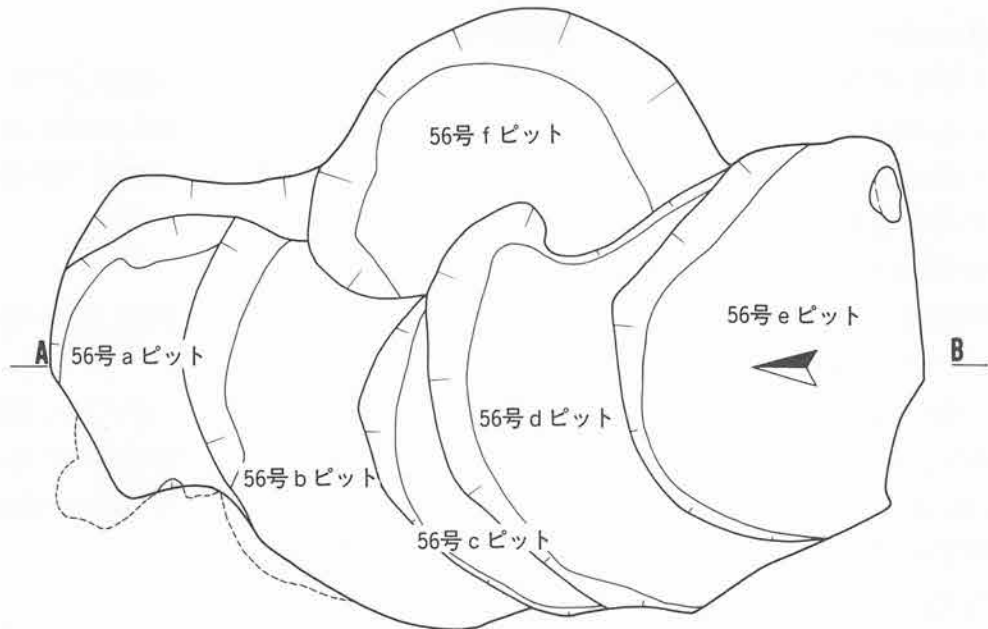
56号aピットの上部は炭化物を含む黒褐色土で、中部が暗褐色ないし褐色のシルト質土、下部は比較的締まりのよい褐色のシルト質土である。56号bピットも上・中部は黒褐色ないし暗褐色のシルト質土で、下部は褐色のシルト質土である。10層は掘り過ぎの可能性もある。56号c～eピットは下部から底部が残存していると考えられ、埋土は粘性のある褐色のシルト質土が主体である。56号fピット埋土は56号aピットと類似の堆積状況を示す。

8. 陥し穴

5基検出されている。遺物はいずれの遺構からも出土していない。

71号陥し穴（第48図、写真図版39）

南尾根の南西に延びる尾根筋VIC区緩斜面上で検出されている。4号古墳主体部と重複し、本



- | | |
|---|---|
| 1. 黒褐色 (10YR $\frac{2}{6}$) シルト質 炭化物を含む | 14. 暗褐色～褐色 (10YR $\frac{3}{6}$ ～ $\frac{4}{6}$) シルト質 |
| 2. 褐色 (10YR $\frac{4}{6}$) シルト質 | 15. 褐色 (10YR $\frac{4}{6}$) シルト質 |
| 3. 黒褐色～暗褐色 (10YR $\frac{2}{6}$ ～ $\frac{3}{6}$) シルト質 | 16. 暗褐色 (10YR $\frac{3}{6}$ ～ $\frac{4}{6}$) シルト質 |
| 4. 褐色 (10YR $\frac{4}{6}$) シルト質 | 17. 褐色 (10YR $\frac{4}{6}$) シルト質 |
| 5. 褐色 (7.5YR $\frac{3}{6}$ ～ $\frac{4}{6}$) シルト質 | 18. 黒褐色 (10YR $\frac{2}{6}$) シルト質 |
| 6. 褐色 (7.5YR $\frac{3}{6}$) シルト質 | 19. 黄褐色 (10YR $\frac{5}{6}$) シルト質 |
| 7. 黄褐色 (10YR $\frac{5}{6}$) シルト質 | 20. 褐色 (7.5YR $\frac{3}{6}$) シルト質 |
| 8. 褐色 (7.5YR $\frac{3}{6}$) シルト質 | 21. 褐色 (10YR $\frac{4}{6}$) シルト質 |
| 9. 黄褐色 (10YR $\frac{5}{6}$) シルト質 | 22. 褐色 (7.5YR $\frac{3}{6}$) シルト質 |
| 10. 黄褐色 (10YR $\frac{5}{6}$) シルト質 | 23. 黒色～黒褐色 (10YR $\frac{1}{6}$ ～ $\frac{2}{6}$) シルト質 |
| 11. 褐色 (7.5YR $\frac{3}{6}$) シルト質 | 24. 褐色 (10YR $\frac{4}{6}$ ～ $\frac{5}{6}$) シルト質 |
| 12. 褐色 (7.5YR $\frac{3}{6}$) シルト質 | 25. 褐色 (7.5YR $\frac{3}{6}$) シルト質 |
| 13. 黄褐色 (10YR $\frac{5}{6}$ ～ $\frac{7}{6}$) シルト質 | 26. 黄褐色 (10YR $\frac{5}{6}$ ～ $\frac{7}{6}$) シルト質 |
| | 27. 黒褐色 (10YR $\frac{2}{6}$) シルト質 |
| | 28. 褐色 (7.5YR $\frac{3}{6}$) シルト質 |
| | 29. 黄褐色 (10YR $\frac{5}{6}$) シルト質 |
| | 30. 褐色 (10YR $\frac{4}{6}$) シルト質 |
| | 31. 黄褐色 (10YR $\frac{5}{6}$) シルト質 |



第47図 ピット2

遺構の開口部の一部が切られている。検出面はⅢ層上面である。

平面形は細長い長方形状である。開口部は崩落のため不整である。短軸の断面形は U 字状を呈する。長軸の方向は等高線に対して斜めである。規模は開口部 176×75 cm、底部 128×40 cm、深さ 90～100 cm である。埋土は上部が締まりの弱い黄褐色ないし褐色のシルト質土、下部が締まりの弱い黄褐色砂質シルトである。

72 号陥し穴 (第 48 図、写真図版 40)

南尾根頂部付近の 29 号古墳の下位のⅣ層上面で検出されている。上部は古墳等によって削剝され、下部のみ残存していたと思われる。

平面形は細長い溝状を呈し、両端が若干ふくらむ。短軸の断面形は幅の狭い U 字状で、長軸の両端は若干オーバーハングする。長軸の向きは等高線に対して平行する。規模は開口部 282×14 cm、底部 274×5 cm、深さ 55～80 cm である。埋土は明褐色シルト質土で、最下部に 6～8 cm の層厚で暗褐色シルト質土が堆積する。

73 号陥し穴 (第 48 図、写真図版 39)

南尾根から南東に延びる尾根のⅥ D 区南向き斜面上で検出されている。

平面形は細長い長方形状である。短軸の断面形は U 字状を呈し、長軸方向の北側はほぼ垂直で、南側は開口部が崩落のためか、外傾する。長軸の方向は等高線に対して直交する。規模は開口部 240×80 cm、底部 204×36 cm、深さ 50～100 cm である。埋土は上部が黒褐色シルト質土、中・下部がにぶい黄褐色等の汚れた砂質土である。

74 号陥し穴 (第 49 図、写真図版 40)

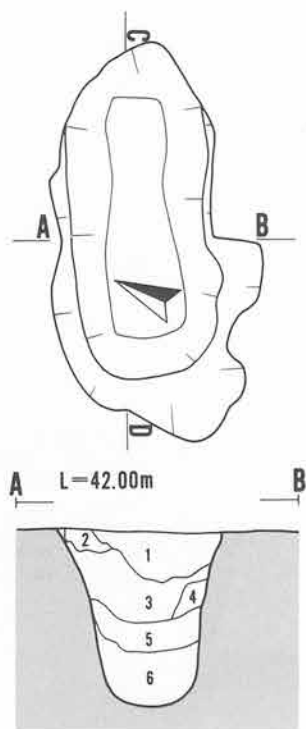
73 号陥し穴の南約 1 m に位置している。

平面形は細長い溝状で、短軸の断面形は漏斗状を呈する。長軸両端はオーバーハングする。長軸の方向は等高線に対して平行する。規模は開口部 335×85 cm、底部 355×30 cm、深さ約 150 cm である。埋土は最上部が黒褐色シルト質土、中・下部は浅黄色やにぶい黄色の汚れた砂質土である。

75 号陥し穴 (第 49 図、写真図版 40)

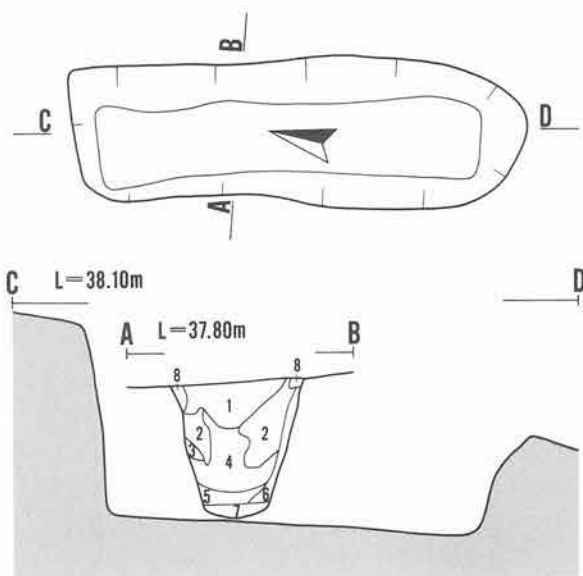
75 号陥し穴に平行して、その南西約 2 m に位置する。

平面形は細長い溝状で、短軸断面形は開口部付近がやや開き、幅の狭い U 字形状を呈する。長軸両端は若干オーバーハングし、長軸の方向は等高線に対して平行する。規模は開口部 315×45 cm、底部 325×10 cm、深さ約 110 cm である。埋土は上部・下部とも汚れた砂質土で、その色調はにぶい黄色や暗灰黄色、黄褐色等である。



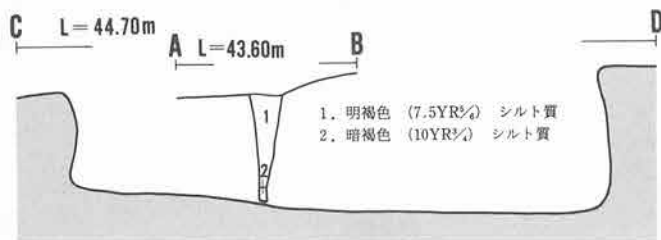
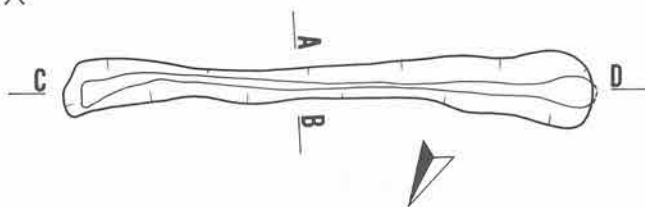
1. 黄褐色 (10YR $\frac{2}{6}$) シルト質 炭化物を含む
2. 褐色 (10YR $\frac{2}{4}$) シルト質
3. 黄褐色 (10YR $\frac{2}{6}$) シルト質
4. 黄橙色 (10YR $\frac{2}{4}$) 砂質シルト
5. 黄褐色 (10YR $\frac{2}{6}$) 砂質シルト
6. 明褐色 (7.5YR $\frac{2}{4}$) 砂質シルト

71号陥し穴



1. 黒褐色 (10YR $\frac{2}{1}$) シルト質
2. におい黄褐色 (10YR $\frac{2}{6}$) 砂質
3. 明黄褐色 (10YR $\frac{2}{6}$) 砂質
4. におい黄褐色 (10YR $\frac{2}{6}$ ~ $\frac{2}{4}$) 砂質
5. におい黄褐色 (10YR $\frac{2}{6}$) 砂質
6. 浅黄色 (2.5YR $\frac{2}{4}$) 砂質
7. におい黄褐色 (10YR $\frac{2}{6}$) 砂質
8. におい黄橙色 (10YR $\frac{2}{4}$) 砂質

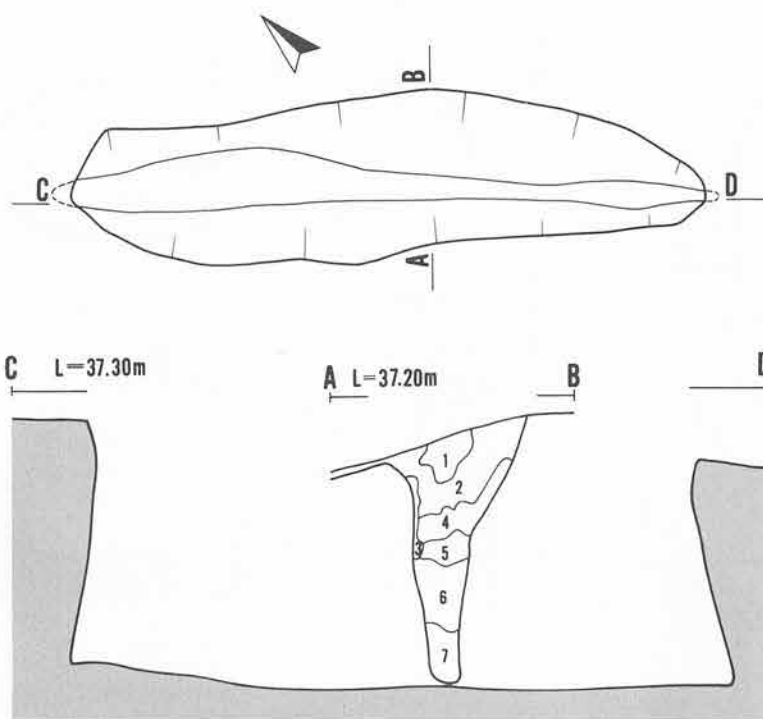
73号陥し穴



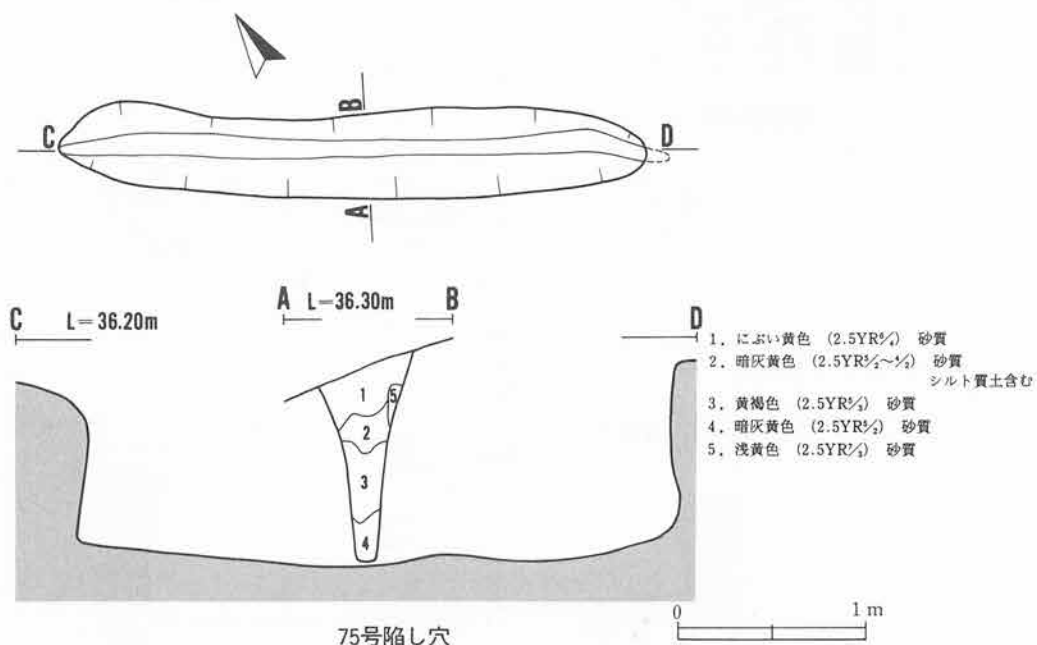
72号陥し穴



第48図 陥し穴 1



74号陥し穴



75号陥し穴

第49図 陥し穴2

V 遺構外の出土遺物

1. 土器

a、縄文時代の土器（第 50・51 図、写真図版 51・52 107～116）

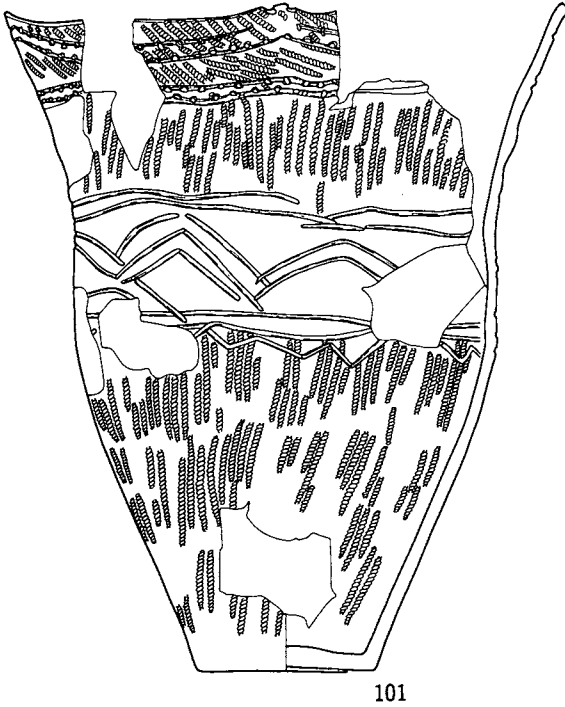
縄文土器は 10 数点の出土できわめて少なく、図版に掲載したものがその大半である。分類は行わず、個々の記載にとどめる。107 は深鉢の底部破片で、表面が一部剝落している。地文がほとんど残っていないが、RL 単節斜縄文を施文していると思われる。108 は小型の鉢の口縁部破片で、沈線で区画し、磨消と撚りの細かい縄文で文様を施している。後期の土器片と思われる。109 も口縁部破片で、残片部分では結束が見られない羽状縄文を施文している。繊維を含んでおり、大木 1 式に多く見られる土器である。110～116 はいずれも深鉢と思われる体部破片である。地文は 110～114 が LR 単節斜縄文、116 が網目状撚糸文である。115 は表面が磨滅しているが、LR 単節斜縄文と思われる。111～114 の胎土には繊維が含まれ、115・116 には粗砂が比較的多く含まれる。

b、弥生時代の土器（第 50～53 図、写真図版 51～54 101～106・117～169）

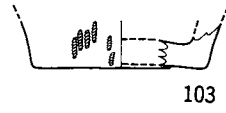
时期的にはいずれも後期に位置づけられる。口縁部から底部まで復元できた土器は 101 の甕 1 点のみである。他は破片のため、明確な器種同定はできなかったが、その多くは甕と思われ、他に鉢と思われるものもある。土器の多くは北尾根の南東側斜面上の黒褐色土層からである。黒褐色土層は基本層序の II 層にあたる。北尾根南東側斜面以外には南尾根 VI C・VI D 区、南尾根南端緩斜面の VII C 区等の I・II 層から若干出土している。層位的な区別ができる出土状態ではなかったので、記述にあたっては文様を構成する要素を主とする。

101 は体部中央がやや張り、その上位で若干窄み、口縁部は外傾する。口縁は残存部からの推定で 4 個の突起を持つ。施文は縦位の撚糸文を地文とし、文様は沈線や交互刺突によって口縁から体部上半にかけて施文されている。口縁部には 2 条を 1 対とする平行沈線が 2 対巡り、沈線の内側に、沈線に向かって交互に刺突がつけられている。上位の交互刺突文は 4 分の 1 周を 1 単位として波状に巡り、下位のそれは横走する。体部上半には 2 条を 1 対として横走する平行沈線によって区画された内部を磨消し、その間に山形の沈線を 2 条ないし 3 条施している。また、その直下には鋸歯状の沈線が 1 条巡る。102 も基本的な施文は 101 と同様である。縦位の撚糸文を地文とし、口縁部には 3 条の交互刺突文が施されている。上位と中位の交互刺突文は波状に巡り、下位のそれは横走する。中位と下位の間の地文はなで消されている。103～105 は底部破片で、103・104 は縦位の、105 は横位の撚糸文が施文されている。106 は器種不明で、底面には撚糸文が、底面直上には交互刺突文が見られる。

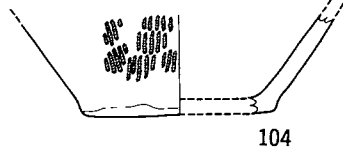
口径22.6・器高26.4・底径7.0(cm) IVE 4 h、II層



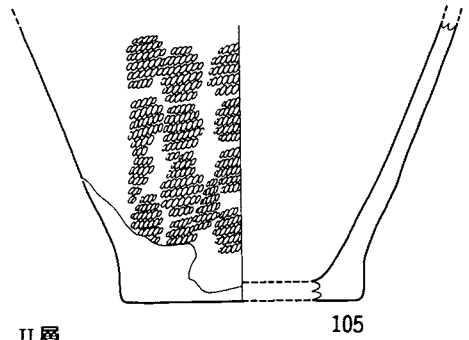
—・[1.8]・(7.0) IVE区、II層



—・[4.0]・(7.6) IVE 3 f、II層

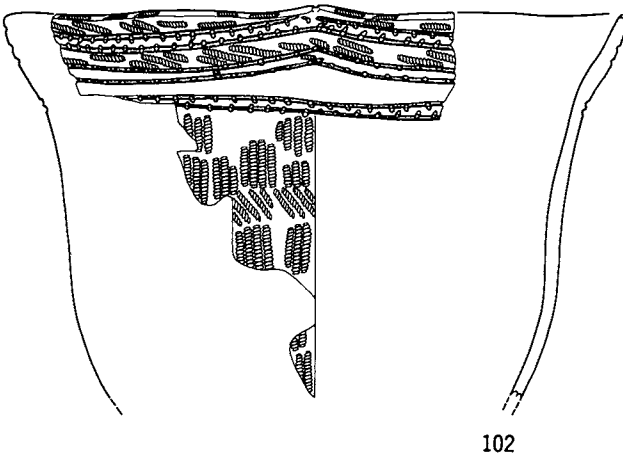


—・[11.0]・(9.6) IVE 2 e、II層

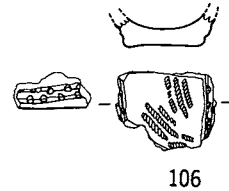


(25.0)・[15.6]・—

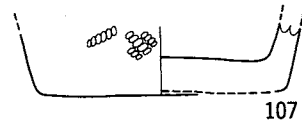
IVE 0 d、II層



IVE 4 e、II層

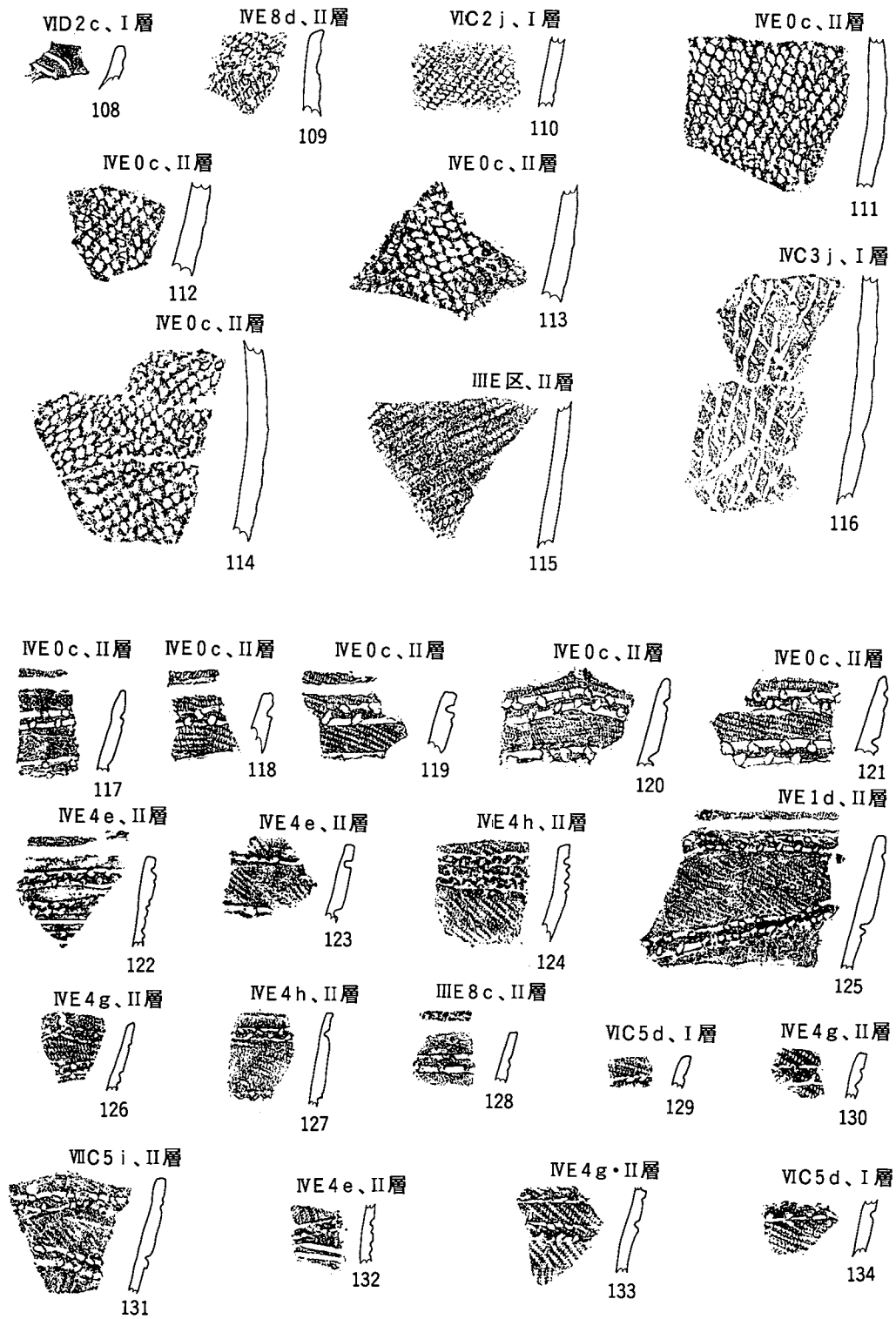


—・[2.5]・(10.0) VII E f、I層

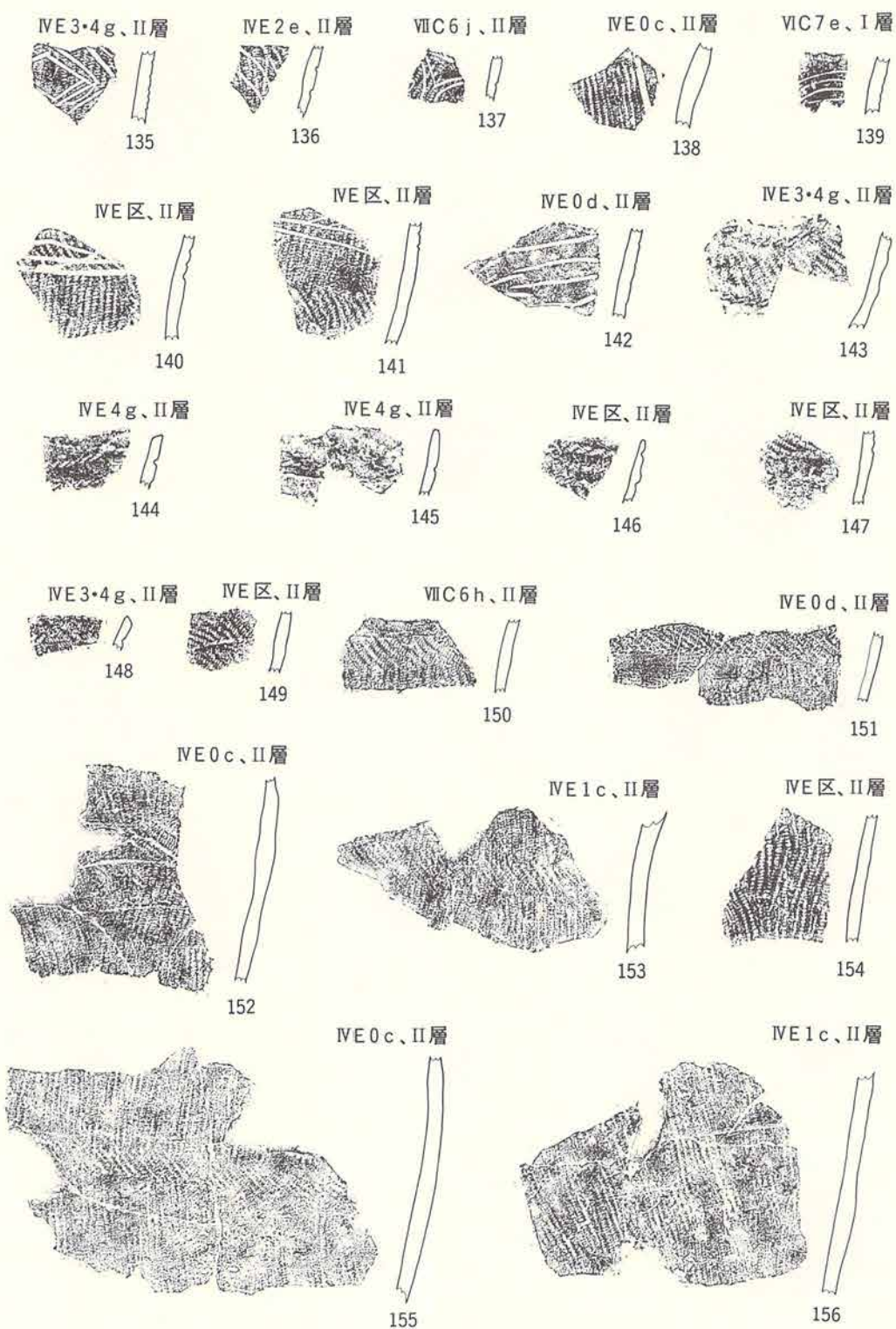


※左肩の数字は法量を表す。口径・器高・底径の順、単位cm
()は推定値、[]は残存値。

第50図 遺構外出土遺物 土器 1



第51圖 遺構外出土遺物 土器 2



第52図 遺構外出土遺物 土器 3

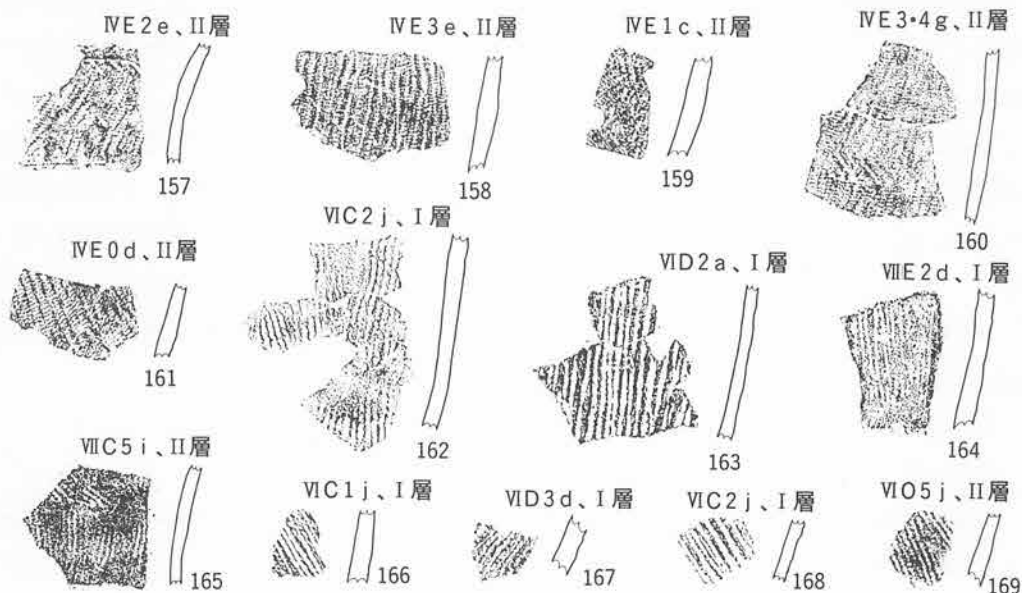
117~169の拓本で掲載した破片の文様は4つに大別できる。交互刺突文を持つもの(117~134)、沈線が施されているもの(135~142)、RLrの0段多条による原体圧痕文が見られるもの(143~148)、捺糸文のみの施文が見られるもの(152~169)に分けられる。

117~131は口縁部、132~134は体部の破片である。132~134は体部破片であるが、口縁部付近のものと思われる。101や102と同様の交互刺突文が1条から3条見られる。刺突は器面に対し斜めに突かれるが、126のみは器面に対しほぼ垂直に軽く突かれている。123・126・127・129を除く口縁部破片の口唇部にも捺糸文の施文が見られる。118~121は同一個体の破片と思われる。

沈線が施されている135~142はいずれも体部破片である。135は菱形を、140~142は平行と山形をモチーフにした沈線が施されている。136~139には2~4条の直線ないし曲線の沈線が見られる。139・142には地文が見られないが、他は捺糸文を施文した後に沈線文様を施している。140・142には煤が付着している。

原体圧痕文が見られる破片は143・147が体部破片、他は口縁部破片である。口縁部破片には2~3条の原体圧痕が見られ、143の体部破片には原体圧痕の間が回転押捺による施文がなされている。また、149~150は原体圧痕はないが、0段多条による施文と思われる。

捺糸文による施文は縦位または斜位で、回転の方向を変えることによって、文様の流れを縦や斜めにしている。いずれも体部破片である。162~169は南尾根またはその南端緩斜面からの出土である。



第53図 遺構外出土遺物 土器 4

c、古代の土器

須恵器（第 54～56 図、写真図版 54・55 170～192）

坏形土器

173 は底部片で、外面に回転糸切痕をもち、1 本の刻線がみられる。180、183 は口縁部片である。183 は還元焰焼成不足でやや灰褐色帯びている。

甕形土器

170 は口縁部から体部上半にかけてのものである。口縁部上位に細沈線を伴う稜線を巡らせている。内面に青海波文の当て具痕、外面に平行叩き目文が残るが、口縁部から肩部にかけてのロクロ調整により、体部上半圧痕は消失している。172 は同一個体の体部片と思われる。

171 は口縁部片、175～176 は体部片で同一個体のものである。外面は縦方向の平行叩き目文、内面には青海波文の当て具痕をもつ。口縁部は外反し、口唇部が下方にのびる形をなす。口縁部はロクロナデ調整である。外面に一部叩き目痕が残る。肩部内面には輪積み痕がみられる。器壁の厚さは 5～6 mm と薄い。器肉内面は褐色を帯びており、還元焰焼成が不足している。器面の色調は青灰色である。

174 は外面に平行叩き目文をもち、内面をナデで調整されている体部片である。外面に自然釉がみられる。178 は体部外面にヨコ方向の平行叩き目文をもつ底部片である。内面及び底部外面はヘラナデ調整されている。

壺形土器

179 はロクロ調整されている体部片で、外面に自然釉がみられる。181・184 はロクロで調整されている体部片である。181 は外面に輪積み痕を残す。182 はロクロ調整されている頸部から肩部にかけてのものである。185 は口唇部が上下にひきだされているロクロ調整の口縁部片である。186 はロクロ調整後、外面をヘラケズリしている底部片である。

187 は頸部下端に凸帯が巡る頸部から肩部にかけてのものである。色調は灰褐色で還元焰焼成不足である。188・189 は肩部から体部上半にかけてのものである。内外面のロクロ痕が顕著である。189 は外面に自然釉がみられる。また、直径 5 cm の孔が肩部に二次的にあけられている。

190 は長頸壺の口縁部片である。191 は端部下方にひきだされた形をなす口縁部片である。192 はロクロ調整後、タテ方向のヘラケズリがなされている体部片である。

土師器（第 56・57 図、写真図版 56・57 193～228）

坏形土器

194・222・223 はロクロ未使用のものである。194 は丸底気味の平底で、体部が底部から内湾しながら立ち上がり口縁部が外傾している。外面の磨耗は著しい。外面はヘラケズリ後、上半

部にヘラミガキ調整がなされている。明瞭な段、稜はみられない。内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。222・223 は体部外面に段をもち、内面に区切りをもつ体部片である。外面は段より上位をヨコナデ、下位をヘラケズリで調整されている。内面はヘラミガキ後、黒色処理されている。

193・195・198～201・204～220 はロクロ使用のものである。193 はロクロから底部を回転糸切りで切り離れた後、体部下端を手持ヘラケズリで再調整されている。内面はヨコ方向のヘラミガキ後、黒色処理が施されている。器形は底部から内湾しながら立ち上がり口縁部がやや外傾するものである。195 は体部片で上端と下端にロクロ痕が残っている。内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。

198～201・207・209・210・218～220 はロクロ調整後、内面をヘラミガキし黒色処理が施されている口縁部片である。210・220 は二次的の火熱を受けて黒色が消失している。器形は内湾しながら立ち上がるものが多いが、200・220 は口唇部近くで外反している。

208 は内外面をヘラミガキ後、黒色処理されている口縁部片である。

204・205・211～214・217 は底部片である。これらはロクロ調整後、内面をヘラミガキし黒色処理をしているが、外面の調整からロクロから切り離した後、体部下端及び底面を回転ヘラケズリで再調整されているもの204、更にヘラミガキで底部を再調整しているもの205・213、回転糸切り無調整のもの211・212・214・217に分かれる。

高台付坏形土器

196・197・215・216 の4点が出土している。215 は高台のみで、そのほかは体部上半、高台下端が欠損している。坏部が残存する3点は、いずれもロクロ調整後、内面をヘラミガキし黒色処理されているが、ミガキの方向が異なる。196・197 は体部がヨコ方向、底面が中心に向かう放射状に施され、216 はヨコ方向のみでヘラミガキ調整が行われている。197 の底部内面中央は凸状をなす。

椀形土器

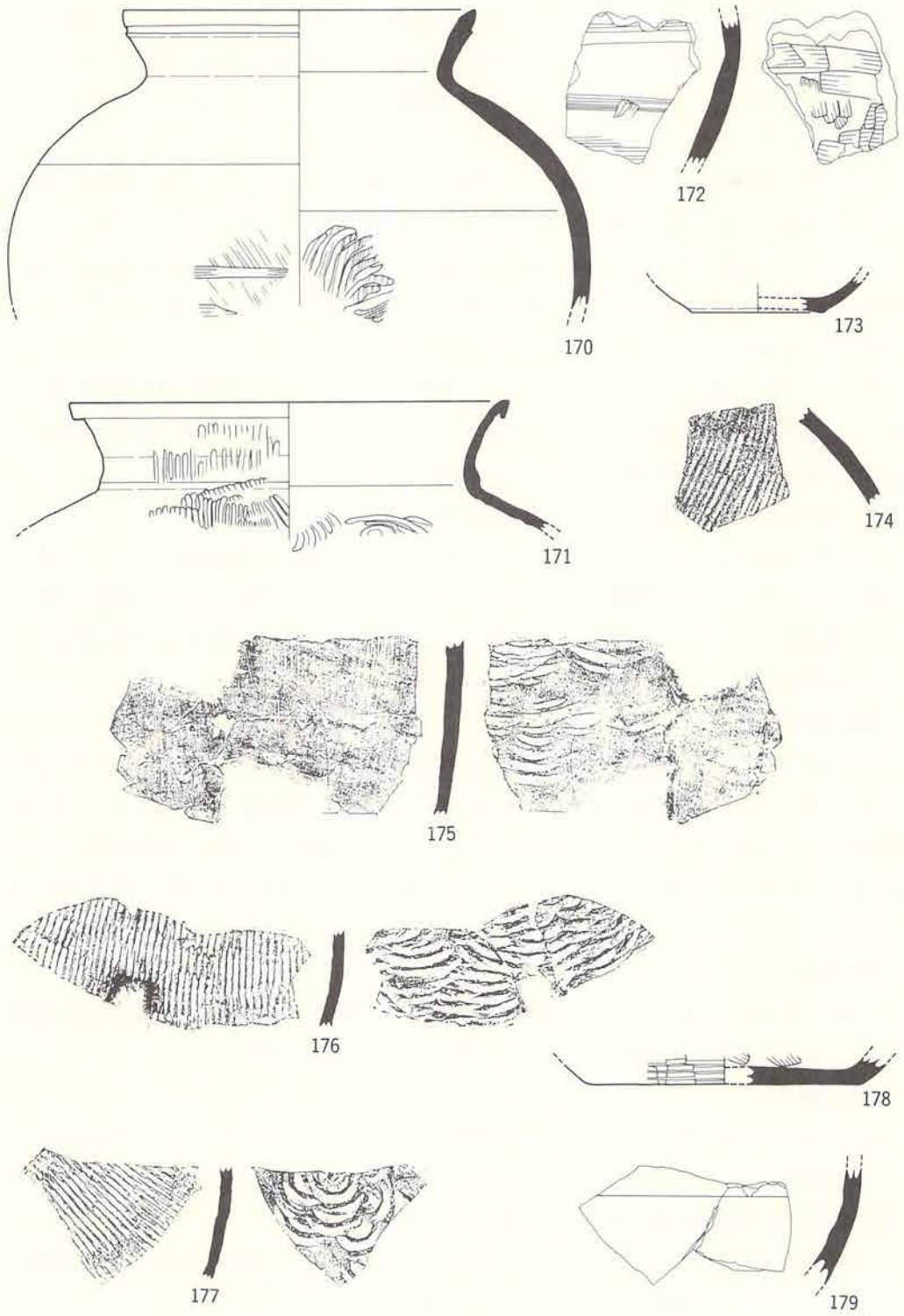
224 は体部上半を欠損している。内面はヘラミガキ後、黒色処理が施されている。外面は磨耗が激しいが、ヘラケズリで調整されている。胎土中に雲母を多く含む。

甕形土器

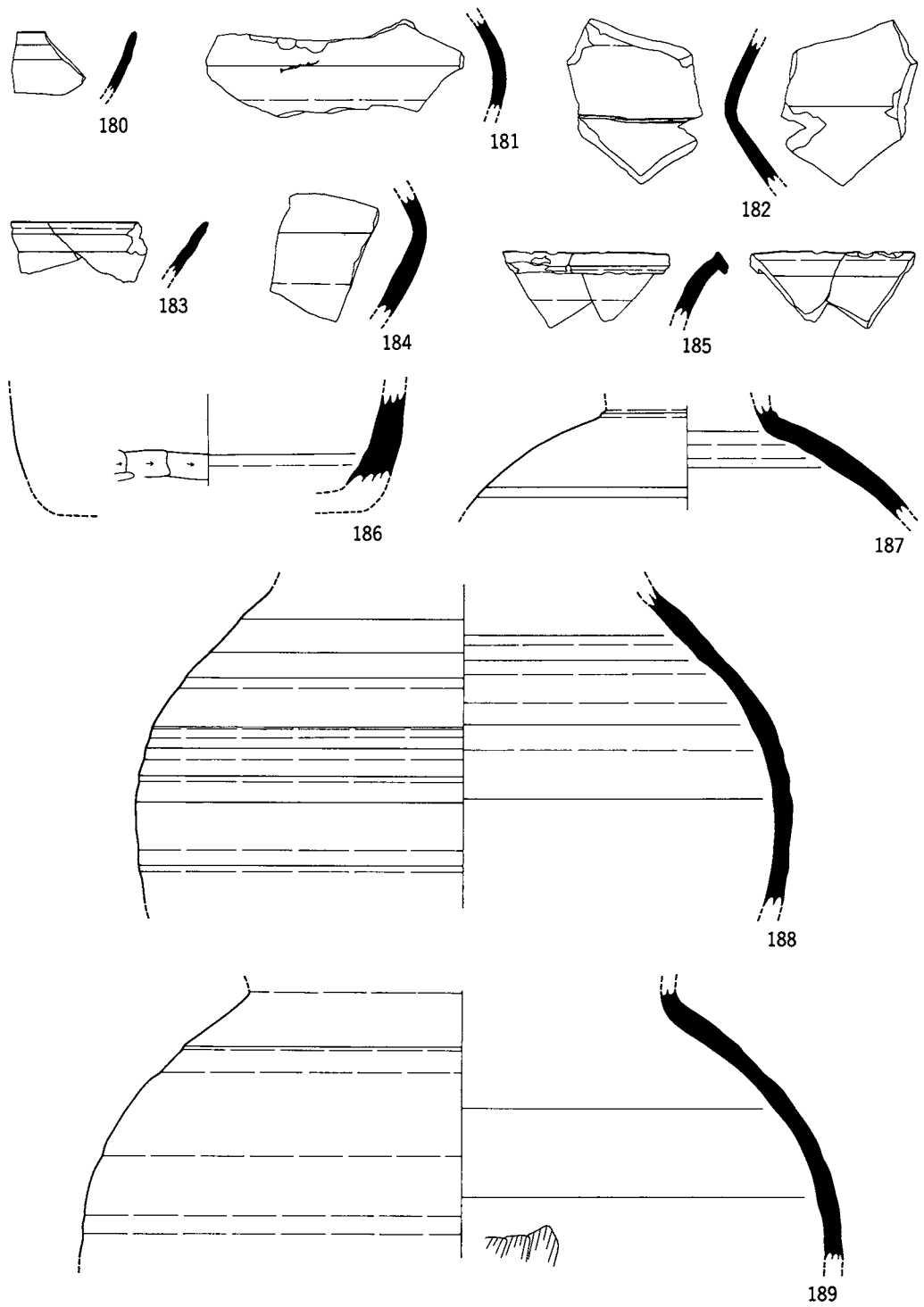
226 は口縁部が短く外反しているロクロ未使用の破片である。内面はヘラナデ、外面はヘラケズリで調整されている。225・227・278 はロクロ未使用の底部片で、225 には木葉圧痕がある。

酸化焰焼成の須恵器（須恵系土器：赤焼土器）

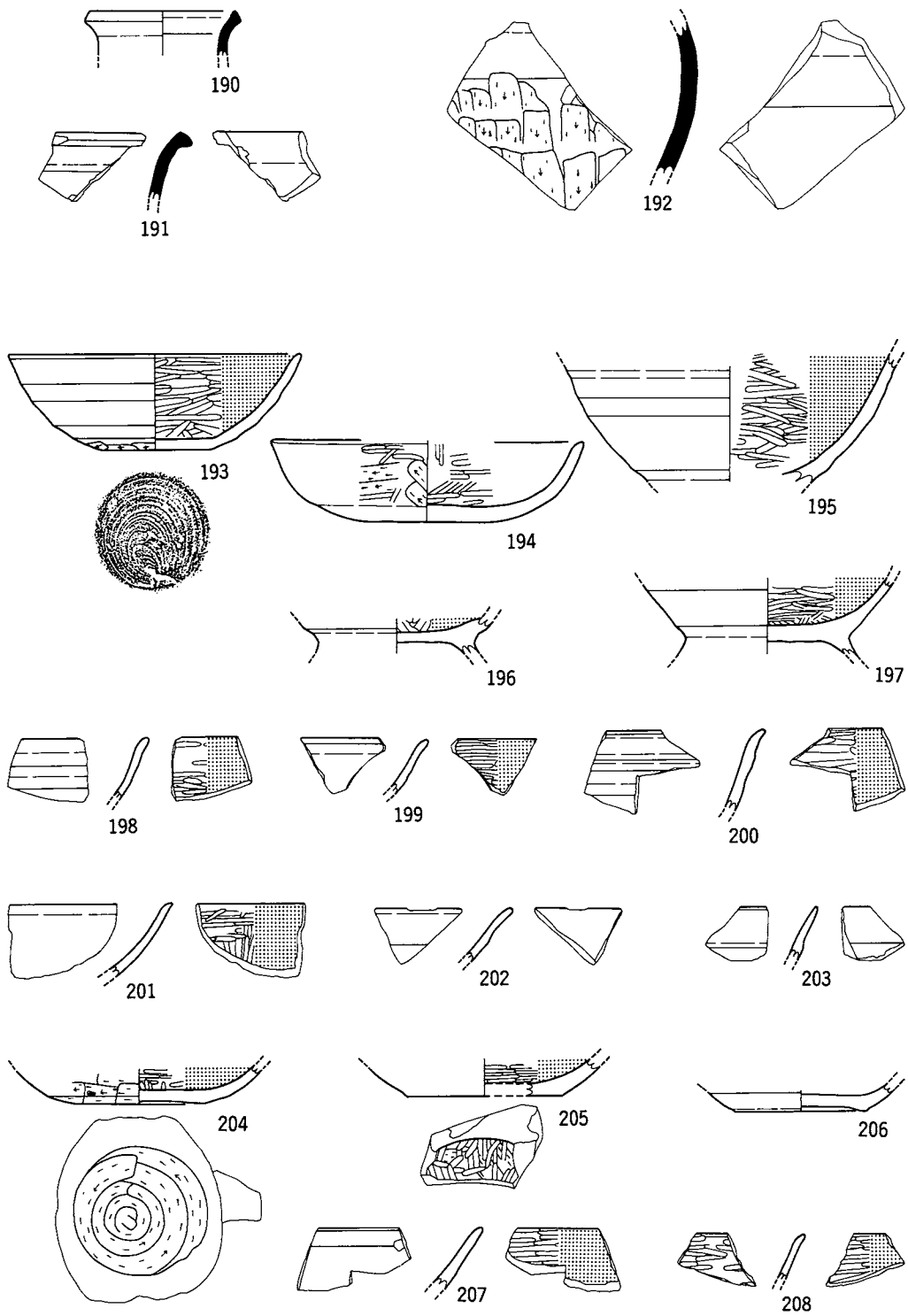
坏形土器の破片6点出土している。202・203 は口縁部片、221 は体部片、206・211 は底部片である。底部2点とも回転糸切り痕をもつ。再調整はない。



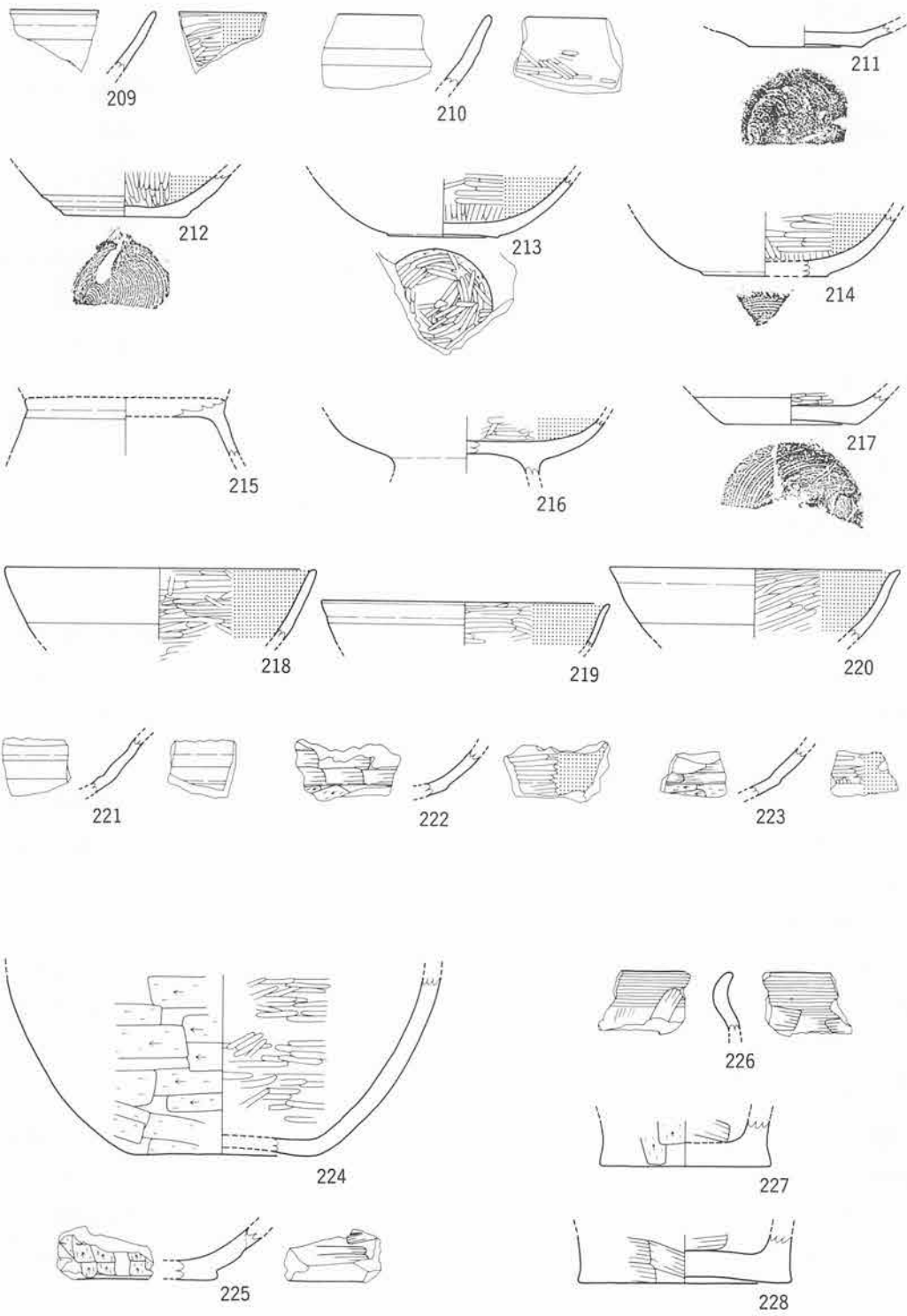
第54図 遺構外出土遺物 土器 5



第55図 遺構外出土遺物 土器 6



第56图 遺構外出土遺物 土器 7



第57図 遺構外出土遺物 土器 8

2. 石器

剥片石器 (第 58 図、写真図版 58 229~236)

いずれも剥片石器のみで、9 点出土している。229 は平基無茎式の石鏃で、剥離調整は両面とも縁辺部にのみ施されている。230 は縦型石匙で、表面は全面加工、裏面は形状を整えるための加工が一部に施されている。231 は両面加工され、先端の断面形はやや扁平な菱形を呈する。石錐と思われる。232~234 は縁辺に連続する 2 次剥離調整を行って刃部を作り出している。2 次剥離は 232 が表裏面とも縁辺に、233 は表面の全面と裏面の縁辺に、234 は裏面の縁辺に施されている。刃部の角度は 232・233 が小さく、234 は大きい。235~237 は縁辺に微細な剥離痕ないしは微細な凹凸の認められるものである。235・236 は一部に、237 はほぼ全周に見られる。それらの縁辺の角度はいずれも小さい。

その他に、北尾根の南東斜面である IVE 区の II 層から基部が逆 T 字形をなすアメリカ式石鏃 1 点と無茎式の石鏃 2 点が出土している。

3. 金属器類・その他

a、刀子 (第 59 図、写真図版 58 238)

1 点の出土で、北尾根の南東側斜面上の IVE1c グリッドの黒褐色土層からの出土である。全長 13.0 cm、刀身 7.8 cm、元幅 1.4 cm、棟の厚さ 4 mm である。柄の部分や鞘の一部と思われる木質が若干付着する。

b、キセル (第 59 図、写真図版 58 239・240)

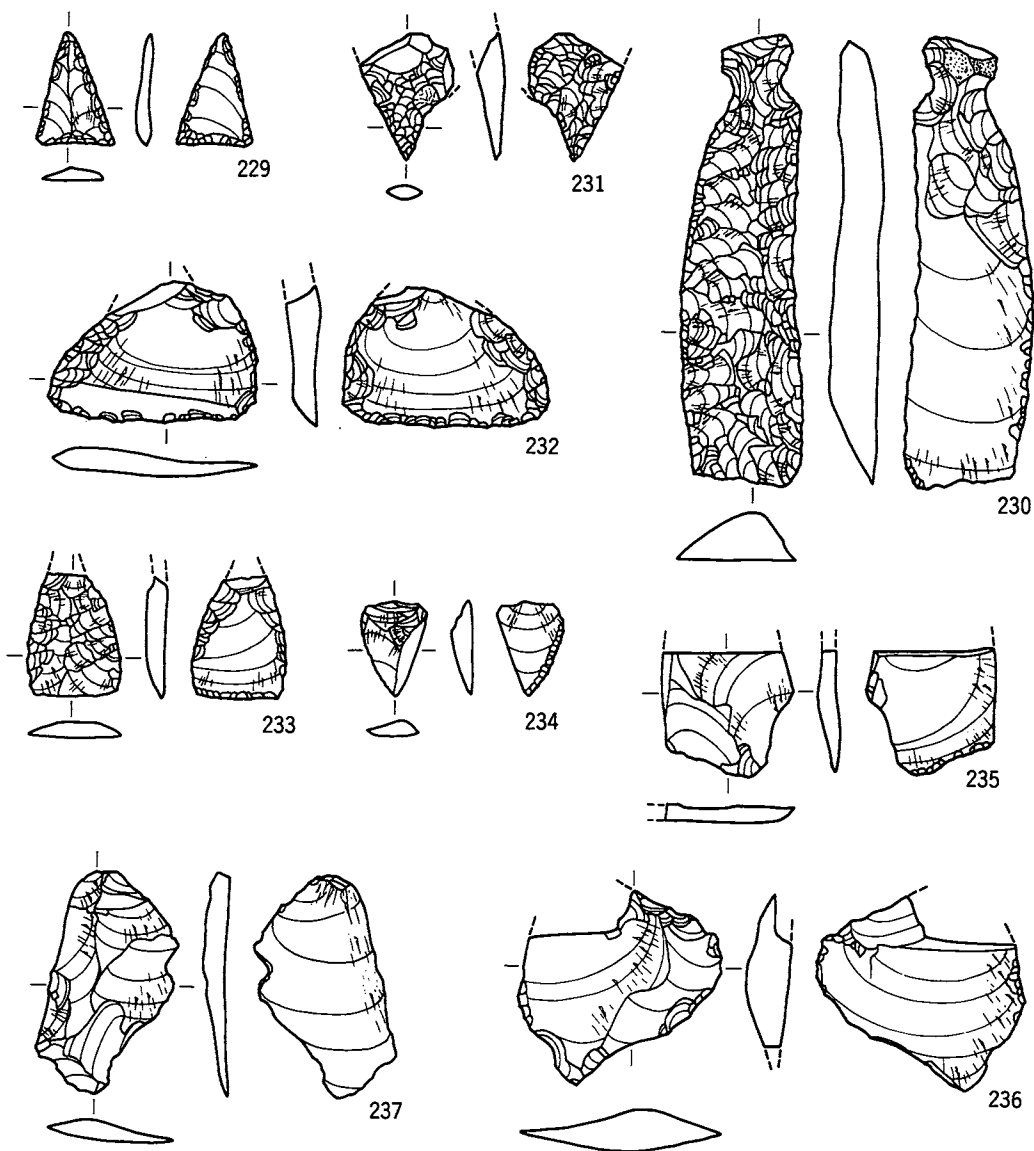
2 点出土している。239 は南尾根頂部付近の VI D2b グリッドから、240 は南尾根から南東に延びる馬背状尾根の VII E0b グリッドからの出土である。雁首のみで、吸い口は発見されていない。240 は 239 に比べ首の部分がくびれている。

c、鏃状鉄製品 (第 59 図、写真図版 58 241)

北尾根の南東斜面上の III E 区黒褐色土層からの出土である。上部が欠損しているが、茎から鏃身にかかると思われる部分が左右に開かれており、雁股の可能性が考えられる。残存部の全長は 68 mm、茎の長さ 57 mm、最大幅 7 mm、最大厚 8 mm である。

d、釘状鉄製品 (第 59・60 図、写真図版 58・59 242~269)

遺構外から 28 点出土している。うち 20 点が北尾根の南東斜面上の III E・IVE 区から、他は南尾根からの出土である。出土層位は I 層ないし II 層である。湾曲や屈曲しているもの、あるいはねじれているものが大半である。また、半数以上の 16 本が欠損品である。完形品の長さは 8.0~13.5 cm で、9 cm 弱と 12 cm 前後のものが多い。断面形はすべて角状で、幅及び厚さは 6~8 mm のものが多い。



第58図 遺構外出土遺物 石器

表4 石器計測一覧表

図版-番号	器 種	出土地点	層位	法 量				石 質	産 地
				長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)		
第58図-229	石鏃	VIIc-5j	II層	22.2	14.9	2.7	0.7	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地 新第三系
第58図 230	石匙	IVE-0e	II層	90.3	23.9	10.2	23.7	珪質泥岩	〃 〃
第58図 231	石鏃	VIIc-6j	II層	25.1	18.6	5.6	1.6	〃	〃 〃
第58図 232	削片	IIIe-5c	II層	28.2	41.7	6.5	7.7	〃	〃 〃
第58図 233	〃	IVE-0f	II層	25.1	18.7	4.6	2.1	凝灰質珪質泥岩	〃 〃
第58図 234	〃	VIIc-5i	II層	18.7	13.5	4.0	0.8	チャート質、粘板岩	北上山地 古生界
第58図 235	微細な剝離痕のある剝片	IIIe-7d	II層	24.3	26.2	4.2	3.0	珪質泥岩	奥羽山地 新第三系
第58図 236	〃	IIIe-5f	II層	39.3	40.7	8.9	9.8	チャート質、粘板岩	北上山地 古生界
第58図 237	〃	VIIc-5f	II層	43.6	29.0	4.3	3.6	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地 新第三系

表5 遺構外出土釘状鉄製品一覧表

図版-番号	出土地点	層位	全長(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	備考	図版-番号	出土地点	層位	全長(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	備考
第59図-242	ⅢE-8d	Ⅱ層	58	6.0	5.0	欠損	第60図-256	ⅣE-0c	Ⅱ層	120	6.0	6.0	
第59図-243	ⅢE-8e	Ⅱ層	102	8.0	6.0		第60図-257	ⅣE-2d	Ⅱ層	134	9.0	8.0	
第59図-244	ⅢE-8e	Ⅱ層	61	6.0	6.0	欠損	第60図-258	ⅣE-1e	Ⅱ層	89	6.5	6.5	
第59図-245	ⅢE-8e	Ⅱ層	74	8.0	7.5	欠損	第60図-259	ⅣE-2e	Ⅱ層	67	6.0	7.0	欠損
第59図-246	ⅢE区	Ⅱ層	57	8.0	8.5	欠損	第60図-260	ⅣE区	Ⅱ層	85	6.0	6.0	
第59図-247	ⅢE区	Ⅱ層	95	7.5	8.5	欠損	第60図-261	ⅣE-2e	Ⅱ層	30	6.5	6.0	欠損
第59図-248	ⅢE区	Ⅰ層	66	6.0	5.5	欠損	第60図-262	VIC-7d	Ⅰ層	32	5.5	4.0	欠損
第59図-249	ⅢE-8c	Ⅱ層	135	9.0	6.0		第60図-263	VIC-7e	Ⅱ層	47	5.5	6.0	欠損
第59図-250	ⅣE-1c	Ⅱ層	74	5.5	4.5	先端部欠損	第60図-264	VIC-7e	Ⅱ層	56	6.0	7.0	欠損
第59図-251	ⅣE-1d	Ⅱ層	83	9.5	8.0	先端部欠損	第60図-265	VIC-7e	Ⅱ層	85	11.0	9.5	
第59図-252	ⅣE-0c	Ⅰ層	37	6.0	8.0	欠損	第60図-266	VIC-6i	Ⅱ層	80	6.0	6.0	
第59図-253	ⅣE-1d	Ⅱ層	58	5.0	6.0	欠損	第60図-267	VID-3c	Ⅰ層	102	6.0	7.0	欠損
第60図-254	ⅣE-0c	Ⅱ層	121	7.0	8.0		第60図-268	VID-4c	Ⅰ層	125	6.5	7.0	
第60図-255	ⅣE-0c	Ⅱ層	129	10.0	8.0		第60図-269	VIE-1b	攪乱	118	8.5	8.0	

※幅・厚さは中央部分での値

e、その他の金属器類 (第61図、写真図版59 270~278)

9点出土している。270~277は鉄器類であるが、278には緑青が付着しており、銅製品と思われる。薄手のもので、溶融した古銭の残片ではないかと思われる。

270・271・274・275は先端部に刃部状のつくりが見られることから工具類と思われる。鑿か手斧の類かもしれない。272・273は下端に刃がついており、完形品ではないが大きさから推定して手鎌の類と思われる。276は鋏み状の基部の残片である。先端部を軸に左右に分かれる形状をなしている。277は断面の形状から刀の残片と思われる。

f、切子玉 (第61図、写真図版59 279)

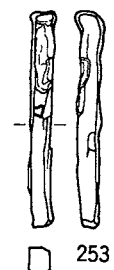
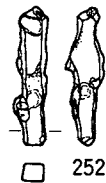
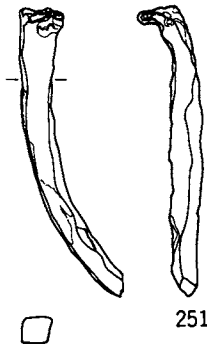
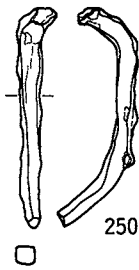
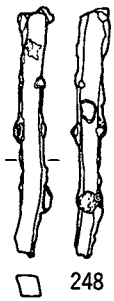
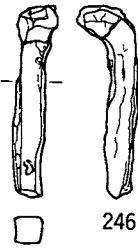
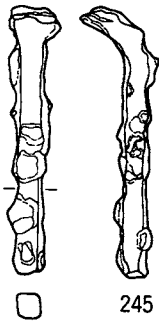
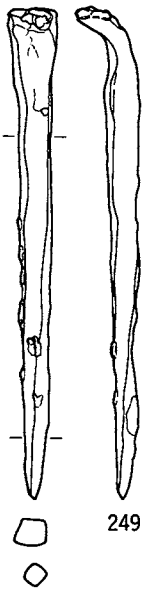
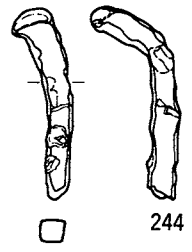
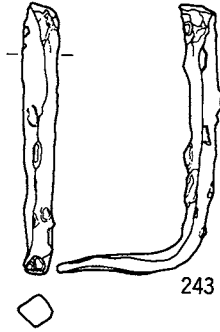
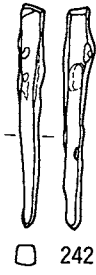
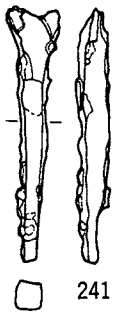
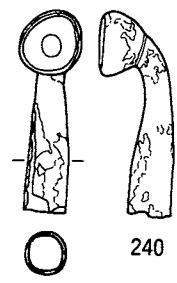
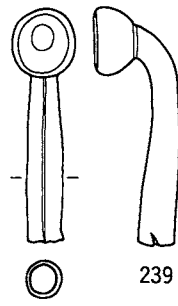
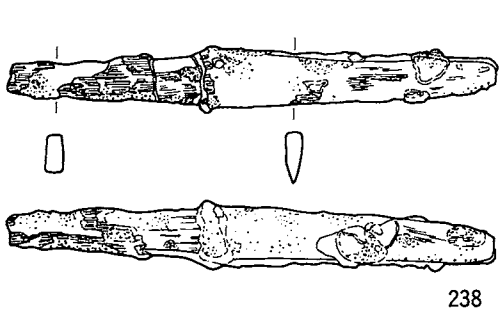
南尾根の南端緩斜面のVII C6hグリッドの黒色土層から1点出土している。水晶製で、長さが17.1mm、最大幅15.8mm、孔径1.8~3.6mm、重さ5.64gである。穿孔は片側から行い、最後の1mm程の部分を実対側から行っている。

g、古銭 (第61図、写真図版59 280・281)

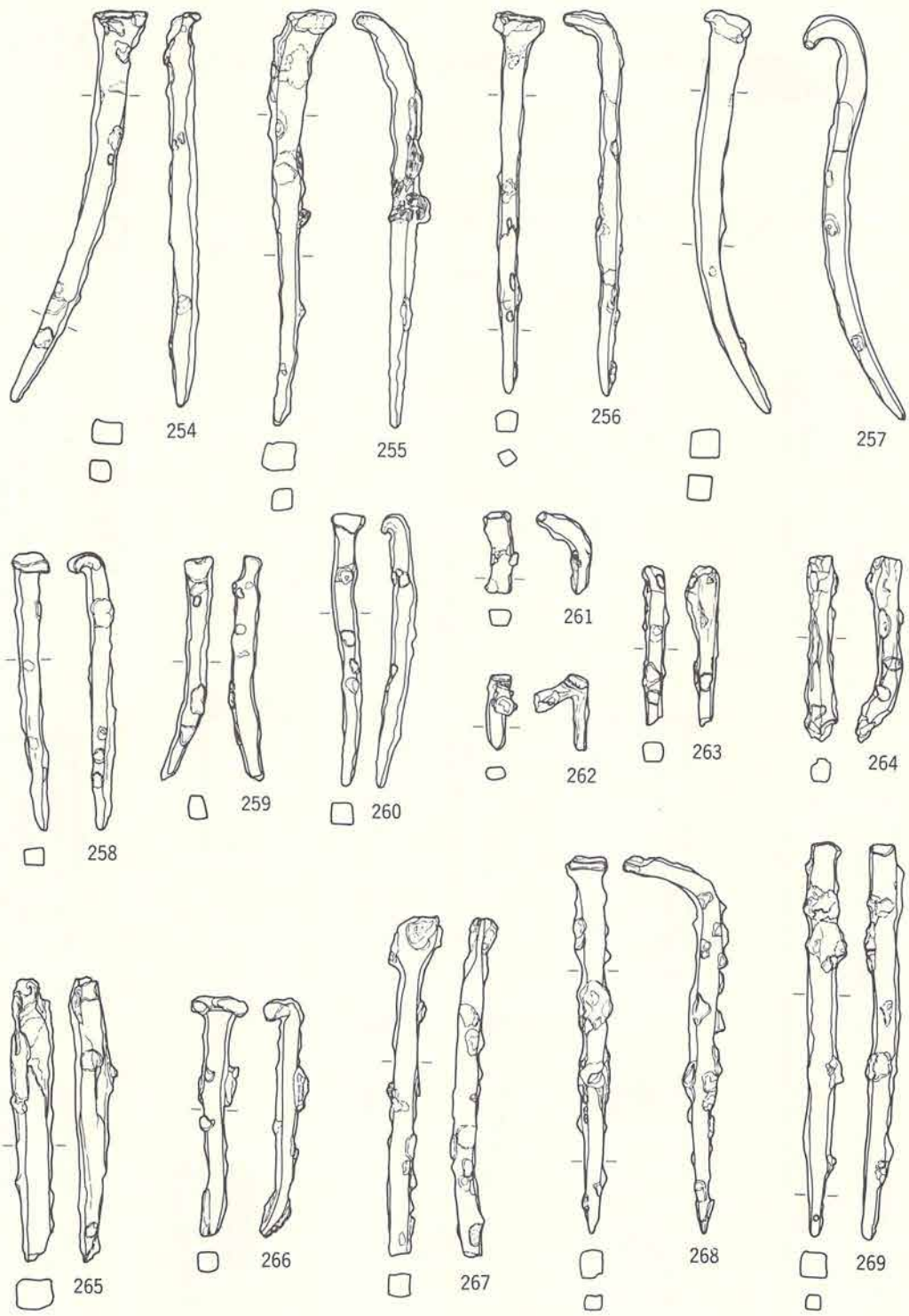
遺構外からは2枚出土している。どちらも南尾根頂部付近の表土層からで、280はグリッドVI D2aから出土の「元祐通宝」、281はVIC0jグリッドからの出土の新「寛永通宝」である。

表6 その他の金属器類一覧表

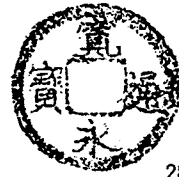
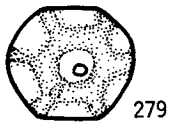
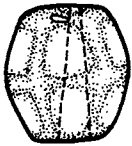
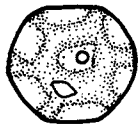
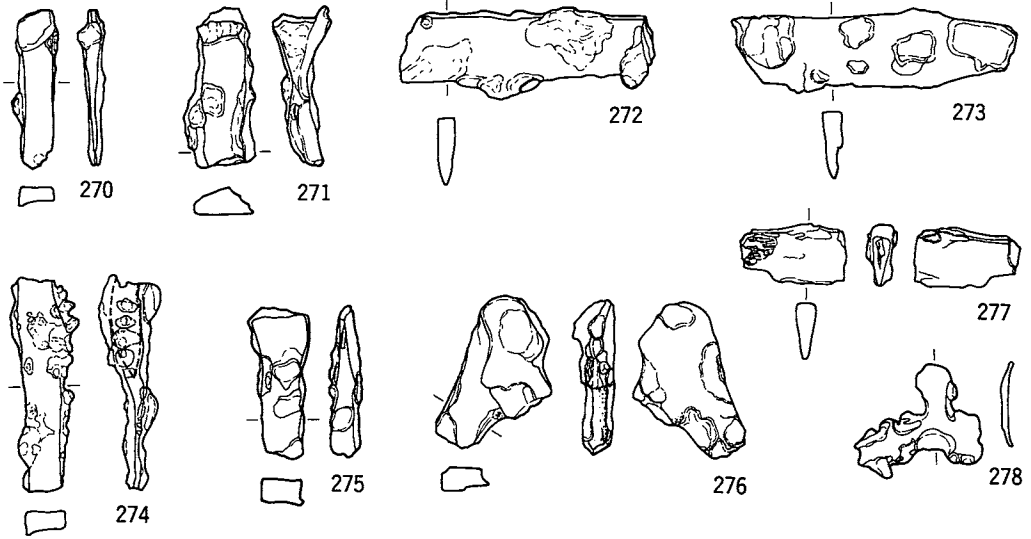
図版-番号	出土地点	層位	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	備考
第61図-270	VIC-7d	Ⅰ層	41.5	11	7	器種不明
第61図-271	VID-2a	Ⅰ層	42	19	15.5	〃
第61図-272	VIC-3g	Ⅲ層	68	19	4.5	手鎌?
第61図-273	VIC-6j	Ⅱ層	75.5	20	5	〃
第61図-274	VIC-7c	Ⅰ層	57	18	17	器種不明
第61図-275	VIC-7c	Ⅰ層	40	16.5	8.5	〃
第61図-276	VIC区	Ⅰ層	41	30.5	11.5	〃
第61図-277	VIC区	Ⅰ層	28	16	5.5	刀?
第61図-278	VID-2a	Ⅰ層	34	23	2	銅製品



第59圖 遺構外出土遺物 金屬器類 1



第60図 遺構外出土遺物 金属器類 2



第61図 遺構外出土遺物 金属器類3・その他

VI まとめと考察

1. 遺構のまとめ

本遺跡では、縄文時代のものと思われる陥し穴から中世の墓墳まで、時代を異にする遺構が検出されたが、主体をなすのは北上川中流域等に多く分布する、所謂末期古墳と呼ばれる一連の古墳である。

(1) 古墳

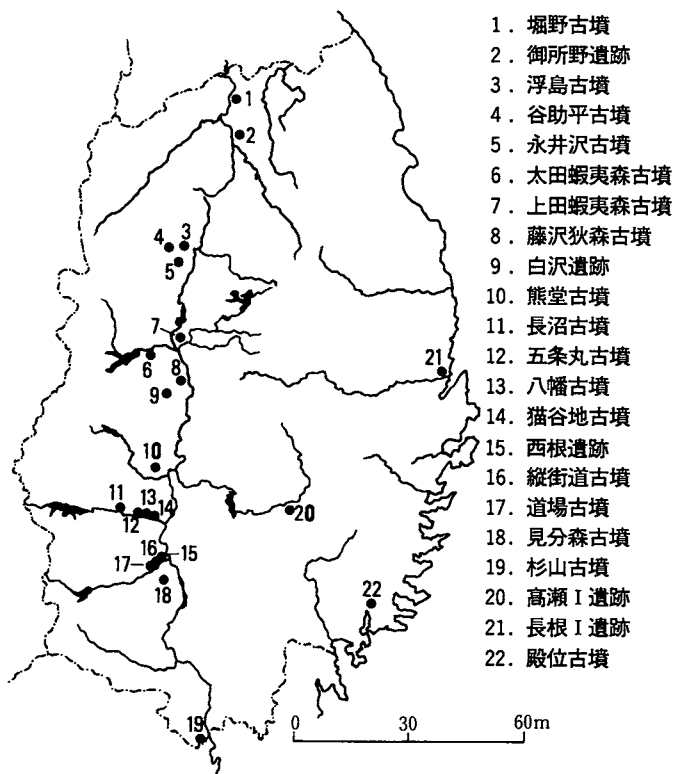
28基発見され、そのうち周滄のみを検出したもの10基、周滄を伴わない土壌のみのもの1基、周滄と主体部を検出したもの17基である。所属時期についての詳細は後述するが、概ね8世紀を中心とする時代である。

本遺跡で古墳とした遺構は、墳丘が検出されていないことや変則的な周滄を持つこと、また、土壌のみのものも古墳としたこと等の問題があるが、基本的な構造や所属時期がこれまで本県等で末期古墳と総称されているものと同様であり、同時代の末期古墳の範疇に含められるものと考えられる。

岩手県で所謂末期古墳が確認されている主な遺跡は北上川流域を中心に多く分布している。北上川流域では支群を加えて20カ所を越え、馬淵川流域で2カ所、北上山地の猿ヶ石川流域で1カ所知られている。沿岸部では、発掘調査が行われた例として大船渡市殿位古墳の範囲確認調査があるが、本遺跡のように20数基まとめて検出されたのは初例である。

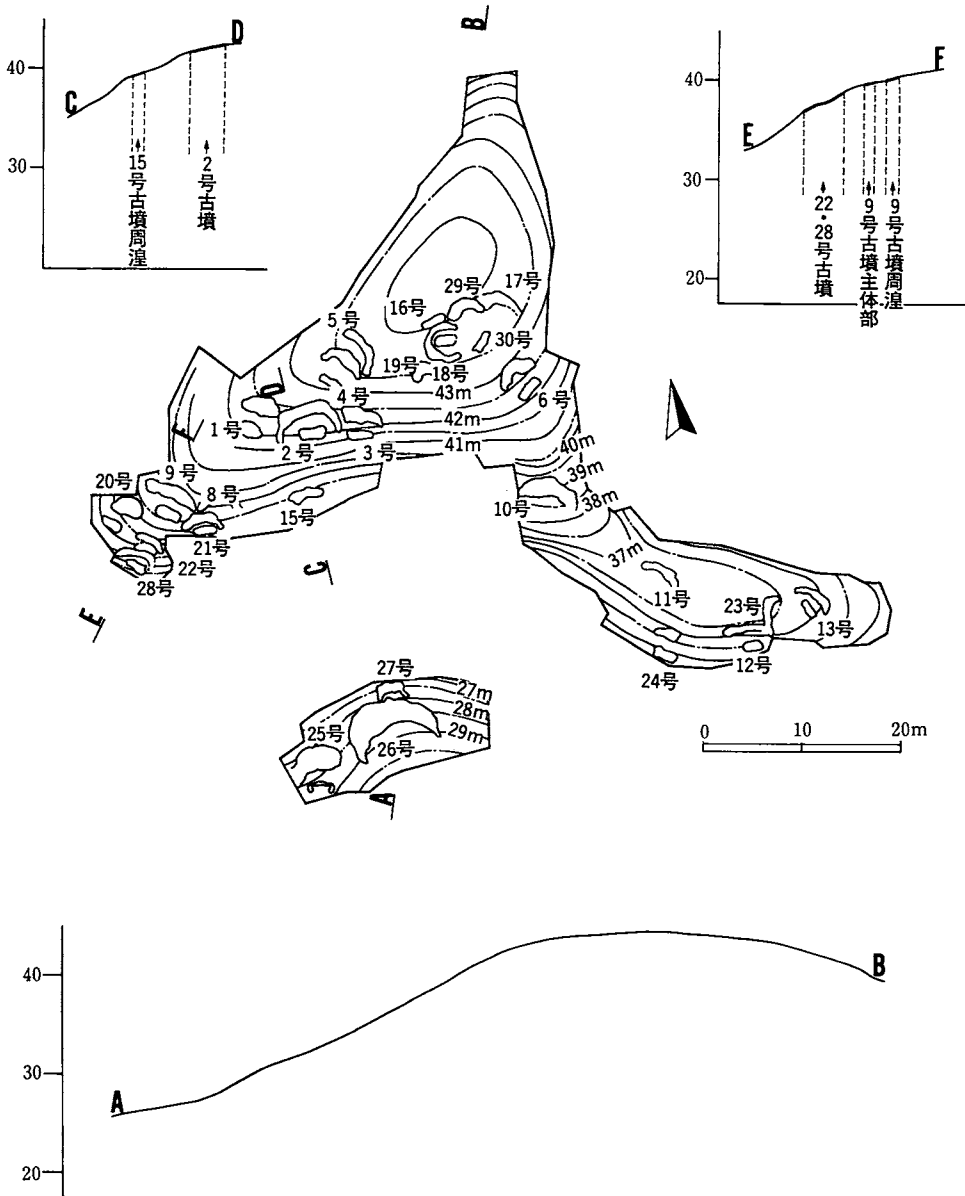
立地上の特徴

本遺跡は太平洋に東流して注ぐ閉伊川左岸の丘陵地に立地し、山地縁辺と低地の間に帯状に広がる丘陵地が閉伊川に向かって張り出



第62図 岩手県内の末期古墳の主な遺跡

す部分に載っている。遺跡の地形は大きく南北の尾根に分けられ、古墳は南尾根から検出されている。南尾根頂部とその南側に広がる低地とは40m近い比高がある。南尾根頂部付近は10度以内の緩斜面であるが、その範囲は狭い。その下方には20度を越す急斜面があり、古墳は緩斜面のみならず急斜面上にも構築されている。構築されている斜面は南西・南・南東向きで、尾根筋を境に南側のみに限られており、北側は利用されていない。



第63図 古墳配置図

北上川流域の古墳群は丘陵や段丘、自然堤防上の平坦面ないしは緩斜面上に立地し、周囲との比高は数 m から 10 数 m のものが大半である。比高の大きい例としては水沢市見分森古墳があり、周囲の低地と約 50 m の比高を持つ独立丘陵上に立地する。しかし、造営時期は平安時代初期とみられ、末期古墳の範疇外とする見解もある。

猿ヶ石川流域の遠野市高瀬 I 遺跡や馬淵川流域の二戸市堀野遺跡、一戸町御所野遺跡の各古墳群も段丘上の平坦面や緩斜面上に立地する。御所野遺跡は周囲の低地との比高が 30 m 前後であり、見晴らしのよい高台に立地するという点では本遺跡に類似する。

このように県内では傾斜角が 20 度を越すような急斜面上に古墳が構築される例はこれまでになく、周囲との比高が 40 m 近くもある例は稀である。

古墳の形態的な特徴

〈主体部の形状〉主体部は 18 期検出されており、平面形はすべて長方形を呈し、箱型に掘り込まれている。そのうち 1 基は仕切り溝のみの検出である。

規模は、開口部の長さ 180～275 cm、幅 60～118 cm、底部の長さ 163～260 cm、幅 50～105 cm である。開口部での長さが 250 cm 以上の大型のものは 6 基、200～249 cm の中型のもの 8 基、200 cm 未満の小型のもの 3 基である。仕切り溝のみを検出した 11 号古墳は中型に属すると思われる。深さは 10～60 cm であり、平面形の規模に関係なく様々である。斜面上のものは上部を流出している可能性が大きく、本来の深さではないと思われる。

主体部の埋土状況から、棺の痕跡を示すと思われるものは 5 基である。2 号・9 号・20 号・21 号・28 号の各古墳で、2 号は棺の片側を、20 号は片側と底部を、他は底部を推測することができる。2 号と 20 号古墳では斜面上方の壁に沿って黄褐色土やにぶい黄褐色土が堆積し、鉛直に分層する線が側面と考えられる。底面の場合は最下部に浅黄色やにぶい黄色等の砂質土が水平に堆積し、その上面がほぼ平坦であることからの推定である。

〈仕切り溝〉1～3 号、6 号、11 号、12 号、16 号、25 号の各古墳で検出している。いずれも細長い溝状を呈し、長軸の底面両端に短軸の壁と平行に掘り込まれているが、短軸の壁に接するものと若干内側に位置するものがある。2・3・6 号古墳は両方とも内側に、1・16・25 号古墳は一方が内側で他方が接し、12 号古墳は両方とも壁に接している。11 号古墳は仕切り溝のみの検出であり、壁との位置関係は不明である。規模は概ね長さ 50～70 cm、幅 15～30 cm、深さ数 cm から 20 数 cm である。

このような遺構の類例は少なく、県内では玉山村の永井沢古墳²¹⁾、青森県では近年調査された八戸市丹後平古墳や下田町阿光坊遺跡で検出されている。

仕切り溝と仮称した理由は川原石積み等の石室を持つ古墳の仕切り石と短軸に平行する点で類似していることや形状が幅の狭い長方形を呈していることから小穴等よりも溝とした方が

遺構のイメージを捉え易いためである。仕切り溝の性格については不明である。

〈長軸の方向〉18基のうち15基が等高線にほぼ平行する。等高線に対して直交するものはなく、斜交するものは13号・25号・27号の各古墳で、等高線とはそれぞれ大凡70度・30度・30度の角度を持つ。25号古墳の場合は主体部が緩斜面にあるため、斜交する感はない。13号古墳も非常に緩やかな斜面上にある。また、周湟が主体部の斜面下方にあり、本遺跡の中では例外的な形態の古墳である。被葬者を水平に埋葬する場合には長軸の方向は等高線に平行する方が安定性がよかったと思われ、若干の例外を除いて、長軸の方向は地形の制約を受けて決められたと考えられる。

〈頭位〉副葬品の出土地点や出土状態から頭位を類推できる古墳がある。

刀は、藤手刀が6号古墳から、直刀が9号古墳から、太刀が27号古墳^(注2)から、立鼓刀が28号古墳からそれぞれ出土している。これらはいずれも柄を東寄りの方向に、刀身を西寄りの方向にして副葬されていたものである。また、ガラス玉は2号と16号古墳から出土し、どちらも主体部の中央から東に寄った埋土ないし底面直上からである。東寄りの中でも南壁側からのものが多い。釧は直刀と同じ9号古墳から出土し、主体部の中央から東に寄った埋土中から検出された。

これらの副葬品が出土した6号・9号・16号・27号・28号古墳の被葬者の頭位は、いずれも東寄りと推定される。

〈周湟の形状〉周湟の平面形は基本的には円弧状を呈するが、比較的整った円弧をなすもの、直線的でその両端が若干湾曲するもの、不整な円弧状のもの等様々である。

弧の円周に対する割合は、中心角が大凡70～280度であり、中心角が120度前後、すなわち3分の1周程度巡るものが11基と最も多い。100度以下は7基で、そのうち2基は弧の端部を他の遺構に切られており、残存部での測定である。145度から180度の5分の2周から半周程度のは8基で、半周を大きく越えるものは18号古墳の1基だけである。18号古墳は中心角約280度、ほぼ4分の3周である。

末期古墳の周湟は馬蹄形や「い」字状、あるいは全周するものが多く、本遺跡のように検出された周湟の大半が4分の1周から2分の1周程度という例は県内では初めてである。

〈周湟の規模〉周湟の長さは最短が2.5m、最長が12.5mで、4m台から5m台のものが約半数の14基である。幅は、最小50cm、最大330cmで、50cmから100cm未満が12基、100cmから150cm未満が10基、それ以上が5基である。深さは最小のものが15cm、最大のものが75cmで、20cmから40cmのものが16基と多く、60cmを越す比較的深い周湟は5基である。ただし、斜面上にあるため、崩落や上部を流出しているものも多いと思われる。

内径は推定であるが最小2.0m、最大8.0mである。3.5m未満のものが8基、3.5m以上5

m未満もの14基、5m以上のもの5基である。古墳の規模としては、県内の末期古墳の中では小型である。

〈周湟の位置〉周湟は主体部あるいは弧の中心から見て13号と30号古墳の2基を除き、いずれも斜面の上方側を巡る。本遺跡では斜面上に古墳が構築されているので、斜面下方側の周湟が流出している可能性も考慮して調査を進めたが、非常に緩やかな斜面上の古墳でも18号古墳を除き、主体部の両側に周湟が巡る例がなく、構築時点から片側にのみ掘り込んだ可能性が大きいと思われる。

〈墳丘〉墳丘が検出された古墳はない。墳丘が本来なかったのか、流出したのかは不明である。しかし、狭い尾根筋上や斜面上に構築されている状況からは、流出した可能性の方が高いと思われる。

以上のようなことから古墳の形態的な特徴は以下のように要約される。

- ・主体部の形状はすべて土壇形であり、石積み等の石室を持つ例はない。
- ・主体部の長軸方向の底面両端に、長軸と直交する細長い溝状の掘り込み（仕切り溝と仮称）を持つ例は8基である。
- ・主体部長軸の方向は大半が等高線に平行し、方角は一定しない。
- ・頭位は副葬品の出土状況から東寄りと推定される。
- ・周湟の平面形は基本的に円弧状を呈して全周するものがなく、多くは2分の1周から4分の1周程度巡る。
- ・周湟の規模は一様ではない。
- ・周湟は主体部及び弧の中心部から見て、2基を除いていずれも斜面の上方を巡る。
- ・墳丘を検出できたものはない。

重複関係

古墳相互で重複関係にあるものは22号と28号古墳、23号と12号古墳、26号と27号古墳である。切り合い関係からはいずれも前者が古く、出土遺物による矛盾も生じていない。

古墳と比較的所属時期が接近する方形周溝との関係では、8号古墳と31号方形周溝、19号・30号古墳と32号方形周溝が重複する。8号古墳は31号方形周溝に切られており、それにより古い。19号・30号古墳と32号方形周溝では埋土がきわめて類似しており、明確な新旧関係は不明である。

注1) 草間俊一氏の教示による。

注2) 9号古墳出土の直刀と27号古墳出土の太刀は本来大刀とすべきものと思われるが、形態の違いが認められ、その違いを明確にするために本稿ではこのような名称を用いた。

表7 古墳一覽表

	周 濠				主 体 部							出 土 遺 物		備 考
	指定内径 (m)	幅 (cm)	深 さ (cm)	長 さ (m)	開口部(cm)		底 部(cm)		深 さ(cm)			主 体 部	周 濠	
					長 さ	幅	長 さ	幅	上 方 壁	中 央	下 方 壁			
1号古墳	4.4	160	20	3.9	275	85	235	64	17					仕切り溝有
2号	5.8	130	52	9.8	265	95	252	70	42	32	16	ガラス玉28		〃
3号	4.4	125	40	4.4	260	83	250	75	26	10	0		土師器坏2	〃
4号	4.5	88	30	5.7	(220)	82	(210)	70	数cm					
5号	5.0	82	50	5.9										
6号	4.0	110	60	5.1	254	92	236	78	20	13	7	麻手刀1 刃先1	土師器坏1	仕切り溝有
7号														欠 番
8号	4.0	75	24	4.4										
9号	5.5	120	70	6.2	262	118	213	72	50	38	24	直刀1 錫製削1	土師器坏破片	
10号	4.0	175	62	5.8										
11号	4.8	105	52	5.9			(200)	(75)						仕切り溝有
12号	4.2	60	28	5.4	193	83	175	68	30	15	14	小刀1		〃
13号	3.6	85	42	3.6	180	60	170	50	20	15	12		須惠器坏破片	
14号														欠 番
15号	3.0	115	40	3.4										
16号					242	70	230	60	25			小刀1 ガラス玉類193		仕切り溝有
17号	3.0	90	25	4.4									土師器坏破片	
18号	2.8	120	22	8.7	230	105	230	100	数cm			刃先2		
19号	2.5	126	37	2.7										
20号	3.7	200	54	3.4	238	90	202	66	43	34	26		須惠器瑠・土師器坏破片	
21号	3.5	90	20	4.7	240	75	196	54	74	58	38			
22号	3.3	80	20	3.7	224	100	163	66	65	60	数cm	和同開珎1 器種不明鉄製品1	土師器坏破片	
23号	4.0	70	40	3.7										
24号	3.5	90	26	2.5	210	(100)	180	(90)	30	10	0			
25号	5.0	260	66	5.7	260	(115)	260	(105)	24	16	0		鉄鏡1 土師器高坏1 坏破片・須惠器坏・瓊破片	仕切り溝有
26号	8.0	330	75	12.5									須惠器坏1・坏破片	
27号	3.0	100	35	4.1	(140)	(85)	(140)	(80)	数cm			太刀1		
28号	3.5	50	15	4.8	224	93	200	56	66	50	数cm	立鼓刀1		
29号	2.0	100	30	4.5										
30号	2.5	70	36	2.6										

(2) 方形周溝

31号・32号方形周溝の2基が検出されており、形状や規模は両者で異なっている。

31号方形周溝は、東辺と西辺が北辺に比べて短く、東辺・西辺の斜面下方部や南辺は検出されていない。本来なかったものか、流出したものは不明であるが、東辺・西辺の端部は立ち上がっており、その部分で一度途切れることは確実である。溝幅は60cmから140cmで最小と最大の開きが大きく、深さも底面に凹凸が多く一定ではない。

32号方形周溝は、東辺は検出されていないが、本遺構は非常に緩やかな斜面上にあるため、東辺のみ流出することは考えられず、当初から存在しないものと思われる。南辺の溝幅は40cm前後と狭く、北辺・西辺の幅は70cm前後でほぼ一定している。深さは20cmから30cmで、底面の凹凸も少なく、ほぼ一定の深さを保つ。

類似の遺構が検出されている遺跡は県内では17遺跡を数える。内陸部に多く、馬淵川流域で二戸市駒焼場遺跡等6遺跡、安比川流域の安代町飛鳥台地I遺跡、北上川及びその支流域で水沢市南矢巾遺跡等9遺跡の計16遺跡、沿岸部では陸前高田市打越遺跡のみである。所属時期が明らかなものは二戸市長瀬D遺跡を除きいずれも平安時代以降である。遺構の性格としては、何らかの領域の区画、墳墓的なもの等の報告がなされている。

本遺跡の場合、所属時期は31号方形周溝がその出土遺物から平安時代前期と考えられ、32号方形周溝は流れ込みと見られる弥生土器の破片以外に遺物がなく詳細は不明である。遺構の性格は、本遺跡が居住域としての営みが行われず、中世に至るまで墓域として利用されていることを考えると墳墓的な性格の可能性があるとと思われる。

(3) その他の遺構

古墳と方形周溝以外の遺構としてはピットや陥し穴、溝跡等が若干検出されており、遺構の性格や特徴・所属時期等について得られた資料からの可能性を若干指摘することとする。

〈住居状堅穴遺構〉 出土遺物から平安時代前期の遺構と考えられる。

〈溝跡〉 4条検出され、そのうち101号溝跡は尾根を区切るように巡らされ、規模も他の3条に比べ大きい。31号方形周溝を切っていることから少なくとも平安時代以降の遺構である。

〈集石遺構〉 尾根筋を境にした北向き斜面上にある。集石以外の施設がなく、性格は不明である。遺物には平安時代のもと考えられる須恵器壺形土器の破片がある。所属時期については平安時代の可能性も考えられる。

〈墓壇〉 副葬されていた古銭と人骨鑑定の結果から中世のものである。土葬墓であり、墓壇の規模や形状から坐棺と思われる。

〈ピット〉 11期検出され、形状・規模とも様々である。遺物はいずれのピットからも出土しておらず、所属時期の明確なものはない。51号ピットは埋土が締まりの弱い黒褐色シルト質土

で新しい時期の様相を示し、礫が数個入っている。遺構付近の表土から元祐通宝やキセルが出土していることから墓墳であった可能性も考えられる。52号ピットは古墳の周湊に切られており、それ以前の遺構である。53号・54号ピットは重複するが、埋土が同質で切り合い関係は不明である。埋土の様相からは時期差はあまりないと思われ、また、少なくとも縄文時代や弥生時代のものではないと思われる。南尾根の南端緩斜面上で検出された55号ピット・56号ピット群は円筒形あるいはフラスコ形状を呈し、埋土にIII層起源と思われるシルト質土等が自然堆積しており、51・53・54号ピットとはその様相が異なる。縄文時代の遺構の可能性もあると思われる。

〈陥し穴〉5基検出され、平面形が幅の狭い溝状を呈するもの3基、それに対してやや幅の広い長方形状を呈するもの2基である。溝状の陥し穴は等高線に対して平行するが、長方形状の陥し穴は等高線に対して斜交または直交する。類似の遺構の所属時期は県内ではほとんどが縄文時代である。

表8 墓墳・ピット・陥し穴一覧表

	開口部(cm)	底部(cm)	深さ(cm)	平面形	断面形	備 考
墓墳	120×103	86×81	53	円 形	円 筒 形	古銭3 人骨一部残存
51号ピット	110×92	100×72	20~27	楕 円 形	皿 形 状	
52号ピット	145×120	80×20	75	楕 円 形	播 鉢 状	
53号ピット	180×(70)	165×(55)	30	長 方 形	皿 形 状	54号に重複
54号ピット	200×(160)	190×(150)	30	楕 円 形	皿 形 状	53号に重複
55号ピット	170×135	128×100	60~80	楕 円 形	円 筒 形	
71号陥し穴	176×75	128×40	90~100	長 方 形 状	U 字 状	等高線に斜交
72号陥し穴	282×14	274×5	55~80	溝 状	U 字 状	等高線に平行
73号陥し穴	240×80	204×36	50~100	長 方 形 状	U 字 状	等高線に直交
74号陥し穴	335×85	355×30	150	溝 状	漏 斗 状	等高線に平行
75号陥し穴	315×45	325×10	110	溝 状	U 字 状	等高線に平行

2. 遺物のまとめ

(1)古墳出土の遺物

古墳からの出土遺物には各種の副葬品や土器などがある。主体部からの出土遺物にはガラス玉や刀類・錫製釧・和同開珎・器種不明鉄製品がある。土器はすべて周湊から出土しており、主体部からは出土していない。また、周湊からの遺物で土器以外のものは25号古墳出土の鉄鏃1点である。土器については次項で述べ、本項では副葬品等を中心に述べることにする。

〈刀類〉ほぼ完形の蕨手刀(6号古墳)・直刀(9号古墳)・太刀(27号古墳)・立鼓刀(28号古墳)が各一振と小刀二振(12号・16号古墳)、他に刀の刃先3点(6号・18号古墳)が出土

している。

蕨手刀は東日本に出土例が多く、中でも岩手県は全国の出土例の約3分の1を数える。石井昌国氏の「蕨手刀」には岩手県で57例が紹介されている。しかし、発掘調査で古墳から出土した例としては江釣子村猫谷地、和賀町長沼、花巻市熊堂の各古墳から1振、江釣子村五条丸古墳から3振の計6振^{#1)}と少ない。高橋信雄氏は「これら6振はすべて川原石積みの石室を持つ古墳から出土し、かなり限定された古墳から出土するといえそうである。」^{#2)}との見解を述べている。長根I古墳の蕨手刀は土壙形の主体部からの出土例としては発掘調査においては初めてである。

蕨手刀の形態分類については石井氏が三型式に大別^{#3)}しており、その中のI型を高橋信雄氏がI a型・I b型・I c型とさらに3分類^{#4)}している。I a型は柄反り、刃反りおよび柄の絞りともないか、極めて小さく、元幅は5 cm以下、I b型は柄反り、刃反りともないか、非常に小さく、柄の絞りが強いもので、元幅5 cm以上の広幅のものが多いとしている。本遺跡のものは元幅4.7 cmと中幅に属するものであるが、柄の絞りは強く、I b型に近いものと言えるであろう。I b型は長沼古墳、猫谷地古墳等から出土しており、これらの類例および共伴遺物からその所属時期は概ね8世紀と考えられる。

直刀は全長70.0 cm、刃長53.5 cm、元幅4.0 cmで、県内の古墳出土の直刀の中では刀身の長い方に属する。直刀の県内での古墳出土例としては岩手町浮島、盛岡市太田蝦夷森、西根町谷助平、五条丸、金ヶ崎町道場、矢巾町藤沢狄森、長沼の各古墳が上げられる。形状や大きさは様々である。全長ないし刃長の点で出土例に比較的近いものとして藤沢狄森14号墳出土の直刀が上げられる。刃長はどちらも50 cmを越えるが、ただし元幅が藤沢狄森のものは2.7 cmと狭く、本遺跡のものは4.0 cmと広い。出土した古墳の形状は主体部がどちらも土壙形である。藤沢狄森14号墳は共伴遺物からその所属時期を概ね7世紀第3四半期に設定している。本遺跡の直刀が出土した9号古墳の場合、主体部に土器の副葬品はないが、周湟から出土し土師器坏の破片は8世紀前半に属すると思われる、本遺跡の古墳の中では比較的古い時期に所属すると考えられる。

27号古墳出土の太刀は身幅が狭く、刀身に反りはないが、柄反りが若干ついている。類似例等については不詳であるが、出土した古墳の所属時期は次項で後述するように8世紀よりも下る可能性を持つ。直刀から彎刀への流れで見た場合、柄反りを持つタイプは比較的新しい時期に位置付けられると思われる。

立鼓刀は28号古墳から出土し、全長62.1 cmで、全反りが1.3 cmと比較的反りの大きい刀である。前出の「蕨手刀」には6例紹介されており、いずれも県内のものである。和賀町長沼で2例、花泉町永井、北上市成田、二戸市金田一、平泉町中尊寺の各1例であるが、発掘調査

によって出土したのは本遺跡が初例である。県外では長野県で1例、群馬県で2例の出土が知られている^{※5)}という。

立鼓刀は出土した古墳の重複関係からその所属時期が8世紀末またはそれ以降と考えられる。

〈ガラス玉類〉2号古墳から28個、16号古墳から193個出土している。16号古墳出土の玉には石製のものが2個含まれている。分析の結果、2号古墳のものはアルカリ石灰ガラス、16号古墳のものも大半はアルカリ石灰ガラスであるが、3個だけ鉛ガラスに分類されるものが含まれている。鉛ガラスの玉は白色を呈しており、表面は風化が著しく、不透明である。また、16号古墳出土のガラス玉の中にコバルトを含むものがあり、その素材が輸入品である可能性が指摘されている。ガラス玉の出土例は多く、県内では他に浮島・太田蝦夷森・熊堂・江釣子・西根等の各古墳群でも出土している。

〈錫製釧〉9号古墳主体部からほぼ1個体分と推定される釧が破片で出土している。ただし、出土時にリング状を呈していた訳ではなく、個々の破片の湾曲の度合いから1個分の釧と考えられるものの、さらに微小な細片も若干出土しており、2個であった可能性も否定しきれない。材質については錫であるという鑑定結果を得ている。

錫製釧の出土例としては和賀町長沼の3号墳や金ヶ崎町西根遺跡のEi-6墓墳がある。どちらも同一遺構から2個ずつ出土し、その所属時期は前者が7世紀後半から末葉、後者は奈良時代としている。

〈和同開珎〉22号古墳主体部の底面直上から1点出土している。副葬されたものと考えられる。和同開珎の初鑄は708年とされ、流通の下限は承和2年(835年)以前で、主体的な流通期間は8世紀である。^{※6)}県内では他に熊堂古墳、金ヶ崎町西根縦街道古墳、太田蝦夷森古墳、江釣子村猫谷地遺跡竪穴住居跡での出土例が知られている。他の銭貨との共伴関係は県内ではなく、本遺跡でもそれと同様である。

〈器種不明鉄製品〉和同開珎の出土した22号古墳主体部の埋土最上部からの出土である。類似の遺物は青森県六ヶ所村弥栄平(4)遺跡、同達田村達田大館遺跡、秋田県鹿角市高市向館から、県内では二戸市駒焼場遺跡から出土している。高市向館と駒焼場遺跡のものは棒状の部分にねじれを持つもので、他はねじれがない。弥栄平(4)遺跡のものは棒状部分の断面形が扁平な長方形を呈し本遺跡のものに酷似する。用途については高市向館で火箸としているほかは不祥である。

〈鉄鏃〉25号古墳の周湟埋土から1点、出土している。鉄鏃が古墳から出土する例は県内にも多く、8遺跡以上にのぼり、主体部に副葬される例も多い。また一カ所から複数出土する場合も多いが、本遺跡では単独の出土である。

注1) 高橋信雄 1987年 「岩手県における末期古墳の再検討」北奥古代文化第18号

注2) 註1に同じ

注3) 石井昌国 1966年 『蔵手刀』雄山閣

注4) 高橋信雄・赤沼英男 1984年 「岩手の古代鉄器に関する検討(2)」岩手県立博物館研究報告第2号

注5) 福島県立博物館 1988年 『日本刀の起源展—直刀から彎刀へ—』

注6) 伊藤玄三 1968年 「末期古墳の年代について」古代学第14巻第3・4号

(2) 古代土器の分類と年代

土師器

坏形土器が主体で、若干高台付坏形土器、高坏形土器、椀形土器が出土している。土師器である甕形土器は底部3点、口縁部片1点のみである。坏形土器を中心に分類する。

〈坏形土器〉ロクロ不使用のものをA類、ロクロ使用のものをB類とする。

A類(ロクロ不使用)

底部の形態、体部、外面の沈線、段、稜線、内面の区切りの有無から次のように分類される。これらの内面はすべてヘラミガキ後、黒色処理が施されている。

A-1類 丸底で体部外面に段、内面に区切りをもつもの。

A-2類 丸底で体部外面に段をもち、内面に区切りをもたないもの。

A-3類 丸底風平底で、体部外面に段、稜線をもつもの。

A-4類 平底で体部外面に稜線をもつもの。

A-1類のものは3号古墳の周湟から1点(2)出土している。外面調整は段より上位がヘラミガキ、下位がヘラケズリ後、一部ヘラミガキである。これと類似する土器は水沢市玉貫遺跡、花巻市古館II遺跡から出土していることから、8世紀前半に位置付けられるものと思われる。

A-2類のものは3号古墳の周湟から1点(1)、9号墳の周湟から1点(7)が出土している。外面は段より上位がヘラミガキ、下位がヘラケズリかヘラミガキで調整されている。A-1類と同様8世紀前半に属するものと思われる。

A-3類のものは31号方形周溝から1点(49)遺構外から1点(194)出土している。沈線、稜線より上位がヘラミガキかヘラケズリ後一部ヘラミガキ、下位がヘラミガキである。体部は底部から内湾しながら立ち上がり、沈線より上位が外傾している器高の大きいものである。これに類する土器は水沢市石田遺跡、江刺市宮地遺跡にみられ、8世紀後半でも新しい方に位置づけられる。

A-4類のものは6号古墳の周湟埋土から1点(5)出土している。平底で体部上位に稜線を巡らせている。内外面はヘラミガキ調整されている。A-3類と同じく水沢市石田遺跡、都南村百目木遺跡などにみられ、9世紀前後に属するものと思われる。

B類(ロクロ使用)

ロクロから切り離し後、外面にヘラケズリ、ヘラミガキなどの再調整の施されているものと施されていないものと大きく分けられる。前者を B-1 類、後者を B-2 類とする。

B-1 類は底部から体部下端までヘラケズリにより再調整されている B-1-a 類、底部をヘラミガキにより再調整されている B-1-b 類、体部下端のみヘラケズリ調整されている B-1-c 類に分けられる。B-1-a 類、B-1-b 類のものは遺構外から 3 点(204、205、213)、B-1-c 類のものは住居状竪穴遺構から 1 点(51)、遺構外から 1 点(193) 出土している。再調整が施されてることから B-1 類は 9 世紀代に位置づけられる。

B-2 類のものは、遺構外から 4 点(211・212・214・217) 出土している。全体の器形を把握できず詳細は不明であるが平安時代前期 9～10 世紀代のものと考えられる。

〈高坏形土器〉25 号古墳から出土した高坏の土師器は、花巻市古館 II 遺跡 D07 住居跡出土のものと類似している。体部外面の調整は稜線より上がヘラミガキ、下がタテ方向のヘラケズリと調整技法も同様である。古館 II 遺跡 D07 住居跡は共伴遺物から、遠藤・相原編年の VII a 群に位置づけられている。本遺跡の高坏は、古館 II 遺跡のものと比較して、脚の高さが低いことや脚外面の段が 1 つ少ないことから VII a 群でも最も新しく位置づけられるか、VII b 群でも最も古いものと考えられる。年代的には 8 世紀半ばと思われる。

〈高台付坏形土器〉遺構外から 4 点(196・197・215・216) が出土している。ともに体部上半、高台の下端が欠損している。197・196 は底部内面の中央が凸状を呈する。付け高台で再調整され、ロクロからの切り離し痕は残っていない。

須恵器

〈坏形土器〉25 号古墳の周湟埋土から底部破片 1 点(33)、26 号古墳の周湟埋土から 1 点(36)、13 号古墳の周湟埋土から体部破片 1 点(11)、遺構外から 1 点(173) 出土している。ともにロクロからの切り離しは回転糸切りである。36 は法量、技法から 9 世紀代に位置づけられると考えられる。

〈壺形土器〉集石遺構から底部、頸部、肩部の破片が各 1 点(61～63) 遺構外から口縁部片 1 点(185)、体部片 6 点(179・181・182・184・191・192)、底部片 1 点(186)、そのほか反転実測できるものが 31 号方形周溝埋土から 1 点(42)、遺構外から 4 点(187～189・190) 出土している。42・187・190 は長頸壺の口縁部のものと頸部から肩部にかけてのものである。これらは平安時代に入るものである。42 は形態から 9 世紀代に、190 は頸部下端に凸帯を巡らせている特徴をもつことから 10 世紀後半に位置づけられる。

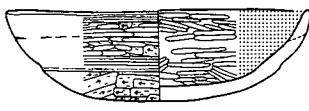
〈甕形土器〉20 号古墳の周湟埋土から口縁部片 1 点(27)、25 号古墳の周湟埋土から体部片 1 点(34)、31 号方形周溝埋土から口縁部片 1 点(43)、体部片 5 点(44～48)、遺構外から口縁部か

〈土師器〉

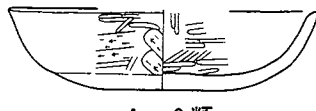
环形土器



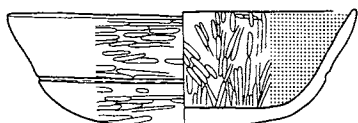
A-1類



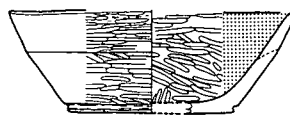
A-2類



A-3類



A-3類



A-4類



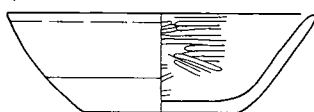
B-1-a類



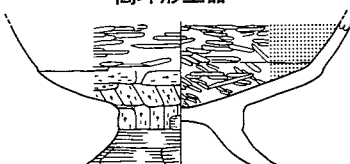
B-1-b類



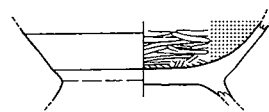
B-1-c類



B-2類



高环形土器



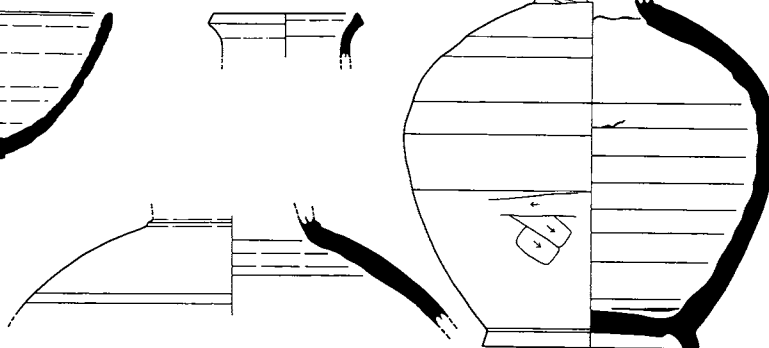
高台付环形土器

〈須恵器〉

环形土器

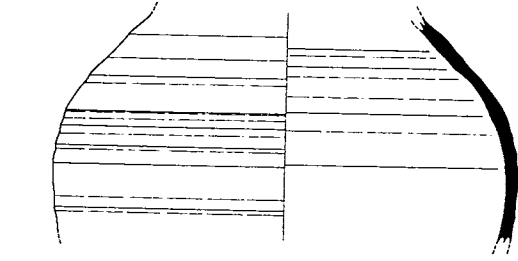


長頸壺形土器

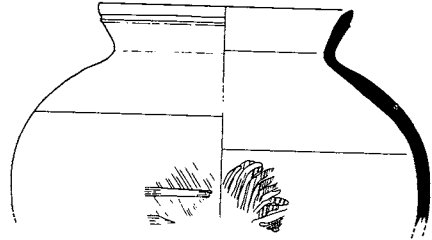
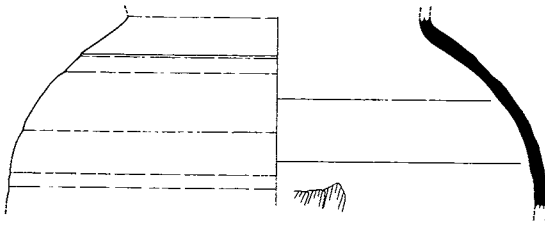


第64図 土師器・須恵器分類図

壺形土器



甕形土器



第65図 須恵器分類図

ら肩部までのもの2点(170・171)、体部片5点(172・174~177)、口縁部片2点(185・191)出土している。反転実測できたものは、170と171の2点である。口縁部の形態、調整技法から二つに分けられる。

A類 口縁部が外傾し、上位に細沈線を伴う稜線が巡り口唇部の断面が丸味を帯びているものである。170がこれに入る。体部上半はロクロ調整により外面の平行叩き目文や内面の当て具痕が消され、わずかに一部残存している。これに類するものは、宮城県色麻町色麻古墳群の第119号墳出土のものがある。古墳群の年代は7世紀後半~8世紀前葉とされている。本遺跡のものは8世紀前葉に位置づけられるものと思われる。

B類 口縁部が外反し、口唇部が下方のみにひきだされているものである。171がこれに入る。外面は平行叩き目文、内面は青海波の当て具痕をもつ。平安時代前期でも古く位置づけられるものと思われる。

〈酸化炎焼成の須恵器(須恵系土器)〉26号古墳の周湟埋土から底部1点(37)、遺構外から底部1点(206)が出土している。ロクロからの切り離しは回転糸切りである。再調整はみられない。平安時代前半のものである。

(3) その他の遺物

31号方形周溝から小刀1点と鎌1点、それに遺構外から刀子1点、キセル2点、鍬状鉄製品1点、釘状鉄製品28点、それ以外の鉄器類8点、古銭2点、溶融したと思われる古銭1点、切

子玉1点、それに縄文土器、弥生式土器、石器が若干出土している。

〈小刀〉 31号方形周溝出土の小刀は刀身の幅が狭く、切先が若干反っており、古墳出土の小刀とは若干形状を異にする。

〈鎌〉 同じく31号方形周溝出土の鎌は刃部が柄に対してやや外向気味に付き、刃部、背部ともにゆるやかに湾曲し、先端はさらに湾曲する。土井義夫氏が分類したC1類に相当すると思われる。関東地方では9世紀後半に普及しているとのことである^{#1)}。本遺構からは8世紀末及び9世紀代と思われる土器が出土している。

〈キセルと古銭〉 南尾根頂部付近のI層からの出土であり、付近には中世の墓壙や墓壇の可能性を持つピットがあることから、中・近世の葬制に関わる副葬品であった可能性がある。

〈釘状鉄製品〉 28点中20点が北尾根南東向き斜面上から出土し、他に南尾根の101号溝跡付近から4点、6号古墳付近から2点等が出土している。101号溝跡からは別に3点出土しており、付近のものと合わせて7点になる。欠損品が半数以上の16点あり、欠損品以外でもねじれや屈曲するものがあり、いずれも使用された後に廃棄された遺物と考えられる。

〈その他の鉄器類〉 工具類と思われるもの数点と刀類の残片と思われるもの1点がある。刀類の残片と思われる277は南尾根上から出土しており、古墳に関わる遺物の可能性がある。

〈切子玉〉 本遺跡で唯1点の出土である。古墳に関わると考えられるが、出土地点付近には25号・26号・27号古墳の各古墳があり、いずれの古墳に関わるかは特定できない。

〈縄文時代の遺物〉 土器片と石器が極少量出土している。前期と後期の土器が散見される。石器は剝片石器のみで、石鏃や石匙、それに削器類と考えられるものが数点出土している。

〈弥生式土器〉 ほぼ復元できた甕が1点と中コンテナ1箱分の破片が出土している。復元できた101の甕は体部中央上半に沈線による不整な山形の文様が施文され、口縁部には交互刺突の文様が巡る。時期は後期で、岩手の弥生式土器編年試論でのV期にあたる^{#2)}。交互刺突の文様をもつ土器は一戸町親久保II遺跡、竹林遺跡、滝沢村湯舟沢遺跡等でも出土している。

本遺跡出土の弥生式土器の破片は交互刺突をもつものの他に沈線が見られるもの、原体圧痕の見られるもの、撚糸文による施文のみのもの等がある。時期的にはいずれもそれ程大差なく、後期に属するものと思われる。

注1) 土井義夫 1971年 「関東地方における住居址出土の鉄製農具について」物質文化NO18

注2) 小田野哲憲 1987年 「岩手の弥生式土器編年試論」岩手県立博物館研究報告第5号

表9 刀類計測値一覧表

図版一番号	出土遺構	種別	全長	刃長	柄長	元幅	先幅	鋒長	鐙長	反り	全反り	備考
第13図-3	6号古墳主体部	藏手刀	50.6	38.8	11.0	4.7	3.4	4.9	6.7	0.8	1.0	
〃 -4	〃	刃先	[11.5]	—	—	—	2.2	2.7	—	—	—	
第16図-6	9号古墳主体部	直刀	70.0	53.5	15.5	4.0	2.4	—	5.8	0	0	貴金具、双脚の足金具が付く
第18図-10	12号古墳主体部	小刀	31.8	23.3	8.5	3.4	2.8	3.1	—	0	0	
第20図-12	16号古墳主体部	小刀	27.1	(18.6)	(8.5)	2.5	1.8	2.0	—	0	0	
第24図-23	18号古墳主体部	刃先	(4.5)	—	—	—	(2.5)	(2.5)	—	—	—	
〃 -24	〃	刃先	(6.1)	—	—	—	(2.7)	(3.0)	—	—	—	
第32図-38	27号古墳主体部	太刀	66.7	51.5	13.6	3.0	2.1	2.1	7.3	0	0.6	柄反り0.7~0.8、双脚の足金具が付く
〃 -39	28号古墳主体部	立鼓刀	62.1	46.7	14.8	4.0	3.1	3.9	6.4	0.6	1.3	双脚の足金具が付く
第34図-41	31号方形周溝	小刀	[25.0]	21.5	[3.5]	2.1	1.3	2.4	—	0.1-0.2	—	

() 残存値 () 推定値 単位: cm

表10 2号古墳出土ガラス小玉一覧表

図版一番号	資料番号 (分析番号 に同じ)	最大高 h(mm)	最大径 r(mm)	最大孔径 (mm)	h:r	色調	備考	図版一番号	資料番号 (分析番号 に同じ)	最大高 h(mm)	最大径 r(mm)	最大孔径 (mm)	h:r	色調	備考
第9図-1	201	3.9	7.0	1.8	0.557:1	紺	分析	第9図-15	215	2.9	4.0	1.3	0.725:1	紺	
2	202	3.6	5.9	1.4	0.610:1	〃	〃	16	216	2.5	3.8	1.3	0.658:1	薄紺	分析
3	203	3.6	4.9	1.6	0.735:1	紺	〃	17	217	2.1	3.6	1.2	0.583:1	〃	
4	204	4.3	7.4	2.5	0.581:1	薄紺	〃	18	218	2.9	3.9	1.5	0.744:1	〃	
5	205	3.2	6.2	2.1	0.616:1	〃		19	219	2.6	4.3	1.3	0.605:1	〃	
6	206	3.1	3.9	1.9	0.795:1	〃		20	220	2.1	3.9	1.1	0.538:1	〃	
7	207	3.0	5.0	1.1	0.6:1	〃		21	221	2.0	3.8	1.2	0.526:1	薄紺	
8	208	3.4	4.3	1.8	0.791:1	濃紺	分析	22	222	2.1	3.7	1.2	0.568:1	〃	
9	209	2.6	4.4	1.4	0.591:1	薄紺		23	223	2.0	3.6	1.2	0.556:1	〃	分析
10	210	2.8	3.9	1.4	0.718:1	〃		24	224	2.0	3.5	1.2	0.571:1	〃	
11	211	2.3	4.0	1.4	0.575:1	〃		25	225	2.1	3.5	1.1	0.6:1	〃	
12	212	2.5	4.1	1.2	0.61:1	〃		26	226	2.4	3.9	—	0.615:1	〃	欠損
13	213	2.2	3.6	1.3	0.611:1	〃	分析	27	227	2.3	4.2	1.3	0.548:1	紺	分析
14	214	2.5	4.0	1.3	0.625:1	濃紺	〃	28	228	—	—	—	—	〃	破損

表11 16号古墳出土ガラス玉類一覧表

図版一番号	資料番号 (分析番号 に同じ)	最大高 h(mm)	最大径 r(mm)	最大孔径 (mm)	h:r	色調	備考	図版一番号	資料番号 (分析番号 に同じ)	最大高 h(mm)	最大径 r(mm)	最大孔径 (mm)	h:r	色調	備考
第21図-1	1	2.2	5.6	1.2	0.393:1	紺		15	15	2.7	3.9	1.5	0.692:1	薄紺	
2	2	3.2	4.8	1.4	0.667:1	〃		16	16	3.0	4.0	1.3	0.750:1	紺	分析
3	3	3.5	3.3	1.2	1.061:1	〃	分析 替状	17	17	2.8	4.1	1.3	0.683:1	薄紺	
4	4	2.4	4.3	1.7	0.558:1	薄紺		18	18	2.2	4.2	1.4	0.523:1	〃	
5	5	2.3	4.2	1.2	0.548:1	紺	分析	19	19	2.2	3.8	1.3	0.579:1	〃	
6	6	2.2	4.2	1.6	0.523:1	薄紺		20	20	2.0	3.7	1.5	0.541:1	〃	
7	7	2.8	4.1	1.6	0.683:1	〃		21	21	2.2	3.9	1.4	0.564:1	薄紺	
8	8	2.8	4.1	1.6	0.512:1	薄青	分析	22	22	2.1	4.0	1.5	0.525:1	〃	
9	9	2.1	3.7	1.2	0.568:1	薄紺		23	23	2.6	3.7	1.2	0.703:1	〃	
10	10	2.6	4.1	1.4	0.634:1	紺		24	24	2.1	3.7	1.5	0.568:1	〃	
11	11	2.2	4.2	1.6	0.524:1	薄紺		25	25	2.8	3.8	1.2	0.737:1	〃	分析
12	12	2.3	3.9	1.3	0.59:1	紺		26	26	2.4	3.6	1.5	0.667:1	〃	
13	13	2.7	3.8	1.4	0.711:1	薄紺		27	27	2.5	3.8	1.5	0.658:1	〃	
14	14	2.2	3.4	1.2	0.647:1	〃		28	28	2.2	4.3	1.7	0.512:1	〃	

図版一番号	資料番号 (分析番号 に同じ)	最大高 h(mm)	最大径 r(mm)	最大孔径 (mm)	h:r	色調	備考	図版一番号	資料番号 (分析番号 に同じ)	最大高 h(mm)	最大径 r(mm)	最大孔径 (mm)	h:r	色調	備考
29	29	2.1	4.0	1.2	0.525:1	薄紺		77	103	2.8	4.4	1.4	0.636:1	薄紺	
30	30	3.3	3.9	1.5	0.846:1	紺	分析	78	104	2.9	4.1	1.2	0.707:1	〃	分析
31	31	2.8	4.4	1.5	0.636:1	薄紺		79	105	2.5	4.2	1.5	0.595:1	〃	
32	32	2.7	3.7	1.4	0.730:1	紺		80	106	2.2	4.1	1.5	0.537:1	〃	
33	33	2.7	3.8	1.3	0.711:1	薄紺	分析	81	107	2.2	4.2	1.2	0.524:1	青灰	
34	34	2.3	3.8	1.4	0.605:1	〃		82	108	3.1	4.4	1.3	0.705:1	薄紺	
35	35	2.6	4.1	1.2	0.634:1	〃		83	109	2.8	4.2	1.5	0.667:1	薄紺	
36	36	2.4	3.8	1.5	0.632:1	〃		84	110	2.3	4.0	1.4	0.575:1	紺	
37	37	2.3	3.5	1.4	0.657:1	〃		85	111	2.5	4.1	1.5	0.61:1	薄紺	
38	38	2.4	3.9	1.1	0.615:1	〃		86	112	2.8	4.2	1.6	0.667:1	〃	
39	39	2.4	3.8	1.4	0.632:1	〃		87	113	1.7	4.2	1.6	0.405:1	水色	
40	40	2.3	3.5	1.0	0.657:1	〃		88	114	2.7	4.0	1.2	0.675:1	薄紺	
41	41	2.2	3.7	1.4	0.595:1	薄紺		89	115	2.2	3.9	1.4	0.564:1	紺	
42	42	2.4	3.5	1.2	0.686:1	〃		90	116	2.5	4.0	1.3	0.625:1	薄紺	
43	43	1.6	3.4	1.1	0.471:1	〃		91	117	2.3	4.1	1.3	0.561:1	〃	
44	50	2.8	3.8	1.2	0.737:1	〃		92	118	2.1	4.0	1.2	0.525:1	紺	
45	71	4.0	5.5	1.8	0.727:1	〃		93	119	2.4	4.1	1.3	0.585:1	薄紺	
46	72	4.1	5.9	1.8	0.695:1	〃		94	120	2.2	3.9	1.3	0.564:1	〃	分析
47	73	3.5	5.8	2.0	0.603:1	〃		95	121	2.7	3.8	1.4	0.711:1	〃	
48	74	3.6	5.4	1.6	0.667:1	紺		96	122	2.2	4.0	1.1	0.55:1	〃	
49	75	3.8	5.3	1.4	0.717:1	〃	分析	97	123	1.9	3.8	1.2	0.5:1	紺	
50	76	4.6	4.8	1.6	0.958:1	緑	分析 管状	98	124	2.1	3.9	1.5	0.538:1	薄紺	
51	77	3.5	5.3	2.0	0.660:1	紺	分析	99	125	2.2	4.0	1.1	0.55:1	〃	
52	78	4.5	5.6	2.4	0.804:1	青	〃	100	126	2.0	3.9	1.3	0.513:1	〃	
53	79	3.0	5.2	1.7	0.577:1	紺		101	127	2.1	3.9	1.6	0.538:1	薄紺	
54	80	4.5	6.9	1.6	0.918:1	〃		102	128	2.6	3.8	1.3	0.684:1	〃	
55	81	2.9	5.2	1.9	0.558:1	緑	分析	103	129	2.1	3.7	1.2	0.568:1	〃	
56	82	4.7	4.3	1.6	1.093:1	青緑	分析 管状	104	130	1.9	3.6	1.4	0.528:1	〃	
57	83	2.3	4.9	1.5	0.469:1	薄紺	分析	105	131	2.4	4.1	1.2	0.585:1	〃	
58	84	2.7	5.5	2.2	0.491:1	水色	〃	106	132	2.1	3.4	1.1	0.618:1	〃	
59	85	4.8	4.6	2.4	1.043:1	濃紺	分析 管状	107	133	2.4	4.2	1.4	0.571:1	〃	
60	86	3.5	4.8	1.6	0.729:1	〃		108	134	2.1	3.8	1.3	0.553:1	〃	分析
61	87	3.2	4.6	1.3	0.696:1	紺		109	135	2.1	3.6	1.3	0.583:1	〃	
62	88	3.6	4.6	1.5	0.783:1	紺		110	136	2.2	3.8	1.3	0.579:1	〃	
63	89	3.7	4.7	1.7	0.787:1	〃		111	137	2.0	3.8	1.4	0.526:1	〃	
64	90	3.7	4.8	1.6	0.771:1	薄紺		112	138	2.2	3.4	1.5	0.647:1	〃	
65	91	3.9	4.4	1.4	0.886:1	水色		113	139	2.6	3.9	1.4	0.667:1	〃	
66	92	3.4	3.9	1.2	0.872:1	紺	管状	114	140	1.8	3.8	1.4	0.474:1	〃	
67	93	4.4	4.8	1.9	0.917:1	濃紺	分析 管状	115	141	2.2	3.5	1.3	0.629:1	〃	
68	94	3.6	4.6	1.6	0.783:1	濃緑	分析	116	142	2.1	3.7	1.0	0.568:1	紺	分析
69	95	3.1	5.7	1.6	0.544:1	紺	〃	117	143	2.0	3.6	1.2	0.556:1	薄紺	
70	96	3.1	4.8	1.9	0.646:1	〃		118	144	2.6	4.1	1.2	0.634:1	〃	
71	97	3.2	4.3	1.8	0.744:1	薄青		119	145	2.3	3.8	1.5	0.605:1	〃	
72	98	3.5	5.0	1.9	0.7:1	水色		120	146	2.2	3.7	1.4	0.595:1	〃	
73	99	3.6	5.4	1.6	0.667:1	薄紺		121	147	2.0	3.7	1.3	0.541:1	緑青	
74	100	3.1	4.5	1.4	0.689:1	薄青		122	148	3.0	3.5	1.3	0.857:1	薄紺	
75	101	2.6	4.3	1.4	0.605:1	薄紺		123	149	2.1	3.6	1.2	0.583:1	〃	
76	102	2.6	4.1	1.2	0.634:1	〃		124	150	2.3	3.8	1.2	0.605:1	紺	

図版一番号	資料番号 (分析番号 に同じ)	最大高 h(mm)	最大径 r(mm)	最大孔径 (mm)	h:r	色調	備考	図版一番号	資料番号 (分析番号 に同じ)	最大高 h(mm)	最大径 r(mm)	最大孔径 (mm)	h:r	色調	備考
125	154	2.3	4.1	1.3	0.561:1	薄紺		155	151	5.0	8.4	4.3	0.595:1	白	分析、鉛 ガラス
126	155	2.4	4.0	1.4	0.6:1	〃		156	152	5.7	8.8	4.4	0.648:1	白	〃
127	156	2.8	4.0	1.4	0.7:1	濃青	分析	157	153	4.9	7.9		0.620:1	白・ 緑	〃
128	157	2.0	4.1	1.5	0.488:1	薄紺	〃	158	44	7.5	11.4	3.3	0.658:1	灰	分析 石製
129	158	2.5	4.2	1.5	0.595:1	〃		159	45	5.8	8.6	2.1	0.674:1	紺	分析
130	159	2.8	4.3	1.4	0.65:1	紺	分析	160	46	4.9	8.6	2.2	0.570:1	青	〃
131	160	2.3	3.9	1.3	0.590:1	薄紺		161	47	5.5	8.1	3.1	0.679:1	濃紺	分析
132	161	2.2	3.8	1.4	0.579:1	〃		162	48	6.7	7.2	2.2	0.931:1	〃	〃
133	162	2.3	3.9	1.1	0.590:1	〃		163	49	5.8	7.6	3.2	0.763:1	〃	〃
134	163	2.5	4.3	1.8	0.581:1	緑黒	分析	164	51	8.6	13.9	3.2	0.619:1	薄緑	〃
135	164	2.8	4.0	1.4	0.7:1	紺	〃	165	52	7.2	8.7	1.9	0.828:1	濃紺	
136	165	2.6	4.2	1.2	2.167:1	薄紺		166	53	5.4	8.7	2.1	0.621:1	〃	
137	166	3.0	4.0	1.5	0.75:1	暗青 灰		167	54	7.1	7.6	2.2	0.934:1	〃	
138	167	2.5	3.6	1.3	0.694:1	紺		168	55	5.2	8.5	2.6	0.612:1	〃	
139	168	3.0	3.8	1.2	0.789:1	〃		169	56	5.4	8.0	2.2	0.675:1	〃	
140	169	2.2	3.9	1.2	0.564:1	薄紺		170	57	4.6	7.6	2.6	0.605:1	〃	
141	170	2.4	3.8	1.5	0.632:1	薄紺		171	58	7.1	7.2	2.1	0.986:1	紺	分析
142	171	1.9	3.8	1.3	0.5:1	〃		172	59	6.5	8.0	1.7	0.813:1	濃紺	
143	172	2.0	3.9	1.4	0.513:1	〃		173	60	5.1	7.5	1.8	0.68:1	〃	
144	173	2.5	3.8	1.1	0.658:1	紺	分析	174	61	5.0	8.1	3.4	0.617:1	灰	分析 石製
145	174	2.4	4.0	1.0	0.6:1	薄紺		175	62	4.8	7.0	2.2	0.686:1	紺	
146	175	2.5	4.0	1.5	0.625:1	〃		176	63	6.0	6.6	2.2	0.909:1	〃	
147	176	2.2	4.0	1.5	0.55:1	〃		177	64	4.1	6.3	2.5	0.651:1	青緑	分析
148	177	2.0	4.0	1.3	0.5:1	〃		178	65	5.0	6.2	2.1	0.806:1	濃紺	〃
149	178	2.1	3.8	1.4	0.553:1	紺		179	66	4.6	6.4	1.8	0.719:1	〃	
150	179	2.4	4.0	1.3	0.6:1	薄紺		180	67	3.8	5.7	1.6	0.667:1	青緑	分析
151	180	2.9	3.7	1.1	0.784:1	紺		181	68	5.3	5.8	2.3	0.914:1	紺	側面に研 磨面有
152	181	2.0	3.3	1.2	0.606:1	暗青 灰		182	69	4.6	5.8	2.0	0.793:1	〃	〃
153	182	2.0	4.0	1.3	0.5:1	薄紺		183	70	4.0	5.6	1.5	0.714:1	〃	
154	183	2.8	4.2	1.2	0.667:1	紺									

表12 遺構内出土須恵器・土師器観察表

ヨコナデ-YN、ヘラミガキ-HM、ヘラクスリ-HK、ヘラナデ-HN () 残存値 () 推定値
器種で須恵器・須恵系以外は土師器 ロクロ使用以外の土師器坏はロクロ未使用

図版一番号	出土地点	層位	器種	外面調整	内面調整	計測値			備考
						口径	器高	底径	
第10図-1	103号古墳周溝	埋土部	坏	YN、HM、HK	HM	13.9	4.1	丸底	輪積み痕
〃 -2	〃	埋土部	坏	HM、HK、HN		15.4	4.5	丸底	
第13図-5	106号古墳	埋土	坏	HM、HK	HM	(13.0)	4.7	(7.6)	輪積み痕
第16図-7	109号古墳	〃	坏	HM	HM	(13.6)	(4.2)	—	
第19図-11	113号古墳	〃	須恵器坏			—	(4.4)	—	
第23図-13	117号古墳	〃	坏		HM	—	(1.4)	(7.6)	ロクロ使用
第25図-26	120号古墳	〃	坏	HK	HM				
〃 -27	〃	〃	須恵器壺		HN				
第27図-30	122号古墳	〃	坏		HM				
第29図-31	125号古墳	底面上	高坏	HM、HK、HN	HM	—	(6.5)	8.6	
〃 -32	〃	〃	〃	HM、HK、HN	HM				31と同一個体
〃 -33	〃	埋土	須恵器坏						
〃 -34	〃	〃	須恵器壺						
〃 -36	126号古墳	埋土部	須恵器坏			16.1	6.7	5.9	回転糸切り痕
〃 -37	〃	埋土	須恵系坏	HN		—	(1.0)	6.2	〃
第35図-42	107号方形周溝	埋土部	須恵器長頸壺	HK		—	(16.2)	9.9	
〃 -43	〃	埋土	須恵器壺			(20.0)	(6.2)	—	
〃 -44	〃	〃	〃	HK	HK	—	(8.6)	—	
〃 -45	〃	〃	〃						
〃 -46	〃	〃	〃						輪積み痕
〃 -47	〃	〃	〃						
〃 -48	〃	〃	〃						
〃 -49	〃	〃	坏	HM	HM	15.4	4.5	—	
〃 -50	〃	埋土部	坏		HM	14.1	4.6	7.0	ロクロ使用、黒色処理消失
第37図-51	5号住居状	埋土	坏	HK	HM	12.4	5.0	5.8	ロクロ使用
〃 -52	〃	〃	坏	HK、HM	HM	—	—	(5.2)	〃 底面再調整内外面黒色処理
〃 -53	〃	〃	坏	HM	HM				〃
〃 -54	〃	〃	坏		HM				〃
〃 -55	〃	〃	坏		HM				〃
第39図-60	101号溝跡	〃	坏		HM				〃
第42図-61	集石遺構		須恵器壺	HK		—	(5.9)	14.4	
〃 -62	〃		須恵器長頸壺			—	(4.2)	—	
〃 -63	〃		須恵器長頸壺						

表13 遺構外出土須恵器・土師器観察表

ヨコナデ-YN、ヘラミガキ-HM、ヘラクスリ HK、ヘラナデ-HN () 残存値 () 推定値
器種で須恵器・須恵系以外は土師器 ロクロ未使用以外の土師器坏はロクロ使用

図版一番号	出土地点	層位	器種	外面調整	内面調整	計測値			備考
						口径	器高	底径	
第54図-170	IV E-3e	I 層	須恵器壺			(6.0)	(13.4)	—	
〃 -171	V D-6b	〃	〃			(20.0)	(5.6)	—	輪積み痕
〃 -172	IV E 区	II 層	〃		HN				170と同一個体
〃 -173	VI C-1g	I 層	須恵器坏			—	—	(6.0)	
〃 -174	V C 区	〃	須恵器壺						自然粘
〃 -175	V D-7b	〃	〃						
〃 -176	V D-6c	〃	〃						175と同一個体

図版—番号	出土地点	層位	器種	外面調整	内面調整	計測値			備考
						口径	器高	底径	
〃 -177	VD-7c	〃	〃						
〃 -178	VD-7b	〃	〃		HN	—	[1.2]	(12.4)	
〃 -179	VI C-6c	〃	須惠器壺						
第55図-180	VI C-1g	〃	〃						
〃 -181	VI D-4a	〃	〃						輪襷み痕
〃 -182	VI D-2b	〃	〃						
〃 -183	〃	〃	〃						
〃 -184	VI D-8h	〃	〃						
〃 -185	VI D-9h	〃	〃						
〃 -186	VII C-5h	〃	〃	HK		—	[4.1]	—	
〃 -187	VI D-0i	〃	〃			—	[5.0]	—	
〃 -188	VII C-4i	II 層	〃			—	[14.2]	—	
〃 -189	〃	〃	〃			—	[12.0]	—	自然釉 肩部に孔有
第56図-190	VII C-6j	I 層	須惠器長頸壺			(7.0)	(2.0)	—	
〃 -191	VII D-1b	〃	須惠器壺						
〃 -192	VII D-0i	〃	〃	HK					
〃 -193	III E-9f	〃	坏	HK	HM	13.2	4.3	5.0	回転糸切り
〃 -194	VI C-5h	II 層	〃	HM, HK	HM	(14.2)	3.6	—	ロクロ未使用
〃 -195	IV E-0d	I 層	〃		HM	—	[5.8]	—	
〃 -196	IV E-1c	II 層	〃		HM	—	[1.6]	—	台付
〃 -197	IV E-1d	I 層	〃		HM	—	[3.7]	—	〃
〃 -198	IV E-0d	〃	〃		HM				
〃 -199	IV E-1e	〃	〃		HM				
〃 -200	IV E-2d	〃	〃		HM				
〃 -201	IV E-2e	〃	〃		HM				
〃 -202	IV E-3e	〃	須惠系坏						
〃 -203	IV E-1e	〃	須惠系坏						
〃 -204	IV E-2e	〃	坏	HK	HM	—	[2.5]	6.0	底面再調整
〃 -205	〃	〃	〃	HM	HM	—	[1.3]	(7.0)	〃
〃 -206	〃	〃	須惠系坏				[0.9]	(6.0)	
〃 -207	IV E-2f	〃	坏		HM				
〃 -208	IV E-4e	〃	〃	HM	HM				
第57図-209	〃	〃	〃		HM				
〃 -210	IV E-4g	〃	〃		HM				
〃 -211	IV E-4f	II 層	〃			—	[1.7]	5.0	須惠系土器 回転糸切り
〃 -212	VI C-2j	I 層	〃		HM	—	[2.0]	(5.4)	回転糸切り
〃 -213	VI C-7d	〃	〃		HM	—	[2.6]	5.0	底面再調整
〃 -214	VI D-1a	〃	〃		HM	—	[2.7]	(5.6)	回転糸切り
〃 -215	IV E-4g	II 層	〃			—	[2.3]	—	
〃 -216	VII C-5h	I 層	〃		HM	—	[2.7]	—	
〃 -217	IV D-1b	〃	〃		HM	(1.3)	—	6.0	回転糸切り
〃 -218	〃	〃	〃		HM	(14.0)	[3.2]	—	
〃 -219	VI D-3c	〃	〃		HM	(13.0)	[2.0]	—	
〃 -220	VII D-6b	〃	〃		HM	(13.0)	[3.2]	—	
〃 -221	VI D-9h	〃	須惠系坏						
〃 -222	VII C-6h	〃	坏	HK, HN	HM				ロクロ未使用
〃 -223	〃	〃	〃	HK, HN	HM				ロクロ未使用
〃 -224	VI C-7a	〃	碗形	HK, HM	—	—	[8.0]	(8.4)	
〃 -225	III E 区	II 層	壺	HK	HN				
〃 -226	IV E-3f	〃	〃	YN, HN	YN, HN				
〃 -227	VI D-2a	I 層	〃	HK	HN	—	[2.1]	7.7	
〃 -228	VI C-2j	〃	〃	HN	HN	—	[2.2]	(9.6)	

3 考察

本遺跡の古墳の所属時期について検討し、考察にかえる。所属時期を推定する資料としては土器、和同開珎、蕨手刀、直刀、太刀、立鼓刀、重複関係等が上げられる。

土器による時期推定については、いずれも周湟からの出土であり、可能性としては後世の祭祀的な所産による場合も考えられる。概ねその下限と見る方が整合性があるように思われる。

出土土器に与えられる年代観は、遺物のまとめの項で述べたように、3号古墳からのものが8世紀前半、6号古墳9世紀前後、9号古墳8世紀前半、25号古墳8世紀半ば、26号古墳9世紀代である。また、17号・20号・22号古墳出土の土師器坏は小破片で、17号古墳のものが回転糸切り痕を持つことから平安時代に、20号・22号古墳のものはロクロ未使用であることから8世紀代と考えられる。

土器以外の要因を加味すると、6号古墳からは主体部からの副葬品として蕨手刀が出土している。前述のようにI b型に近い蕨手刀であり、類似の蕨手刀が出土した長沼古墳、猫谷地古墳で与えられている年代観はそれぞれ7世紀から8世紀、新式の初頭としている。本遺構出土の蕨手刀は刀身に若干反りが見られ、長沼古墳等のものよりは若干新しいタイプに属すると思われる。また、土器の出土地点は周湟の埋土最上部であり、これらのことを総合して考えると本遺構は概ね8世紀代の遺構と考えられる。

9号古墳からは他に直刀と錫製釧がある。直刀は長さの点では7世紀第3四半期とされる藤沢狄森14号古墳出土のものに近いが、身幅が広く、それよりは新しいタイプと考えられる。錫製釧の出土している西根遺跡、長沼古墳の所属年代は奈良時代および7世紀後半である。これらのことから本遺構は8世紀前半頃と推定される。

22号古墳では和同開珎が単独で出土している。遺物の年代は8世紀におさえられる。和同開珎が出土した古墳の所属時期については、708年～760年とかなり精緻な年代を設定する説もある。この22号古墳と重複関係にある28号古墳はそれより新しい。

28号古墳の所属時期は8世紀末またはそれ以降に下る可能性を持つ。同古墳からは立鼓刀が出土しているが、立鼓刀の県内での発掘調査における出土例がこれまでになく、本遺跡の重複関係によって得られた資料は今後立鼓刀の1つの年代資料となり得るであろう。

26号古墳と27号は重複し、後者が新しい。26号後者の周湟からは前述のように9世紀代と思われる須恵器坏が出土しているが古墳の所属時期とすることには疑問が残る。27号古墳からは太刀が出土している。柄反りを持ち、直刀から彎刀への移行期のものと考えられるが、明確な所属時期は不明である。ただし、2基の古墳の前後関係は明らかであり、ここでは27号古墳が8世紀またはそれ以降に下る可能性を持つことを指摘するに留める。

重複関係としては他に 12 号古墳と 23 号古墳があり、前者が新しい。これらの古墳からの出土遺物は 12 号古墳の小刀のみであり、明確な所属時期は不明である。

以上、所属時期を推定できる資料が得られた古墳について述べたきた。これらを総合すると、本遺跡において古墳が営まれた時期は概ね 8 世紀を中心としていることが窺えるが、中にはそれ以降に下る可能性を持つものもある。なお、7 世紀に遡りうる資料は得られていない。

本遺跡における所属時期の下限については古墳という名称問題も含めて今後の課題であり、類例の増加と今後の論議を待つこととしたい。

最後に、被葬者についてであるが、宮古市には 8 世紀代には相当数の集落が営まれていたであろうことはこれまでの発掘調査や分布調査から予想される所であり、一般的な考え方としてはこのような在地勢力の族長級の人々に関わる古墳と見ることができであろう。また、出土遺物に和同開珎や輸入素材等を含むガラス玉等が見られることから、何等かの形で律令政権と関係を持つ人物ということも想定できる。8 世紀代にそのような人物として文献に登場する人物もあるが、特定の人物を比定できるものではなく、被葬者についてはあくまでも推論の域を出るものではない。

<引用・参考文献>

- 1) 青森県教育委員会 1987 年『弥栄平(4)(5)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 106 集
- 2) 秋田県教育委員会 1986 年『蝦夷塚古墳群発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第 136 集
- 3) 秋田県鹿角市教育委員会 1982 年『高市向館発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料 2
- 4) 石井昌国 1966 年『蕨手刀』雄山閣
- 5) 石川長喜 1983 年「発掘調査された墳墓について」『紀要Ⅲ』岩手県埋蔵文化財センター
- 6) 伊藤玄三 1968 年「末期古墳の年代について」『古代学』第 14 巻第 3・4 号
- 7) 伊藤玄三・高橋信雄他 1989 年『シンポジウム「東日本の末期古墳」』レジュメ
- 8) 伊東信雄 1959 年「岩手県西磐井郡杉山古墳群」『日本考古学年報』8
- 9) 伊東信雄・伊藤玄三・草間俊一他 1968 年『西根古墳と住居址』金ヶ崎町教育委員会
- 10) 伊東信雄 1974 年「見分森古墳」『水沢市史』第 1 巻
- 11) 岩手県企画開発室 1973 年「土地分類基本調査」宮古、銚ヶ崎
- 12) 岩手県埋蔵文化財センター 1985 年『岩手の遺跡』
- 13) 岩手県江釣子村教育委員会 1978 年『猫谷地・五条丸古墳群(増補再刊)』
- 14) 遠藤勝博・相原康二 1983 年「岩手県南部(北上川中流域)における所謂第 1 型式の土師器・前期土師器の内容について」『考古学論叢』寧楽社
- 15) 及川洵 1977 年「殿位古墳」『日本考古学年報』28
- 16) 大塚初重・小林三郎編 1982 年『古墳辞典』東京堂出版
- 17) 小笠原迷宮 1924 年「和同銭を出した陸中国熊堂の古墳群」『考古学雑誌』第 14 巻第 7 号
- 18) 小田野哲憲 1987 年「岩手の弥生式土器編年試論」『岩手県立博物館研究報告』第 5 号
- 19) 貝塚爽平他 1985 年「日本の平野と海岸」岩波書店
- 20) 葛西励・高橋潤 1989 年『原遺跡発掘調査報告書』青森県尾上町教育委員会
- 21) 菊池利和・光井文行 1986 年『伏森古墳群遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター調査報告書第 113 集
- 22) 桐生正一他 1986 年『湯沢沢遺跡(第 1 分冊)』滝沢村教育委員会 同調査報告書第 2 集
- 23) 草間俊一 1959 年『浮島古墳群・沢口遺跡』岩手町教育委員会

- 24) 草間俊一 1961年「岩手県西根村谷助平古墳」『岩手大学学芸学部研究年報』第18巻
- 25) 草間俊一 1965年「堀野古墳」『堀野遺跡』福岡町(現二戸市)教育委員会
- 26) 草間俊一・玉川一郎 1974年『長沼古墳』和賀町教育委員会
- 27) 草間俊一 1975年「永井沢古墳」『日本考古学年報』26
- 28) 酒井宗孝他 1987年『親久保Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 同調査報告書第116集
- 29) 坂川進 1988年『丹後平古墳発掘調査概報』八戸市教育委員会
- 30) 桜井清彦・菊池徹夫 1987年『逢田村逢田大館遺跡』六興出版
- 31) 佐々木勝他 1980年『宮地遺跡』岩手県教育委員会 岩手県文化財調査報告書第48集
- 32) 鈴木恵治・吉田洋他 1981年「玉貫遺跡」「西根遺跡」『金ヶ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ』岩手県埋蔵文化財センター同調査報告書第18集
- 33) 高橋義介 1984年「岩手県における奈良・平安時代の鉄製品について」『紀要Ⅳ』岩手県埋蔵文化財センター
- 34) 高橋信雄 1983年「古代」『岩手の土器』岩手県立博物館
- 35) 高橋信雄・赤沼英雄 1984年「岩手の古代鉄器に関する検討(2)」『岩手県立博物館研究報告』第2号
- 36) 高橋信雄 1987年『花巻市熊堂古墳群-昭和61年度発掘調査概報』花巻市教育委員会
- 37) 高橋信雄 1987年「岩手県における末期古墳の再検討」『北奥古代文化』第18号
- 38) 高橋正勝他 1981年『元江別遺跡群』北海道江別市教育委員会 同調査報告書ⅩⅢ
- 39) 高橋与右エ門 1986年『堀切・竹林遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 同調査報告書第107集
- 40) 土井義夫 1971年「関東地方における住居址出土の鉄製農具について」『物資文化』No8
- 41) 西野修 1986年『徳田遺跡群詳細分布調査報告書-藤沢狄森古墳群の発掘調査-』矢巾町教育委員会
- 42) 西野修 1989年「岩手県内出土古墳時代須恵器の集成とその年代的位置付けについて」『岩手考古学』第1号
- 43) 沼山源喜治 1976年「陸奥北半における末期群集墳の性格」『北奥古代文化』第8号
- 44) 八戸市立博物館 1989年『いにしへの東日本 古墳文化をさぐる』
- 45) 林謙作 1978年「五条丸古墳群の被葬者たち」『考古学研究』第25巻第3号
- 46) 福島県立博物館 1988年『日本刀の起源展-直刀から彎刀へ-』
- 47) 古川一明他 1985年『色麻古墳群』宮城県教育委員会 宮城県文化財調査報告書第103集
- 48) 光井文行他 1986年『古館Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 同調査報告書第103集
- 48) 光井文行他 1989年『駒焼場遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 同調査報告書第133集
- 50) 宮古教育委員会 1985年『宮古市遺跡分布図』昭和60年度版 宮古市埋蔵文化財調査報告書9
- 51) 宮古市教育委員会 1983~86年『宮古市遺跡分布調査報告書1~4』宮古市埋蔵文化財調査報告書3・4・6・8
- 52) 宮古市教育委員会 1986年『中谷地、島田遺跡報告書』
- 53) // 1984年『赤前遺跡群』宮古市埋蔵文化財調査報告書5
- 54) // 1988年『青猿Ⅰ遺跡・下在家Ⅱ遺跡・千徳城遺跡群(堀合館)』宮古市埋蔵文化財調査報告書14
- 55) 吉川虎雄他 1973年 新編『日本地形論』 東大出版会
- 56) 八重樫良宏他 1981年『石田遺跡』 岩手県教育委員会 岩手県文化財調査報告書第61集
- 57) 安村二郎 1987年「枯草坂古墳について(上)」『よねしろ考古』第3号
- 58) // 1988年「枯草坂古墳について(下)」『よねしろ考古』第4号
- 59) 現地説明会資料 1989年『遠野市高瀬Ⅰ遺跡』
- 60) // 1989年『一戸町御所野遺跡』

写真図版



写真図版 1 遺跡全景（空中写真一南西から）



遠景（南から）



遠景（西から）

写真図版2 遺跡遠景



近景（北から）

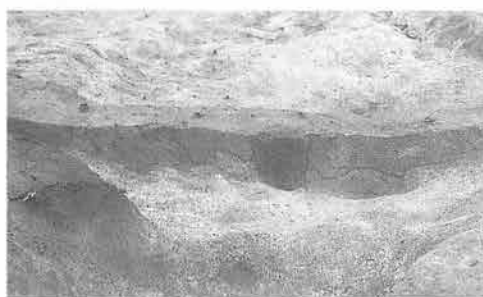


近景（北西から）

写真図版3 遺跡近景



全 景 (西から)



周埋土断面

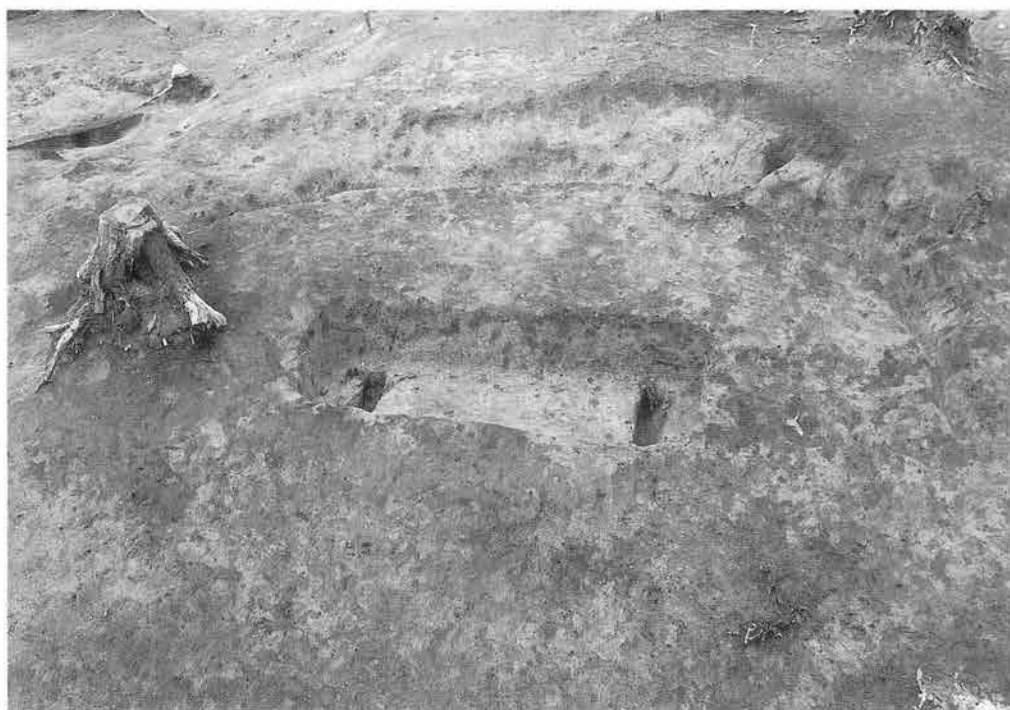


主体部埋土断面



主体部近接

写真図版 4 1号古墳



全 景 (南から)



周遑埋土断面



主体部埋土断面



仕切り溝断面

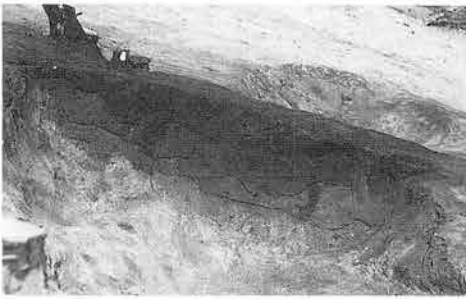


主体部近接

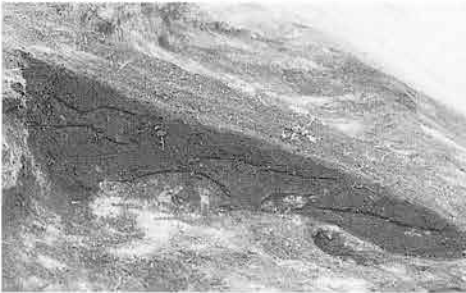
写真図版 5 2号古墳



全 景 (南から)



周濠埋土断面



主体部埋土断面



主体部近接

写真図版 6 3号古墳



4号・5号全景（北西から）



4号周埋土断面



5号周埋土断面



4号主体部近接



全 景 (南東から)



周埴埋土断面



仕切り溝断面



主体部埋土断面



主体部検出状況

写真図版 8 6号古墳



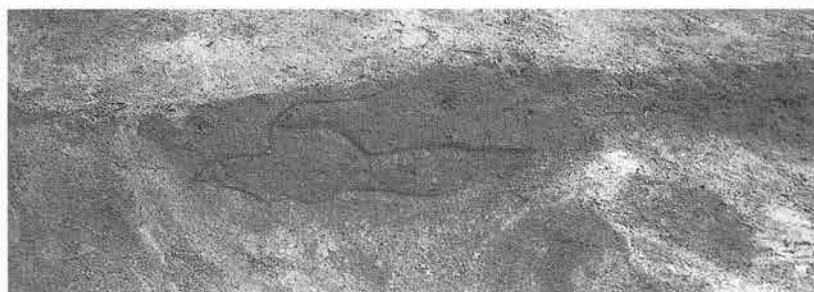
6号刃先土状況



6号藤手刀出土状況



8号全景（南から）



8号周湮埋土断面

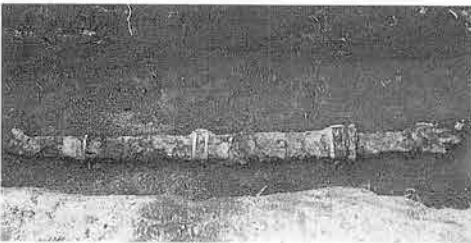
写真図版9 6号・8号古墳



全 景 (南東から)



周遑埋土断面



直刀出土状況



主体部近接



全 景 (東から)



周湟埋土断面



全 景 (北西から)



周遑埋土断面



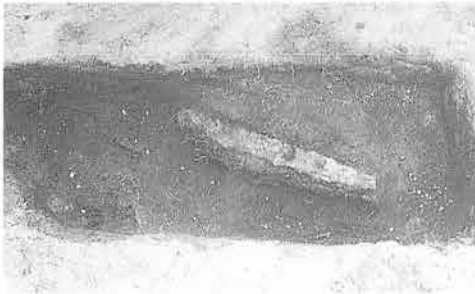
仕切り溝断面



全 景 (西から)



周湟埋土断面



小刀出土状況



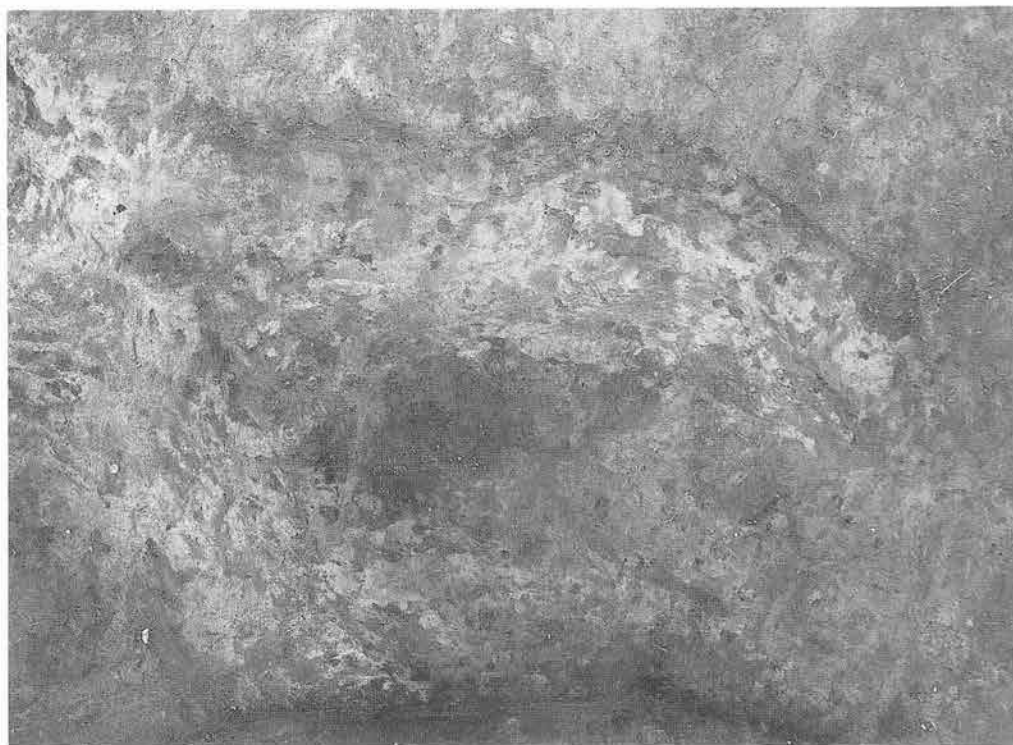
主体部近接



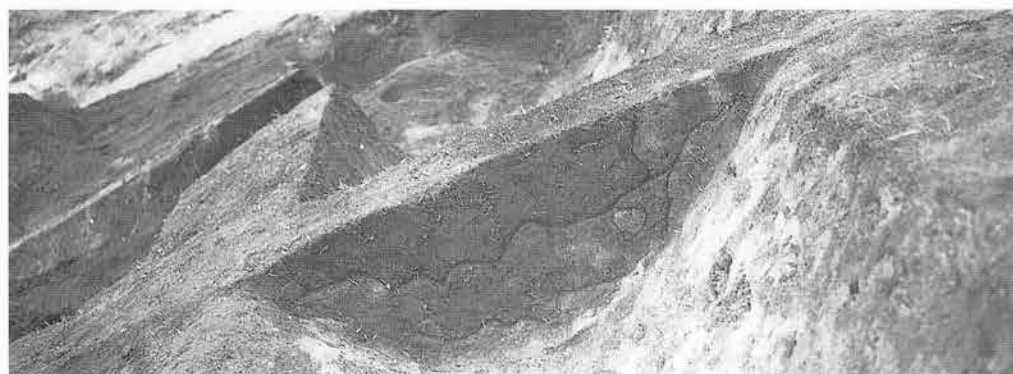
全 景 (北西から)



周湟埋土断面



全 景 (南から)



周湟埋土断面



全 景



主体部埋土断面



仕切り溝断面（西側）

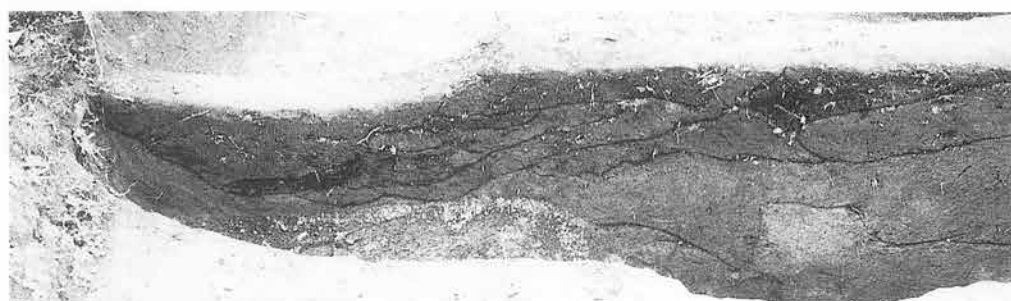


仕切り溝断面（東側）

写真図版16 16号古墳



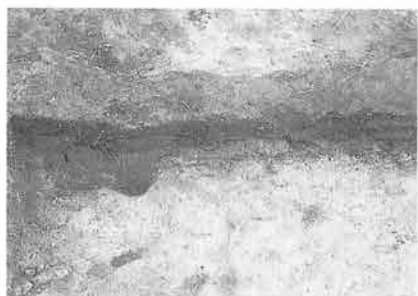
全 景 (南から)



周湮埋土断面



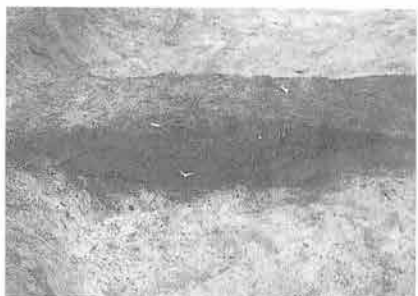
全 景



周湟埋土断面



精查中全景

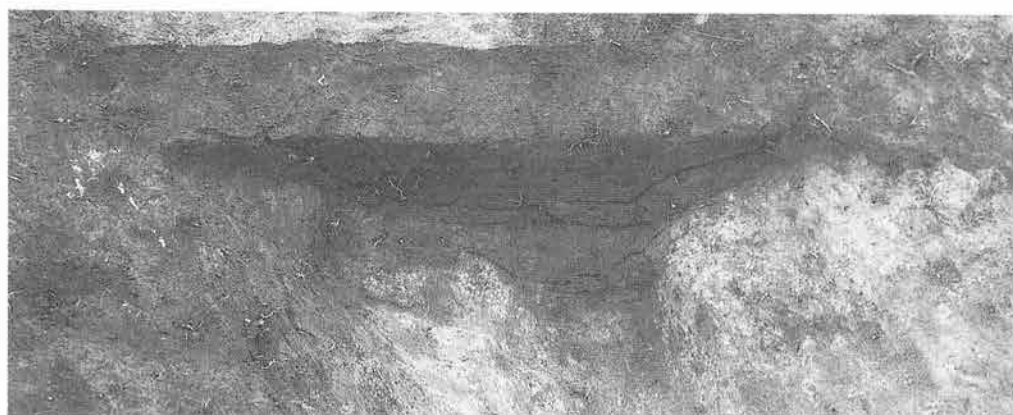


周湟埋土断面

写真图版18 18号古墳



全 景 (南から)



周湟埋土断面



全 景 (南西から)



周塹埋土断面



主体部埋土断面



主体部近接



全 景 (南から)



周漥・主体部埋土断面



主体部近接



全 景 (北西から)



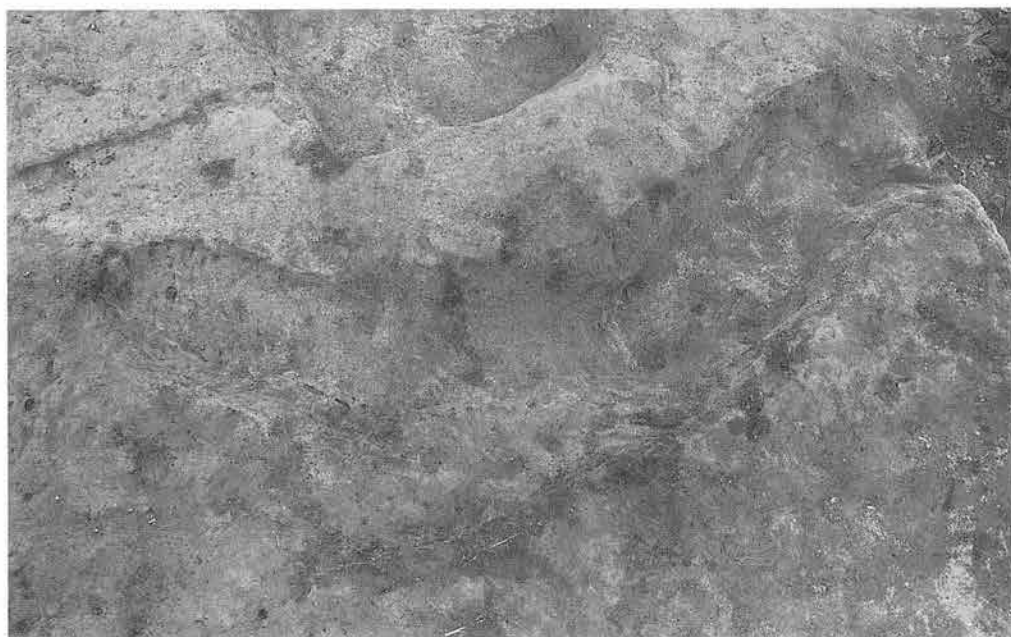
主体部・周遑埋土断面



和同開珎出土状況



主体部近接



全 景 (西から)



周湟埋土断面



全 景（南から）



周遑埋土断面

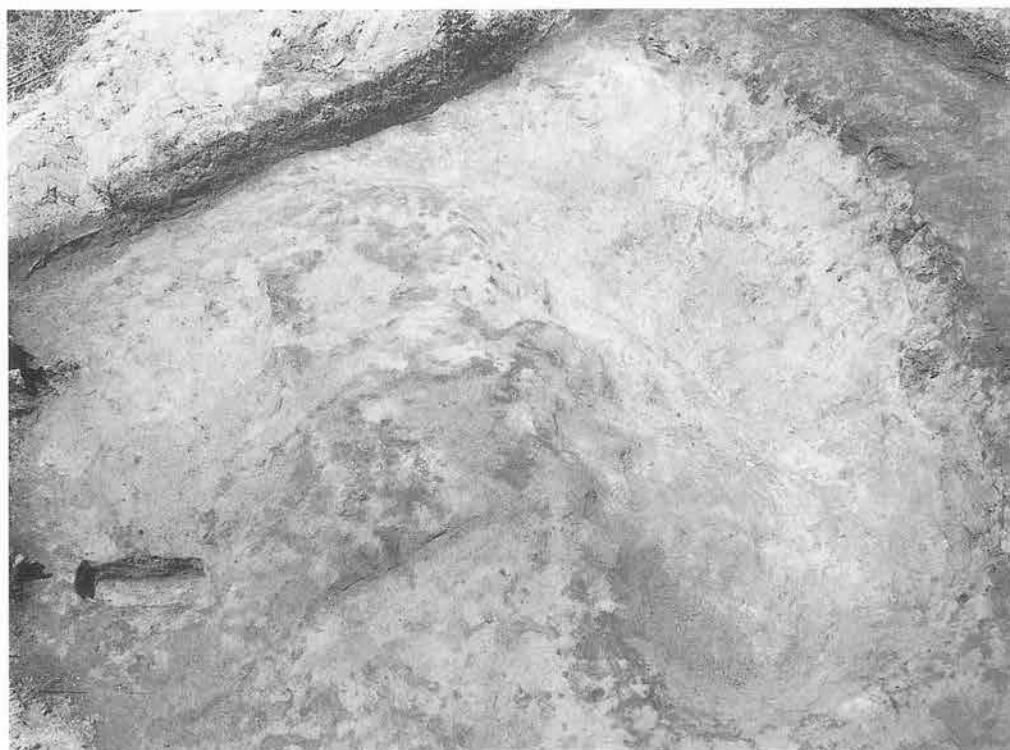


主体部埋土（短軸）断面



主体部埋土（長軸）断面

写真図版24 24号古墳



全 景 (東から)



周湟埋土断面



土器出土状況

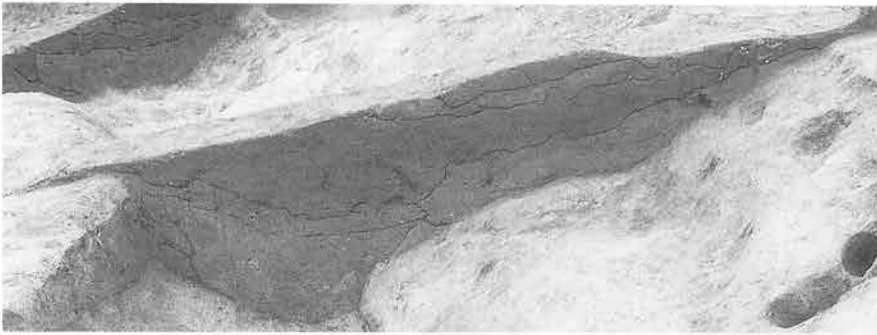


仕切り溝断面

写真図版25 25号古墳



全 景 (東から)



周遑埋土断面

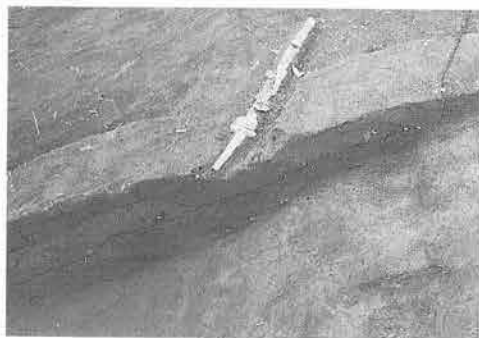


周遑埋土断面

写真図版26 26号古墳



全 景 (南西から)



主体部埋土断面



主体部近接



周遑埋土断面



太刀出土状況



全 景 (北西から)



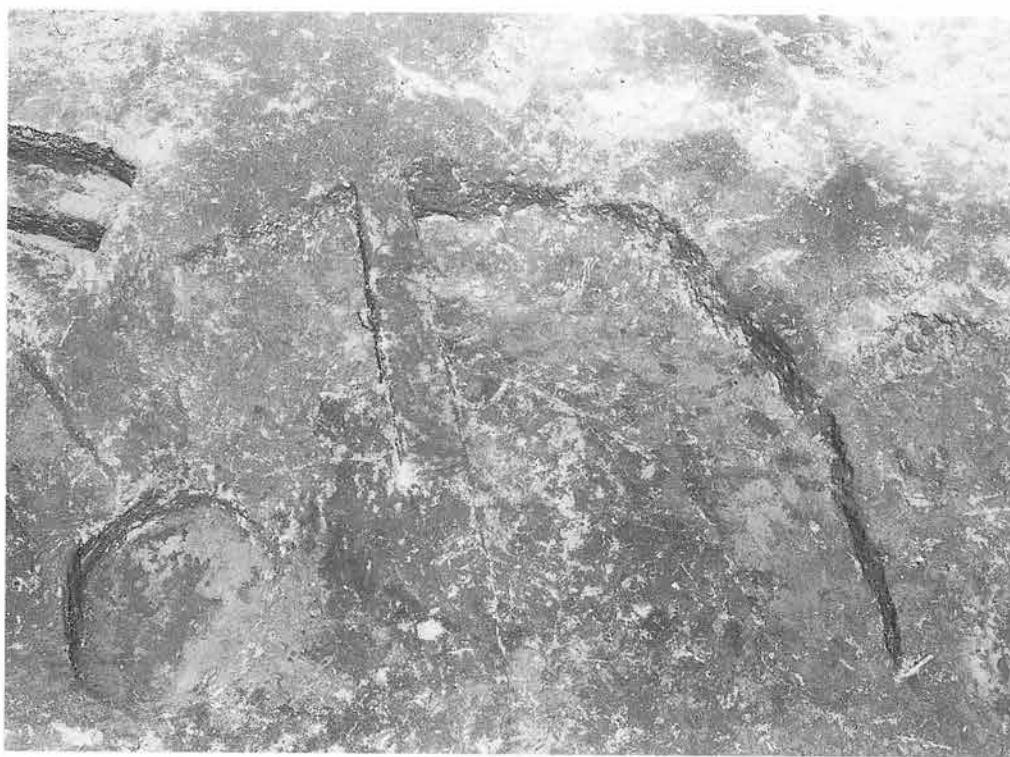
主体部埋土断面



立鼓刀出土状況



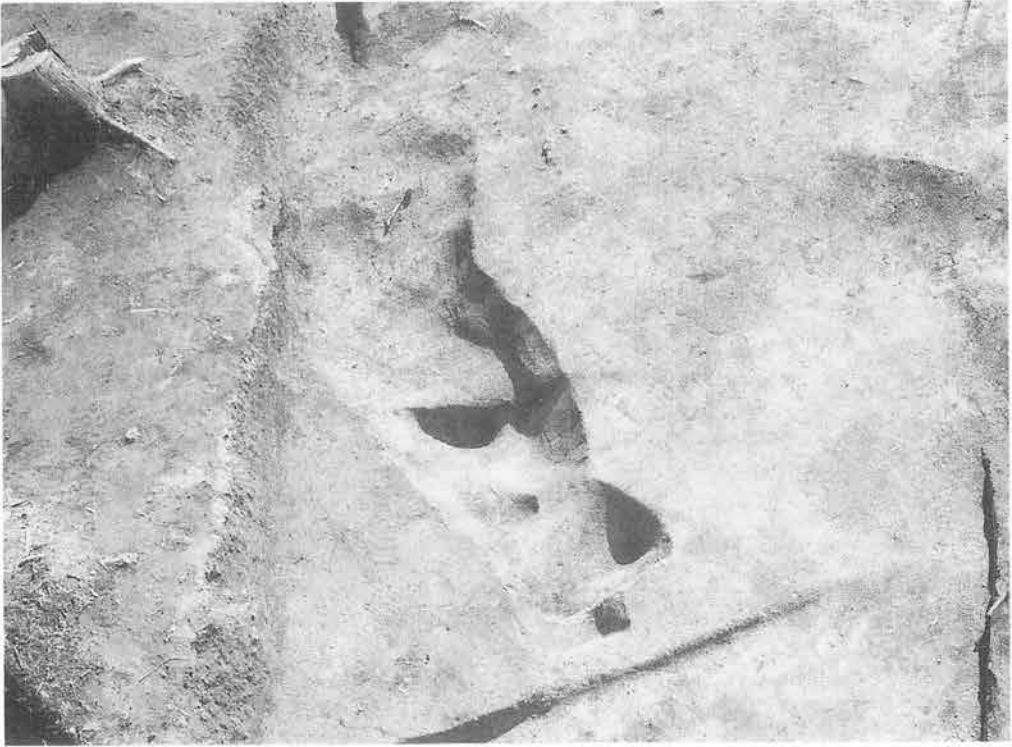
主体部近接



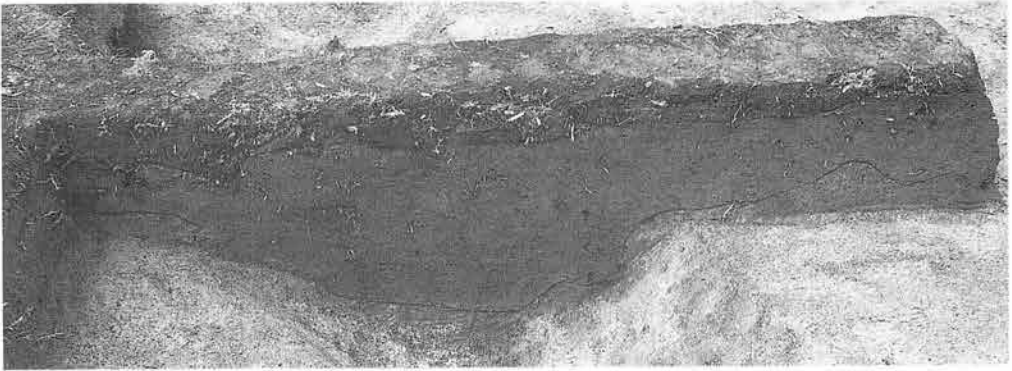
全 景 (南から)



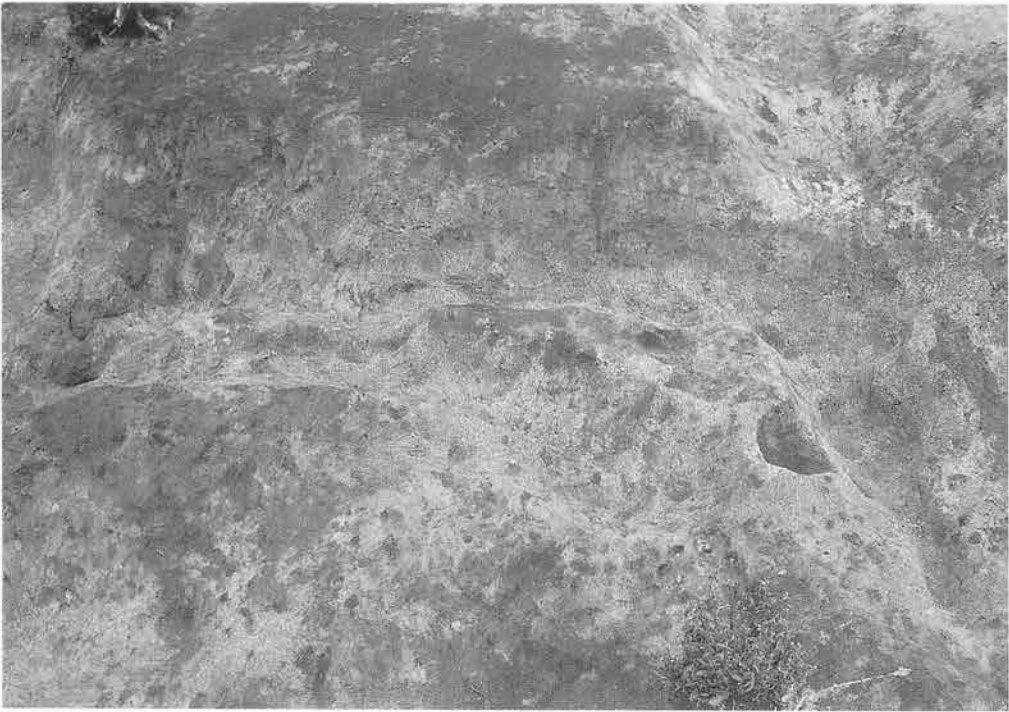
周湟埋土断面



全 景（東から）



周湟埋土断面



全 景 (南から)



周溝埋土断面



周溝埋土断面



遺物出土状況



全 景 (東から)



埋土断面



埋土断面



全 景 (南から)



埋土断面

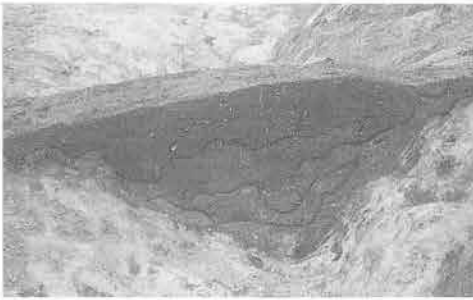


貼床断面

写真図版33 住居状竪穴遺構



全 景 (東から)



埋土断面



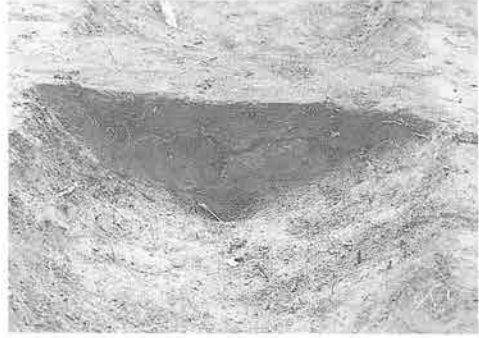
埋土断面



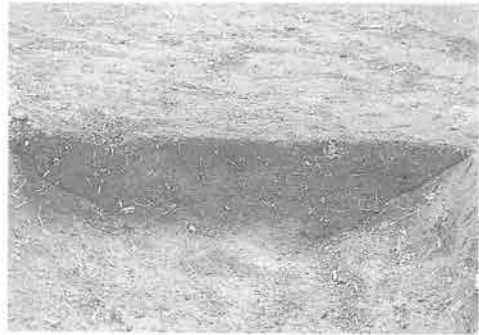
石組検出状況



全 景 (北東から)



埋土断面



埋土断面



全 景 (北西から)



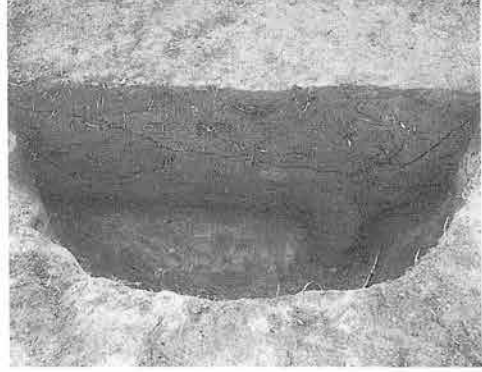
近接



近接



(平面)



(断面)

墓 墳



(平面)

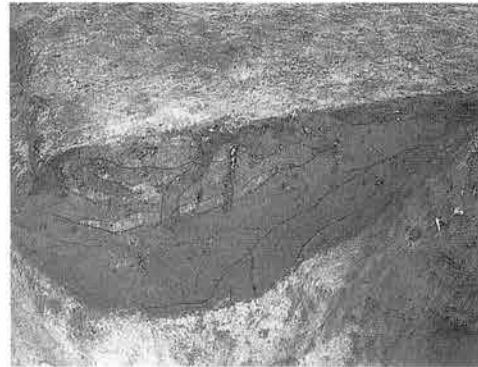


(断面)

51号ピット



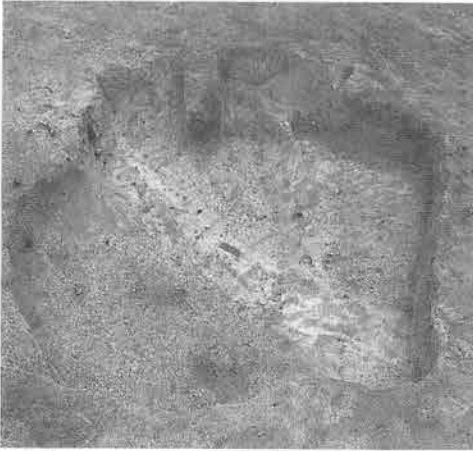
(平面)



(断面)

52号ピット

写真図版37 墓墳・ピット1



(平面)

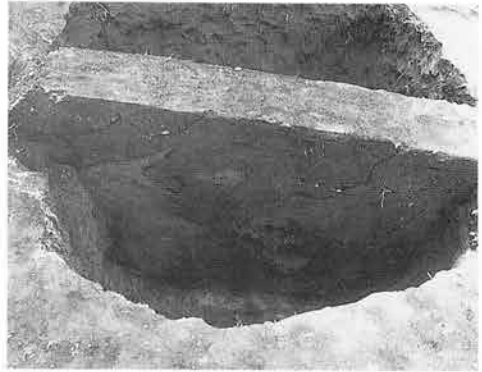


(断面)

53号・54号ピット



(平面)



(断面)

55号ピット



(平面)



(断面)

56号ピット群

写真図版38 ピット2



(平面)



(平面)



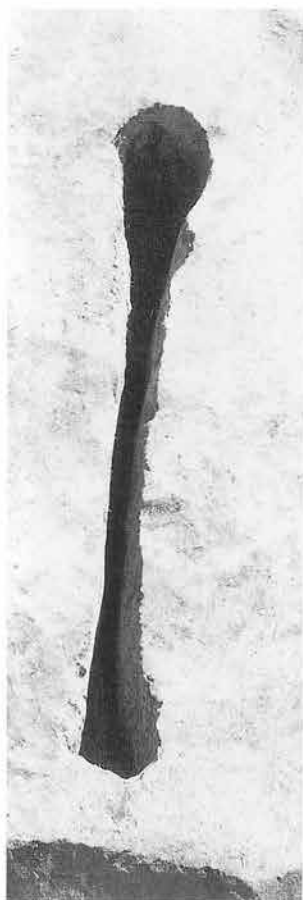
71号陥し穴

(断面)



73号陥し穴

(断面)



72号陥し穴 (平面)



(平面)



(平面)



基本層序



74号陥し穴 (断面)



75号陥し穴 (断面)

写真図版40 陥し穴2・基本層序



近景（南西から）

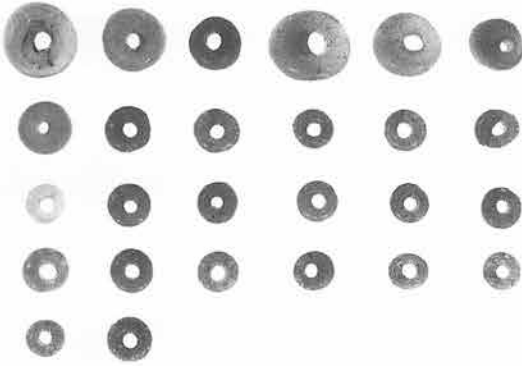


作業風景

写真図版41 遺跡近景・作業風景



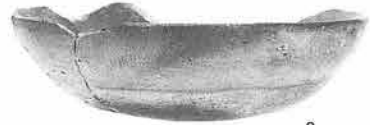
写真図版42 現地説明会



2号古墳出土ガラス小玉

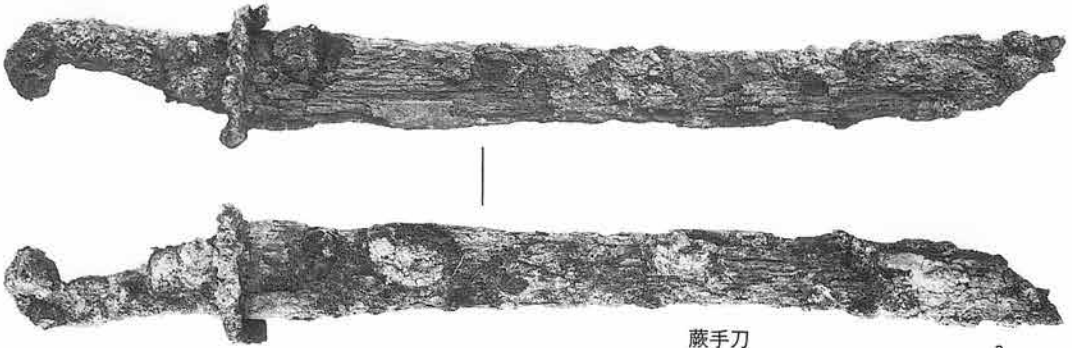


1



2

3号古墳出土遺物

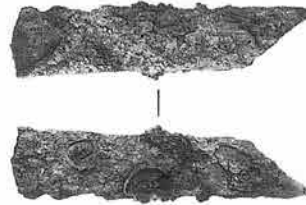


蕨手刀

3

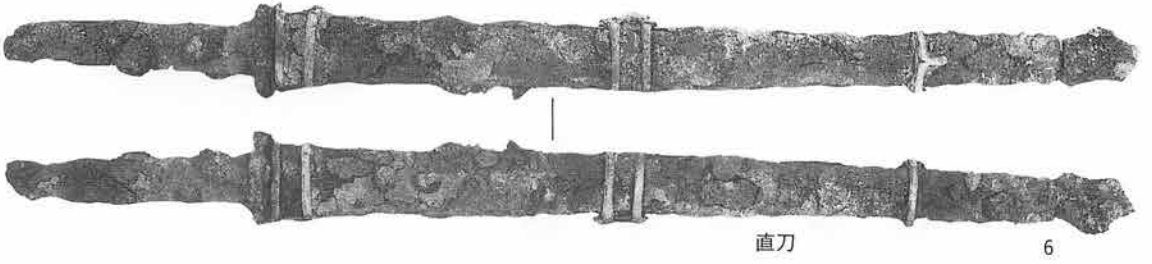


5



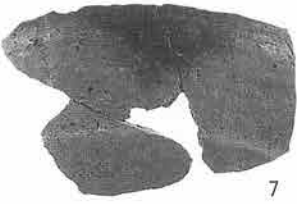
4

6号古墳出土遺物



直刀

6



7



8

9号古墳出土遺物



9

錫製釧



11

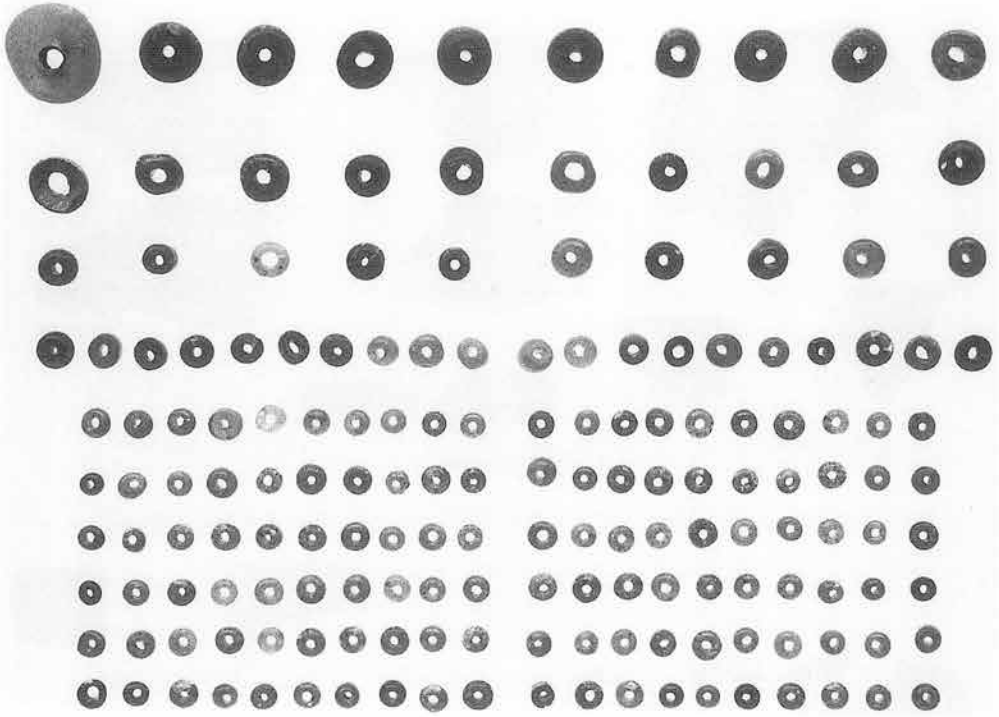
13号古墳出土遺物



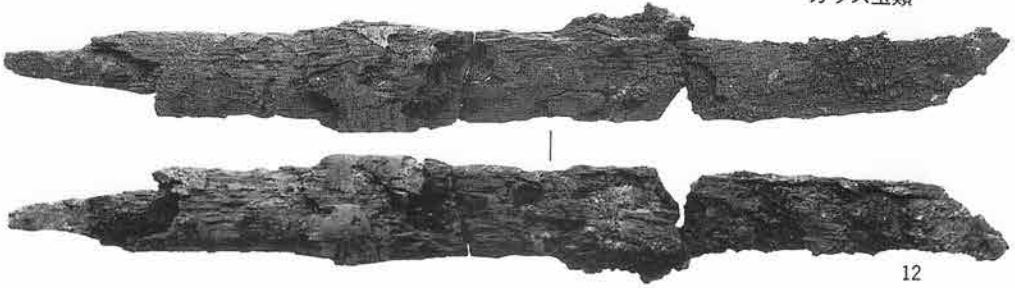
12号古墳出土遺物

10

写真図版44 9号・12号・13号古墳出土遺物



ガラス玉類



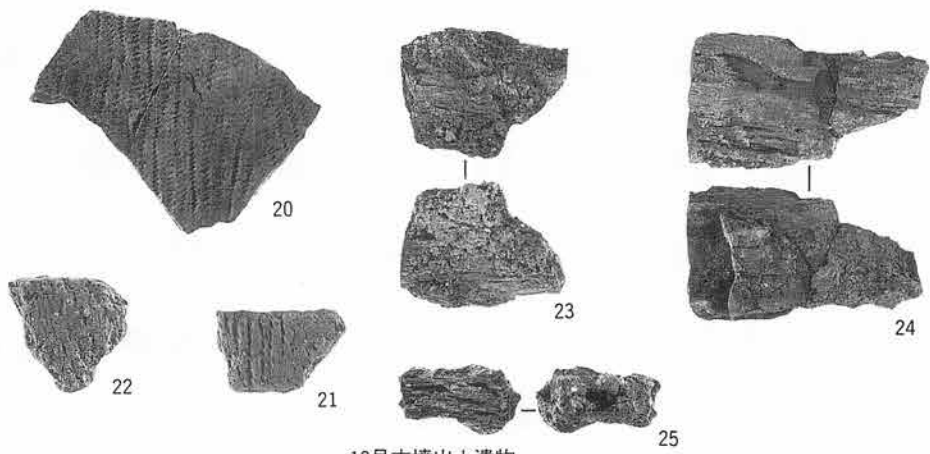
16号古墳出土遺物

12

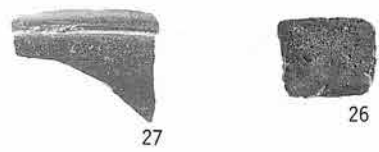


17号古墳出土遺物

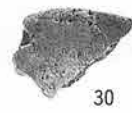
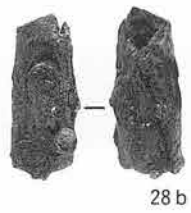
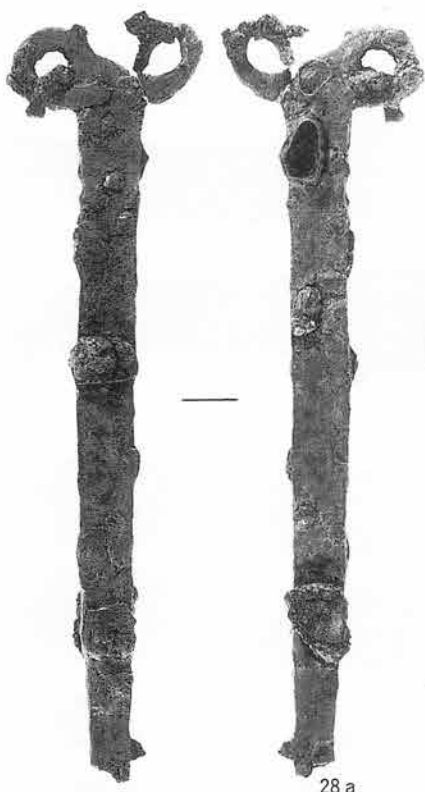
写真図版45 16号・17号古墳出土遺物



18号古墳出土遺物



20号古墳出土遺物



22号古墳出土遺物



31



32



33



34



35

25号古墳出土遺物



36



37

26号古墳出土遺物



太刀

38

27号古墳出土遺物

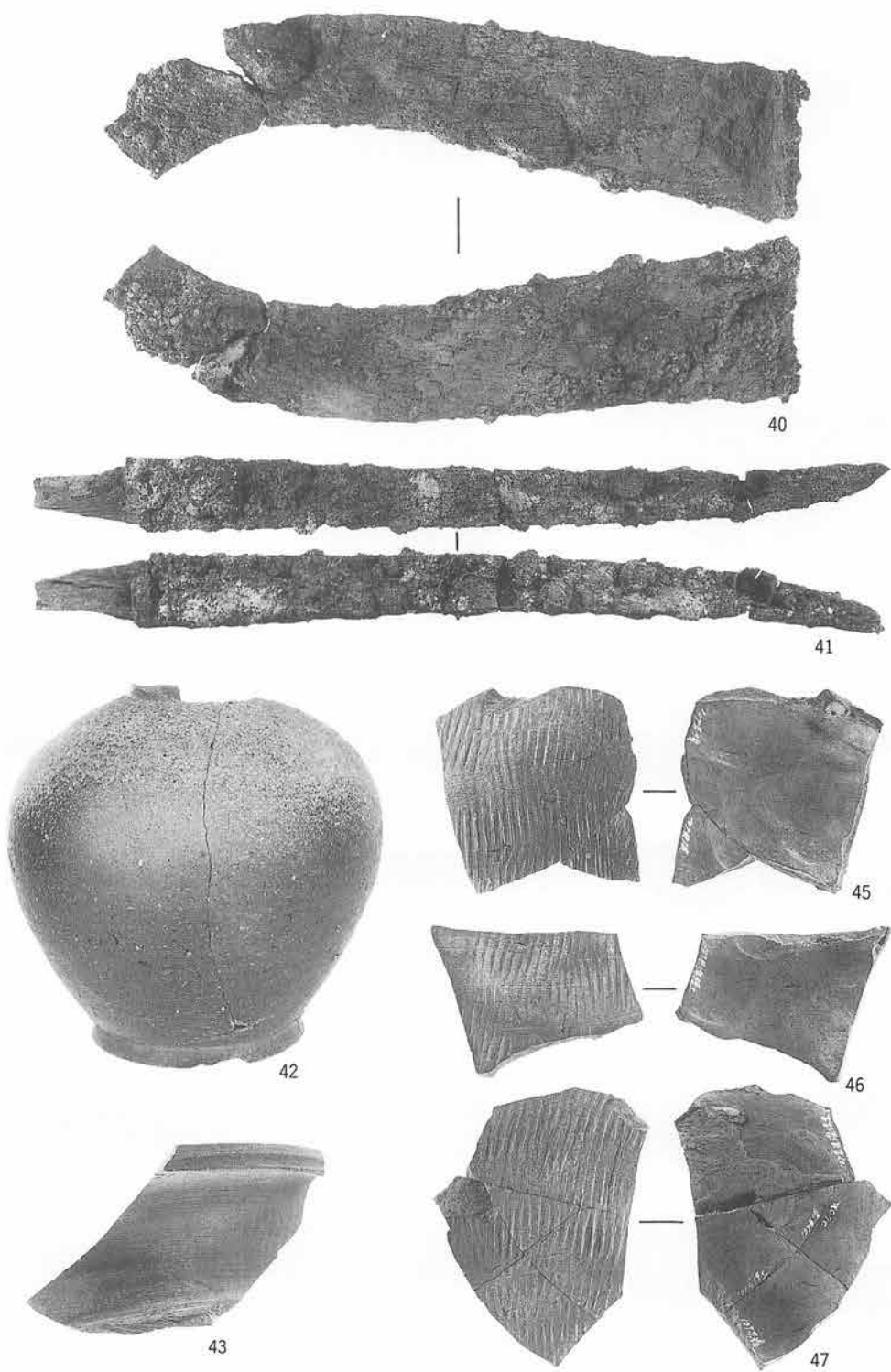


立鼓刀

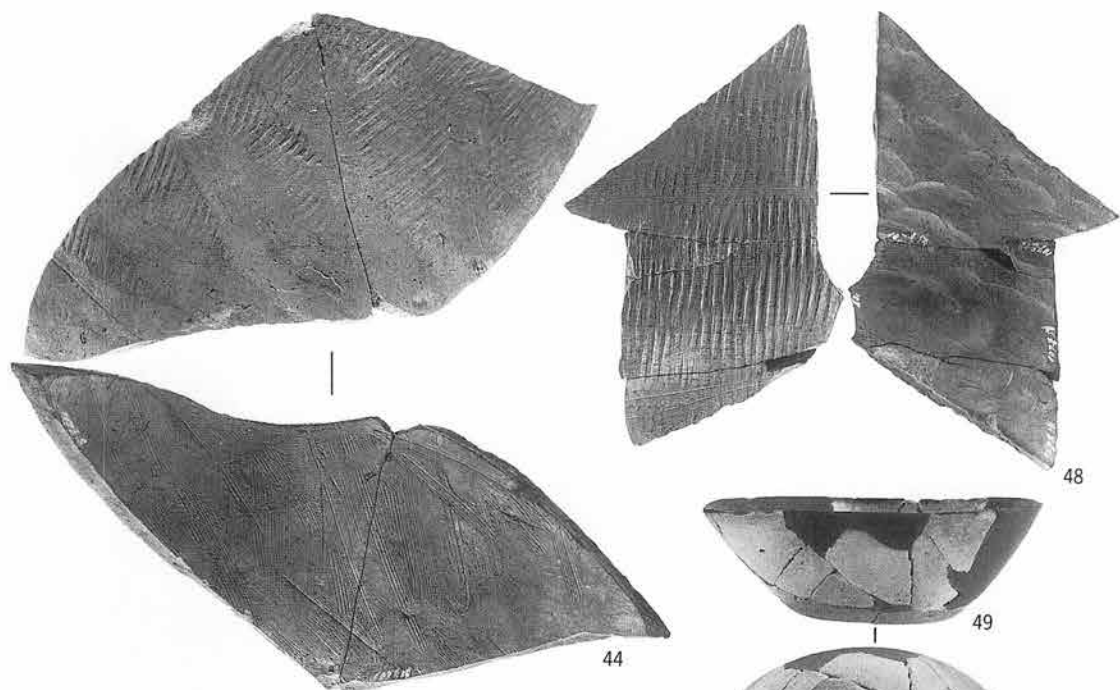
39

28号古墳出土遺物

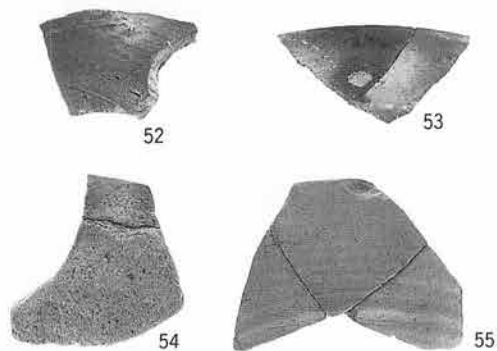
写真図版47 25号・26号・27号・28号古墳出土遺物



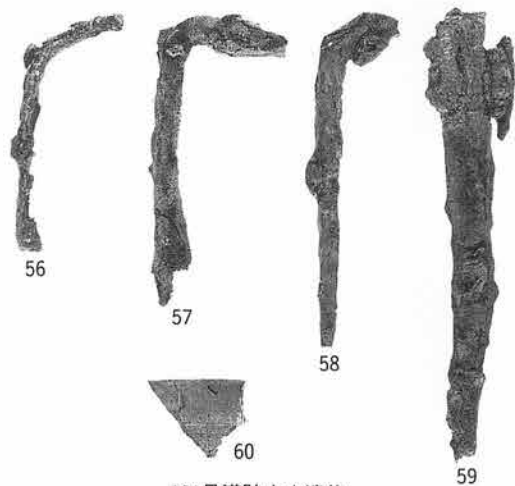
写真図版48 31号方形周溝出土遺物



31号方形周溝出土遺物



住居状堅穴遺構・出土遺物



101号溝跡出土遺物

写真図版49 31号方形周溝・住居状堅穴遺構・101号溝跡出土遺物



61



62



63



80



81



82



83



84



85

集石遺構出土遺物



89



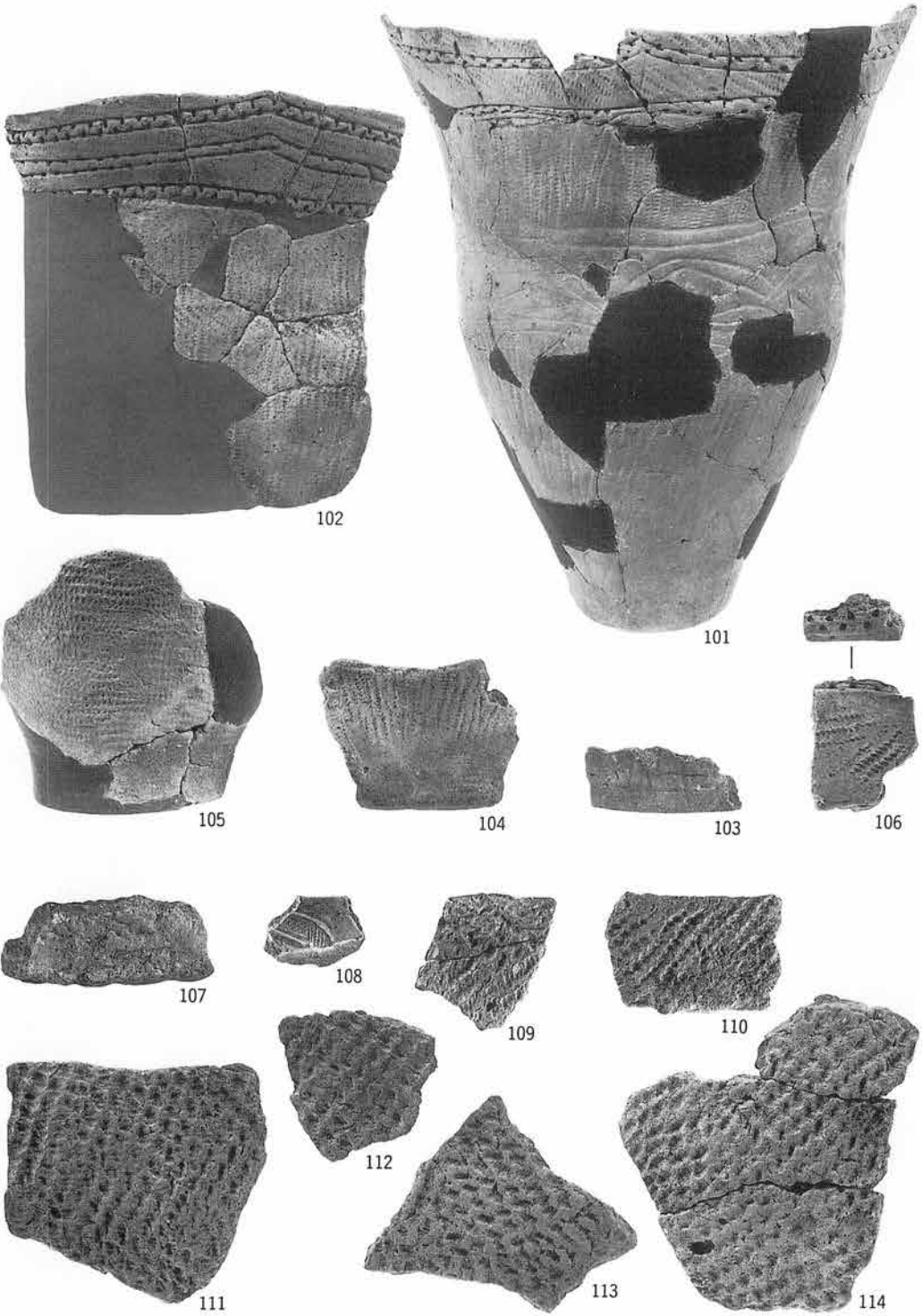
90



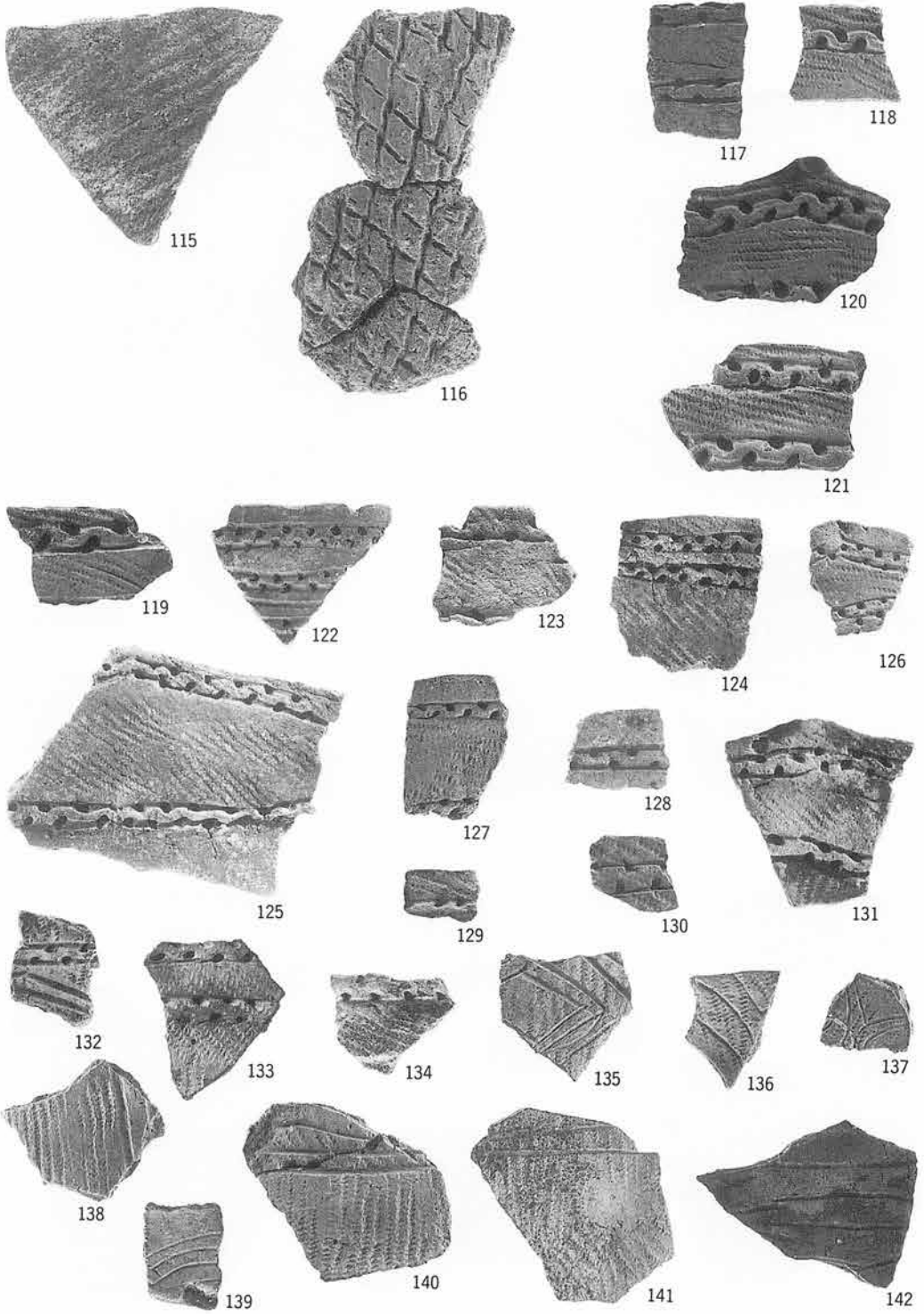
91

墓壙出土遺物

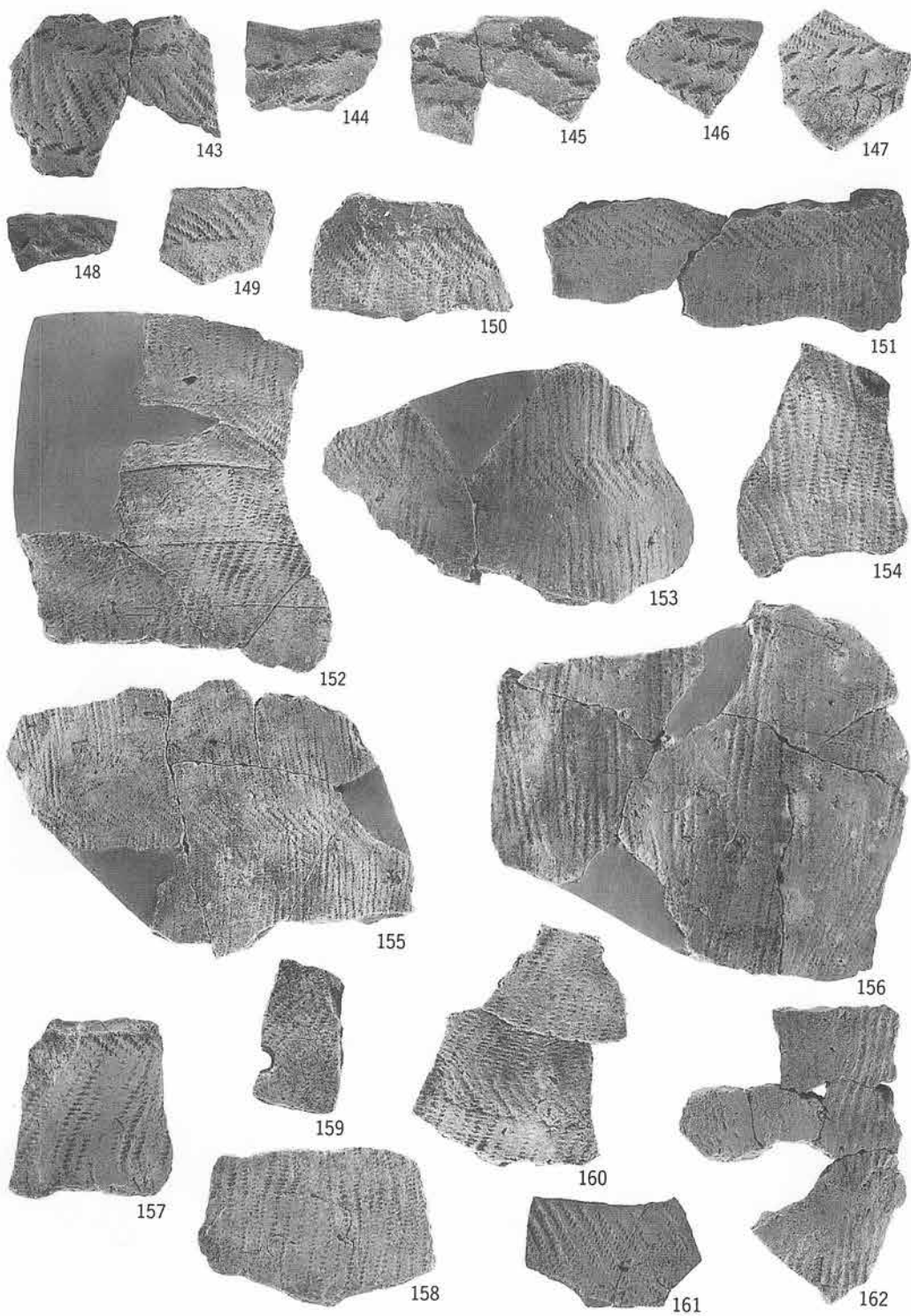
写真図版50 集石遺構・墓壙出土遺物



写真図版51 遺構外出土遺物 土器 1



写真図版52 遺構外出土遺物 土器 2



写真図版53 遺構外出土遺物 土器 3



163



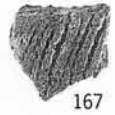
164



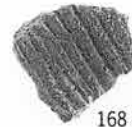
165



166



167



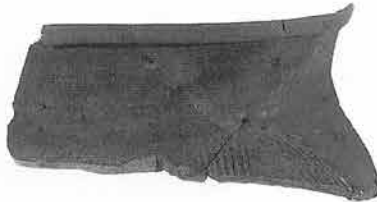
168



169



170



171



173



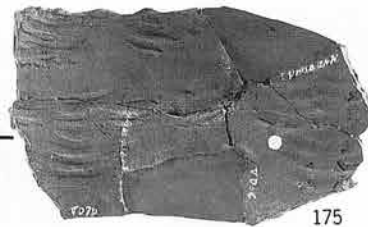
172



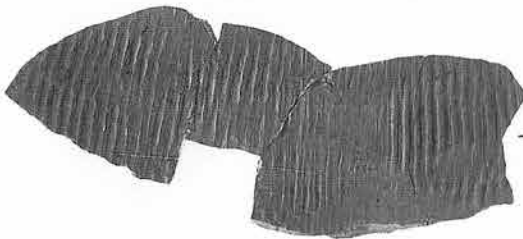
174



178

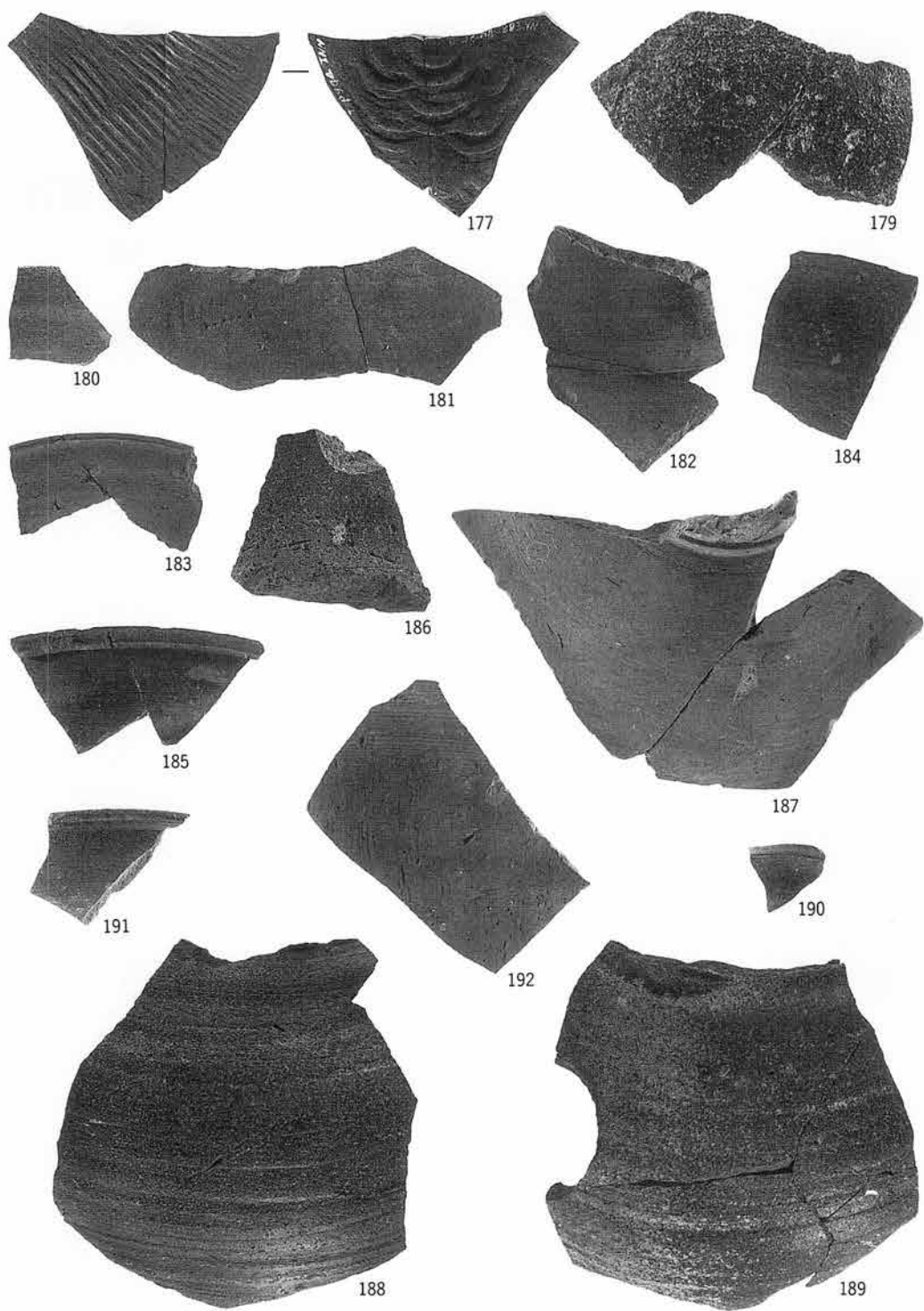


175



176

写真図版54 遺構外出土遺物 土器4



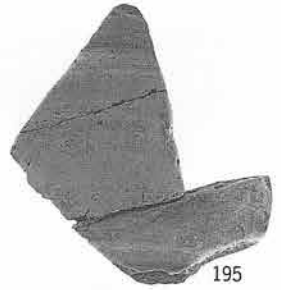
写真図版55 遺構外出土遺物 土器 5



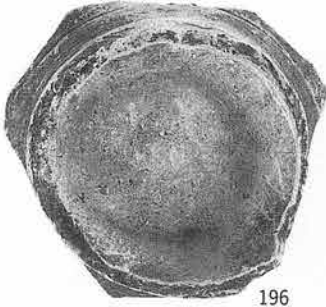
193



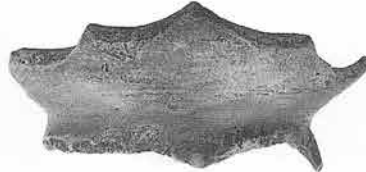
194



195



196



197



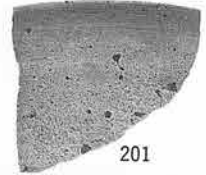
199



198



200



201



202



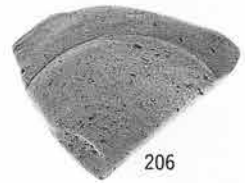
203



204



205



206



207



208



209

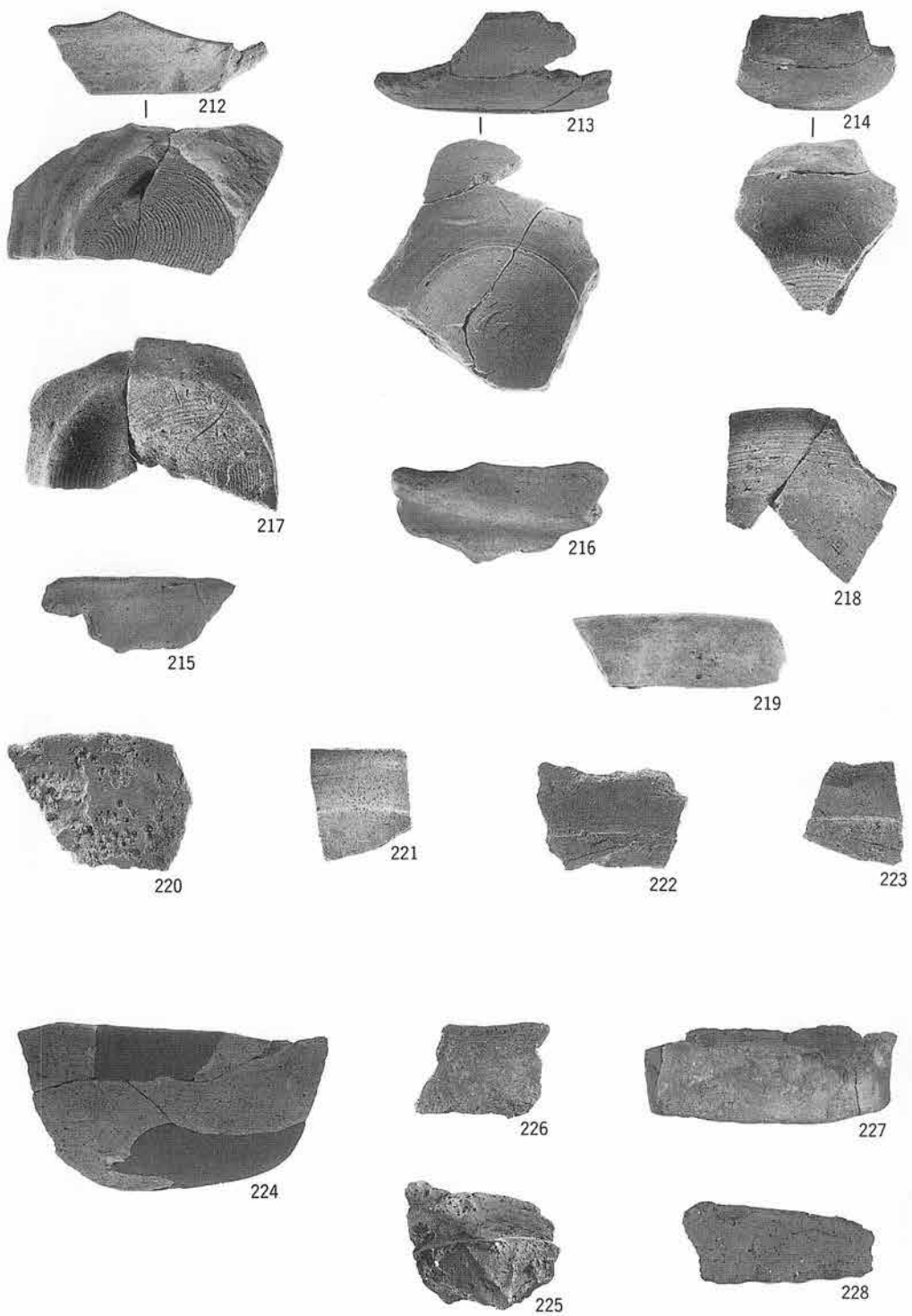


210

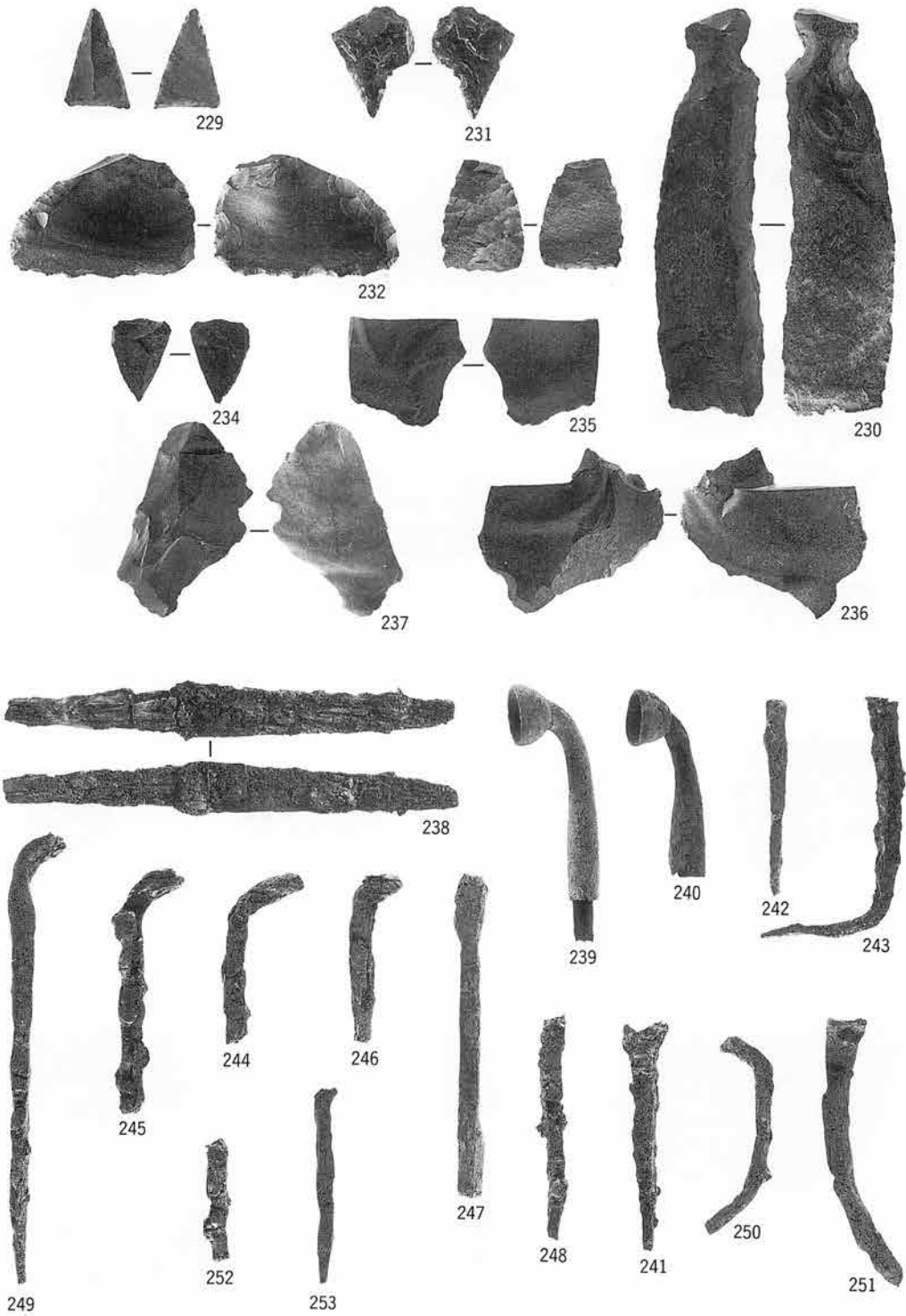


211

写真図版56 遺構外出土遺物 土器 6



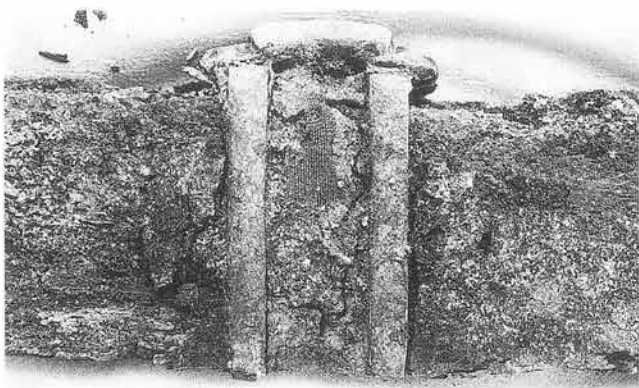
写真図版57 遺構外出土遺物 土器 7



写真図版58 遺構外出土遺物 石器・金属器類 1



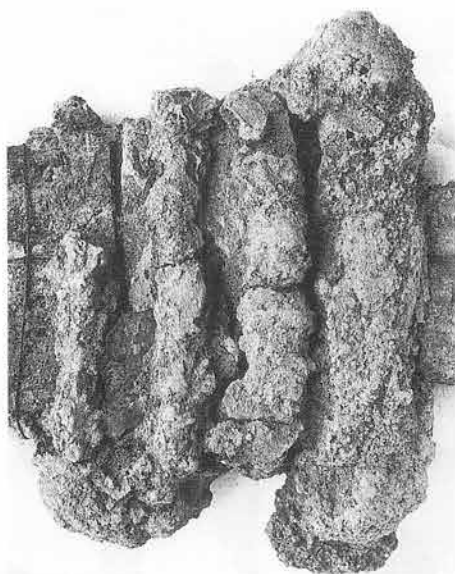
写真図版59 遺構外出土遺物 金属器類2・その他



直 刀



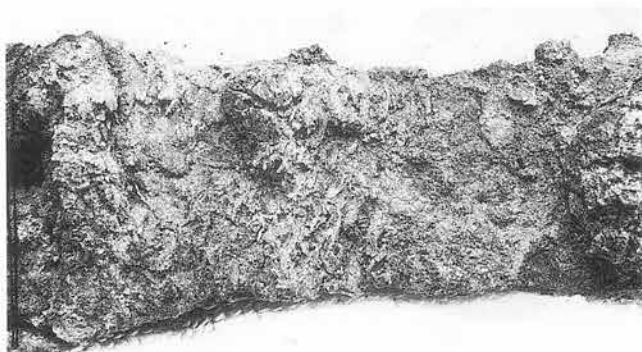
(2.5倍)



太 刀



(2.5倍)



立 鼓 刀



(2.5倍)

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長 及 川 昌 二
副 所 長 鎌 田 良 悦

〔管 理 課〕

管理課長(兼)	鎌 田 良 悦	嘱 託	吉 田 一 男
課 長 補 佐	伊 藤 吉 郎	運 転 技 能 士 員	佐 藤 春 男
主 事	阿 部 隆 広		

〔調 査 課〕

調 査 課 長	昆 野 靖		
課 長 補 佐	佐々木 嘉直		
主 任 文 化 財 員	小 田 野 哲 憲	文 化 財 員	遠 藤 修
專 門 調 査 員	三 浦 謙 一	專 門 調 査 員	齋 藤 邦 雄
〃	工 藤 利 幸	〃	高 橋 義 介
〃	高 橋 与 右 工 門	〃	佐々木 信 一
〃	平 井 進	〃	小 原 眞 一
〃	中 村 良 一	〃	村 上 修
〃	中 川 重 紀	〃	酒 井 宗 孝
文 化 財 員	藤 村 敏 男	期 限 調 査 員	菊 池 達 哉
專 門 調 査 員	齋 藤 實	〃	相 原 伸 裕
〃	光 井 文 行	〃	及 川 靖 世
〃	佐 瀬 隆	〃	女 鹿 文 雄
〃	齋 藤 博 司	〃	濱 田 宏
〃	東 海 林 隆 幹	〃	及 川 涉
〃	佐々木 弘	〃	星 雅 之
〃	川 村 均	〃	森 下 宏
〃	鈴 木 貞 行	〃	高 橋 堅

〔資 料 課〕

資 料 課 長	高 橋 薰
主 任 文 化 財 員	田 鎖 寿 夫
專 門 調 査 員	

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第146集

長根 I 遺跡発掘調査報告書

宅地造成工事関連遺跡発掘調査

印刷 平成2年2月23日

発行 平成2年2月28日

発行 財団法人 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡11-185

電話 (0196) 38-9001・9002

印刷 山口北州印刷株式会社

〒020-01 盛岡市青山四丁目10-5

電話 (0196) 41-0585